
真剣でボクとアタシと恋しよう！

じょんぺい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣でボクとアタシと恋しよう！

【Nコード】

N6693S

【作者名】

じょんぺい

【あらすじ】

かつて川神に住んでいた少年と少女、二人が長い時を経て川神に戻ってくる、彼らもたらすものは一体何なのか、彼らの新しい学園生活が始まる。オリキャラの主人公が二人出てきます。原作キャラは性格を原作にほぼ忠実にしていくよう精進します。

プロローグ

かつて川神市には2人の子供がいた。

1人は少年、1人は少女。

少年はとても友人が多く、誰とも分け隔てなく接する気さくな子だった。

少年はリュウゼツランが咲いた数カ月後に川神市にやってきた。

風間ファミリーとは時間も全く要せず仲良くなっていつの間にかファミリーの一員となっていた。

しかし、少年は海外赴任する両親に連れられて直ぐに川神市を去ることになってしまった。

少女は明るく、たとえ同じ年でもお姉さんのように振舞う面倒見の良い子だった。

少女は約10年前、後に風間ファミリーと呼ばれる仲良しグループの参謀役で軍師と称されている直江大和と、キャップこと風間ファミリーのリーダーである風間翔一と親しくなった。

しかし、少女も母親の病の療養のために空気の澄んだ自然の多いところで暮らさなければならず、風間ファミリーが発足する前に川神市を離れることになってしまった。

たまにメールで少女と大和は連絡を取り合っていたが、直接会うことは10年近くなかった。

少年の名は、あきほしせいらん 秋星晴蘭。

少女の名は、みねしき 峰楓麗。

少年は川神院のトップの川神鉄心と、風間ファミリーのみんなと再会するために

少女は大和と翔一、2人との約束をはたすために

2人が再び川神市に戻ってくる。

プロローグ（後書き）

初作品です

定期更新及び完結が最大目標です と言ってもそんなに短くする気はありませんww

精進していきますのでヨロシクお願いします！

第一話 来訪者は突然に（前書き）

記念にしたい一話目

第一話 来訪者は突然に

時は2009年4月

S i d e O t h e r s

「なんか、懐かしすぎてあんまり感動がない 困ったね」

少年は多馬大橋の上から多馬川を見下ろして1人で呟いた。

「ボク本当にここの出身なのかな」

苦笑しながらも腕を組んで首を傾げる。けれど、少年には1つの思い出がしかと頭に刻まれていた。それはあのやんちゃなグループと遊んだ懐かしい思い出。みんなそろってワイワイやりたいことやって、楽しかったことばかり。

「まあウジウジしてても仕方ないや。とにかく鉄心のおじいちゃんに挨拶に行かなきゃ」

少年

秋星晴蘭は一度大きく深呼吸をして

橋から飛び降りた。

S i d e O u t

S i d e 百代

ん？

わずか一瞬だが大気が揺れたのを感じた。

こんなことが出来る人間は限られてくる。

私を知るうちでは、この辺りじゃジジイか川神院の師範代か釈迦堂
さんだろう。

またジジイが何かしでかしたのか、くだらん。

私の思いつかない誰かが大気を揺らしたなどと言う考えは浮かばず、私は二度寝をすることにした。

S i d e O u t

S i d e O t h e r s

「帰ってきたわよ川神！」

少女は駅前でカバン片手に両手を広げ大きく息を吸い込んだ。

「それにしてもここも変わったわねー。まあアタシがいた時からもう10年近く経ってるんだからそりゃそうか」

少女は瞼を閉じてしみじみと昔を思い出していた。少女と遊んでくれた2人の少年、直江大和と風間翔一。川原で鬼ごっこしたり探検ごっこしたり、少女は思い出に浸っていた。

「そろそろ大和に会いに行こうかな、アポ無しだからきつと驚くで

しょうね
「

少女はゆっくりと歩みを進めていった。

少女

峰槻麗が目指すは大和の居場所、島津寮。

Side Out

Side 大和

「むー
」

数学の課題が解らん、結構難しいなこれ。時々これは学生に解けるのか怪しい問題が混じっているのが非常に困る。普通に学生レベルの問題だけで良いというのに。けど、やってて飽きることがないから楽しくないと言えば嘘になる。

「やあ大和。何を唸っているんだい？」

課題に悪戦苦闘しているところへ、島津寮のお使いロボ、クッキーが覗き込んできた。

「数学かい？大和が悩むなんて珍しいじゃないか」

「なんか難しくてさ、もう少しで出来そうなんだがどうしても計算が合わない」

数式で埋められたノートをシャーペンでトントンと叩く。何度か消しゴムで消しているのでノートは少しよれよれになっていた。

「じゃあボクが計算をしてあげよう」

「ロボにさせたら1発じゃねーか」

「なんだよ！せっかくボクが手伝ってやるつもりだと思って言ったのに！」

ピピッ！プシュー！ガチャガチャ！

クッキーの体から聞こえる機械が稼働している音が大きくなり、眼の色がピカピカと変色しだした。

「切り刻みたいのか？」

クッキーは丸い形をしていたお仕えモードから、右手に光輝く剣を装備した戦闘モードへと変形していた。

「いきなり変形するなよ 無駄なハイテク機能搭載しやがって

」

世界の九鬼財閥の最先端の技術で作ったロボが何故学生寮にいるのかはおいといて。

「何か用があつたんじゃないのか？」

俺の言葉を聞いて本来の目的を思い出したのか、クッキーは第1形態であるお仕えモードに戻る。

「そうだった、そろそろご飯の時間だから呼びに来たんだった」

「了解、あと5分くらいで行くよ」

クッキーは任務を終えたので部屋から出て行った。さて、この積分がきつと計算間違ってるから

「しゅめーんくーださーい！」

その時寮の外から声が聞こえた。誰か来たみたいだ。恐らくだが、この島津寮に向けられた言葉だろう。みんな居間にいて料理の音やらテレビの音で気付いてないだろうし、ここは俺が確認しに

「私が行ってくるよ」

「京さん、部屋に隠れるのは止めてくれませんか？」

テレビの裏から幼馴染で同じ寮に住む椎名京がヌウツと現れた。正

直かなりびびった。

そんな俺の驚きに気付いたか気付いてないのかは解らないが、京は直ぐに玄関に向かった。

「クッキーの奴だな、また勝手に人の部屋の鍵開けやがって」

ハア とつい溜め息を漏らしてしまう。 まあよくあることだと言えばそうなんだが。

なんて考えていると、京が驚きの早さで戻ってきた。 まだ部屋を出てから5秒と経ってないのに お客に何か失礼なことをしなかったか非常に心配だ。

「大和、女の、お客さん、女の、女の」

「女を強調しなくてよろしい」

「調教ッ ！？」

「妙な脳内変換するな！」

京がトリップしかけているのを放置して玄関へ向かう。 調教って単語1つでトリップするとかどうなのか

しかし、女の客ねえ。

心当たりはないなあ。知り合いならまず携帯に連絡があってもいいもんだし、姉さんやワン子ならさっきの声でわかる。一体誰だ？

玄関に辿り着くと、そこには髪が桃色でツインテールの女の子が仁王立ちしていた。

一瞬、姉さんかと思ってしまっぐらい堂々とした立ち方をしていた。それにしても綺麗なスタイルをしている。歳は俺と変わらないか！つ上ぐらいだろう。

「大和　だよね」

「そ、そうですが、どちら様でしょう？」

俺が質問をすると、女の子ははて？と言いたげな表情で人差し指を唇に当てて首をかしげた。少しその仕草にドキッとしてしまったのは秘密だ。

「あれ？わかんないかな？この髪の毛で一発だと思ったんだけど
ほら！10年近く前にアタシと翔一とアンタでよく遊んだじゃない
い」

10年近く前？ってことは風間ファミリーなんかまだ出来る前だよ
な 下手したらワン子ともまだ仲間じゃない頃の話じゃ

『また戻ってくるわ！この川神に！約束よ！！』

「麗？峰槻麗！？」

「よつやく思い出したわね、大和？」

峰槻麗の突然の来訪、それは俺の人生の歯車を急速に回転させる出来事だった。

第一話 来訪者は突然に（後書き）

なんか書いてると持病の腰痛に響いてイケマセンネー

何かご意見でもご指摘でもあれば遠慮せずにお問い合わせします！

第二話 麗との再会（前書き）

会話文で原作を生かすのはなかなか骨が折れますね

第二話 麗との再会

S i d e 忠勝

一体どういう状況だこりゃ

直江の奴がいつまで経っても居間に来やがらねえから仕方なく呼びに行こうとしてみりゃ

玄関で椎名と知らない女に抱きつかれてやがった。

なんか直江がこっちを見て必死に訴えかけようとしているが、

まあ、いい経験になるだろう。

見なかったことにして俺は居間に戻った。

Side Out

Side 大和

「大和を、放せえ　！！」

ギシギシと、俺の左腕の骨がきしむ。

「い・や・だ　」

ミチミチと、俺の右腕の靭帯が悲鳴を上げる。

「2人ともッ　！ち、千切れる！腕が、千切れる！！」

どうしてこうなった。

まず、前方から俺に麗がハグしてきたのを見た京が、背後からラグビーのタックルばりに俺に抱き着いてきて無理矢理倒された。

ここでゲンさん登場、必死に「助けて」と訴えのまなざしを送った。

それを見たゲンさんはこちらを一瞥して、しばらく状況を考えてくれたように見えた。

結局、助けてはもらえなかったが。ゲンさんひどい。

そのあと京が俺を奪還しようとして左腕を引っ張ったところ、麗も負けじと右腕を引っ張ってきた。要は綱引き状態である。俺が綱という不憫かつ危険極まりないポジションだ。

しかも2人とも俺の話を聞いちゃいねえ。

「遅いぞ大和！みんな早く飯が食べたくて待ちくたびれてるんだぞ
って何やってんだ？」

そこに我らがキャップ、風間翔一がやってきた。

「キャップ！助けて！」

俺は必死に助けを求めた。きっとキャップなら助けてくれる。俺たちのヒーローキャップなら救世主になってくれる！

「ズルいぞ大和お！俺も混ぜろ！」

「アンタ！翔一でしょ！？」

「おう！ところで、アンタ誰？」

キャップが首をかしげるのを見て麗は少し残念そうだった。俺の時と一緒だった。

「髪の毛で解ると思ってただけだな　麗よ、峰槻麗」

「麗　うらら　麗！？おお！懐かしいじゃん！」

「大和大和やま　あれ？キャップとも知り合いなの？」

「キャップに疑問ぶつけながら唇をぶつけようとするな！」

京は観念してようやく俺の上から降りてくれた。ああ、危なかった。主に理性と貞操が。

「と、ところで麗、何で川神に？確かお母さんの療養の為に北陸の方に引越したんじゃないかなかったっけ？」

「お母さんも大分よくなってるね、もう都会に戻ってきててもよくなったんだ。今年からまた3人一緒！」

麗は心底嬉しそうに笑っていた。それを見て俺とキャップは目を合
わせた。いつまで経っても麗は変わらない明るい奴だ。

「大和、詳しい説明が欲しい」

1人残された京がシヨボくれていた。置き去りにするのはちょっと
酷かったな。

「今日はまだ引越しが済んでないから川神院にお世話になって、明
日からアタシの家に戻るんだ。そろそろ帰らないとマズイから今日
はもう帰らせてもらうね！」

麗は自分のブーツを履きなおして玄関の戸を開けた。

「じゃあね翔一！大和！また明日会いましょう！」

麗は島津寮から颯爽と去って行ってしまった。まるで台風みたいな
やつちゃな。

「いやー、懐かしい奴が帰ってきたもんだ」

「本当ならファミリーに入ってもおかしくなかったし、他のメン

「バーとも仲良くやっていけるだろ」

「むー、説明、してもぶっ」

京が俺の肩を掴んで放さない、「こりゃ今日は思い出話で潰れちゃうな。」

第二話 麗との再会（後書き）

更新は時間を見つけたら結構ためて書いていきます

第三話 川神院にも来訪者（前書き）

サブタイトルつけるのも苦労するんですねこれが

第三話 川神院にも来訪者

S i d e ? ? ?

武道の総本山と言われる武道家にとって聖地である川神院。ここに
来るのは何年振りなのだろうか。

昔はよくあのファミリーとここまで来て遊んだものだ。

みんなはボクのことを覚えているのかな。短い間しか一緒にいなかったけど、忘れられてたら結構ショックだな。

「どちら様ですかー？」

後ろから声をかけられたので振り返る。着ているのは体操服にブル
マ、腰に巻き付けた紐でタイヤを引っ張り、元気の象徴とも言える
ポニーテールが印象的。

髪は伸びてたけど一瞬で誰か解った。

少しだけだけど、柄にも無く興奮しちゃったよ。

久し振りの再会に。

「久し振り、一子」

Side Out

Side 一子

「久し振り、一子」

川神院の前に立っている緑色のボサボサ髪の男の人に話しかけたら
久し振りって言われたわ。

じーちゃんにお客さんかと思ったんだけど、あたしの知り合いかし
ら？うーん

「えっと」

「解んない、か」

男の人は残念そうにうつむいてしまった。悪いことしちゃったかな。

「取りあえず、中に入れさせてもらつよ。鉄心のおじいちゃんに会いたくて」

鉄心のおじいちゃん？じーちゃんのことをそんなに親しく呼べる人なんて限られてると思うんだけど　　それほどこの人強いのかな？？

でも気もそんなに感じられないし

って！？あの人がない！勝手に入って行っちゃった！？

「ちよ、ちよつと待って！」

S i d e O u t

S i d e 鉄心

む、誰かが川神院の敷地内に入って来おったのう。

何じゃこやつのは。ハッキリと捕らえることが出来ん。

又、近くに一子もおるのか。

歩みはこちらに向かつておるようじゃの。

何者かは解らぬが 通して迎え撃つとしようかの。

S i d e O u t

S i d e 一子

「ここにおじいちゃんがいるね、失礼しまーす」

ああ、ついにこの人と一緒に川神院の奥まで来ちゃった

じーちゃんに怒られちゃうかな

襖の奥にじーちゃんの気を感じるし

「川神流、空衾くうしん！」

だった。川神院の新米門下生でも勝てちゃいそうな気だったもん。

「わずかじゃが 気を抑えているように感じられてのう、ついや
つてもうたわ」

「ついで!?」

ついであそこまで蹴り飛ばしちゃうの!? 相変わらず恐ろしいわ

「まあ威力は抑えておる。気絶程度に」

「

「いきなり飛び蹴りなんて、つれないな」

「ぬ!?」

アタシとじーちゃんは目を疑った。

男の人はあれほど勢いよく吹き飛ばされたのに、傷は一つも無くケロツとしていた。

不意打ちだったから防御の暇はないはずなのに　　一体どうやって？

「話を聞くところ、ボクが気を抑えたのが仇になったみたいだね。出来るだけサプライズに行こうとしたのが完全に裏目に出るなんてついてないなー」

「何者じゃお主」

「安心してよ、道場破りとかじゃなくてただの来訪者だから。今日は挨拶に来ただけだしね」

男の人は服についた埃をパンパンとはたいて落として、ジーちゃんに1度深くお辞儀をする。

「秋星晴蘭、川神に帰ってきたよ。鉄心のおじいちゃん」

第三話 川神院にも来訪者（後書き）

平野さんのドリフターズ面白いデスネー

二巻早く出ないかな

来週の0000はついにプトティラコンボ初登場ですね

Wk t k がとまらないよ

それにしてもエアギアの武内兄弟ってもはやチートレベルじゃね？

第四話 帰ってきた晴蘭（前書き）

一話が短くなってしまった

第四話 帰ってきた晴蘭

Side 晴蘭

「せーちゃん？せーちゃんなの？」

一子が急にプルプルと小刻みに震えだした。

「思い出したかな？短い間だったけど 昔風間ファミリーにいた晴蘭だよ？」

「せーちゃんだ！！せーちゃんだ！！」

勢いよく一子が飛びついてきた。よし、ここは優しく受け止めてドスン！（ ちょっと勢いよすぎだね 鳩尾痛い。

「おお、晴蘭君だったか。スマヌのう いきなり川神流など使ってしまった」

おじいちゃんは深々と頭を下げてくれた。別に気にしてないのに。

「そんな止めてよ！ボクに非があつた訳だし　それに、久々にお
じいちゃんの蹴りを食らつて気合が入つたよ」

ニツコリと笑つて見せるとおじいちゃんも笑い返してくれた。

ところで、一子は一向に放してくれる気配がない。むしろよりき
つく抱きしめられてグリグリと頭が腹に押し付けて痛い。

「か、一子？　苦しい苦しい」

「ああゴメン！　つい懐かしくて！」

「いやぁホントに懐かしいよ。相変わらず修行ばかりしてるのかな
？」

「そりゃあもう！」

まあ見たらわかつたけど。

さつき再会した時にタイヤ二つも重りにしてたしなあ。

それに昔と比べて格段に力が上がってるみたいだ。その力がついた
一子をやっとの思いで引き離れた。

「それにしても本当に急に帰ってきたもんじゃのう」

「サプライズだよサプライズ。まあ時間が無かったのもあるけど

一子。ちょっとおじいちゃんと話したいことあるから外しても
よえらるっ?」

「うん? わかったわ!」

一子は頭の上にクエスチョンマークを浮かべながらも、すんなりと
言うことを聞いて部屋から出て行ってくれた。

一子がここから離れて周りに誰もいないのを確かめてからおじいち
ゃんは話を切り出してくれた。

「それで、何用じゃ? 要件があるのじゃろっ?」

「うん。それなんだけどさ、おじいちゃんはボクの家が代々受け継
いでいる流派について知ってる?」

「むっ? 聞いたことないのう」

「七天流しちてんりゅうって、聞いたことない？」

「七天流 じゃと!？」

おじいちゃんが驚いていた。知ってるほうが普通に驚きなんだけ
な。

第四話 帰ってきた晴蘭（後書き）

お気に入り登録してくれた方、閲覧してくれた方、感想を書いてくださった方に感謝いたします！！

第五話 七天流（前書き）

ストックを作らねば

第五話 七天流

七天流

それはかつて天下無双を誇ったと謳われていた武道の流派。

その流派を完全に極めた者の拳は天を裂き、蹴りは海を割り、奥義は戦国の国一つ支配できる威力を秘めていたと言われている。動乱の戦国時代、名を馳せた戦国大名の家臣の中にはその使い手が必ずついたと言われている。

しかし、そんな強大な力を持ったものが世に知られようものなら、後の世で七天流を求めた猛者共が暴れて日本がさらに荒れてしまう。そう考えたかの有名な徳川家康公は七天流を表の歴史から消した。

しかし、そこでさらに事件が起きた。

日本が鎖国された徳川家光公が御時世、七天流の門下生の中で七天流を使い異国へ逃げようとした者が現れた。それを聞いた幕府は七天流を危険と判断。七天流は危険すぎる、ただそれだけの理由で七天流に関わった者は皆秘密裏に処罰された。

「七天流は完全に滅んだはずじゃ なぜお主の家がそれを受け継いでおる？」

「どうやらおじいちゃんはかなり現代に生きる人の仲では詳しい部類らしい。」

「完全には滅ばなかったんだ。江戸時代当時の七天流総代は七天流を書き記した7つの巻物を7つの分家に託しておいたみたい。それについての話なんだ」

「その巻物がどうしたのじゃ？」

「どうやら悪用しようとしてる奴がいるみたいでさ、解っている段階で2つが行方不明」

この時、おじいちゃんはあまり驚いていなかった。結構ゆゆしき事態なんだけどなあ。

「皇樹じゆじゆの巻と崩雷ほうらいの巻、薩摩と土佐にあった分家がつぶされて持っていかれたみたい」

「その危険性は如何ほどじゃ」

「武の素質が全くない素人でも1つ読めばたいいの武人を圧倒し、2つ読めば高位の修行僧クラスを叩き潰し、3つ読めば武道の師範代クラスを凌駕できる。4つ読めば下手したらじいちゃんにも匹敵するかもね」

事の重大さが解ったのか、おじいちゃんの顔にも焦りが見えてきた。

7つの巻物全てを読んだとき、一体どうなるのかを想像したらそりゃあ身震いもするよね、おじいちゃんは七天流のことをそれなりに知ってるみたいだし。

「今ボクの手元には3つ巻物があるから、残りは加賀と陸奥の2つ」

「まさか お主の怪しい気配の正体は」

どうやらおじいちゃんにはバレてたみたいだね。

気を抑えてもちよつと漏れちゃうのが難点だ。

すぐに読み取られちゃうんだもんね、「コイツら」特有の気、気配、威圧感。

「3つとも読んだよ、ボクにもそれなりに武の素質あったみたいだから 今のボクは結構強いよ?」

「何故じゃ？何故危険と解っていてそのようなものに手を出したのじゃー！」

「怒らないでよ、ちゃんと理由があるから。実はボクが今度の分家の総代になってさ。今回の事件を含めて決めただ。」

ボクは自分の鞆から細かい文字が書かれた数多の札で頑丈に閉じられた木箱を3つ取り出した。

おじいちゃんは咄嗟に身構えた。“コイツら”から発する気がおじいちゃんに向かって敵意を剥き出しにしているみたい。

いやむしろ、“こいつら”は悦んでいるのか。

最強の武人、川神鉄心との遭遇に。

「巻物は完全にこの世から消し去る。ボクの代で七天流を完全に滅ぼす。そのためにまず巻物を集める必要があるんだ。その巻物を奪った奴から巻物を奪還するためにこれを読んだんだよ」

おじいちゃんは自分の顎鬚をゆつくりとさすりながら考えていた。

「大体の事情は把握できた、なるほどのう、つまり相談とは」

「協力してほしいんだ。だから百代さんがいない時に来たんだ。あの人がいたら絶対に巻物を読ませてから戦わせそうで」

「いろいろと得心行く理由じゃ」

おじいちゃんが躊躇い無く頷いていた。

まあ、主に百代さんの件くだりだろうけどね。

「協力してほしいのは、多分この巻物と似たような気配がするだろうから感知したら教えてね。ボクはボクで情報を集めるからさ」

「しかと承ったぞい」

「ありがとうおじいちゃん。あと悪いんだけど 今日泊めてもらっていいかな？いきなり来たもんだから住む所がまだ決まってなくて」

へへへと笑って見せると、真剣な雰囲気はなくなり、おじいちゃんは喜んで寢床を用意してくれた。いやあよかった。

流石に4月とは言え野宿は寒いしね。

「ごめんくーださいー!」

その時、川神院に元気な声が響き渡った。

「来おつたの、お主以外にも今日ここに泊まる学生がいるんじゃないよ」
「そうなんだ」

この時は軽く受け止めていたが。

これが予想だにしない事件の予兆だったのに、この時のボクは気付かなかった。

第五話 七天流（後書き）

サンデーはうえきの法則が載ってた辺りが絶頂期だと思うところ
です

マガジンは飽きませんね

ジャンプはめだかボックスが楽しみで仕方無いですよ

ビッグコミックは黄金のラフですかね

最近はライバル読んでないなあ

第六話 接触（前書き）

もじとじと話を聞かへておしよるじとじと

第六話 接触

Side 晴蘭

「

あの後、おじいちゃんには1室しっかりと貸してもらった。布団もあるし、ちゃぶ台もあるし、荷物置くスペースもあるし、テレビもあるし、冷蔵庫もあるし、パソコンもあるし。空調設備、収納スペースもばっちり。

え？なにこの優良物件。

これで家賃タダだよ？！っそのことここに住まわせてもらおうかな。流石にお金は出すけど。

「感謝感謝」

一息ついたところでちゃぶ台を隅に追いやり、札で頑丈に閉じられている巻物の入った木箱を三つ並べた。

ボクは座布団の上で正座、気が引き締まるから正座は好きだ。

さて、これを開けると川神院どころか、下手すれば川神市全域に“こいつら”の気が充満しちゃうね。閉じたままにしておくか。

ガタガタガタガタ！！

三つの木箱全てが音を立てて騒ぎ始める。

「落ち着きなよ楼閣ろうかく、穿火せんか、劉士りゅうし。今はまだ君たちが暴れる時じゃない」

ガタガタガタガタガタガタガタガタガタ！！！！

さつきより激しく暴れてるなあ。開放しろと言わんばかりだ。

いや、実際そう言ってるんだろ。一応、主であるボクにさえも“コイツら”は禍々しい気全開で闘争心剥き出しなんだから。おじいちゃんに会ってから気が乱れてるのはボクにも解る。

「安心しなよ、どうせいずれイヤでも巻物の所持者と戦うことになるんだしさ。楽しみは取っておこうよ。ボクとしては一氣にやるほ

うが楽しいと思うよ?」

ガタガタガタカタカタ カタ タ

ようやく収まった。これだけでも一苦労だ。ああしんどい 普段はおとなしいのにおじいちゃんと会ったら興奮しちゃったのかな

「せーちゃん! ご飯だよー!」

グッドタイミング一子。1仕事終わって疲れた時はご飯だよね。

「丁度キリが良かったから今から行くよ」

そう言つと一子は素早く移動していった。元気な奴だ。

じゃあご飯にありつきますかね。川神院のご飯ってどんなのかな?

ご飯への期待に胸を膨らませながら、ガラッ!と勢いよく襖を開けた。

どすん!

「キヤツ!？」

「わっ!？」

体を部屋から出した直後何かにぶつかった。どうやら人みたいだぞ。

「あたたた
」

床に尻餅をついているのはボクと歳の変わらなさそうな女の子だった。

腰近くまである長い桃色のツインテール、体はスラッとしてホツトパンツがよく似合いそうな綺麗な脚。

恐らく身長はボクより少し小さい160センチ半ばくらいだろうか。

しかし、胸が結構大きいな　パツと見ただけで80はありそうだと、イカンイカン。

「う、ごめん!ぶつかっちゃって!」

しかし、その胸の大きさに動じずにそつと手を差し出す。なんか紳士的だぞボク。

「あはは、いいのいいの！アタシがよそ見してたのが悪かったんだし」

女の子はボクの手を取ろうとして女の子の指先がボクの手に触れた。

バチーン！！

その瞬間、女の子の手は急にボクの手には弾かれてしまった。手を差し伸べたボク自身にも何が起きたのか理解できなかった。

「え

」

女の子も自分の弾かれた手を見つめて呆然としていた。

「だ、大丈夫？今は

」

「触らないで！！」

突然の大声にひるんでしまった。ボク何かいけないことしたのかな？

「なんで川神院に

」

そう言い残して女の子は桃色の髪をたなびかせて去っていった。しまった。何だったんだ一体

第六話 接触（後書き）

その内テスト始まるので更新にバラつきが出るかもしれない

早くまゆまゆ出したいのに ！！

話が進まないじゃないか！！

第七話 晴蘭の提案（前書き）

そうか、2話に分割しなきゃいいんだ

第七話 晴蘭の提案

Side ????

男の人とぶつかって尻餅をついてしまった。

すると、男の人はアタシに手を差し伸べてくれた。

男の人は緑髪のパサボサ頭、スゴイ印象的だ。身長もアタシより10センチくらい高いから翔一の身長に近いみたいね。

うまく気を抑えてるみたいだから相当な手練てだれだと思う。体つきも服の上だからなんとなくだけど 鍛えてる体してる。

アタシはその男の人から差し出された手を取ろうとした。

バチーン！！

男の手に触れた瞬間、アタシの手が弾かれた。静電気なんて比じゃないぐらいの衝撃を伴って。

いきなりの事だったから戸惑ったけど

間違いない。

この感覚は忘れない。

「なんで川神院に

」

なんで川神院にあの悪魔が

！！

Side Out

Side 晴蘭

「ゴメンねせーちゃん。今日はお姉さまは泊まりでいなくて

一子はボクの隣で一緒にご飯を食べていた。それにしても夕飯は
気が引けるなあ

「気にしなくていいよ。仕方ないもん」

だっっていない時を見計らって来たんだもん。いたら逆に困るよ。

「それよりおじいちゃん。いいの？タダで泊めてくれてその上ご飯まで」

「ほっほっほ、若いうちはそんなもん気にせんでええ」

ニッコリと笑ってくれてるけど　　やっぱり何かしなくちゃなあ
巻物の件も頼んじやったし。

頼みっぱなし、一方通行の要望ってのはどうも性分に合わないみたいだ。

よし、決めたぞ！

「じゃあおじいちゃん、今度川神院の仕事色々と手伝うよ。そうすれば今日のお礼にはなるしさ」

「む？いいんかのう　　掃除とか洗濯とかの雑用ばっかじゃぞ？」

おじいちゃんは考え込んでいた。まあ確かにいきなりすぎるよね。

「むしろその方が助かるよ。門下生の相手をしろとか格闘系の手伝

何かより、雑用系の手伝い方が性にあってるからさ」

「よし、ならこれからもここに泊まっていきなさい。雑用係としての泊まり込みのバイトみたいなもんじゃの」

「いいの!?!」

自分で切り出した案とはいえ、まさかこれからも泊まっていいいとは思わなかった。

「話を聞く限り、お主だけで来たのじゃろ?なら住む場所がないのも領ける。ワシとしてはかわいい孫がもう一人出来たみたいで嬉しいもんじゃ」

「ありがとうおじいちゃん!」

やった!これで当分住むところには困らないぞ!

おじいちゃんが優しくてよかった

さて、住居の問題が解決したところで。

さっきからこっちを睨んでくる女の子が1人。

さっきぶつかった桃色の髪の女の子だ

これはどうしたもんか

ボクホントに何か悪いことしちゃったのか!?

第七話 晴蘭の提案（後書き）

話が進まないぞ

クリスが出るまで何話かかるんだよ

第八話 戦闘準備（前書き）

こっから本文が1000字ほど長くなります。

第八話 戦闘準備

Side 一子

「一子ちゃん、よね？」

ご飯を食べ終わって食器を片付けていると後ろから声をかけられた。後ろを振り返ると、さつき川神院にやってきた今日泊まっていた女の人だった。

「そうですけど どうしました？」

「あの緑髪の男、何て名前なの？あと、アタシたち同い年なんだから敬語は無し！」

「え！？そうなんですか！？」

「ほらまた敬語！」

「はっ！」

つついっお客さんには敬語を使っちゃう。いけないいけない、気を

つけなきゃ。それに、見知らぬ人だけどちよつとお姉様みたいな雰
囲気がして、尊敬の念を表そうと敬語を使ってしまう。

でも今緑髪の男って言ったよね？

「それってせーちゃんのこと？」

「その　せーちゃんの本名は？」

「秋星晴蘭だけど　」

女の方は1度考え込むように目を瞑った。

「　　ありがとう、じゃあアタシちよつと用事が出来たから失礼する
ね」

そう言つて桃色の髪の女の方は食堂から立ち去つて行った。

一体なんだつたんだろう？それにアタシが同じ年つてなんで知つて
たんだろう？

ひよつとしたらファミリーの誰かの知り合いかしら？うーん、謎だ
わ

Side Out

S i d e 晴蘭

ガタガタガタガタガタ！

部屋に戻ったボクがまず目についたのは3つの木箱、何故かまた騒ぎ始めていた。

「 どうしたんだ？ 」

ボクは1番左側の木箱を手にとって話しかけた。

これだけ近ければ巻物の“声”もギリギリ聞き取れるだろう。

（主、主に殺気向けられてるよ？）

巻物の“声”がボクに忠告をしてくれた。

巻物たちは殺気に反応して興奮していたんだろう。

「なんとなく気付いてるよ。多分あの女の子だろうね。何か悪いことしたのかな？」

(どうだろうね、そのうち襲われるだろうからその時に聞いたら？)

なんて不吉なことを コイツはたまに怖いことを言うから困る

(あながち外れじゃないと思うよ？主の後ろの襖の奥から殺気がピリピリきてる、聞き耳立ててるんじゃないかな)

やっぱり、どつりでさっきから誰かの気配がするわけだ。意識してみると、確かに嫌な視線を感じる。

(応戦する？応戦するとしても、どうせ僕はまだ使ってもらえないのだから)

木箱が少し寂しそうにカタカタと揺れた。

「ごめんな楼閣、お前は切り札だから」

(まあ慣れちゃったからいいけどね。じゃあ穿火を使ってあげてよ、あの子相当ストレス溜まってるみたいだから)

この“声”が聞こえたのか、真ん中の木箱が飛び上がった。おいお

い、一応嚴重に封印してあるんだけどさ。相変わらずコイツは好戦的過ぎる。

「解った。じゃあ穿火で迎え撃とうかな」

僕は木箱を全部鞆の中にしてしまう。おじいちゃんに知らせた方がいいだろうけど。外に出たらあの女の子に襲われるだろう。ならばここは文明の力。

「もしもし一子？ちょっとおじいちゃんと話したいから代わってくれる？」

ポケットから取り出した携帯電話で一子と連絡を取る。先ほど一子の電話番号を聞いておいて正解だった。

直ぐさま一子はおじいちゃんの所へ向かってくれたようだ。

10秒とかからないうちにおじいちゃんが電話に出る。

『晴蘭君か、何じゃい？』

「あ、おじいちゃん？実はさ、ちょっとあの女の子と戦う雰囲気になっちゃって。ここの広場で戦いたいんだけどいいかな？」

『ふむ、まあいいじゃろう。結界も張っておこう。百代にあ

まり気づかれんようにせんとな。それに、ワシも七天流を見てみた
くつのは』

七天流が見たいって本音出しちゃったよおじいちゃん。

「ありがとう。それじゃあ準備をして広場に行くね」

通話を切って携帯をポケットにしまう。

よし、おじいちゃんのご期待には応えなきゃね。

「そこで盗み聞きしてる人、聞こえた？広場に行こうよ」

ボクの呼びかけに、襖の向こうの人が立ち上がってガラッ！と襖を
開けた。

「先に行ってるわ」

ピシャン！と勢いよく襖が閉じられた。

それを言うためだけなら別に襖を開けなくてもよかったんじゃない？

S i d e O u t

S i d e ? ? ?

気づかれていた。あの男、やっぱり相当できるようだ。

殺気だけでアタシって解るものなの？普通はまだほぼ面識のないア
タシの事は解らないはずなのに やっぱりあの男 何か知っ
ている。

あの男は強い。アタシが敵うかも解らない。

でも、勝たなきゃいけない。

そのためにアタシは強くなったんだから

S i d e O u t

S i d e 晴蘭

服を着替えて川神院内の広場にやってきた。

服を着替えたと言っても、下は黒いジャージに上は白い無地のＴシャツ。

一応、この組み合わせがボクの戦闘服。

身軽に動けるし代えも効く。そこいらのスポーツ用品店に行けば直ぐにそろつた物で、この服装に大した思い入れは無い。強いて言えば、父さんもこんな格好が好きだったから、その影響なのかな？

「お待たせ」

「気にしないで、アタシも今準備が終わったところだから」

広場の真ん中でボクと女の子は対峙する。この女の子から感じる殺気、ホントにボク何しちやっただらうかな

見物人は3人、おじいちゃんと一子、それと川神院の師範代であるルーさん。

「これは楽しみですネ」

「むっ」

「せーちゃん頑張れー!!」

照れ臭かったが、一子の声援に軽く手を振って応える。

「随分余裕ね」

それが気に入らなかったのか、女の子は語気を荒げていた。

「安心してよ、油断なんてしてないからさ」

油断はしない、そんな殺気をバリバリ出してる相手に余所見なんかするもんか。ずっと気にかけているに決まっている。

「ではワシが立会人じゃ。ワシが止めたら試合は終了じゃ。異論はないかのう？」

「ええ」

「りょーかい」

おじいちゃんの確認が終わると暫く静寂が辺りを包んだ。

「時間無制限、一本勝負 始めい!!!」

第八話 戦闘準備（後書き）

次はうまく書けるか解らないバトル描写になります！

生暖かい目で見守りください

第九話 激突！（前書き）

さあついに戦いの回

第九話 激突！

Side 晴蘭

「時間無制限、1本勝負 始めい！！！」

「はっ！！！」

おじいちゃんの開始宣言とほぼ同時、女の子の姿が消えた。

「うむ、よい動きじゃ」

おじいちゃんは実況やら解説やらして楽しむみたい。

さて、あれは縮地法の1種だね。ああいう技の後の出現場所は相場が決まっている。

「後ろ！！！」

ボクが背後へ振り向きざまにハイキックを繰り出すと、ガツキイン！！と、ボクの足と何かが耳障りな金属音を立てて衝突した。

正体を確認すると、女の子の両手に握られたトンファーがハイキックを防いでいた。

いつのまにトンファーなんか取り出したのか。それに、どこに隠し持っていたんだ？

「やるね」

「そつちこそ、でもね」

すると女の子はニッコリ笑って、トンファーを手放した。

「アタシこれは嫌いなものよ」

「え？うわッ!？」

トンファーの支えがなくなりボクはバランスを崩す。

「纏元流、緋燕！」
てんげんりゅう ひえん

女の子は上体を反らし、サマーソルトキックのように右足をボクの顎目掛けて蹴り上げてきた。

「うおおおおッ!？」

片足しか地についていないが、こっちも負けじと上体を反らしてそれをかわす。

しかし、それはタダの蹴りではなかった。

ブシュッ!と何かが噴き出る音がボクの腹の辺りから聞こえた。音の出所を見ると、ボクの白い服が鮮血によって真っ赤に染まっついて、その傷口は何かで切られたようなものだ。

焦ったボクは思わず10メートル近く距離をとると、女の子の足下に血のついたナイフが落ちているのに気づいた。

「油断大敵よ、あれ?油断なんてしてないんじゃないかなかった?」

挑発的な誘いだね全く。結構痛いぞこれ

S i d e O u t

S i d e 鉄心

「纏元流、なるほどのう。これはまた古流派武術の使い手じゃ」

「ジーちゃん、纏元流って？」

「かつて、大陸の一部分で使われていた暗殺用の武術が発展したものじゃ。巧みに武器を操る武術らしいんじゃが、ワシも詳しいことは知らなんだ。何せこれを使える者にワシは会ったことが無いものでう。これは本当に見る価値のある戦いじゃぞ。」

Side Out

Side 晴蘭

「へえ 面白いね。まだどっかに刃物を隠してるのかな？」

幸い傷は浅い、これなら後でどうにでもなるから気にしない。

さてと、恐らくあの女の子は暗器使い、本当に警戒するのは刃物以外にあるかもしれないな。

下手したら拳銃とかの飛び道具だってあり得る。いや、そうであつてほしくはないんだけどさ。

「じゃあ今度はこっちから行くね」

ボクはゆっくりと両手を合わせて目を閉じた。

「七天流奥義書が一つ、穿火 解放！！」

ボクが目を見開いたのと同時に、轟ッ！！と、ボクの周囲の大气が音をあげてうねり出した。

「ッ！？なによこれ！！」

「七天流、陽炎」

ボクは予測動作無しで移動して間合いを一気に詰める。残り1メートルあるかないか解らないくらいまで女の子に接近した。

「七天流、鳳仙火！」

ボクは拳を前に突き出す。その拳から炎をまとった気の塊、気弾が数10個が女の子に向けて発射された。その気弾はボクが止めない限り、毎秒数十個の気弾が発射され続けるよ、どうする？

「 て、纏元流 這鼠はいねずみ!!! 」

バシユツ！と女の子の両足の靴から1つずつ手裏剣が回転しながら射出された。まるで地を這う生き物のようにボクに向かってくる。

「 ツ！？ヤバツ

」！

2つの手裏剣はボクの足下で高度を上げて上昇し、勢いを増してボクの腹を切り裂いた。その傷口から真っ赤な鮮血が勢いよく噴き出す。

「 が、あ

」

ボクは腹を押さえてかすれた声を発して、そのまま後ろ向きに倒れこんだ。

そのままボクはピクリとも動かなかった。

「 や、やった 勝った !! 」

女の子は鎖を地面に落としてその場に座り込み、体内の空気を思い

つきり吐き出した。

「なんてね、残念でした」

「ッ
」

女の子は硬直した。先ほど目の前で倒れた男の音が“背後”から聞こえたらまあボクでも驚くけどさ。

「仕込み手裏剣かあ、スゴいなあ」

「な、んで」

女の子は呆然として“倒れているボク”を指差していた。

「ああ、あれ？あれは七天流の陽炎だよ、さっき使ったでしょ？あれ予測動作無しソーマーションの移動技じゃなくてさ、実は大気に自分の気を練り

こんで分身を作る技なんだ。なかなか強かったでしょ？ボクの気を3分の1もつき込んで作った分身だから」

「さ、3分の、1？それだけで、あんな威力？」

女の子は自分の手を見ていた。その手はボクの分身の放った気弾の炎で肘まで酷く火傷をしていた。ちよつとやりすぎたかな

女の子はしばらく何も言わずに考え込んでいた。

「今から“あれ”を出してももう遅い
油断してたのはア
タシ、か」

「え？」

「降参する、アタシの負け」

女の子は俯いて自分の負けを宣言した。

「そこまで！！勝者、秋星晴蘭！！！」

決闘が終わった後、女の子の腕の治療は火傷を負わせたボクが率先してすることになった。

女の子は嫌がっていたが、勝者の権利を行使して無理矢理治療させてもらっている。これくらいしなきゃ申し訳ない。

「ねえ、よければ名前教えてくれない？何て呼べばいいのか解らなくて」

「麗よ、峰槻麗」

「じゃあ 麗、何でボクに殺気に向けてるのか教えてくれないかな？このままじゃ気になって夜も寝れないよ」

「いいわ、教えてあげる。理由はたった1つだから」

麗はボクの麗を治療している手を振り払い、怒りの籠った目でボクを睨みつけてきた。

「アンタが悪魔だからよ！」

ボクが、悪魔？

第九話 激突！（後書き）

さて、もう一方の小説も頑張らねば。

ためたまま出し忘れていたものですけどWWW

コードブレイカー面白い

第十話 2人の過去（前書き）

シリアスに出来ないのは自分の修行不足

ここからまた分量増えます

第十話 2人の過去

Side 晴蘭

「あ、悪魔？」

思わず聞き返してしまった。

悪魔って何のことだ？ボクは麗さんと面識なんか一切無いのに
なんでそんなこと言われるんだ？

「忘れるもんか、アタシの兄貴を“実験台”と言って見るも無残な
姿になるまで殺したあの男！アタシの兄貴は七天流に殺されたのよ
！！」

麗が叫んだ。

七天流が殺人に使われた、その衝撃的な事実にもも言えなかった。
それはボクら七天流の関係者が七天流の危険性に気付くのが遅すぎ
たからだ

しかし、そんなボクのことなど気にせず麗は話を続ける。

「アタシたち家族はお母さんの病気の療養のために北陸の方まで引越した。お父さんの知り合いの黛さんって人に援助のおかげで人付き合いは問題なかったし、住居に關しても困ることなく数年間暮らした。けどね、人生そう簡単には行かなかつたわ」

麗は目に涙をためていた。それは悔しさから来るものなのか悲しさから来るものなのか、ボクは解らなかつた。ただ、その目に強い意志が宿っていたのはよく解つた。

「ある日、兄貴が山まで修行を兼ねて山菜を取りに行った、アタシも一緒に。そこで山菜取りをしていたら山奥から真つ黒なフードの男がやって来てこう言つたわ」

麗はボクを睨んだまま視線を逸らさなかつた。

「『お前が纏元流の次期頭首、峰槻旭か。俺の七天流の“実験台”になつてもららうぞ』ってね。兄貴は必死に応戦した、修行中の身だったけどその実力はお父さんにも引けを取らなかつた。それなのにそれなのに!!」

麗はボクの胸倉を掴み上げて泣きながら訴えてきた。

「アイツは兄貴の4肢の靱帯を七天流で切つて使えなくさせてから

痛めつけたのよ！それこそ“実験台”のようにね！！アイツは兄貴を樹に縛り付けてサンドバッグみたいになら七天流を何度も何度もぶつけて苦しめた！！死にそうになつたら七天流の回復技を使って意識が途切れないように！！骨が砕けても内臓が爆発しても体中切り傷塗れになつてもまた元に戻る、地獄の繰り返しよ！！死んだほうがマシだつて思わせるくらいの一方向的な処刑よ！！」

麗はその光景を鮮明に覚えているのだろう、感情が抑えきれずにいるようだ。

「兄貴は何度も『殺してくれ』つて頼んでいた。けどそれは自分が楽になりたいからじゃなかったの。兄貴は一時間も無理矢理生かさね続けて殺す寸前に追いやられて　それでも精神が狂わずに兄貴はこう続けたわ。『俺の事は殺しても構わん、だが、妹だけは見逃してくれ、頼む、俺を殺してくれ』つてね。兄貴はアタシの誇りよ、だからアタシは兄貴を殺した七天流を許さない！！だからアタシは必死に修行して力をつけた！！復讐を果たすために！！七天流を使う“悪魔”を殺すために！！！」

「　それでボクに殺気を向けてた訳ね。でもボクがそのフードの人物と同一人物だつて解らないよ？ボクとぶつかったときからボクを敵視する理由が無いじゃないか」

「理由ならあるわ」

何だつて？理由がある？ボクに心当たりがないのに？

けど、麗の声は自信に満ちていた。

「アタシは七天流を使える者が持つ特有の気に対して過敏に反応する力を持つてる。そのフードの男が『見つけてみな、捕まえてみな、復讐しに来な』と言って去り際にアタシに預けて行った力よ。アタシが兄貴が殺されたのにシヨックを受けて動くことも話すこともまともに出来なかつた時にね」

なるほど、あの時麗の手が弾かれたのはそれが原因だったのか。

それだけじゃないわ、と麗は推理を続ける。

「アイツはその後はアタシにこう言ったのよ。『“秋星”、今度の七天流の総代だ。覚えておくといい』ってね。アンタの苗字、秋星よね？」

秋星、だって？ボクは耳を疑った。

「それは七天流の機密事項だ。ボクの家は昔からのしきたりに倣って、総代を受け継ぐ家の名前が知られぬように咲昏さきぐれって名前を使って総代を受け継いだんだよ？実質、父さんの代も咲昏さきぐれで通っていた。それなのに、秋星と七天流が関係してるなんて分家でも知らないことをなんでそんなフードの奴が知ってるんだ？」

「アンタかアンタの家族の誰かが犯人なのよ！そうに決まって

「一瞬、頭が真っ白になった。」

「勝手に決め付けるな！！！！」

ボクは感情に任せて怒鳴り散らした。麗はそれに驚いて目をパチパチさせていたがそんなことは気にしない。コイツは今言っちゃ行けないことを言っただ。

「ボクの両親は世界中を巡る仕事だった、ボクも一緒にね　ある日、日本に帰ってきて、尾張の自分の家に戻った時、ボクの家も襲われたんだ！！巻物は何とか死守して生き残ったのは　ボクと母さんだけ　他は皆殺しにされた！！父さんも、お婆ちゃんも、お爺ちゃんも、弟も、みんなみんな殺された！！何とか二人で海外に逃げたけど、その母さんも数年前に過労で倒れてそのまま息絶えた！！もうボクの家族は誰もいないんだぞ！！これでもまだボクの家族の誰かが犯人だって言うのか！！！！」

麗はボクの気迫に押され黙ってしまった。

全部言い終わったところで頭が少し冷えた。いけない、ボクも少し冷静になろう。

「ボクはなんとか七天流の分家を説得して3つまで巻物を集めたけど、アイツは残りの七天流の奥義書を使ってまだ悪事をやらかすつもりだ。その犯人が誰かは見当がつかないけど、今の話を聞いて解ったことが1つある」

「何よ」

「麗のお兄さんを殺したフードの男とボクの家を襲って七天流を集めている犯人、この2人が同一人物だってこと」

「え？」

「さっきお兄さんは七天流の回復技を使われたって言うたよね？七天流の中で他人を回復させることが出来るのは皇樹の巻を読んだものだけ、その皇樹の巻は元々は島津に保管されてた物で、それを奪ったのがボクの家を襲った犯人なんだ。恐らく奴はそのうちボクの持っている3つの巻物を取りに川神にやって来る」

信じたくないけど、七天流の被害がもう出始めている。しかもその被害者が目の前に。

麗さんの事情を知ってしまったのもあるけど、被害者のこの子にはボクの事情も七天流の情報も知ってもらいたかった。

ボクも麗さんも、家族を目の前で殺された被害者なんだから。

「今の話は 全部本当？」

「嘘をついたところでボクにメリットは無いよ。家族がいないなんて嘘ついてどうするのさ。それに、久々に川神に戻ってきたらさ、偶然にも同じ目的の仲間に出会えたのは幸運だしね。仲間には嘘をつかないよ」

「仲間？」

「同じ目的を持った仲間だよ、復讐仲間」

麗はしばらく考え込んで何も言わなくなった。

すると、麗はボクの胸倉から手を放してボクと向き合った。

その目には炎が、お兄さんの仇討ちへの闘志が宿って見えた気がした。

「いいわ、共同戦線よ。ただし、条件がある」

麗はボクに近寄り睨みつけてくる。その距離は30センチも無いだろつ。

「アイツはアタシが殺す」

「それは譲れないな、ボクが殺す」

「じゃあこうしましよ、殺したもん勝ち」

「シンプルでいいね、そうしよう」

ボクは手を差し出した。何がしたいのか麗も解ったのだろう、麗も手を伸ばして握手をする。

今日ここに復讐同盟が結成された。

S i d e O u t

「ワシらも聞いてしまったのう」

「
」

せーちゃんと麗さんが握手をしている。

目的が復讐、そんな悲しい目的の一致。

「あの2人は相当過酷な人生を送っておる。麗君は大切な兄を失い、晴蘭君に至っては天涯孤独じゃ。しかもその理由が全て殺人によるものじゃ」

「でも、でも復讐なんて！」

「ふむ、確かに褒められたことではないのう。じゃが一子、あの2人は幼い頃からそれを目的として生きてきたのじゃ。無理矢理止めさせることは恐らく出来ぬ。それに、2人とも解っておるのじゃろう。復讐の先には虚しい空虚な悲しさしか残らん、その上得るものが無いことなど」

「せーちゃん」

「一子、このことは部外者に漏らすでないぞ？あの2人が話すまでワシらは関与してはならん問題じゃ」

アタシは強く頷いた。

復讐なんて応援はしたくないけど、せーちゃんと麗さんにはそんなことしてほしくないけど、アタシにはそれを止めることはできなさそう。

せめて祈る、2人が無事でありますように。

第十話 2人の過去（後書き）

感想カモンです

あと少しでようやく原作の流れに乗れる！！

第十一話 麗と大和と翔一（前書き）

間隔が開いてしまった

第十一話 麗と大和と翔一

S i d e 大和

「さあ大和、説明プリーズ」

夕飯（ゲンさん作、本人曰く自分のついで）を食べた俺は京に迫られていた。

理由は明白、俺とキャップと麗の関係について聞きたいんだろう。

キャップは京に捕まると察したのか、飯を驚くべき速度でたいらげて寮から飛び出していった。

居間には俺とゲンさんと京の3人、新しく入った一年生は出かけていない。

「茶でも出してやろう、勘違いすんなよ、俺のついでだ」

そついいながらも丁寧にお茶を入れてくれるあたり、この人はツンデレなんだろう。

ゲンさんのお茶をすする、うーん、いい味。

「大和、早く」

お茶で和んでこの話題を回避なんて出来なかった。

「解ったから急かすなよ　そんなに面白い話じゃねえけどな。あれはワン子が入る前、風間ファミリーが結成される前の話だよ」

Side Out

Side 大和's Memories

俺、直江大和と、風間ファミリーのキャップこと風間翔一。俺たちは家が超至近距離で親同士も仲がよく、気がついたら遊んでいる仲間だった。

意外に気もあつたし、この頃から相当仲がよかったのを覚えてる。

「あそこの駄菓子屋にピックリマンの新しいのが入ったってよ！」

「キラを狙うなら法則にしたがって新品の箱から慎重に選ぼう」

キャップが俺をリードしている感じ、まあ今もそうだが、とにかくバカばっかやってて楽しかったよ。

それがある日、嵐が襲ったように1人の女の子がやってきたんだ。

「アンタたち、面白そうなこととしてそうね」

ソイツは腕を組んで俺たちの目の前で仁王立ちをして立ちふさがっていったんだ。

「誰だお前！」

「峰槻麗って言うの、ちょっと面白い話があるんだけど、興味ないかしら？」

ソイツの笑顔は、子供か疑ってしまうくらい何か裏がありそうな不敵な笑みだった。

「どっつする？」

「聞くに決まってるだろ！何なんだその話って？」

キャップは疑いも無し、と言うか楽しそうな感じがしたんだろう、非常に乗り気だった。

「山のほうにどうやら埋蔵金があるみたいなのよ、しかもトクガワ！」

「おお！トクガワ！埋蔵金！なんだか冒険の匂いがするぜ！！」

「トクガワが何か解ってるのか？」

「知らん！けどなんだかすごそーじゃん！！」

この頃はトクガワとかノブナガとか、そんな名前だけでもカッコイイと興奮できるお年頃だったからな。

「決まりね！行きましよう！」

この後山まで俺たち3人は行ったんだが、結局徳川の埋蔵金なんてあるはずもなく、そのまま帰り道が解らなくなって迷子になったんだ。

「くそ、もう歩けねえよ」

真っ先に諦めたのは俺だった。こんなに遠出をしたことなんて1回もなかったからな。

「諦めちゃダメだぞ！まだ助かる！」

「そうは言っても さっき足ひねっちまった」

「ちよつと見せて」

足の怪我也あつて諦めていた俺はもうどうでもよかつたが、麗は一切諦めてなんかいなかった。まあキャップに関して言えばいつも通り突っ走っていたが。

「いてっ」

「ちよつと我慢して、包帯で固定するから」

麗は俺の足の患部に湿布を貼って包帯で固定してくれた。こんな手際がいい子供は滅多にいないだろうな。

「スゲエ！そんなもん持ち歩いてんのかよ！」

麗が持っていたのは湿布や包帯だけじゃなくて、絆創膏はもちろん、消毒液やガーゼにテーピング用のテープまで持っていた。

「誘ったのはアタシ、だったらアンタたちを無事に帰すのもアタシよ。ほら大和、乗って」

「え？」

麗がしゃがんで俺に背中を向けていた。始めは何を言ってるか解らなかつたがな。

「背中に乗れって言ってるの」

「い、イヤだ！そんな恥ずかしいこと！」

「これ以上歩かせるとホントに足が酷くなっちゃう、そんなこと気にしてらんないの！早く乗って！」

「乗れよ大和！3人で帰ろうぜ！」

「」

結局、俺は麗の背中に乗って下山出来た。あん時はスツゲエ恥ずかしかったな。

俺たちの帰りが遅くて危うく警察が出そうだったんだが、ギリギリ

間に合って警察沙汰にはならなかった。

それでもしつかり説教は食らったがな。

「ゴメンね2人とも、アタシが誘ったばかりにさ、大和に至っては怪我させちゃうし」

「気にすんな！楽しかったから大丈夫だぜ！」

「こんくらい平気だ。それより、ありがとな。おんぶしてここまで運んでくれて」

「そりゃあね、アタシは今回の発案者、いわば保護者でお姉さんよ？当然のことしただけ」

「 気に入った！お前！今度から一緒に遊ぼうぜ！」

この頃から、キャップは突発的にいろいろ言い出す癖があったんだな。

「 いいの？また迷惑かけるかもだけど」

「 その時は何とかしてくれるんだろ？お姉さん？」

「 む、生意気！」

それから俺たちは3人で遊ぶようになった。一緒に河原で水切りやったり、夏場だったから虫取で競争したり楽しかった。

けど、そう長くは続かなかったんだ。

この日から1週間後、麗は川神から出て行かなくちゃいけなくなっ
た。

どうやらお母さんが体調が悪くて、自然の多い場所に引越すこと
になったそうだ。

「行っちゃうのか？」

珍しくキャップが寂しそうな顔をしていたのが印象に残ってるな。

「麗」

「しけた面しないでよ！俺たちの別れは後味の良い珈琲のようなく
リアな別れにしようって言ったの大和でしょ！」

ま、まあこの頃の発言のニヒルさは気にするな。

「麗！俺たち離れてても友達だかな！」

「毎月メールするよ、麗」

「当たり前よ翔一！メール楽しみにしてるからね大和！」

麗は桃色の髪をなびかせてお母さんのところへ走っていった。

けどその途中で振り返ってこう言ったんだ。

「また戻ってくるわ！この川神に！約束よ……！」

Side Out

Side 大和

「こんな感じだ。実はあの山で遭難する事件は計3回あってな、麗もキヤップも俺も懲りなかったんだな。つづくつづく呆れるよ。で、毎月互いの近況を含めてメールしてたんだ」

「大和と定期的なメールだと!？」

京の形相が怖い。

「京とは毎日会ってるからいいだろ別に」

「それはこれからもずっと一緒にいてって言うプロポーズ？」

「残念ながら、お友達で」

どうしてそう解釈できるんだろうか。まったく、油断もすきもあつたもんじゃないな。

「それにしても、一子が入る前のお前の連れか」

「その直ぐ後にワン子が入ったんだ。麗がいなくて俺らも寂しかったし、直ぐに仲良くなったなあ。当たり前だけど、麗の代わりとかそう言うのじゃないぞ。まあ1番の理由は近所だったからってのがあるけどな」

実際のところ、一子との出会いにドラマチックなものなんてなかった。ただ、気がついたら一緒に遊んで、一緒にいるんなことするようになったんだよな。

「それにしても、実際キャップがいなくてよったかもな。キャップがいたら余計なこと言いそうだし」

「まだ何かあるの？夫婦の間に隠し事はよくない」

「俺たちまだ学生だからね？ただ、あることないこと言われたら大変だなんて思っただけ」

実際のところ、まだ言っていないことがあるけど、これ言ったらファミリーと麗でいざこざが起きそうだから黙っておこう。

もしかしたら麗がばらしちゃうかも知れないけど、念のためキャップには口封じのメールでも送っておこう。

「直江、茶のおかわりでも淹れてやる、勘違いすんなよ？」

「ありがと、でもこれって、あくまでついでなんだよね？」

「ナイスなツイデレ」

「なんだツイデレって」

「ついでに色々やってくれるツンデレ、略してツイデレ」

「何言ってるやがる椎名、アホらしい。とにかく淹れておくぞ。俺は部屋に戻る」

そう言ってゲンさんは自室へ戻っていった。

やっぱりいい人だ。

「ねえ大和、私は」

京が口ごもっているが、何が言いたいかはなんとなく解る。

「麗をファミリィに入れたくないんだろ？」

「うん、私は今のままでいい」

「俺はどっちでもいいんだ、でもな、キャップのことだ。恐らく無理矢理にでも入れようとするだろう。俺はそうになったら絶対に反対はしないしね」

「む」

ちよつと不機嫌そうになる京の頭をそつとなでてやる。

「それにアイツのために空席を取っておくくらいだ。多分ファミリィ入りは確定だろうぜ？」

「アイツ、そういえばあのボサボサ頭は今頃どうしてるのか」

「シベリアとか寒いところにいるかもな」

「案外日本だったり」

「それだったらアイツは連絡くらいよこすだろうよ、多分国外だよ
きつと」

Side Out

Side 晴蘭

「へくちっ!」

「せーちゃんどうしたの？風邪？」

「どっかの国のお偉いさんがまたボクの噂でもしてるのさ。ドイツ
やロシアの軍隊や組織にはお世話になったしね。それより、みんな
にまだ教えてないよね？ボクが戻ってきてること 2枚チェンジ」

「バッチリよ！こういうドッキリに参加したかったの！アタシ3枚
」!

「悪趣味ねアンタたち ノーチェンジ」

ボクと麗が目的が同じ復讐だと解り結託していたとき、おじいちゃんが一子が話を聞いていたのに気づいた。2人は慌てて隠れようとしたけど、麗の鎖にあえなく捕まってしまった。

一応2人には口外しないようにと念押ししておいたから大丈夫だね。

今はボクと麗と一子で親睦を深めるのを理由にボクの部屋でトランプの真つ最中。種目はポーカである。

「『コール!』」

「ツーパー!」

ボクは勢いよく畳みにJとKのペアを叩きつける。それを見た一子はニヤリと笑って自分の手札を自慢げに出してきた。

「フラッシュ!」

「ウソ!?!」

「ふっふっふ、見くびっちゃダメよ?」

一子が自慢げに鼻を高くしていると、一子の手札の上に麗が手札を載せた。

「ロイヤルストレート」

「「また負けた!?!」」

こうしてボクの川神院初日の夜は更けていった。

Side Out

Side 百代

「
」

寝付けない、私が寝付けないのは珍しい気がする。

何か、何かを私を駆り立てているのか。

頭では感じられず、ただ本能が騒いでいるのか。

この川神に“何か”が来ている。

恐らくあの時の大気の揺れはじじいや私の知っている人物ではないな。

もし私の予感が当たっていたら

面白くなるぞこれから。

「ふ、ふふふふ」

「どうしちゃったのかな」

私のにやけ面が弓子に見られていることに気付かず、私はただ強敵に巡り合えるかも知れない喜びに浸って笑い続けた。

第十一話 麗と大和と翔一（後書き）

ドンドン長くなっていく

これじゃ間隔が開きすぎるような

一週間は開けないように頑張ろう

感想、指摘ヨロシクです

第十二話 早起き3人組（前書き）

サブタイがだんだんとおざなりに

このあたりから5000字で安定してきました

第十二話 早起き3人組

S i d e 麗

目を覚ますと、見慣れない天井が。手を伸ばすと、包帯だらけの自分の手。

「そっか、アタシ川神院にお世話になっただっけ」

何とか昨日の記憶を手繰り寄せて情報を整理する。

昨日は川神院で偶然にも七天流の総代に会っただった。まさか帰省したその日に思わぬ人物と遭遇するなんて、昨日のアタシは何か憑いていたんだろうか。

けど、おかげでいい情報が手に入った。

また謝らないといけないな、情報のお礼と一緒に伝えることにしよう。

「時間は、4時ね。そろそろ起きなきゃ」

毎朝4時起き、そこからアタシは朝の修行をする、これがもう日課になっていた。

「今日はどれくらいつけていこうかな」

アタシは鞆の中からナイフをゴトゴトと取り出す。これらには全部重さが書いてある。

「今日はいつもより多めの10本にしよう」

柄に“10kg”と刻まれたナイフを片手に1本ずつ持ってそれを“カラダ”にしまう。

これを5回繰り返し、アタシはジャージに着替えてランニングに向かった。

Side Out

Side 一子

「よし！準備運動終わり！さあ走るわよ！」

アタシは新聞配達を兼ねて修行をしている。朝5時から6時の近所だけの短いものだけど、スゴイ走りこめるしお金も稼げるしご近所さんの名前も地理にも詳しくなるから一石三鳥。

と、バイトへ出かけようと思ったとき、昨日から川神院でよく目立つ桃色の髪の毛が目に入った。

「あれ？麗？」

麗は広場の隅で素振りをしていた。けど、素振りをしている獲物が異様だ。

木刀とか日本刀とか大剣とかじゃなくて。

でっかいハンマーを振り回していた。それも両手で2本。

「ふう　あ、おはよう一子」

「お、おはよう」

麗とは昨日のトランプ大会のうちに非常に仲良くなった。同い年だし、昔の大和とキャップを知ってたみたいだからより会話が弾んで、まるで昔っからの友人みたいに親しくなった。

けど、あの試合を見た後だとやっぱり尊敬の念の方が強くなっていた。

それに、こんなでっかい得物を振り回している姿を見せ付けられたらさらにね

「ね、ねえ？それ何？」

「ああ、これ？特注の片手ハンマー、1本の重さは17kgで長さは2メートルの鈍器だよ」

サラツと言ったけど、片手17kgをまるで木の枝を振るつように振り回しているのを見るとその重さが信じがたいわね

「ほらいいの？バイトなんでしょ？」

「あ、いけない！じゃあアタシ行ってくるから！」

「行ってらっしゃい。よかつたらだけど、帰ってきたら少しだけ纏元流の技を見せてあげるわよ？」

「いいの？ありがとう麗！行ってきますー！」

アタシは麗と別れてバイトへ向かう。

でもすごいなあ、あのハンマーを軽々と振り回すなんて。けど、あれは麗にとってはまだ序の口なんだろうな。

よし！アタシも頑張ろう！

麗のを見せてくれる纏元流を楽しみにしながら私は川神院から出発した。

Side Out

Side 晴蘭

「おはよう。早いね麗」

「おはよ、アタシもなかなか早い起床時間よ。まあアタシや一子よりは遅いけどね」

朝、起きて散歩に行こうとしたら麗が鍛練をしていた。感心感心。

「まあそれでも6時前に起きたのはかなり早いけどね。」

「朝は弱いんだけど朝の空気は好きだから頑張ってる。まだ眠いけどさ、早起きは三文の徳って言うでしょ?」

「へえ、いい心掛けじゃない」

予想外なことで誉められたのでちょっと照れ臭い。

「それはどうも。それにしても鍛練かあ　ボクも鍛練したいんだけどさ、百代さんに見つかる厄介だから暫くは精神修行だね」

七天流を強化しようとするかどうかでも巻物の気が抑えられない、要は百代さんに見つかってしまう。だから暫くはもう少し気を抑える修行、ほとんど察知できないくらいにしないと百代さん以外にも襲われそうだしね。

「そう　ね、ねえ晴蘭」

「ん?どしたの?」

すると突然、麗が勢いよく頭を下げてきた。

「昨日は情報ありがと。それと、その、ごめんなさいね。アンタの家族のこと酷く言っただけで疑って」

「いや、もういいよ。もう気にしないで」

ボクももう気にしていない。

実際麗も辛い目に遭って来たんだししょうがないもんね。

いや、それより。

「麗、その手に持ってるのは何さ？」

麗はなにやらゴツイ斧のようなものを、タオルと溶液と砥石のよう
な何かで磨いていた。

「これ？^{バルディッシュユ}三日月斧、西洋の方じゃ^{ハルバート}鉄斧って呼ばれてる白兵戦向きの
ポールウェポンよ」

「ゴメン、何言ってるかサツパリなんだけどさ、要はそれは斧の類
い？」

「そうよ。長さ2.5m、重量は少し重くしてあるから9kgあって
ところね。これは一般のポールウェポンよりも柄が短い分刃が長く

て重いよ。昔のヨーロッパで使用が禁止されるくらい破壊力があって、何回目の十字軍の遠征が忘れちゃったけど、その時まで戦士同士の戦いで活躍していた武器よ」

「な、なんでそんなもの今取り出してるの？」

「いつまでもしまったまんまじゃ切れ味落ちちゃうからね、定期的に取り出しては手入れしてんのよ。今朝はこれと片手ハンマー2本と重り専用のナイフ10本と日本刀3本とスタームルガー・ブラックホークとコルトSAAよ」

「聞いてやいけない名前が二つほど拳がったがこれは突っ込むべきなんだろうか。纏元流ってのは銃なんて隠し持っても何も言われな
いのか？」

不思議でしかたがないけどやっぱり聞かなかったことにしよう。

「ただいまー!!!」

「お！帰ってきたわね！」

ボクが現実から目を逸らそうと努力していると一子が帰ってきた。

こんなに朝早くから出かけていたってことは 昨日のトランプ大会中に言ってた新聞配達のパイトか。

「麗！約束約束！」

「はいはい、今から見せてあげるわよ」

麗は使っていたタオルや溶液をポーチにしまっって立ち上がった。

「何するの？」

「纏元流の実演よ、今朝約束しちゃってね」

麗はそう言つと三日月斧を両手で持ち抱えた。

すると、麗の両手から三日月斧が一瞬で姿を消した。

ボクと一子は目を疑った。

「「え？」」

「ふふっ！2人と、右手をよく見ててよ」

何やらご機嫌な麗は、右手を挙げて手のひらをひらひらとさせて、何も持っていないとアピールしてきた。うん、何も持っていない。

麗はボクらが手に何も持っていないと確認したのを見てから勢いよく手を下に振り下ろした。

その手の指と指の間には短い刃物、計4本のナイフが挟まっていた。

ボクも一子も口をあけて驚いていた。

「すごいな　それが纏元流の奥義？」

「奥義と言うか、これは纏元流を極めるなら中級ぐらいで学ばなきゃいけないテクニクよ。纏元流身体操術、ありのすめくり蟻栖廻って言ってね、“カラダ”の中、要は皮膚と皮膚の間とか脂肪や筋肉で挟み込んだりとか体を織り込んで武器を収納する技、沢山の武器を隠し持たなきゃいけないのが纏元流だからね。まあアタシが持ち運んでる武器は纏元流でも例を見ないほどの多らしいけど、慣れちゃえばどう

ってことないわ」

「じ、じゃあ朝振り回してたあのハンマーも？」

朝からハンマーなんて振り回してたの！？

「今も隠して持ってるわよ」

麗はそう言うとナイフをその場から退場させて、これまたゴツイハンマーを2本登場させた。

「それ最早手品だよね　どうやって織り込んでるのやら。しかもそれを軽々持つてるところが恐ろしいよ」

重量がこれまた重そうなハンマーを軽々持つてる姿は中々奇妙だな。

「奥義のレベルって言うところかしらね、まあ纏元流を極めた者にはこれが出来なきゃいけないレベルだけど」

そう言って、麗は1本のナイフを取り出して、

自分の腕に降り下ろした。

「ちょっと!?!」

ボクは思わず声をあげて、一子は目をつぶってしまった。

「ふふん、まあ見てよ。全然刺さってないでしょ?」

一子は恐る恐る目を開けた。ボクも麗の腕を見たが、傷は一切ついてない、と言うかナイフは皮膚に届いていなかった。

「纏元流、甲鰐鎧こうかくがい。大抵の刃物なら防げる気の応用よ。まあ本当の奥義は攻撃系ばかりだから無暗に使えないんだけどね」

「でたらめだね」

なんてボソツと呟いたら、一子が猛抗議してきた。

「せーちゃんも人のこと言えないわよ!!! じーちゃんの蹴りを食らって無傷だったし、拳から炎がポオーツ! って出てきたし!!!」

確かに人のことは言えないかもね。自分で言うのもなんだけど七天流って結構やり過ぎな感じがするし。

「よし、じゃあボクも七天流を少しだけ見せてあげる。一子にはボクのこと黙ってもらおう口止め料ってことで」

「本当!？」

「勿論、それじゃあ なんておじいちゃんの蹴りが直撃したのに無傷だったか。それは七天流の奥義書の内の1つ、楼閣あせやなきを読むと使える気を抑える極限值設定兼自動防衛オートガードの技、七天流、畔柳あせやなきを使つてたからなんだ」

「リミッター 極限值設定? オートガード 自動防衛?」

「もしここに来るまでにただ漏れになった七天流の気に当てられて、あの百代さんが襲ってきたらたまつたもんじゃないでしょ? だから畔柳リミッターの極限值設定技で気をボクから一定の範囲だけに留めてたんだ。それに自動防衛オートガードを発動すると一定以上の威力の技はボクに当たる前に威力が緩和されて、ボクへのダメージは限りなくゼロになるんだ」

「何それ!?! 反則!」

「けどね一子、そんなに都合のいいことばかりじゃないんだよ。これを使っているときボクは攻撃できないんだ。攻撃しようとしてもボクの周りの気がボクの攻撃すら吸収しちゃうからね。それにこの

技ね、すつつつごく！！疲れるの。むやみやたらに使ってたらボクの方がダウンしちゃうから、本気で戦うときはこれは使わないよ。あくまで不意打ちとかに備えてしか使わない」

必死にタメを使って畔柳が精神的に疲れる技だとアピールしたもんだから、2人とも納得してくれた。

「じゃあじーちゃんの蹴りを食らって無傷だったのはそれを使ってたから？」

「そういうこと。あと、これは少し出力を上げるとこんなことも出来る」

そうやってボクは楼閣の力を少し強くすると、ボクの体が数センチ程ふわりと浮かんだ。

原理は簡単、気の密度が上がったから地面からの反発力が強くなつて、気を放出してる範囲だけ足が浮いてるだけだ。

それを見た2人は驚いて拍手までしていた。ちよつと楽しいなこれ。

「2人ともスゴイ！！アタシも見習わなくっちゃ！！」

「それじゃあボクでよければ少しだけ気の応用教えてあげるよ」

「アタシも雑刀の技はいくつか知ってるから教えてあげるわ」

それを聞いた一子は歓喜していた。2人の師匠分が出来たようで嬉しいのかな？

「3人とも、朝早くから精が出るのう」

するとそこへおじいちゃんがやって来たので、ボクたちは軽い朝の挨拶を交わす。

「2人の例の件じゃが、明日20日の月曜日からオツケーじゃ」

「いいの？編入テストがあんなのでも」

「鉄心さんのお話だけだったけど」

「2人ともどうせ勉強が出来ても手を抜くじゃろ？だったら無駄な紙など使わぬわい。2人ともF組じゃ、2年と3年での」

「え！？2人とも川神学院に来るの！？」

「目的はどうかあれ、やはり学生は学生らしく生活してもらわんな」

一子は喜んでいたが、ボクと麗は別の事に気を取られていた。

「 2年と」

「 3年？」

どういふこと？

「晴蘭君は3年、麗君は2年じゃろ？」

「は！？ま、待ってよ！ボク一子と同年だよ！？何でボクだけ3年なのさ！」

「確か晴蘭君は基本的に海外暮らしだったから学校に行った事がないんじゃないの。お主、誕生日はいつか言ってみい」

「誕生日？4月1日だけど？」

「それで今アタシと同年？」

「じゃあアンタ3年よ」

麗までもがボクを3年だと言ってくる。

「何で！？ボク4月生まれだよ！？ギリギリセーフでしょ！？」

「この国じゃ1学年は4月2日からスタートするのよ、閏年の関係でね。簡単に言えばアンタは4月1日生まれでもあって、3月31日生まれの扱いなのよ。そう考えるとあんたが3年だって解りやすいでしょ」

「で、でも！昨日一子から聞きましたけど風間ファミリー7人は全員F組だよな？そうするとボク百代さんと同じクラスなんじゃないですか？それは流石にまずいんじゃない？」

よし、この言い訳で百代さんと同じクラスだけはなんとしても回避する！！

「それなんじゃが、むしろ好都合じゃ」

なんですと！？

「モモは最近強者との戦いに飢えておる、その相手になってやってくれんか？格闘系の仕事は出来ぬと言っておったが、昨日の決闘を見られてはそのようなことは言えぬじゃろ？川神院からの“お仕事”じゃ」

“お仕事”、それってつまりはボクが川神院（川）に住まわせてもらう案件のことじゃないか？

「モモの欲求解消と一子の修行の手伝い、それと軽い掃除とかの雑用が“お仕事”じゃな」

「真剣（真）ですか？」

秋星晴蘭は今日この時初めて川神に戻ってきて後悔をした。

第十二話 早起き3人組（後書き）

さて、あと少しで原作に入れるぞ！！

第十三話 麗再来（前書き）

休日はゆっくり書いていいですね

第十三話 麗再来

S i d e 大和

「おはよ！」

「あのさ麗、まだ朝の7時なんだけど？」

日曜日の朝の島津寮、お客さんが来たとかツッキーに叩き起こされて玄関に行ってみれば、麗が爽やかな顔で仁王立ちしていた。

この仁王立ち、デジャヴな気がする。

「“まだ”？“もう”でしょうが！」

「いいじゃないか休日なんだからさ 休日くらいゆっくり寝てた
いんだから」

「ほう？」

ゾゾッ！と突然体中を寒気が襲った。理由は明白、麗の殺気だ。久し振りだけど忘れられないこの感覚。

「あの、麗さん？なんか目が怖いですよ？」

「そりゃあ腑抜けたアンタを見りゃ怒りも混み上がるさ。あの1週間で仕込んであげたでしょ？早朝起床、起きられなかったら」

フツ！と麗の姿が消えた。

「ヤバッ

」

「コブラッ！！ツイストオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！
！」

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！
ああああ！！！！」

バキベキバキ！！と俺の体がきしんで悲鳴をあげていく。

「ギブギブギブギブ！！死ぬ！！死んじやうから！！」

「正義の鉄槌でバッキボキよ！！」

チエツクが何かは解らないが試しに体を軽く動かしてみる。

すると、体がスツキリして思ったよりも体が動くぞ。

「整体は言うまでもなく体の調子を整えてあげただけど、チエツクはアンタがどれだけ鍛えてるか確かめたのよ。それなりに筋肉ついてるし、スタミナも昔に比べたら相当あるわね！それもメールにあった“姉さん”のお蔭かしら？」

一瞬、俺の時間が止まった。

「い、いや！それは、その！」

「別に怒ってないわよ。流石に10年近くも離れてれば違う姉貴分が出来てもおかしくないでしょうが。それとも何？アタシがそんなこと気にする器の小さい人間だと思ってるわけ？」

「滅相ありません！！！」

峰槻麗は俺とキャップにとってただの旧友ではなく、初めて出来た姉貴分、つまりは“姉さん”だった。麗はいつも面倒を見てくれて、人一倍お節介で、我儘だったけど絶対に俺たちを裏切らなかった人だった。

姉さんと呼ぶのに1週間もかからなかったなあ。

「さて、今日来たのは他でもないわ。風間ファミリーのメンバーを紹介しなさい、OGとして知る義務があるのよ」

「OGって。まだ風間ファミリー出来てなかったじゃん」

「アンタたちの元姉貴分として知る義務があるの！」

「素直に教えてって言えばいいのに」

「何か言ったかしら？」

どこから取り出したのか、麗の右手に握られた短剣が俺の首筋に当てられていた。

「イイエナニモ」

危ない、なんか麗が昔より一層強くなってる気がする。

眼鏡が似合うスーツのオッサンとこれまた眼鏡でスーツの赤毛の男の子だ。

「いやあどもども！2人は親子なんスか？」

「いやあ違うよ、同じ教師仲間さ」

「教師！？お前が！？」

少年はパツと見たところ10歳ぐらいだぞ？

「未熟者ですが　一応大学レベルの語学力は勉強済みです」

「なぬ！？スゲーな！！」

「おっと、そろそろ待ち合わせの時間になってしまっうね。僕たちは行かせてもらっうよ。早く深谷駅に行かないと君のお師匠様に怒られてしまっう」

「^{マスター}師匠が！？そ、それじゃお兄さん！お先に失礼します！」

「おう！頑張れよチビツ子教師！」

オッサンとチビツ子教師は店を出て行った。

いやあそれにしても若いうちから頑張るねえ。俺には働くななんてムリだな、風はそんなに簡単に自由を捨てないのさ。俺はまだまだ学生時代を謳歌させてもらっぜ。

まあ早く冒険に出たいから学生時代も抜きたいけどな！

自由が1番だ！

Side Out

Side 大和

「えー、と言うわけで、こちらが俺とキャップの古い友人の」

「峰槻麗よ。よろしくね！」

「美人さんキターーーーー！！！！！」

「大和の貞操が危険」

「んな心配せんでもいい！！！」

俺はファミリーを多馬川の直ぐ近くにある廃ビル、俺たちの秘密基地に集めて麗の紹介をしていた。

俺たちはこの廃ビルの中の見回りのアルバイトをしているからここを自由に使える。

秘密基地としては最高の場所だ。

この場にはいないメンバーはキャンプだけだから問題はないだろう。

「アタシはもう仲良くなったよ！」

「友達になるの早いねワン子、相変わらずだけどね」

「だって昨日麗は川神院に泊まっていったんだもん。トランプ大会楽しかったわ！」

「ほう、私も混じりたかったな。昨日弓子の家に泊まらなくてもよかったかもな」

姉さんがちょっと残念そうな顔をしている。

「部長の家に？」

「ああ。どうしても弓子と一緒に映画に行きたいって言うからついでに泊まってきたんだ。ちなみに、映画のジャンルは聞くなよ？」

「『『『『ホラーか』』』』」

麗以外のメンバーは姉さんが帰ってこなかった理由が解った。どうせ夜道が怖くなって帰れず矢場先輩に泣きついて泊めてもらったと言っ所だろう。

恐らく矢場先輩は、姉さんを騙してホラー映画を見せたのだろう。じゃなきゃ姉さんが幽霊の類いが出てくる映画なんか見るわけがない。

「それはさて置き、麗と親しくなってほしいんだ。コイツどうも久々の川神で縮こまっちゃってるみたいだし」

「誰が縮こまってるって？」

またしても首筋に短剣を添えられる。音もなくそんなことしないでほしい。

「私の大和への愛は常に拡大中だ!!」

「京には言っってないからな？」

京が俺に詰め寄っているのを見て麗は納得したような顔をする。

「京　へえ、なるほど。この子がメールで言ってた大和に助けられた子ね」

麗は頭の中で俺のメールと今の状況を照らし合わせているようだ。

「京ちゃん可愛い子じゃない。大和もつたいないぞ？こんな可愛い子に惚れられてるんなら付き合っただけなさいよ」

「私、麗がファミリーに入ってもいいと思う」

「おい！！昨日あんまり乗り気じゃなかったのはどこのどいつだ！！心変わりにも程があるだろ！！それと麗もあんまり適当なこと言わないでくれよ！京が暴走しかねん！」

「大和、京ちゃんが可哀想じゃない。メールで読んでる限りだけど、京ちゃんがアンタに惚れたのって結構前からでしょ？保留にしすぎよ！いい加減に付き合っただけなさい！」

「麗さん！お姉さんと呼ばせてください！！」

この瞬間、京は麗に掌握されたも同然だった。相変わらず人を取り込む能力に長けたもんだ

「スゲエ 京が初対面の女に頭を下げたぞ」

「大和のこととなると見境なくなるからね」

「えっと、その鍛えまくってる体の君が筋肉のガクト君で、その少し細身の君がパソコン関係に強い卓也君であだ名がモロロ？でいいのかな？よろしくね！」

「おお！このカラダで俺様と認識してくれるとは！！」

「大和が僕たちをどうやって説明しているのか気になるね」

麗、頼むから余計なことは言わないでくれ、って口に出せないのが悔しい。

そんなこと言ったら麗はさらに余計なことを言うだろうし、皆からは質問責めだ。それだけは御免こつむる。

「そして、アナタが武神と名高い川神百代さんね」

「ああ、よろしくな。ところでお前」

「麗って呼んでね」

「麗、お前相当強いだろ？」

姉さんの顔が獲物を見つけた獣のようになっていく。

「そんなに強くないわよ？」

「その気、隠しきれてはいないだろ？漏れているぞ？」

「ご心配なく、わざと漏らしてるのよ」

麗の顔も学生とは思えない不敵な笑みを浮かべる。

「それは挑発と受け取ってもいいのか？」

「ええ、大和とキャップの“姉さん”がどれほど強いかわりたくてね」

麗と姉さんの間で火花が散っている。

なんだ。やっぱり姉さんのこと気にしてるんじゃないか。

旧姉貴分と現姉貴分が 何も起きなきゃいいんだけど。

「アタシはやってもらってもいいけどどここじゃ被害が出るわね、やるんなら川原のほうでやりましょ？」

「好戦的で話が合うのは助かる、逃げる奴もいたからな」

嫌な予感の中した。

麗も結構気にするタイプなんだな。

て言うか2人の目が怖い。互いに絶好の獲物を見つけた猛獣のような目をしている。

これはちょっとマズイ気がするな。

Side Out

Side 一子

麗とお姉様が戦う雰囲気になっちゃってるわ。

ちょっとマズイかもしれないわね。

大和を見ると、いつも冷静なあの大和にも焦りが見える。

念のため連絡を入れておこう。

じーちゃんとルー師範代と

念には念を入れなきゃね。

S i d e O u t

S i d e 百代

「それじゃあやりましょうか」

多馬川の河川敷、辺りには誰もいないのをしっかりと確認してから麗と言う少女は構えを取った。

さっきから漏れてた気はわずかだが私に向けられていた。

それに抑えた気でありながらあの鋭いもの、コイツは強い。

恐らく京や妹でも敵わないだろう。

面白い、いい強者を紹介してくれたな舎弟。あとで褒めてやる。

「開始は大和の合図、異論は？」

「ないわ」

麗はグルグルと肩を回していた。やる気は充分のようだ。

「えー それでは、1本勝負」

さて、どうするか。まずは出方を覗おう。

「アタシは川神に戻ってきて浮かれてたわ」

「？」

突然、麗が神妙な顔で語り出した。

「昨日それに気付かされた。浮かれは慢心を呼ぶものだって。アタシはもう油断しない、だからアタシは昨日より強い」

昨日、何があったのだろうか。トランプ大会と言っていたが何かあるな。

後でワン子に聞いただそう。

「始め!!」

「纏元流奥義!!」

「何?」

Side Out

Side 晴蘭

おいおいおいおいおい。

麗、昨日の今日でまた決闘とは。

こちららまだみんなには会わないで明日ドッキリのつもりだったのに。

一子、キミってやっぱり馬鹿なのかな?おじいちゃんもルーさんも

朝方出かけていったのを忘れてるな？

ボクが行くしかなくなっちゃったじゃないか。

(主、行くの？)

頭の中で、巻物たちが話しかけてくる。

「うん、しかも相手はあの川神百代、おじいちゃんからも百代さんと戦つてと頼まれてるから丁度いいしね。けど、流石に穿火だけじゃ太刀打ち出来なさそうだからね　楼閣、穿火、劉土、キミたちを総動員するよ」

(待つてたぜご主人！！昨日のあれだけじゃ私も不完全燃焼だったからね！！暴れてやるよ！！)

(私も出るんだ、楼閣ほどじゃないけど　久し振りだから張り切りますかね)

「まだ気は抑えたままで頼むよみんな。危なくなったら直ぐに全力出せるように準備しててね。それじゃあ、行きますか！」

木箱が3つ入った鞆を手に、ボクは戦場へと赴いた。

第十三話 麗再来（後書き）

話で出てきた眼鏡のおじさんと赤毛の少年

ネタがわかる人いたら感想で書いてくれると嬉しいです。

解らない人のためにヒント

2人は深谷駅がモデルになってる学園の教師です

まあこれはあくまでネタなので今後この2人の名前を出す気はありませんし、登場もこれっきりでしょうwww

それでは次回はバトル回です！

第十四話 新旧姉対決（前書き）

進行遅れ気味

第十四話 新旧姉対決

Side 百代

「纏元流奥義！！艶舞・蜉蝣！！」

試合開始と同時に轟ッ！！と、辺りの大気が揺れた。麗の体から気があふれ出している。なるほど、始めから全力と言うことか。

もしかすると、昨日の大気の揺れはコイツかもしれないな。

ますます面白くなってきたぞ。

「それで？どうするんだ？」

「足下注意よ武神さん？」

ずず

足下から何かが蠢く音が聞こえた。

「せい……」

ズダン！！と、麗は地面を片足で思いつきり踏みしめた。

わずかだが、それによって地面が揺れる。

「っと！すごい威力だな、地面が揺れたぞ？」

「墜ちろ！！！」

「何？」

私が1歩踏み出そうと足を前に出した瞬間、体が宙に浮いたような感覚が私を襲った。

「なッ！？」

私の体は確かに浮いていた。だが、それは私自身が浮いた訳ではなく、地面がなくなっただけのことによって起きたものだった。

下を見ると深さ3メートルほどの半球の穴、そこには数多の刃物がぎっしりと敷き詰められていた。いつの間にかこんな仕掛けを！

「串刺しになりなさい」

「イヤだね!!」

なんの気も籠っていない刃物なら、壊すことに苦勞はしない!

私は体中を気で覆って刃物を叩き割って着地する。

「流石、これで終わりじゃ興ざめだもんね」

麗が穴の外から私を見下している。

その人を見下しているような態度、少しだけイラッと来たぞ?

「こんな不意打ちが奥義か? 笑わせる、お前の流派はそんなものか?」

「あら挑発? けど残念、奥義はこれじゃないわ。この落とし穴はあらかじめ仕掛けておいた罠、奥義の準備をするための時間稼ぎよ?」

準備だと? 特に変わった様子は見られないが 面白い、見せてもらおうじゃないか。

「待ってる、今からそっちにいつてやる」

私はジャンプして穴から脱出する。

麗と対峙するが、麗に間近で見てもやはり変化は見られない。ハツタリか？

「もし、もしアンタが先にアタシを攻撃していたら、アタシは確実に負けていただろうね」

突然麗は語り始めた。

「でもね？アンタが油断したお蔭で、アタシの勝率が“0”じゃなくなつたのよ？油断したら自分の実力を出せずに終わる、昨日それを痛感したばかりだね」

本当、昨日川神院にいなかったことを後悔する。昨日の川神院は相当楽しかったんだろうな。

「奥義を始めから使っていれば昨日も結果は解らなかつた。だから今日は始めから奥義を使うー！！」

「で？その奥義とやらは何なんだ？」

「アンタの目で追えたら解るわよ」

そう言い残して麗は突然前へ倒れ込んだ。

しかし、その体は地面につく寸前で姿を消した。

「なに？」

「目で追えなかったわね？」

背後から麗の声があった。

慌てて振り返るが、そこに麗の姿はない。

「じつちよ」

ズバツ！

「うッ！？」

また背後から声、しかも今度は攻撃まで。

しかもこれは刃物か？私に傷を負わせる刃物と言うことは、気で強化されているのだろう。

瞬間回復があるとはいえ、気で強化された武器はかなり効くものだ。

「瞬間移動か？」

「残念ながらそんな超能力は使えないわ」

また背後から声が 結構ウザいなこれ。

「アタシは走ってるだけよ？ただ、重りを外したから今は音速を越えてるだけ」

音速を越えるって。いったいどれだけの重りをつけていたのか。

「それが奥義か？」

「笑わせないで」

麗は今度は私の目の前に現れた。それも下から覗き込むように腰をかがめていた。

「重りを外すくらい小学生でも出来るわよ。奥義は重りを外した上で体を“こつ”することよ」

そう言って麗は左手を私の前に突き出す。

その左腕の至るところから刃物が生えてきた。

その数は軽く20を超えている。

「な、何だそれは!？」

まるでゲームに出てくる西洋の鎧のようだった。

「こつちが本命よ?体の全身を刃物として扱うの」

何も無いはずのところから武器を取り出すってことは

「暗器使いか　！」

「そう言うことよ」

そう言うって麗はまた姿を消した。

チツ、厄介な使い手だ。暗器使いでこの速度、忍者と言っても良さそうだな。

「この腕でチョークスリーパーなんかしたら死んじゃうわよね」

いやなことを言ってくるものだ。

その言葉を軽く流して、私は必死で麗の気配を探る。

さっきコイツは言った。“ただ走ってるだけ”だと。

つまり、足音は隠しきれないし気配を完全には消しきれないはずだ。

だったら

「お姉様！？なんで目を閉じるの!？」

「諦めって訳じゃなさそうね」

全神経を集中、気配を探る。

ほう、私の回りを物凄い勢いで移動している気配が1つあるな。

これを察知するのは並大抵の武人では骨だろう。なんせ辺りで大気がうねって気が入り乱れているからな。

つまり、最初に大気を揺らしたのも計算の内だったのか。

「そこ!!川神流、蠍撃ち!!」

私は右後方へ拳を叩き付ける。確かな感触、当たった!

「デコイって知ってる？」

「!？」

仕留めたはずの獲物の声がまた背後からする。

私が殴ったものを見ると、それは刀やハンマーで作られた塊、変わり身だった。

「さっきアタシのナイフに気が通ってるのは自分の体で把握したでしょ？ だったらアタシが抑えきれなくて漏れてる気よりも大きい気を武器に纏わせれば充分に困になるわ」

「チツ！」

私は回し蹴りを放つが麗はまたしても姿を隠し蹴りをかわした。

「武神でも見切れない速度があるのに驚きよ」

「調子に乗るなよ？」

いつまでもいい気にさせてたまるか。見てろ。

(また目を閉じた　　？無駄よ！)

また気が入り乱れる、さっきと同じってことはまた罠デコイが入る。

だがそれは私が攻撃しないと意味がない。

(攻撃する気が見られない。だったらこっちから！)

背後に強い気配、罠の可能性もあり動かないでおく。

ズバツ！！

「えっ!?!」

私の背中は斬られたが驚いているのは麗の方だった。

「攻撃したところを掴めば確実だろう？」

私は麗の腕から伸びる無数の刃がの1つを掴む。

「川神流、無双正拳突き！！」

そのまま麗を引き寄せて両拳を麗の腹に叩き込んだ。

「グフツ！！」

しかし、麗は吹き飛ばされずその場に留まり笑っていた。それに、感触がおかしかった。

「腹に気を集中してなかったらアウトだったわ。かなり痛いけど」

そのうえ、麗の腕についていた刃物が麗の腕から離れ、私の手の中に取り残されていた。

なるほど、緊急回避のためにこれらは着脱も自在なのか。今も腕からナイフを切り離し直ぐに回避に回ったから私の拳の威力を相殺出来たのだろう。

「本当に面白い、私の拳に堪えた奴は久々だ！だがこれで終わりだ！！」

「その前にまずはコイツらの相手をしてもらおうわ」

「なに？」

その瞬間、麗の袖から6本の鎖が勢いよく飛び出してきた。しかもその鎖の先端には刺突きの鉄球がぶらさがっていた。

「纏元流蛇交鞭、改！鼓舞螺ウツク！！」

「くツ！」

私は一旦距離をとって鎖に備える。

2本の鎖が左右同時に襲い掛かってくる。鎖自身を掴めば体を締め付けられてしまうし、鉄球を掴めば手が穴だらけになる。

さっきのナイフと同様にこの鎖にも強い気が通っている。安易に壊すことは出来ないだろう。

私は鎖から逃れつつ前に詰める。

それを予測していたのか、麗は3本の鎖を一緒に回転させて1本の太い鎖のようにして私に向けて1直線に突いてきた。

これはまずい、当たれば私と言えどダメージを食らうし捕らえられてしまう。

「川神流、星砕き！！」

渾身の力で鎖を粉碎する。鎖に通わせていた気が一気に消えたのだろう、麗の顔に疲れが見える。

仕掛けるならここだ。

私は全方位から襲い掛かってくる3本の鎖を全部掴みとって麗へ再び詰め寄る。

どうやらあの鎖を使っている間はさっきの左腕は使えないようだな、ならばここで決める！！

「川神流、無双正拳突き！！」

先程よりも威力を高めて放った一撃。もらった！！

「そこまで」

響き渡る轟音、辺りに飛び散る衝撃波。しかし手応えが無さすぎる。麗に当たったはずなのに感触が何もない。

「全力の川神流と全力の纏元流、しかもトップクラスの實力者の攻撃同士が当たればどうなるか解るでしょ？大した結界も張ってないのに」

気付けば、麗と私の間に1人の男が立っていた。男は私の拳を体で受け止めていたが、その顔に苦しみは一切見られなかった。

「誰だお前、決闘の邪魔をするつもりか」

「もしキミの無双正拳突きと麗の奥義が当たってたら　周
りにいるファミリーのみんなもタダじゃ済まなかったよ？」

麗の、奥義？

私は男の向こうにいる麗を見た。

私は目を疑った。いつの間にかその麗の右腕は異様な形をしていた。

先ほどの刃物だらけの腕とは一変して、それはまるで1本の巨大な
槍のようになっていた。

「掌から槍の先端を、肘には2段攻撃のための加速に使うバズーカ、
腕からは避けられてもいいように左右に巨大な鎌を、まるで十文字
槍みたいだね」

「アンタ、なんで止めたのよ」

麗が男を睨みつけている。どうやらこの2人は顔見知りのようだ。

「一子から連絡をもらってね、一緒におじいちゃんとルーさんにもメール入れてたみたいだけど、あの2人今日は朝方からいないから代わりに来たって訳」

この男　麗にワン子、それにジジイたちとも知り合いなのか？

「さて、そう言うわけで。ファミリーのみんなに危害が及びそうになったから止めに来たよ。麗、いいね？」

「　解ったわ」

男の言うことを聞いて麗は武器をしまっってしまう。

冗談じゃないぞ。

こんな面白い闘いを止められただと？

「お前、よくも邪魔をしてくれたな」

私は殺気を全開にして男へぶつけるが、男の顔は平然としたままだった。

「どつやらご立腹のようだね、いいよ。相手になってあげる、ただし」

男が右手を前に出した瞬間、麗が揺らした大気のうねりが急に収まった。

「ファミリーのみんなには迷惑かけられないから　また今度ね」

「何を言って　」

私は男に飛び掛かろうとした瞬間、意識を失った。

S i d e O u t

S i d e 大和

「な、何が起きたんだ？」

麗と姉さんの激しい戦いの余波を受けながらなんとか決闘を見てみると、突然どこからか男が現れて決闘を中断させた。

それだけじゃなく、姉さんがいきなり地面に倒れ込んでしまった。

「一子、ちょっとこっちに来なさい」

男はこちらを向くと一子を手招きして呼んでいた。

一子は何の疑いもなしに近寄っていったが　大丈夫か？

「あのね一子、今日おじいちゃんもルーさんもいないんだよ？ボクはドッキリがいろいろって言ったじゃないか。これじゃもう今日ネタばらしするしかないじゃんか！」

「あ、忘れてた！ご、ゴメンせーちゃん！でも他に頼れる人いないか
て　　」

せーちゃん？

今、せーちゃんって言ったか？

「せーちゃん？」

「ん？大和ってボクのことせーちゃんって呼んでたっけ？」

つい口に出してしまっただが、昔はそんな呼び方じゃなかった。せーちゃんと呼ぶのはワン子ただ1人。

そして、せーちゃんと呼ばれる人物は1人しかない。

「お前、晴蘭か？」

「みんなひどいなー。この髪の毛で解らない？」

「晴蘭、か」

「うん。ただいま」

懐かしい奴が2人も帰ってきた。

俺たちの人生を加速させていく要因、麗と晴蘭がこの場に揃った。

第十四話 新旧姉対決（後書き）

これからテストがあるので更新しおくれるかも知れないです

第十五話 晴蘭参上(前書き)

ギリギリ1週間以内の更新

少し時間が空いたので量が多いかもしれないです

第十五話 晴蘭参上

Side 晴蘭

「いやー、みんなでつかなくなったなあ」

「せ、晴蘭！？お前海外に行ったんじゃねえのかよ!？」

筋肉質な体型で体長のでかい島津岳人が驚いていた。昔は鼻に絆創膏貼ったりして結構やんちゃな少年だった。昔も馬鹿だったけど今も馬鹿なのかな？

「ちよつと前に戻ってきたんだよ、ちよつと前と言うか昨日なんだけどさ」

「何で連絡しなかったのさ？迎えに行ったのに」

その後ろから、細い体型で長い前髪で片目が隠れた師岡卓也が顔を出した。雰囲気を感じる限り、引っ込み思案は治ってなさそうだ。

「いやあ、1度やってみたかったんだよ！ドッキリ内密帰国！」

「しょーもない」

ん？

この雰囲気は多分京、なんだろうけど

「京、なんか変わった？」

昔のガリガリな体とは違って変わって、かなり豊富な体をしている椎名京。リュウゼツランが咲いたあたりではいじめにあってたみたいで、生気があまり感じられなかったけど今はそうでもない。

けど変わったのは肉体だけじゃない、あの暗くて沈んでた性格が昔に比べて明るくなっている。

「大和が私の夫になってくれたからね。活力も付くさ」

「都合のいいように捏造しないで頂きたい!!」

「大和は全然気取ってないね！昔と大分変わってるけどその雰囲気は大和だ」

京に腕を捕まれている直江大和。昔はすっごくかっこつけと云うかニヒルぶっていたと言つか、ちょっと残念な子だったけど、今はおとなしくなってるみたい。

「昔のことは忘れてください！」

みんな元氣そうで何よりだ。

10年近く経ったからみんな外見は多少変わったけど、昔の面影も残ってほとんど変わってないね。

大和のニヒルさは無くなってたし、京はなんか大分明るくなってるのは例外。

「あれ？そっいや翔一は？」

「昨日から行方知れず」

「相変わらず自由気ままだからね」

行方知れずって。

ひよっとしなくても1番変わってないのは翔一だね。昔っから行き当たりばったりなりーダーだったからね。「ね、ねえせーちゃん？お姉様は大丈夫なの？」

ノスタルジーに浸っていると、一子がボクの袖を引っ張って不安そうに聞いてきた。

しまったすっかり忘れてたな。

「大丈夫、グツスリ寝てるだけだから」

「寝てるの!？」

「そう、百代さん正直すぎるから催眠術の類いは簡単にかかると思っ
つて。そしたら案の定、1発で寝ちゃったよ」

「そうだ!晴蘭さつきモモ先輩のパンチ食らってたじゃん!」

モロが慌てたようにボクの心配をしてくれた。

「ああ、それなら大丈夫。攻撃はボクに当たってないから」

「何言ってるんだ!さつきお前体で止めてただろうが!」

ガクトがボクの体の右側、さつき百代さんの攻撃が当たったところを確かめていく。

「拳が当たっても威力は全くなかったから」

「?どついつ意味?」

「秘密!機会が来たら教えてあげるよ」

そんな機会が来ないことを望むけどね。

七天流にはあまり深く関わってほしくないから。

「それはそうと、百代さんはいつまで寝てるのよ」

麗が不機嫌そうに尋ねてきた。やっぱり決闘を邪魔されたのは多少なりにも気に触ったらしい。

「あ、えっと、百代さんなら30分くらいは目が覚めないと思うよ。全力で催眠術をかけたから」

ゾクッ

「ッ！！？」

「ど、どうした晴蘭？」

「顔色悪いわよ？」

そりゃ悪くもなる。背後からこんなに鋭い殺気を当てられたら誰でもこうなるはずだ。

「まさか、まだ5分も経ってないんだよ？」

声を出して自分に言い聞かせるけど全く意味をなさない。体が殺気に打ち震えている。

背後からくる殺気は間違いなくあの人のもの。

「奇妙な技を使ってくれたな」

「おはようございます、お早いお目覚めで」

しまった 目を覚ます前にここから立ち去って今日は決闘もなく済ませる予定だったのに。

一応巻物を持ってきてはいるけど、今日闘いたくはなかったな。面倒だから。

「なかなかやるじゃないか、私の意識を奪うなんて大したものだ」

ボクはゆっくりと振り返ってそこにいる猛獣と対面する。

獲物を顔を再認識した猛獣は頬を吊り上げて笑っていた。

「一子、麗。みんなを連れてボクと百代さんから離れて。巻き沿いを食らうだろうから」

それを聞いた2人はみんなをつれてすぐに移動してくれた。ありがたいことだ。

「やるんなら先に結界を張らせてよ。そつでもしないとさつきボクが麗との決闘を止めた意味がなくなる」

「解つた」

ボクは鞆の中から巻物の入った木箱を3つとも取り出す。

「楼閣、穿火、劉土。結界ヨロシクね」

ボクは3つの木箱に貼られた札を一気にはがし封印からコイツらを解放した。

「ッ!!!? (な、なんだこの禍々しい気は!?)」

百代さんはどうやら肌で感じ取ったらしい、コイツらの危険性を。流石は武神だね。

(それじゃあ主、いくね)

まるで石を投げ入れた水面が波を起こすように、ボクを中心に目映い光の波が拡がっていった。

(半径200mに他の人間の反応はなし。念のため3重の結界にしてあるよ。ファミリーみんなは結界の外にいるから安心して)

「報告ご苦労様。さあ川神百代、準備はできたよ」

「その前に名を名乗れ。喧嘩ならともかく、誰とも解らん相手と真剣勝負はしたくない」

「あれ？まだボクのこと気づいてなかったんだ。ちよっぴりシヨツク」

「なんだと？」

「ボクに勝ったら教えてあげるよ。今は七天流の総代、とだけ言うておくね」

「聞いたことのない流派だな」

「そりゃそうだね。もうすぐ滅び行く流派だもん」

ボクの手によって、ね。

「残念ながら開始宣言を行える人がこの結界の中にいないからこの石が地面に落ちたら開始ってことでもいい？」

足下に転がっている小石を拾い上げて提案する。

「ああ、問題ない」

ボクは石を高く放り投げた。石は速度を落とすつつも上昇し、1度だけ完全に止まる。そして石は勢いを増して落ちてくる。

カツン！

「川神流、無双正拳突き！！」

石が落ちた音と同時に百代さんはボクの腹に両拳を叩き込んできた。

けど、残念ながら予測済み。

不意打ち対策の畔柳を、さっき決闘を中断させた時から発動したままにしているからダメージはない。

(な、なんだ？手応えがない、さっきと同じ　ッ！？まずい！！)

「七天流、鶴子鳥めえこどり！！」

百代さんの鳩尾目掛けてつま先を打ち込む。

百代さんはそれを耐えようと鳩尾に気を集中して防御力を上げていた。

「けど、それは意味を成さないよ！」

ドズツ！とつま先が百代さんの腹部に深く突き刺さる。

「ぐうっ!?!」

百代さんは腹を押さえて苦しんでいた。

「鎧通しの類似技、防御力を無視する貫通系の蹴りの味はどう？」

「最高だね!!」

さっきよりも百代さんの顔がイキキしている。

やれやれ、戦意喪失なんか狙えないなこりゃ。

おじいちゃん、あなたのお孫さんは相当な危険人物に育っておられ

ますよ。

「畔柳解除」

周りに充満させてた気を回収する。いい加減コレばっかり使ってたから本当に体力が持たない。

「せつ!!」

繰り出される百代さんの拳のラツシュ、これは受け流すので精一杯。右から来る拳を上体を反らしてかわし、正面からの左正拳を左手でいなす。

20発ほどの拳をやり過ぎた後にカウンターで右アッパーを叩き込むが、かわされて腕を捕らえられてしまう。

そのまま腕はボクの背中へと持っていかれる。

(ヤバッ、関節!!)

ゴキッ!と嫌な音が肩から聞こえた。

「いびっ」

肩を押さえて前かがみになってしまっ。

それを狙っていた百代さんはボクの目の前でしゃがんでいた。その時、かすかに気が足に籠っていくのが感じられた。

「川神流、鳥落とし！」

ボクの顎に鋭い衝撃が走る。まるでサマーソルトキックのような蹴りが下から襲い掛かってきた。

まずい、頭が揺らぐ、脳みそがシェイクされたみたいだ。

ヤバい、意識が

S i d e O u t

S i d e O t h e r s

真っ暗な空間、しかし時折数多の小さな光が瞬き、まるで宇宙のよ

うな場所。

そこにある3つの人影。

3人の身長はとも小さく小学生のよう、顔つきは中性的で整っていて性別の区別がつかないほど。

1人は真紅の髪でポニーテールの活発そうな子、1人は黄土の髪でショートカットの寡黙そうな子、1人は漆黒の髪でくるぶしまであるストレートの優艶そうな子。

「主がやばそうだね」

漆黒の髪の子が2人に話しかけた。

「ああ、やばそうだな、誰が行く？」

真紅の髪の子は腕を組んで笑っていた。

「私は後の方でいい、先に行ったら？」

黄土の髪の子は真紅の髪の子を先に行くよう無表情で促した。

「お！いいのか？じゃあ行かせてもらっぜー！」

「行ってらっしゃい、穿火」

「油断しないように」

真紅の髪の子、穿火は手を振ってその場から消えていった。

Side Out

Side 百代

男の顎を蹴り挙げて脳を揺らす、もうこれでまともに立てないはずだ。

コイツの目が左右でぶれている。意識が朦朧としてるな　これで決める！！

「終わりだ！！川神流、無双正拳突き！！」

「七天流奥伝、穿火」

その瞬間、男の体から激しい炎が全方位に噴出された。

「なッ!？」

私は拳を止めてすぐさま炎から逃れる。

なんだあの炎は。

「あつぶねえ、危うくやられるところだったぜ」

男は頭を左に倒して首の骨を鳴らす。

意識がしっかりしているだと？そんなはずはない。私は確かにさっきの攻撃でもう立てないほどの衝撃を頭に与えた。

じゃあなんでコイツは平然としている？

「不思議に思うか？私　おっと、主は男だったな。オレがこうやって何事もないようにケロッとしているのがよ？」

口調が明らかに変わっている。コイツ二重人格者か？

「二重人格とか多重人格とか考えたか？確かにそれに近い。けどオレはそんなんじゃない。オレは咲昏穿火^{さきくれせんか}。さつきとは別人だぜ？人格だけじゃなくて実力もな。」

「要は二重人格じゃないか」

私の言葉に男はあざ笑った。

「違うんだなコレが。オレは元々は咲昏穿火^{さきくれせんか}って言う人間だった。その魂がこの体に移ってるってわけだ」

魂が乗り移っている？ゆ、幽霊的なものか！？

い、いや待て、落ち着け。コイツは体があるから物理的に殴れる。よし、問題ない。

「んー、あんまり理解できてないみたいだな。じゃあ　これで

どうだ？」

そう言っつて穿火と名乗った男は両手の掌を開く。

そこからチリチリと焦げ付くような匂いが発生し、最終的に火花を散らして炎が燃え上がった。

「どうだ？さつきと気が違つたろ？」

そこで私はようやく気がついた。

さつきまでのコイツが纏っていた気と、今のコイツの掌から感じ取れる気が明らかに違う。

ここまで気を変化させることは私やジジイでもまず無理だろう。

そう、別人にならない限り。

「どうやら理解できたみたいだな。じゃあ改めて名乗らせてもらつぜ？ななだいとつあつ七天流七大闘王が1人、咲昏穿火！行くぜ！！」

「ところで、お前名乗っちゃってもよかったのか？さっき勝てば教えるとか言っていただろ？」

「ん？ああ、それはさっきの話、オレは別人だから関係なし！」

二カッ！と笑う男の雰囲気^が先ほどから変わっていた。こっちの方が気さくで私と気が合いそうだな。

「そうか。なら私も名乗らないと失礼だな、川神百代だ。」

「それじゃ行くぜ！？七天流、奥義！！せいかりようげん星火燎^せ巖！！」

穿火は両手の拳を力強く握り脇をギュツと締めて腰を落とす。

力を溜めているのが丸解りだ。気が男の中で強く練られているのが解る。

「来ないならこっちから」

ポポッ！！

私が仕掛けようとした瞬間、穿火の両腕が炎に包まれた。

いや両腕だけじゃない、穿火の靴はもう炎と同化しており原型が解らず、右眼が真っ赤に燃えていた。

「はッ!!」

私は炎の事などお構い無しに腕ごと頭を左の上段蹴りで狙った。

「あめえ!!」

私の足がこめかみにあたる前に左手で捕まえられてしまった。

「ほっ!!」

穿火は私の左足を引き寄せて膝を余った右手の裏拳で叩く。

ジウウツ!と肌に焼きごてを押し当てられたような音が聞こえた後、私の足は関節と逆に叩き折られる。

だが、私には瞬間回復がある。

一旦左足の事を頭から取り除き、残った右足でジャンプをして空中で体を思いつきり左に回して、かかとを穿火の左の脇腹にめり込ませた。

その衝撃で肋を数本叩き割った感覚が足から伝わってきた。

「ぐ、うっ！レバーブローならぬレバーキック、てか！？」

穿火は私の足を振り払う。

ちゃんと折れたらしく、穿火は左側の横っ腹を手でさすっていた。

「私の体は結構頑丈なんだが　かなり簡単に折ってくれたな」

「折れた足で立ってるお前はどうなんだよ」

「私は瞬間回復が使えるからな」

先ほど折られた足も、今ではすっかり元通りだ。

「チートだなそれ。まあオレも人のことは言えんが」

「まったくだな。肋をかなり折ったはずだが、なんでそんなに平然としてるんだ？」

穿火が押さえている脇腹から、シューウウ　と音を立てて煙が出ていた。その顔に苦しさは無く、笑顔だけが残っていた。

「オレも再生能力があるんだよ、瞬間は流石に無理だがよ。現在進行形で修復中だ」

「 やっぱりお前最高だ。もつとだ、もつと闘おう」

「 ああ、全力勝負だ!!」

穿火が再度構えを取り直すと、穿火の体を纏っている炎の火力が上がっていく。

「 突っ走るぜ!!」

すると、穿火の靴に同化していた炎が勢いを増してバイクのエンジンのように唸っている。

「 1歩!」

ドン!!と爆発したかのような音と共に穿火は私の目の前まで詰めてきた。

穿火が先ほどまでいた場所に目をやると、そこは炎に焦がされたように黒く染まっていた。

「七天流、ひれんじゃく 緋連雀！！」

右足の中断蹴り、だがそれはただの蹴りではなくて、腕と同じように炎を纏ったものだった。

しかもその炎は回転しておりまるでドリルのようだった。

「川神流」

コイツも再生を使えると言っていたな。

なら、これくらいの攻撃は、耐えられるだろう！？

「大爆発！！！」

ドオン！！と、私を中心に爆発が発生する。

「げっ!!」

げっ？

予想外の声を上げた穿火は、爆風に巻き込まれて吹き飛ばされてしまった。

何度か地面で体がバウンドして数m先まで吹っ飛んでいた。

「
」

しまった、ひょっとしてやりすぎたか？

穿火は地面に突っ伏したまま立ち上がらない。何回か頭打ってたからなあ

「お、おい!!」

私が駆け寄ろうとしたその時

地面が、大地が揺れた。

「七天流奥伝、劉土」

第十五話 晴蘭参上（後書き）

明後日からテストですがちよくちよく書いていきます！

1週間に最低1回の更新は受験がやばくなるまで続けていきます！

感想、意見お願いします！！

第十六話 全力勝負（前書き）

気に関しては文献をあさり集約して自分の解釈のもと描いておりますので悪しからず

第十六話 全力勝負

Side Others

「あの馬鹿、油断するなって言ったのに」

先ほど3人の子供がいた真つ暗な空間で、黄土の髪の子はプルプルと体を小刻みに震わせながら怒っていた。

「次、どっちが行く？」

「私が行く。そろそろストレス発散しないとやっていけない」

黄土の髪の子は拳を強く握ってわなわなと震わせていた。

「行ってらっしゃい、劉土」

黄土の髪の子、劉土は苛立った様子でその場を後にした。

Side Out

Side 百代

「七天流奥伝、劉土」

穿火が地面にうつ伏せになりながら何かを口にした途端、私に向かって地面に亀裂が入る。

「チツ！狸寝入りか！」

私は急ブレーキをかけて穿火から離れた。

まさか気絶したフリをするなんて、コイツはそういう不意打ちもやってくるのか。

「狸寝入りじゃない、本当に穿火は気絶した。だから、ぼくが出てきた。油断するなど言ったのに、不意打ちの爆発で驚いて気絶するなんて、あの馬鹿」

と思っていたら、狸寝入りに関してゆったりと否定されたが、どうも先ほどと何かが違う。

先ほどとは打って変わって気配が大人しい、半開きの目に無表情で
実に暗そうな雰囲気だ。

それに今度は“ぼく”、また口調が違うぞ？

穿火はゆっくりと体を起こして気だるそうに立ち上がった。

体の炎は既に鎮火していて、右眼も元に戻っていた。

「ぼくは咲昏劉土^{さきぐれりゅうど}、さっきの単細胞とは別人だから、間違えないで」

「お前もあれか？魂が乗り移ったとか言うのか？」

「事実だから仕方無い、それより、ぼくも闘いたいんだけど、いい
？」

劉土とやらの気が少しざわついている。欲求に身を任せて自身を昂
ぶらせているようだ。

「お前ら基本的に好戦的なのか？とても嬉しいんだけど」

「今回は特別、一番好戦的なのは穿火、他のぼくたちはそうでもな
い。けど、今日はぼくもイライラしてる。だから、闘ってスッキリ
したい」

「実に解りやすい理由だな」

だがそれがいい。要は私と闘いたいつてことだからな。受けてたたない理由がない。

しかし、今コイツ“他のぼくたちはそうでもない”って言ったな。

さっきの穿火つて奴は好戦的、そしてコイツと始めの奴はそれほど闘いたくないのは解った。

けど今の言い回し、もしかするとコイツの中にはまだまだ強い奴がいるということなのか？

「ねえ川神百代、始めてもいい？」

「ああすまん。楽しくなりすぎてトリップしかけていた。いつでも来い！」

「遠慮なく、七天流、奥義、土崩瓦塊どほうがかい」

ズダン！と劉土は力一杯地面を左足で踏み締めて腰を落とし、右手の甲を頭に、左手の甲を左膝に添える見たこともない構えを取った。

本格的に七天流とやらの興味が出てきたな。

なんて思っていると、私はふとあることに気づいた。

足が上がらない。

「ッ!？」

足が私の意思で動かない。まるで石や鉄のように固まってしまっている。

「穿火が操るのは火気^{かき}、ぼくが操るのは土気^{どき}、違いには気づいた？」

「なんだそれは」

「また主に教えてもらえるだろうけど、少し説明する。七天流の流派としての気概念、人間の内に秘められた気、5種の内気。自然から借りる強大な気、2種の外気。この7種の気が、この世には存在すると七天流は説いている。その5種の内気の内の1つ、火気を使うのが穿火、ぼくは同じく、内気の土気を使う」

まるで機械のように無表情のまま淡々と自分の流派について語る劉士。

「火気は、気を練って発火させた気の通った火を、操ることができる。ぼくの土気は、大地や地脈と自分の練った気を、繋げることができる」

「では、この足が動かないのは」

「大地を震動させて、足を固定してる。激しく、細かく振動しているものからは、体を離すことは出来ない。詳しいことは、物理の先生にでも聞くように。今使った土崩瓦塊は、地脈、中国では龍脈というらしいけど、それとぼくの気を繋げる下準備」

「用語ばかりでなんとなくしか解らんが　この程度で私を止めれると?」

私は足に気を集中させる。

気の通っているものなら気の通っているもので打ち破るのが定石!!

1歩で間合いを

「みんなそう考える、でも大抵話を聞いていない」

ぶしゅん

私の足から何かが抜けたような音がしたと共に、私の中から明らかに気が削り取られていた。

「な、に？」

「ぼくは、地脈に気を通わせてる。あなたがどんなに気を送ろうと、その気自体が地脈に流れてしまうから、意味はない」

「くっ！厄介な」

「まあ動けないこともないと思うけど、まずはこっちから行く」

劉土は構えをやめて1歩、また1歩とゆっくりとこちらへ歩み寄ってくる。

劉土は私の目の前で立ち止まる。

「反撃、しないの？」

わずか30センチの距離で挑発されるが、力を入れても拳が動かない。

地脈の影響とやらが上半身にまで及んできているのか。

劉土は無表情のまま再び先程の構えを取った。

「七天流、雲母」

ドズツ！と私の腹部に2つの拳がめり込んだ。

「だが、この程度の威力なら！！」

私は溜めておいた気で腹部を強化しダメージをなくした。

なくした、はずだった。

「ぐ、あ？」

「ぼくの土気で操るのは、基本的には震動。大気だろうが、大地だろうが、気を通して揺らせないものは、ほとんどない。自分の拳ならなおさら」

私の腹部の外部は確かに気で強化したが、腹部の内側、つまり内蔵へ直接ダメージが襲っていた。

「浸透勁、発勁に近いものか」

中国の拳法に、浸透勁、発勁と呼ばれる技法が存在する。

原理は様々だが、主に“波”がそれを生んでいると言われている。腹部に当てたはずの打撃の威力が背中で爆発したり、内側の内臓や血管を破裂させたと言う事例がある。

これが出るようになる簡単な理屈として、“定常波”がある。拳を打ち込んだ場所にもう1度素早く拳を叩き込むことで出来る“定常波”、一定方向からしか来ない波の反射波と、新たに打ち込んだ入射波が合わさり増幅することによって爆発的な威力を発揮するものだ。その爆発地点は達人になれば意図的に調整できるらしい。

例え強固な鎧を着ていようが分厚い壁で囲まれていようが、“定常波”の前では無いも同然。むしろ威力を上げてしまっているだけだ。

今回、劉土が使っている技は振動、“波”を自在に操ってくる。つまり、コイツの技の全てが防御不可。さらに、波の調整が自在に出来るコイツは、胸に拳を当てて腹を攻撃することが可能で、その威力は波の幅を変えることによって自由自在。コイツはさながら、“人間兵器”。

「そう。伝える力が主力なのが土気、同系統のものなら、その2つが1番近い」

「だとしたら、防御はほとんど意味をなさないと?」

「そうなる、でも防げないことはない」

そう言って劉土は私の頭部へ蹴りをかます。

「ぐっ
」

脳みそを直接揺さぶられたような“波”が襲ってくる。

やはり防げない、のか？

防げないことはないってどうやるんだ。体だってまだまともに動かせる状況じゃないって言うのに。

ん？そういえばさっきコイツ、地脈がどうとか

「せい」

考えてる私の頭に容赦なく襲いかかる劉土の重い連続蹴り、ガードも出来ないままじゃ私と言えど防げないんじゃないじゃ脳に響く。瞬間回復は細胞にしか作用しないから意識を持っていかれるとまずい。

“動けないこともない” “防げないことはない”

コイツの言葉は信用していいのか解らんが、嘘をついてるようには見えない

地脈か。波動か。振動か。

やれることも少ない、やるだけやってやる!!

「終わり」

劉土の足が私の側頭部へ飛んでくる、こめかみを撃ち抜いて意識を絶ちに来た。

地脈、龍脈、振動、波動、なんだっていい。

私の邪魔をするな!!!

「な、に？」

驚いているのは劉土、笑っているのは私。

「お前が言ったんだぞ？ “動けないこともない” とな！」

私は劉土の足の甲を掴んで蹴りを止めた。

「だったら動いてやるさ」

「それ、言うほど簡単じゃないの、解ってる？」

劉土は逆の足で私の手を振り払い再び間合いを取る。

「簡単じゃなくても出来ないことはない」

「土気を破る方法は1つだけ、同系統の気を使用すること。波を波で、振動を振動で弾き返すこと。それもその気は必ず土気に極限まで近くなきゃいけない。ぼくが言いたいこと、解る？」

「悪いが、あんまり頭が良くないものでな。半分も理解していない。浸透勁ならなんとか解ったんだがな」

自慢げに言えることではないが。

「じゃあ口に出してあげる」

瞬間、劉土の目付きが変わった。

さっきまでの無関心無表情の半開きの目とは違い、明らかにこちらを睨み付ける熱い目。

「極めたぼくの土気を破るには土気を使う他ない、つまり川神百代、あなたは無意識に七天流の一端を使えた」

「多分だがな、そんな大層なことじゃない。浸透勁に近いものが川神流にもあるんだよ。蠍撃ちさそりうちと言ってな、相手の内部へ攻撃する特殊なものだ。恐らく、偶然にも同じような技法だったんだろうな」

「なるほど、その蠍撃ちとやらの応用と、七天流の土気が類似するものだ。それなら確かに破れた理由になる」

劉土は1回だけ目を閉じてゆっくりと深呼吸をした。

再び目を開けると、劉土は歯を見せて笑っていた。先ほどのような大人しい雰囲気ではなく、私のように鬨いに飢える獣の目。

「川神百代、あなたはめちゃくちゃだ。普段無口なぼくも、ついついしゃべってしまう。それほどまでに、あなたはぼくの本能を駆り立てる、闘争の本能を」

「私も楽しいぞ。さっきから何回も言っているが、事実だから仕方ないか」

「でも、残念ながら全力でお応えすることが出来なそうだ」

劉土の顔に陰りが見えた。

「ぼくのを全部引き出すには主は不向きだ。さっきも言った七天流の概念、7種の気にも人に見合った相性がある。主はぼくの土気とは相性がよくないから、引き出せて60%」

60%、だと？ちよつと待て。

私を動けなくした振動を起こすのに必要な気の量、密度、川神院の師範代でも破れる奴はそうそういないほど強いんだぞ？

「でも、今使える全力で迎え撃つ」

轟ッ！と劉土の周囲が気で風が荒み砂嵐すざんを起こし出した。

「なら、私もこの1撃に懸けよう！」

私は残りの気を全て右腕に集約させて極限まで練って練って密度を上げていく。

「1発勝負、ぼくそついうの好きなんだ」

ザザザッ！と劉土の右腕に先程巻き起こした砂嵐が凝縮されて纏っていく。

まるでその腕自体が小さな砂嵐のようだ。

「砂嵐はね、あらゆるものを削り抉り砕く悪魔なんだ。ダイヤだつて粉みじんに来る」

「ならば、その悪魔ごとお前を打ち砕いてやるさ」

互いに動かずに力を溜めていく。今持てる限りの力を込めて、限界を越える勢いで力を上げて。

「禁じ手！！富士砕き！！！！」

「七天流、極技きょくぎ、龍鈷金剛拳りゅうここんごうけん！！！！」

互いの拳が激突した。

絶大な爆音と共に発生する衝撃波。

互いの技の威力による地響き。

そして - - -

2人の武人は倒れこんだ。

第十六話 全力勝負（後書き）

やっと、やっと闘いが

早く学園生活が書きたい、クリスとまゆまゆどこいったWWW

第十七話 3人目は瓜2つ（前書き）

テスト終わりすぐ仕上げた今回です

誤字脱字あったらスイマセン

第十七話 3人目は瓜2つ

S i d e 麗

アタシと一子はみんなを連れてあの化物同士の決闘から距離を置いた。

200mぐらい離れたところで3重の結界がアタシたちとあの2人を引き離し、中には入れなくなってしまうた。

「おいおい！晴蘭は大丈夫なのかよ！？」

「そうだよ！モモ先輩に勝てるわけないじゃん！」

岳人くとモロ口くんが慌てふためいている。確かに、今のアイツの強さを知らないならうろたえて当然ね。

「麗、晴蘭は」

大和も落ち着こうとしているみたいだけど、あの川神百代の強さを理解している弟分の大和としては晴蘭が心配なのだろう。

「ねえ、お姉さん」

「私より大人びた子からそう呼ばれると鳥肌立つから麗って呼んで」

「麗、晴蘭のあの妙な力、一体なに？」

「どうやら勘のいい子も混じっているらしい、あの気配を本人のか怪しむとは、強いわねこの子。」

「詳しくは言えない、けどこれだけは言える。アイツの強さは川神百代よりも上よ」

「あの晴蘭が？」

「アイツも相当苦労してる、京ちゃん、アナタよりもね」

「っ!？」

京の顔が真っ青に染まっていく。

「アタシは定期的なメールを大和としてたのよ？アナタがファミリィに入る前の同級生からの扱いを知ってもおかしくはないでしょ？その頃、まだ大和がアナタを本気で助けたいと思う前なら尚更よ」

「う」

「ゴメンね、アタシがその場にいたら味方になれたのに」

アタシの一言に京はキョトンとしていた。

「 軽蔑、しないの? 」

「む、アンタねえ アタシはそんな低脳共とは違うわよ? アナタはアナタでしょ? 親がどうだろうとなんだらうと、そんなもんクソ食らえよ」

「! 」

そう、親がどうだろうと、クソ食らえだ。

「アタシは元川神のお姉さんの峰槻麗よ? 誰だって救いの手を差し伸べるし、誰だってアタシの可愛い兄弟よ」

「 」

「心配しなくてもアンタのことは軽蔑しないし、今度もし誰かにそのこと言われたらアタシにいいなさい。そいつらとっちめて説教してやるわ、親なんか関係ないってね」

「 ありがとう 」

京ちゃんの顔が緩んだ。警戒心を大分解いてくれたみたい。さつきから大和の事になると暴走してたけど、やはり新参者のアタシは結構警戒されてたみたいねー

「気にしちゃダメよ？困ったことがあったらお姉さんに任せなさい！」

Side Out

Side 一子

せーちゃんとお姉様が闘い始めて数分後、いつの間にか京が麗に非常になつているわ。あの京が、珍しいわ。

何があつたのか気になるけど今はこの闘いをしっかり見ておかないと！

「ワン子」

お姉様とせーちゃんの闘いを凝視していると、横から大和が話しかけてきた。

あれ？

「詳しく聞かせてもらおうか、後でファミレスでゆっくりと　な

「ニヤー！？はめられた!？」

「昨日何があつたか非常に興味深くてな」

拝啓、せーちゃん、麗

ごめんなさい、アタシ、約束守れそうにありません。

Side Out

Side 麗

「ヤバいわね」

結界の外からでも解るあの2人の気の増幅、おそらくこれで決着がつく。

この3重の結界が持つのかどうか、念には念をいれておこう。

「みんな、アタシのすぐ後ろにいて。絶対離れちゃダメよ」

「どづしたの?」

京ちゃんが袖を引っ張ってくる。ああもう、可愛いわね!

「あの2人とアタシたちの距離が近すぎる。下手したら結界が割れちゃうかもしれない」

「ええ!?じゃあどうするんですか!?!」

「モロ君!アタシには敬語は必要ない!」

「そんなこと言ってる場合か!」

「私には大和が必要だ!」

「どづしてそつ繋がる!?!」

さて、仲のよい夫婦漫才は置いておいて、本格的に準備しなきゃ。

「纏元流奥義！」

アタシはみんなを囲むように地面に日本刀を4方に1本ずつ、計4本を突き刺した。

「艶舞・鴻！」
おおとり

アタシの気が刀と刀を繋げるように展開されていく。

「大抵の衝撃ならなんとか持ちこたえられる！みんな！絶対にここから飛び出さないでね！」

アタシの呼び掛けにみんな頷いてくれた。

いいなあこのファミリー、アタシが引つ越さなきゃここに混じれていたはずなんだけどな。

まあ過ぎたこと悔やんでも仕方ない。今はこの子らを守る！それが元川神のお姉さんの役目！

そしてアタシの結界が全方位に展開された刹那。

2人の拳が激突した。

爆発でも起こったんじゃないかと思うくらいの爆音が鳴り響き、発生した衝撃波が辺りに分散した。

1枚目の結界、結界に全体的にヒビが入り呆気なく碎け散る。

2枚目の結界、1枚目の結界が威力を弱めたが、それでも結界は膨らみ風船のように破裂。

「ちょっと！！なんなのさあの威力！！」

「じーちゃんと喧嘩してもこんなことにはならないわよ！？」

モロ君と一子がワタワタと慌てている。

「やっぱりあんだけ力を蓄える時間を設けちゃそりゃ全力の全力が

発揮されるだろうね！ほら3枚目も危ないよ！アタシの後ろから出ないでね！！」

「岳人が危ないって」

「おい大和、三枚目って俺様のことか？」

「そうなるな」

「おいおいよせやい！俺様がそんなに華麗な肉体を持つてるからって！」

胸筋を突き出すようなポーズをとるガクト君。何をしているんだか。

「それ、二枚目だから」

「二枚目は素敵な大和、三枚目はお調子者のガクト」

「なに！？三枚目ってそういう意味なのか！？」

「ガクト　流石にそれくらいは常識として知っててよ」

ガクト君の無知さにモロ君が呆れている。

大和、翔一。アンタらが羨ましいね、こんなに仲がいい子とファミリーになれるなんて。

「ほらみんな！衝撃来るよ！」

アタシが呼び掛けたとほぼ同時、3枚目の結界が奮闘虚しく破れ去った。

その結界を破った衝撃波がアタシの結界に激突して轟音を上げて眩く光る。

「耐えてよ、アタシの結界！」

S i d e O u t

S i d e 大和

「た、助かった？」

眩しい光を防ぐため目を閉じて頭を押さえてかがんでいた俺は、轟音が収まったので立ち上がって目を開ける。

「みんな無事みたいね」

結界に使用していた4本の刀は叩き折られて見るも無惨な姿になっていて、麗が俺たちを守るようにかばったのか、大の字に体をひろげていた。

「結界が崩れるかと思ってかばって見たはいいけど　どうやら必要なかったみたい。ギリギリセーフね」

「た、助かったあ　」

モロはその場にヘナヘナと座り込んでしまった。

「へっ！情けねえなモロ！」

「ガクト、足震えてる」

「ちっ、ちげーよ！これは武者震いってやつだ！」

京に指摘されてガクトは直ぐに足を隠すが、隠しきれてない。

確かに目で見て解るくらい震えてるな。

「それよりあの2人は？」

先程2人がいた所には砂ぼこりが立ち上げていて視界が悪く、今状況がどうなっているのか解らない。

「 見えない」

弓使いで目のいい京も、流石にこんなに視界が悪くては確認できないだろう。

「 倒れてるわね」

「 え？見えるの？」

「 ぼやーっとだけね」

目のいい京も感心していた。

麗ってこんなにすごい奴だったっけ　？まあ俺たちと遊んでたときはまだ小さかったから変わるの当たり前だが。

本当に姉さんが2人になった感じだな　腕力的、規格外的な意味で。

「 決闘はもう終わりみたいよ。一子、百代さんを運んであげて。晴蘭はアタシが運ぶわ」

「ラジャー！」

「とりあえず川神院へ運ぼうよ」

「そうだね、あそこなら怪我の治療もしてくれるだろうし」

怪我と言うワードが出て、何かを思い出したようにガクトが発言する。

「ていうか麗さん！」

「ガクト君！敬語を使うな！」

しかし、それも一蹴されてしまう。

「う、麗！モモ先輩との決闘であんたも怪我してるだろ！？」

「ああ、それなら治ったわ。アタシも多少なりには回復術あるからね、回復術というよりは細胞活性化術だけ。それに、速度なんかあの武神には到底及ばないわよ」

姉さんが2人、もう本当に姉さんが2人。

10分も経たずに回復し終わるのも反則じゃないか？

チート使えるのって姉さんだけじゃなかったんだ

「一子、着いておいで」

「はい！」

麗は一子を連れて粉塵の中へ突入していった。

一子ももう呑み込まれてるなー　麗の姉パワーに。

Side Out

Side 麗

「こつちよ」

一子の手を引いて先導する。

アタシは百代さんと晴蘭をぼんやりと捉えていたからそれを目指す。

「ねえ麗、どうして2人が見えるの？こんなに砂が舞ってるのに」

「纏元流、鶺鴒くまたかまなこ。この技使うとアタシの目は鳥みたいになって、あの2人から出てる熱や紫外線が見える。まあ簡単に言えばあそこに誰かいるぞーって感じでアバウトに解るの。まあちよつとした気の応用みたいなもんよ」

「纏元流ってそんな技もあるのね」

キラキラした尊敬の籠った目で見つめてくる。うーん、尊敬されるほどじゃないんだけどなあ

「今からでも纏元流に入ってもいいわよ？なんてね」

「アタシは川神百代の妹だからそんなことは出来ないわ！」

「あはは！自分の意思を貫くってのは大事なことよ？頑張ってね」

「うん！　　ってあれ？2人とも発見！！」

一子が指を指した先には2人の若者が倒れていた。

アタシたちは近寄って2人の容態を確認する。

幸い気絶してるだけで目立った怪我や出血はない。

「この2人なら直ぐに目が覚めるだろうけど、まあとりあえず運ぼうか」

アタシが晴蘭を背負おうとして晴蘭に触れた瞬間

何か黒いものが晴蘭から噴き出した。

「ッ！！？」

「な、なにこれ！？」

一子は百代さんを背負ったままこっちに寄ってきた。

この黒いもの、アタシの体が反応している。

これは 七天流の気、アタシの七天流に反応する能力が警報を鳴らしている。

「大丈夫、自分で起き上がれるから」

ゆっくりと晴蘭が立ち上がった。黒い何かを体に纏ったまま。

「せ、せーちゃん?」

「アンタ、大丈夫なの?」

晴蘭はアタシたち2人の顔を見てしばし考えこんでいた。

「ああ、僕は晴蘭じゃないよ。体はそうだけど中身が違う、僕は咲昏楼閣、晴蘭は僕の主」

晴蘭は楼閣と名乗った。一体どういうことだ?そんなに変わった気はしないが

噴き出していた黒い何かも、そこまで違和感はなかったし

「詳しいことは川神院で話してあげるよ。説明するんなら主が目を覚ましてからがいいんだけど、しばらく起きそうに無いしね。さっきその武神に気絶させられちゃってさ。けど、あの威力じゃ普通、首の骨が折れるか死ぬもんだけど」

そう言って楼閣は川神院の方向へ歩き出した。

「ちょ、ちょっと!? 一子! みんなを呼んで川神院に向かって! アタシはあの馬鹿を追っかけるから!」

「ら、ラジャー!」

Side Out

Side 大和

「 って訳、これが決闘の全貌だよ」

晴蘭、の中にいる別人格と名乗った楼閣が、姉さんとの決闘について話してくれた。

「 で、お前はなんなんだ? 晴蘭だろ?」

どうにも信じがたい。多重人格とは思えない。

「 だから! 晴蘭は僕の主で! 僕は咲昏楼閣だってば!」

「口調もほとんど一緒なのに信じられるかよ。明らかに晴蘭だろ」

ガクトもでもが晴蘭を否定していた。

「くそー 穿火が起きてれば話が早いのに」

「しょーもない」

京が冷ややかな目で晴蘭を見つめている。これは痛い。

「あー 完全にネタだと思われてる どうやって証明するか
何だって僕と主はこうも口調が変わらないのか 川神百代が
起きてれば立証できるんだけどな」

なにやら歯がゆいのか、晴蘭はもじもじとしている。

「それは、冗談でもなんでもないぞ」

その時、背後から声が聞こえた。

「お姉様！」

「少し、寝てしまったようだ」

ゆっくりと布団から抜け出る姉さん。服が乱れているから煩惱がやばい。

「バツチリなタイミングで起きてくれた！流石は武神と名高い川神百代！」

「私をおちよくっているのか？」

姉さんが布団から起き上がって5秒も経たないうちに、姉さんと晴蘭で早くも喧嘩が始まりそうだった。

「冗談じゃない？さっきの多重人格の話が？」

「ああ、正確には魂が体に入り込んでいる状態だから多重人格ってわけではないらしいが。まあ多重人格とほとんど変わらん」

「おざなりな扱いだね」

姉さんの解説があつて助かったが、雑な扱いのようで少し複雑な顔をしている晴蘭。

いや、今は楼閣だったか。

「お前、確か楼閣と言ったな。浅い眠りだったから頭の中に情報は入ってきてる。お前から一体何者だ？」

「うーん、言っても信じてくれそうにないしな」

楼閣は頬を人指し指でポリポリとかきながらあははと笑う。

もう魂とか言ってる時点で信じがたいんだけどね。

「話してみる、案外面白いことかもしれん」

「それに、主はあんまり僕らのことを話したくないみたいだよ？みんなから否定されそうで怖いみたい。まあもう川神百代と対峙した時点で充分手遅れだと僕は思うけどね」

「モモ先輩いる時点で俺様たちに怖いことはほとんどないから大丈夫」

「姉パンチ！！」

目にも止まらない速さの拳がガクトの自慢の筋肉を貫いた。

「ぐっふぁー！！」

勢いよく壁に激突したガクトは頭を強く打つてのた打ち回っている。

「自業自得だねガクト」

「しょーもない」

「おおー　　すごいパンチ　　」

それを見たモロたちが和んだりしていた。

この光景にみんな見慣れてしまっている。

「まあ、いつものことだから大丈夫だろ」

「　　すごいな風間ファミリー、これは主が心配する必要ないね。
じゃあ今から僕が話しちゃおう」

楼閣がゆっくりと立ち上がって鞆から1つの木箱を取り出し、その木箱から巻物を取り出した。

「僕は咲昏楼閣、七天流を極めた7人の武道家、七大闘王の1人だよ。僕の魂は戦国時代のある戦国大名の魂なんだ」

「せ、戦国大名？」

「巻物には魂だけ乗り移ったから、口調とかは子供の頃に戻っちゃ
ってるけどね。名前は吉法師きっほうしで」

「き、吉法師い！！？」

つい大声を出してしまったが、こんな驚かずにいられない。

「ど、どうした舎弟？有名なのか？」

有名なんてもんじゃない、今の話が本当だとすれば歴史学者が黙っ
ちやいないレベルだ。

「この人の名前を知らない人なんてほとんどいないよ 戦国時代
の三英傑とまで言われてる人だよ そうでしょ？」

じつくりと楼閣の目を見つめる、その目の中に見えるのは莫大な経
験からなる絶対的な自信と強烈な威圧感。

「第六天魔王、織田信長さん？」

第十七話 3人目は瓜2つ（後書き）

あと2話あれば原作へ入れそうなスピード

ちなみに第六天魔王様、さすがに思い付きではないですwww

ちゃんと考えてありましたよ。主人公の実家が尾張と決めたのもそれが理由です

それにしても一二の三四郎のオコノミマン、かっこよすぎである

第十八話 お茶目な魔王様（前書き）

2日続けて更新、雑かもしれません

第十八話 お茶目な魔王様

S i d e 大和

「織田信長あ!？」

1番初めに驚いたのはモロだった。

伊達にいろんなゲームをやっていない。

「織田つて、あの織田?」

いつも冷静な京にも焦りが見える。

「
」

姉さんは何も言わず、その場に立ったままだった。

「おいおいおいおい!冗談が過ぎるぜ!？」

ガクトも流石に信長は知っているようで、体中に冷や汗をかいていた。

「信長つて言えば、桶狭間の戦いとか長篠の戦いで有名な大名じゃない」

麗もそれなりに驚いてはいたが、あくまで冷静に分析していた。

昨日、やっぱり何かあったのだろうか？

「名前だけなら知ってるわ！」

ワン子にはもっと勉強してほしいものだ。

「面白い反応。これだから正体明かす時って楽しいんだよね」

フフフ、と楼閣は静かに笑っていた。

「ほ、本物？」

「しっかりと記憶に残ってるからそれは確かだよ。僕は吉法師こと織田信長。恐れ多き戦国武将であるぞ？ってね」

ピースをしてへへッ、とお茶目に笑っている。

なんだろう、イメージとかけ離れている。

なんかこう、何と言うか もっと冷酷非道な鬼みたいなイメージだったんだけどな。

「ゲームとかと違うね、なんかもっと怖いイメージだったんだけど」
どうやらモロも似たようなことを考えていたらしい。

そりゃそうだよなあ。だってこの人の別名第六天魔王、魔王だぜ？
焼き討ちとか殲滅とかしてたって文献もあるし、敵の頭蓋骨で杯作
って宴会したとかいう恐ろしい逸話まであるんだから、怖いイメー
ジが無いほうが無理だ。

モロも言ったけど、ゲームじゃ声も格好も“ラスボスですけど何か
？”的な感じでほとんど統一されてるから、歴史をほとんど知らない
少年たちも信長怖いと思っっているはずだ。

それにあの名言、“鳴かぬなら殺してしまえホトトギス”なんてのも
小学校で残りの三英傑の秀吉と家康と一緒に教えてもらうはずだ。
実際の意味は違うらしいが、まじめに調べないとそんなの解んない
だろう。

これほどまで怖い要素が語り継がれている信長がまさかのピース。

そりゃ気が抜ける。

「どうも信じられねえ。おい大和、なんか確かめる手段はねえの
かよ？」

ガクト、素晴らしい無茶振りありがとう。

「えっと、信長さん」

「楼閣って呼んでよ、あとタメ口でヨロシク。信長って名前はもう
卒業したいからさ」

「じゃあ楼閣、いくつかの質問に答えてもらえるか？」

「ドンと来なさい」

胸を拳で叩く楼閣。じゃあこじは一つ

「江戸幕府って知ってます？」

「それ、確か僕が死んでから起こった幕府だよな？あのガキだった泣き虫の家康が、悪知恵の働く猿の秀吉とか、鉄砲玉の勝家とか亡ぼして成立させたって主から聞いたよ」

この人が死んでからの出来事を質問しても“主から聞いた”で1点張りされるな。

「死ぬ寸前の記憶は？」

正直、これは好奇心の質問。俺が知りたいだけ。

あの本能寺の変のこと。

「これ話していいのかな？まあ制限が来るまで話すよ。天正10年の6月、旧暦で考えてね。本能寺の変があつたでしょ？あの時、本能寺が燃やされちゃってさ。いやあ焦った焦った！蘭丸と一緒に寺を脱出しようと思っただけで、どうにも逃げ切れなくてね。1番火の回っていかなかった奥の奥まで逃げ切ったところで、諦めた。」

俺は夢中になって話を聞いていた。まだこの人が信長本人だという証明は出来ていないけど、もしこの人が本物で話が全部本当だったらと期待しているからだ。

「そこで自害しようと思ったんだけど、そこにアイツがやってきた」

「アイツってまさか」

「そう、あの明智光秀だよ。こんの根暗め、殺してやる！！　と
思っただけどき。どうも様子がおかしかった。光秀の目が、光を
宿していなかったんだ。始めはただ狂気に溺れてるだけだと思っ
たが、どうやらそういうわけでもなさそうで、アイツはもう死人だっ
たよ」

「は？」

「まだしゃべれそうだ、続けるね。光秀は誰かに操られていたみた
いでき。だって目が虚ろなのに笑っていて、足の骨が折れて肉から
突き出してるのに普通に立っていたんだもん。それこそ、上から糸
で操られてる傀儡かいらいだった。」

「ち、ちよつと待てよ！光秀がその時死んでいたら辻褃が合わない
だろ！？あの後秀吉に討たれるまで確かに生きていただろ！？」

「表向きはね。けど、確かにあの時僕を襲ってきた光秀は死に体だ
った。さて、ここでクエスチョン。この問題を解決する仮説が1つ
あります。それは一体なんでしょうか？」

「仮説って、現代の学者が推察した仮説？」

「その仮説だよ。結構な歴史好きなら少しは知ってそうだけどね」

仮説、仮説、仮説

ピン！と1つ思い出した。けどこれって日本史の教師に聞いてみたらあんまり信憑性が無かった気が

その教師がああ綾小路だからその“信憑性の無さ”に信憑性が無いんだけどね

「入れ代わり説」？

「ネガティブExactly!!」

の、信長が横文字使ってる、しかも結構発音いいぞ。

キリスト教とそれなりに関係してただけあって外国語にはあまり抵抗が無いのか？

「人間50年”なんて僕が言った時代だけどさ、流石に“1000歳超”は長生きしすぎだと思っただよ。しかもこの説が通ればあの天海とかいう家康の側近も光秀になっちゃう。ははは！光秀3世ってか？」

「何々？どづいつことさ？」

話に何とか着いて来れていたモロが訪ねてくる。

「明智光秀は昔は何の役にも立たない、いわゆる出来の悪い奴だった時期があるんだ。長良川の戦いで明智家が離散するまでがそう。その後しばらく光秀は失踪するんだ。そして帰ってくる、まるで“別人”のような有能さになっていたって逸話がある。でも、それは光秀が修行したからと言う説が有力だからあんまり大きく取り上げられていない」

「それで？続きを聞かせてよ」

楼閣は俺の説明を楽しんでいるように見えた。

「これは俺なりの解釈、と言うか文献やら漁ってネットとかで討論した結果。その時光秀は既に死亡していたんだけど、誰かが光秀を名乗って帰ってきた。その光秀が本能寺の変を起こした人物なんだと思う。その後秀吉に亡ぼされたはずの光秀は生き延びていて、誰かに自分の名前を託して3人目の光秀が誕生した。その光秀は密かに修行を積んで僧の天海として名乗り家康の側近にいた。でも、もしアンタの話が本当だとすると、この説は途中で砕ける」

「90点！歴史マニアだねえ。じゃあ残り10点の解説をしよう。光秀は名前を本能寺の変の後に譲渡したんじゃない、その前に強奪されたんだ」

「それは誰に？」

「それは　　で　　だったわけで」

ん？何を言っているんだ？

「　　あ、ゴメン、そろそろ限界だ」

「限界？」

「僕が魂になってこの巻物に入るときにある制限をされてね、“ある一定以上の真実を話すことを禁ずる”ってね。ゴメンね中途半端で」

へ？終わり？このめちゃくちゃ楽しい話終わり？

「全貌が知りたいなら残り6人に話を聞くといいよ。この光秀3世について各々知ってることがあるだろうからさ」

め、目の前で超高級料理を床にぶちまけられて豚に食べられた気分だ　　！！

この中途半端に終わられてさ迷う俺の情熱はどこへ向かえばいいんだ！？

「さて、僕が信長だってことはこれでいいのかな？どうやっても証

明する手段はないし、あるとすれば僕が話す昔話を君たちが信じる
ことだけ」

「俺は信じるよ、こんな興味深い話を聞かせてもらっちゃっ
たからね」

「それは何よりだよ。じゃあ1つ忠告してあげる、主の中にいる穿
火って短気な奴は相手ごわいよ？アイツ頑固だから。逆に言えば、
1回気に入られちゃえば後は簡単だから。それじゃあ僕はそろそろ
退散するよ。主が起きそうだと、君もみんなを起こしてあげてね？」

みんな？俺はなんとなく予想は出来るけど、振り返って後ろを見る。

「くくかー」

案の定、ガクト、ワン子、姉さんの3人は話が難しすぎて付いてい
けなかったのだろう、ご就寝しておられる。

「起きろ3人とも！！」

「あれ？ボインのお姉さんは？」

「お前の妄想だ」

この筋肉バカは一体何の夢を見ていたんだか。

まあ大方、美人にモテる夢だろう。現実でありえないから夢で想像するとは憐れな。

「お腹いっぱい ムニヤ」

「おら起きろ！今日のご飯は満漢全席だぞー！」

「北京ダック！？」

瞬間的な早さで目を覚ましたワン子。条件反射ってすごい。

「はいおはよう」

正直これで目を覚まされても嬉しくはない、むしろワン子の躰役としては悲しい。

「姉さん、話し終わったよ？」

「そのようだな」

これだけで起きるんだから 実は起きてるんじゃないか？

「それじゃ、また話そうか大和君、またね」

そう言つて楼闇は目を閉じた。

「あーあ、話しちゃったのか楼闇、あの決闘の事話しちゃった
らボクが化物扱いされちゃうじゃん、別にいいけど」

そして、気だるそうに目を開けた。

「晴蘭？」

「おはよう大和、楼闇の話し相手になつてくれてありがとう」

どうやら晴蘭本人のようだ。

それにしても魂の憑依による多重人格か、コイツ相当苦勞してきた
のか？

まあいい、あとでワン子に問いただそう。

「アンタ、大丈夫なの？」

麗が晴蘭に声をかけた。やっぱり昨日何かあったな。

「まだ多少ククラするけど問題ないよ。それにしても全力の劉土と互角か、百代さんも未恐ろしいね」

「私は納得していないぞ！アイツは60パーセントしか本気を出せないと言っていた！！」

（り、劉土のバカ！余計なこと言わなくてもよかつたのに！そうすればこれから百代さんとやる時に全力出さずに闘えたのに！）

なんか晴蘭が少し焦っている。

ひよっとして姉さんに襲われる確立でも上がったな？

まあそんなところか。

「そつだ、あの劉土とか言ってた奴がお前が七天流について詳しく教えてくれると言っていたぞ？」

「あ、あああのマイペース野郎　！！毎度毎度勝手に決めて　！！」

晴蘭の額に血管が浮き出てきた。なんかご立腹のようだ。

「それはまた今度です！今日はもう疲れました！もうすぐ7時です！今日はもうお開きにしましょう！...！」

晴蘭の叫びがきっかけで、今日は解散する流れになった。

さて、俺はもう1仕事。

待ってるよ、ワン子。

Side Out

Side 百代

「おい

「何ですか？今日はもう闘いませんよ？」

「そうじゃなくてだな、なんで川神院かわかみいんにいるんだ？」

あの後、晴蘭の一声がきっかけでそのまま解散の流れになってしまったが、晴蘭は何故か川神院にいて晩御飯の片づけをしていた。

「晴蘭君は昨日からここに居候してある、雑用係ということでのつ。ホッホッホ」

外出から帰ってきたじじいは茶をすすりながら笑っていた。

聞いてないぞ　そんな楽しくなるようなこと!!

これは、決闘が出来きる!!

「ということとは、昨日麗と決闘したのは晴蘭か」

「まあちよつとした誤解や入れ違いから起こったものですから」

「互いに本気を出さない試合とはいえ久々に炎を練りだす使い手を見たわい」

「ああ、あれは楽しかったな。最後の奴なんか最高だった!」

腕に砂嵐を作るとは　なんと奇妙な流派だ、七天流。

「あれは疲れるんですよ　集中するのにも大分時間食うし」

「でもすごいわ!アタシにも少し気の使い方教えて!」

「ん、それじゃ今から少しだけやろうか。おじいちゃん、ちよつと道場借りるね」

「ウム、頑張りなさい」

「私も行こうかな！」

「ダメー!!」

立ち上がったところで2人に止められた。

「お姉様いきなり闘いたくなっただか言っただけのまま決闘になっちゃいそうだし」

「流石にもう今日は相手は出来ないのよ」

「2人して私を除け者に」

「日頃の行いの悪さじゃな」

「何だとじじい、やるか？」

「やっぱりまだ好戦的ですね、やっぱりダメです」

あ、しまった。

「ホツホツホ」

この後1人で自室でいじけていたのは秘密だ。

S i d e O u t

S i d e O t h e r s

新幹線の中、1人の男がたこ焼きを頼張っていた。

「本場は違うなあ、夜店の屋台なんかとは比べもんになんねえや」

男は新大阪駅から乗ってきた。右手には10個入りのたこ焼き、左手にはお好み焼き2枚を携えていた。

ソース独特の匂いは強烈だが、駅弁にもたこ焼きやお好み焼きがあるので、他の乗客はそこまで気にしていないように見える。

男はたこ焼きとお好み焼きを交互に口に持っていき、満悦の様子だった。

「ん？」

突然男の手が止まった。

「 関東からアホみたいな量の気が漏れてやがる 」

男は残りのたこ焼きを全て口の中へ放り込み、お好み焼きを全て平らげる。

「 咲昏碎聖さきくれさいせい、アイツが関東にいるのか まあまだ会うには時期尚早、こちらも駒を揃えないとな 」

男は降りる準備を始める。膝にかけておいた真っ黒なパーカーを羽織ってフードを頭に被せる。

「 次は加賀だ 」

第十八話 お茶目な魔王様（後書き）

ヒロインについてですが

1・オリ主同士でくつつく

2・オリ主は別々でくつつく

この二択でいまだに迷っております。これに関しても意見をジャンジャン送ってください！ようはアンケートですね

さて、これで一章は終わりです。

ようやく原作に入ることが出来ますね！

あの剣聖の娘さんやドイツのKY娘もS組のお方たちもF組の愉快的仲間たちも続々出てきます！

お気に入り登録してくださってる方、感想をくれた方、評価をしてくださった方々のおかげで頑張っております！

これからも精進いたしますのでヨロシクお願いします！

今回は二章に入る前に人物、技紹介はさみます

第一章 登場人物（前書き）

第一章に出てきた原作キャラ以外のキャラの紹介になります

第一章 登場人物

あきほしせいらん
秋星晴蘭

身長 173センチ

血液型 AB型

誕生日 4月1日 おひつじ座

一人称 ボク

あだ名 せーちゃん

武器 七天流、己の肉体

職業 川神学園3-F 川神院に居候

好きな食べ物 クリームたっぷりのシュークリーム

好きな飲み物 ココナッツミルクタピオカ入り

趣味 スイーツ食べ歩き

特技 お菓子作り

大切なもの 交友関係、会話

苦手なもの 人を見下す人 静電気

尊敬する人 父、母

風間ファミリーとは10年以上前に知り合い、川神を離れるまでファミリーのメンバーだった少年で七天流現総代。ボサボサの緑の髪が特徴的。基本的には面倒くさがり屋だが、頼まれるとあまり断れないタイプ。

ある日、家が襲われて父を含む家の人たちを皆殺しにされてからは母と2人暮らしだったが、その母も過労で息を引き取り天涯孤独。家を襲った犯人に復讐すべく修行中。

川神に戻ってきたのは鉄心に協力を頼みにきたためだが、風間ファミ

特技

武器の瞬間解体、組み立て

大切なもの

兄弟分、兄のお守り

苦手なもの

電車

尊敬する人

兄

大和と同じ年の桃色のツインテールの少女で纏元流現当主。大和、翔一とは一子よりも長い付き合い。自称、“川神のお姉さん”だったが、大和を百代に取られたので“元川神のお姉さん”に改名している。

自分の歳に関係なく、自分の気に入った人物を兄弟分とみなして振り回す傾向がある。だがその代わり面倒見が非常にいいまさにお姉さんタイプ。しかし、性知識は皆無。

晴蘭同様、ファミリーのみんなに自分が復讐者であることを伏せている。しかし、復讐の火は一切衰えることを知らない。それ以外にもある過去があるが大和もしらない。

黨家にお世話になっていた時期があり、その頃は東北地方で過ごしていたので寒さに強く適応力が上がっている。黨家とは父親が剣聖黨十一段と知り合い。

田舎暮らしが長いので都会の人混みや満員電車は苦手。観光地に行く時は名所を巡るのではなく静かな穴場を探す派。

使えない武器はないと豪語しているが最近軍用武器に興味をもっており戦車砲やミサイルの構造を勉強している。体の中に隠してある武器は数え切れないほど、実家に帰れば武器専用の倉庫がありそこで時々中身を交換しているらしい。

料理は苦手、食べれないことは無いが無味無臭の料理を作り出す奇妙なテクニクを秘めている。

咲昏楼闇／織田信長

詳しいプロフィール不明。

七天流の奥義書の1つ、楼闇の中に封じ込めてあった魂。一人称は僕。口調も性格もほぼ晴蘭と酷似しているのでよく間違えられる。正体は戦国時代の三英傑の1人、第六天魔王こと織田信長。本能寺の変には隠された真実がありそれを全て知っているらしいが、制約によりそれを全て話すことが出来ない。好物は自分が生きていたときに無かった外国の食べ物。初めて食べたボルシチやパエリアは至高の味だったらしい。(本人談)

咲昏穿火／???

詳しいプロフィール不明。

七天流の奥義書の1つ、穿火の中に封じ込めてあった魂。一人称はオレ。好戦的で百代と気が合う。正体は不明、油断しやすい人物らしいが、楼闇＝織田信長のようにその事実が史実と当てはまるとは限らないのでよくわからない。好物は辛いものらしい、京と気が合いそうだ。

咲昏劉土／???

詳しいプロフィール不明。

七天流の奥義書の1つ、劉土の中に封じ込めてあった魂。一人称はぼく。大人しい性格で普段は無口。

正体は不明、穿火同様なのでよくわかっていない。

好物は甘いもの、晴蘭が作ったものを食べるのが最近の楽しみらしい。

第一章 登場人物（後書き）

キャラ紹介は気まぐれでやってしまいましたが今後もちょうと続けます

第一章 技一覧(前書き)

第一章で使われた技のリスト、解説です

やはり原作の技は書いてありません

第一章 技一覧

使用者：秋星晴蘭（穿火、劉土、楼閣を含む）

・陽炎かげろう

七天流の奥義書、穿火を読むことで使えるようになる技の1つ。大気に自らが練り出した火気を混ぜこんで実態のある分身を作り出すことが出来る。意識を通わせることでまるで自分と同じ様に動かせるが、その間本体は他の七天流を使えない。

・鳳仙火ほうせんか

七天流の奥義書、穿火を読むことで使えるようになる技の1つ。練り上げた火気を拳から大量生産して炎の弾丸を連写する中距離攻撃。火気を練り上げる時間が長ければ長いほど威力は強くなる。秒間70連弾が現在の晴蘭の全力。

・緋連雀ひれんじゃく

七天流の奥義書、穿火を読むことで使えるようになる技の1つ。火気で練り出した炎で足を包んでドリルのようにする近距離攻撃。威力は接触部分が足首に近づけば近づくほど上がる。炎だけ発射することも出来るが、そうすると使う気の量が格段に多いので多用は出来ない。

・雲母 ウヰロウモ

七天流の奥義書、劉土を読むことで使えるようになる技の1つ。鳩尾と丹田に1発ずつ拳を打ち込んで体力と気を削る近距離攻撃。土気を使用することで鳩尾には違和感が残り体力は格段に削られ、丹田には気が貯まらなくなってしまいが、川神百代は自力で耐え抜いてしまったのであまり活躍はしなかった。土気の震動により防御を貫通する。

・畔柳 アゼヤなぎ

七天流の奥義書、楼閣を読むことで使えるようになる技の1つ。一定の範囲（発動初期は自分の輪郭から5センチ）に外部から集めた闇気あんきと自分の気を混ぜたものを留めて体を覆い、気を漏らさないようにして気配を消す極限値設定技、相手の攻撃を吸収して威力を限り無く0に近づけることが出来る自動防衛オートガードの役割を兼ね備える。晴蘭曰くこの技は相当疲れるとのこと。これを使用している間は他の七天流を使えない。

・鶴子鳥 ツルこどり

七天流の奥義書、楼閣を読むことで使えるようになる技の1つ。外部から集めた闇気を爪先に集中させて相手の防御を貫通して内部にダメージを与える近距離攻撃。この技が当たった場所は穴が開いたように感じるが、川神百代はものともしなかった。足技が好きな晴蘭としては使いやすい技の1つ。

・夢墜ゆめおち（技名未登場）

七天流の奥義書、楼閣を読むことで使えるようになる技の1つ。簡単に言えば催眠術、かつこよく言えば意識を奪う。ただし、これを使った相手に攻撃しても攻撃は通らない（相手の意識がなくなるのは七天流の気に覆われたからであり、その気が威力を吸収してしまうため）。逃走専用にしかならない技。30分から1時間の間ぐすり快眠。

・奥義、星火燎原せいかりようげん

七天流の奥義書、穿火を読むことで使えるようになる奥義。体に炎を纏わせて自身を強化する技（発動初期は両腕と足首、右目が燃えていたのは穿火の趣味）。主な効力としては、加速、攻撃力強化、防御力強化、全ての技を1ランクアップ、肉体再生速度アップがあげられる。背中に炎の翼を生やして飛ぶことも出来るが、30秒ほどが限界。

・奥義、土崩瓦塊どほうがかい

七天流の奥義書、劉土を読むことで使えるようになる奥義。地球の地脈と自分の気をリンクさせる技。主な効力としては、貫通付加、震動付加、砂や岩を使役出来る、相手の行動に制限をつける（ただしこの時自分は片足を必ず地面に着けていなければならない）。地割れを起こしたり地震を発生することもその気になれば出来るらしいが、そのあとで地面を元に戻すのが面倒なので使用は控えているらしい。

・奥伝、楼閣（穿火、劉土）

肉体を支配する意識を入れ換える技。その際に変わるのは性格だけではなく、気の量や質、さらには使用できる技も変わる。

・極技、龍鈷金剛拳きょくぎ りゅうつごんごうけん

七天流の奥義書、劉土を読むことで使えるようになる最強の打撃技。気を伝えた砂を震動、回転させて砂嵐のようなものを腕に纏わせた拳で殴る近距離攻撃。ダイヤすら粉微塵にする威力なので普通の決闘では滅多に使われない。砂嵐の回転数を上げれば上げるほど、気の密度を上げれば上げるほど威力は上がる。

使用者：峰槻麗

・緋燕ひえん

纏元流の技の1つ。基本はサマーソルトキックとはそこまで変わらないが、相手に当たる前に踵と爪先と足の裏の3ヶ所から仕込んだ刃渡り10センチ程のナイフを体から出して切りつけることが出来る。相手がかわせるタイミングで蹴りを出して相手が油断したところをナイフで切り裂くのがコツらしい。

・蛇交鞭じやこへん

纏元流の技の1つ。袖から伸ばした6本の鎖を操って攻撃する全距離攻撃。鎖をまるで生きてるかのようには動かすことが出来るので応用しやすい技。これを使っていると腕に全神経を注ぐので腕を使う纏元流を使っている余裕はなく、この技単体で使用することがほとんど。

・鼓舞羅こぶし

纏元流の技の1つで蛇交鞭の強化版。蛇交鞭に使用する鎖の先端にトゲ付きの鉄球を装着することで威力を格段に上げることが出来るが、その分質量が増し速度は落ちる。麗はその質量をものとしないうが、遠心力は必ず働くものなのでまだ改良の余地あり。

・這鼠はいねずみ

纏元流の技の1つ。靴に仕込んだ手裏剣を発射する遠距離攻撃。両手がふさがっている時や不意打ちに使用されることが多い。回転されて発射されるので切れ味は高く、人を切り裂くには十分な威力を持っている。

・身体操術、蟻栖廻ありのすめくり

纏元流の技の1つ。麗曰く、纏元流を極めるなら中級で学ばなければならぬテクニクらしい。武器を体の中に織り込む技法。服な

どにも隠すことが出来るが肉体の中が1番確実らしい。この技法で隠せる武器の上限は未だ不明。しかし、相当数の武器がしまわれているものと思われる。収納、取り出しは一瞬で可能。

・甲鱗鎧こっこうがいがい

纏元流の技の1つ。攻撃技の多い纏元流の中ではめずらしい防御専用の技で、体を気で包み刃物すら通さなくさせることが出来る。刃物なら大抵は防ぐことが出来るらしく、体に武器をしまふ際にこれが出来ないと自身を傷つけることが多々あるらしい。

・針蟻地獄はりありじごく（技名未登場）

纏元流の技の1つ。落とし穴に落ちると串刺しになるトラップ。製作時間は10分、穴掘り45秒、残りは刃物の設置。

・鶺鴒眼くまたがまなこ

纏元流の技の1つ。目に気を集中させることで鳥のように紫外線や熱を見ることが出来る。視力も格段に上がり、双眼鏡要らずの便利な技。麗はこれを気に入っているので極めている。

・艶舞えんぶ・蜉蝣かげろう

纏元流の奥義の1つ。攻撃に使うのは100本以内の刃物のみにして、必要の無いもの（囷などに使うもの以外）は体から取り出すこ

とで、自身の重さは軽くなり移動速度は音速を超える。これを使っているときは気を全て刃物に集中させているので攻撃力は高い。百代の攻撃を受けたときは腹に隠していた刃物に気を通していたので防ぎきつたらしい。刃物は着脱可能。

・艶舞・蜻蛉とんぼ（技名未登場）

纏元流の奥義の1つ。百代に対抗しようとして腕を槍のようにした技。掌から槍の先端を、肘には2段攻撃のための加速に使うバズーカ、腕からは避けられてもいよいよ左右に巨大な鎌を、まるで十字槍のようにするもので、威力などは不明。

・艶舞・鴻おおとり

纏元流の奥義の1つ。日本刀を四方に突き刺して日本刀同士を気で繋げて結界を張る防御技。麗は自身たちを守る結界を張ることは出来るが、晴蘭のような周りへ影響を与えないような結界は張れない。耐久性はそれなりに高いが百代と晴蘭の全力には敵わなかった。

第一章 技一覧（後書き）

これで一章完全完結！

1カ月ちよつとかかりましてスイマセン

ようやく原作突入です！

感想お待ちしております！

第一話 4月20日・・・それぞれの朝（前書き）

今回台本形式をやめて書いてみました！

第一話 4月20日・・・それぞれの朝

Side 大和

誰も逃げられない、恐ろしい奴がやって来た！

その名は“月曜日”

朝まどろみながらそのことを確認してみると

何者かの手によって布団がゆっくりはがされた。

「おはよう大和、そして好き」

京のキスを手でガードして回避する。

「おはよう京、好意は嬉しいがお友達で」

また新しい1週間が始まる。

Side Out

S i d e 晴蘭

「
」

朝、いきなり目が覚めてしまった。原因は
まあ解らなくはない。

敷居を跨いだ向こう側、明らかにぶつけられる殺気。起きない方が無理だというものだ。

誰のものかも解ってしまふ。

「百代さん？何がしたいんですか？」

「よく解ったな」

ガラスと襖を開けて闘争心むき出しの百代さんが入ってきた。

「明らかすぎる殺気に向けているくせによく言いますね それに、無視したらしたで何かしらのいちゃもんを付けられそうですからね

」

実際のところ、無視して狸寝入りを決め込むのもよかつただけだ。無視して寝直せなかったのはボクの中でアイツが騒ぎだしたからだ。

「穿火、ちよつと落ち着いてよ」

（落ち着いてられねえって！！あんな殺気を無視出来つかよ！！代われ主！！）

（落ち着け馬鹿）

（なんだよ劉士、止めんじゃねえよ！！）

（昨日無様な負け方したくせに、ちよつと黙って）

（あんだと！？）

（ちよつと2人とも落ち着いてよ！主が混乱しちゃう！）

ボクの中で3人が口論して暴れまわって　あ、頭がクラクラしてくるう　目が回るようだあ

「　だ、大丈夫か？」

「大丈夫じゃない、です　コイツら五月蠅くて　」

「気が混ざって乱れているのはよく解るが、お前の中どうなってる

んだ？」

「百代さんの殺気に反応した穿火と劉土がいつものごとく喧嘩腰、それを楼閣が仲裁に入っててんやわんやの大騒ぎ」

「す、すまなかった これからは無闇に殺気は向けないでおこう」

流石にかわいそうに思ってくれたのか少し罰の悪そうな顔をして謝罪してくれた。

「非常に助かります 決闘の時は別にいいですけどね」

それを聞いた百代さんが玩具を見つけたように飛びついてくる。

「次の決闘はいつだ？今日か！？」

「体が持ちません！最低でもボクからの申し出がない限り襲ってこないでくださいよ！」

「えー」

こ、この人は ！！なんてムカつく顔をするんだ ！！唇を突き出してジト目、明らかに挑発狙いの顔をしている。しかし、ここは我慢 ！

「も、文句言わないでください！最低でも1週間に1回は相手をしてあげますから！」

「本当か!？」

「嘘をついたって仕方がないでしょう　その代わり！いきなりボクに襲いかからないでくださいよ！」

「ああ、了解した」

「もう1つ、闘うのはボクだけじゃないですからね。穿火も劉土も楼閣も、ローテーションではないですが対戦相手は代わっていきますからね」

「昨日の決闘は総動員だったじゃないか」

「あ、あれは百代さんの攻撃のせいです！あんな人を殺せるレベルの技なんか繰り出すからみんなが勝手に出てきちゃったんですよ！」

穿火は興奮しちゃうし劉土は苛立つちゃうし！！この2人が同時に騒がしくなると相当苦労するんだから！！

「まああれくらいは大丈夫だろうと」

「あれくらい!？頭が黒ひげ危機一髪的なことになる威力でしたよ!？」

「まあ色々とすまなかつたな　おっと、そろそろ行ってくる」

よく見れば百代さんは制服姿だった。あ、そうか、今日は月曜日だから学生は学校に行くんだっけ。どうも学校に行ったことがないからその辺りはよく解らない。

「川神学園ですか、ボクには縁がないところですね」

「転入してくればいいだろう?」

「まあおじいちゃんに掛け合ってみますよ」

「では行ってくる」

「行ってらっしゃい、また後で」

また後で、教室で、ね。

Side Out

Side Others

「うーん」

一方、麗は自宅の倉庫で悩んでいた。

「拳銃を持って行くべきか行かないべきか　まあ木刀と模造槍とナイフは確定で　このハンマーは赤と黒のどちらにしようか

あ！この和弓いいわね！あとは　」

次々と体の中に武器をしまっていく。

峰槻家の武器庫は体育館くらいの敷地面積で、地上4階地下3階のどこかの怪しい研究所レベル。しかも置いてあるのは武器以外に何も無い、あげるとすれば設計図とそれを作るための機材くらいだろうか。

「こんなものかな、ちょっと偏りがあるような　」

麗が武器を吟味している心情は、女子が今日はどんな服を着ていこうか迷っているのほとんど同じである。女子が「今日はこのリボンにしよう」「と自分を飾っていくような感じで、麗は「今日はこの斧にしよう」と自分を武装していくのだ。

「まあいいか、まだ時間あるしゆっくり決めよ。あ！この小太刀可愛いー！」

「ついで麗の学園初日の朝は過ぎていった。

Side Out

Side 大和

「ほらーっ、ガクト！早くしなさいよ！！大和ちゃんたち行っちゃ
うよー！」

よくあることだが、島津寮の隣の島津家から麗子さん（43歳、韓
流好き）の声が響いてくる。ガクトの奴、いつつも怒られてるんだ
から。

「うるせーな！あんまり恥かせんな母ちゃん！」

筋肉バカのカクトがようやく出てきた。

「やあ、名前負け」

「いきなり喧嘩売ってんのか大和てめー！」

「冗談だ、今日も超かつこいいぞガクト」

「おいおい、よせやいいきなり本当の事を　　どうだ京。今日の俺様いつもよりイケてるだろ？」

ガクトがボディビルダーのようなポーズをとって京に自分を見せつけている。筋肉以外に自慢できるものはないのか。

「具体的にどこが？」

「髪型とかビシツと決まってるてメスホイホイだろ？」

「変わらないけど」

「やれやれ、京は世間とは疎いからな。男の大和でさえ俺様にモテオーラ感じてるってのに」

「あれ俺何か言ってたっけ？」

「俺様が超絶かつこいいと言っただろうが」

「そんなの嘘に決まってるだろ、馬鹿かよ」

「ガクトの頭が心配だ。将来大丈夫かな」

「なんだこの幼馴染たち容赦ねー！ー！ー！」

この調子じゃ彼女なんて到底叶わぬ夢で終わるだろう。

Side Out

Side 晴蘭

百代さんが出かけてからだいたい10分後、巻物を3つ取り出してコイツらと直に会話をする。

「3人も解ってるね？学園に着いたら大人しくしてること！百代さんクラスはおじいちゃんとかしかいないだろうけど、それでもあの場所は強者の巣窟、武道家の溜まり場なんだ。無暗やたらに暴れまわったら燃す^もからね！」

（も、燃す！？ちよ、主！流石にそれは勘弁してよ！）

「穿火はそれぐらい言わないと意味なさそうだからね。劉土も楼閣も解った？」

（初めて川神鉄心に会ったときは思わず興奮しちゃったけど、もう大丈夫）

（僕も戦闘は久々だったからちよっと危なかったな、気をつけるよ）

「そっぴや、穿火と劉土はまだ正体明かしてないんだっけ？」

(楽しみは後に取っておくものだぜ？戦いは別だけどな！)

(言ってもまだ意味は無いよ、もう少し揃ってからじゃないと私たちが選ばれた理由が解らないでしょ？)

「それもそうだね、せめて後2つは欲しいもんね。まあこの話は大和と京と麗ぐらいしか理解出来なさそうだけど」

穿火も劉土も楼閣同様、元になった人物がちゃんと存在している。

楼閣の正体を聞いた時も驚いたけど、この2人から話を聞いた時もあり驚いたのを覚えている。あの時からこの2人はよく言い争っていたな、その分仲もいいんだろうけど。

(主、そろそろ時間、麗との待ち合わせに遅れる)

少しだけ懐かしさに浸っていたらもう待ち合わせの時間だ。遅れたら麗怒りそうだな

「じゃあ行くかうか」

新品の香りがするパリパリに整った制服に袖を通す。

(なんか主の制服姿って新鮮だね。戦闘の時はあの味気の無い白黒だし、私服だってほとんど持ってないのに)

楼間、それは余計なお世話である。

Side Out

Side 大和

「やー」

今日発売の週刊少年誌ジャソプを見ながら歩いてくる男も合流。

「おはよう師岡卓也。2-F所属趣味は以下略」

「説明キャラで通したいんだったら最後まで貫いてよー!」

「その影の薄さのあまりつい」

「朝から酷いこと言わないでよ京!それに京に影薄いって言われたくないよー!」

「今日もナイスつつこみでよろしい」

京はどこから取り出したのか、“10 GOOD!!”と書かれた赤い採点板をモロに向けていた。

「あれ？キャップは昨日からいないまま？」

「帰ってこなかった。ま、気にしなくてもキャップなら大丈夫だろ」

4人で登校を再開してぐんぐん進む。

すると、数十人の人だかりが出来ていた。

「なんであそこ人が集まって　　って。ああ、しまった」

集団の先の川原を見ると、そこには明らかに不良そうな集団（13、4人。その上バットなどで武装済み）が1人の女の子をグルツと取り囲んでいた。

それを見ても助けようとする川神学園の生徒は誰1人としていない。むしろこの見世物を楽しもうとしている。

「これ、止めないとまずいよね大和」

「やっぱり流れ的に俺が行くのか　　まあ仕方ないか。お前ら待て」

待て待てー！ー！ー！

俺は今や惨劇が繰り広げられそうになっている現場へと飛び込む。

「ここは俺が食い止める！ー！だから今のうちに逃げるんだっ！ー！」

必死に説得しようと語りかけた。

不良たちに。

「はあ！？それ俺たちに言ってるの？」

「そつだよ！早く！早く逃げろ！ー！この人が誰か解ってる！？」

「そりゃ解ってるんよ、川神百代だべ？俺たちの地元の“ちば”まで情報入ってきてんだからなあ！ー！」

他県からとかご苦労なことだ。

「七浜のチーム“九尾の犬”を1人で潰したとか、生意気なガキをボールに見立てて Dank したりとか冗談にもほどがある、嘘くさいんだよ。どうせ噂に尾ヒレついてこんな大げさなことになってるだけだろ？」

「クス、女だから手を出さないと思うなよ」

「ぶっ潰してやんよ、そのたいそうな嘘と一緒にねえ!!」

不良共が騒ぎあつて互いを鼓舞している。

ああもつ。ちゃんと忠告はしたからな。

「テトリスか、懐かしいな」

不良の中心からサツパリとした笑い声と共に、あの人の声が静かに聞こえてきた。

「お前の携帯ストラップ、テトリスだろ？懐かしいな」

「だからなんだってんだよ！？関係ねえだろおがこのアマ!!」

「いやなに、ちょっと久々にやってみたくなつたんだよ。協力してくれ」

ゴキツ！と物凄く痛そうな音と共に、不良の1人の腕の関節が全く逆の方向へ曲がっていた。

「こつやっってお前らをブロックに見立てて、な！！」

不良が次々と関節を外されてはコマにされて組み立てられていく。

姉さんの憂さ晴らし、もとい一方的ないじめが始まった。

関節外しなんていつものことだけど 見慣れた自分がいやだな。

S i d e O u t

S i d e 晴蘭

「 ねえ晴蘭」

「 何かな麗」

「この複雑な形の水死体は何？」

ボクと麗は駅前で待ち合わせて2人で川神学園を目指していた。

その道すがら、多馬川に10人ちよつとの学生が浮かんでいた。

それも何と云うか 見るも無残と云うか、徹底的にやられた後つて云うか。

死屍累々、今まさにピッタリの言葉だ。

「スイマセン」

「はいはい何でしょうか」

麗が近くににいる人に聞き込みを開始している。

兜被ってるし楯と槍持ってるし なんか紫のダボダボな服が異様に似合っつて見るからに怪しそうな

誰に聞き込みしてんだ!!

「あら、麗ちゃん!? お久しぶり! いつ頃戻ってきたの?」

「一昨日です! 将軍もお元気そうぞ!」

将軍!?! 待つて待つて! この人そんな偉い立場なの!?

「ところでアレ」

「ああ、あれ？アレは百代さんに喧嘩吹っかけて返り討ちにされたおバカさんたちよ」

「百代って、川神百代ですか？」

「そうなのよ、百代さんにイチャモンつけるのは無謀だと思うの、私」

あれも百代さんの仕業か

あの人台風かなんかじゃないのか？

「それじゃ私、今から支部に帰ってこの大根漬けなきゃいけないから。またお漬物おすそ分けするわね」

「ありがとうございます将軍！」

そう言って将軍は去っていった。ていうか将軍が漬物って、主婦か。

「ねえ麗、今の誰さ」

「うーんと、確か“フロなんとか”とか言う会社の幹部さんだったはずだけど」

「フロなんとか」？銭湯とかのボイラー修理かなんかが本職なの？」

「まあいい人なんだし気にするほどの事じゃないわよ」

それもそうか、と納得してボクらは川神学園を目指す。

あの死体？はきつと川神院の誰かが処理してくれるだろう。

Side Out

Side ????

「あぶねえあぶねえ、あんなオモチャの扱いは勘弁だ」

多馬大橋の下、多馬川アンダーザブリッジ。

1人の男が息を潜めていた。

「不良共にまぎれて川神百代を監視するだけの予定だったのにまさか人間テトリスが執行されようとは 気配消せなきゃ危なかつたな」

男は不良たちに合わせた学ランを脱ぎ捨て本来の学生服、川神学園の服装に着替える。

「川神百代、確かに目に焼き付けたぜ」

第一話 4月20日・・・それぞれの朝（後書き）

ご意見ドシドシとお願いします！

ちなみにこの將軍さんの中の人
はルネッサンスなお笑い芸人さん
ですwwww

川神のモデルが川崎だつてこと
で解るかたもいるかと

新キャラ伏線、もう新キャラ
出ないと思つてたその君！
アマいな！ 逆転検事、
ロウ捜査官

なんていつたつてまだ七天流
の分家は6つある上に麗の家
内も出てないしね！

でもこれって自分で自分の首絞
めてるよね？

第二話 4月20日・・・サプライズ（前書き）

活動報告通り、今日は学校休んでますWWW

第二話 4月20日・・・サプライズ

Side 大和

多馬大橋に到着。ここを渡れば川神学園だ。

この橋、別名変態の橋と言われていたりする。

「ジューン、チヨウチヨ」

「こらこらユキ、道路の方にフラフラ行くんじゃない、危ない行為禁止」

「らんらんる」

「唐突に危ない発言も禁止！」

「そーなのか」

「それも少し危ない気が イヤ、これはセーフか？」

「お持ち帰り」

「それはアウトだから！」

「てもて、てもて、てもて」

「貧乳はステータスだッ！！希少価値だッ！！！」

変態の橋、そう呼ばれるところの所以は奇抜な生徒たちがこの橋を通って登校していくからである。

「フハハハハハハハハ！！おはよう庶民！！我こそは九・鬼・英雄！皆の英雄である！この栄光の印、その目に焼き付けるがいい！！」

「素敵です英雄様！！みなさん おはようございますー！」

その中でもコイツらは最上級の変人である。

「又！？我が天使である一子殿がいらないとはどういうことだ庶民！」

「鍛錬してるからだ、私の妹は努力家なんだ」

「流石一子殿！日々の切磋琢磨こそ武士の証！そのひたむきさが私の心を掴んで離さないのだ！！フハハハハハ！テンションが上がってきたぞ！あずみ！人力車発車だ！！！」

「かしこまりました英雄様あーーーーーッ！！！」

颯爽と現れたメイドと主は嵐のように去っていった。

「今朝聞いてみたが今日は川神院から出る感じはなかったな」

「あ、そっか。晴蘭は川神院の居候だったっけ」

「そうだな。大和も来るか？毎日しごかれるぞ？」

「ゴメンゴームル！！」

体の前で腕をクロスさせて“x”をつくって断固拒否の意思を表明する。

「ふむ、まあアイツはアイツでじじいに相談に行くだろう」

「そうだね」

適当に相槌を打ったが実のところ、俺は晴蘭と麗の転入サプライズを知っている。

昨日一子に問い詰めたからな。

Side Out

Side 一子

昨日の夜、アタシが川神院から抜け出そうとしたところで大和に見つかった。

「どこに行く気だ？」

「ちょ、ちょっと静岡まで走りに」

「もう7時だぞ？帰ってきたら深夜だぞ？女の子1人を行かせられないなあ」

大和の笑顔が怖いわ　これは戦術的撤退！

「三角関係逃げるにしかず！！」

「させるか！！（笛を吹く）」

ピーーツ！！と犬笛が甲高い音を鳴らした。

この笛が聞こえると10分以内に駆けつけられるようにファミリィのみんなにしつけられた。

だから体が勝手に大和のほうへ。

「ギャー！足が勝手に！」

「三角関係じゃなくて三十六計な。三角関係逃げるにしかずじゃ昼ドラみたいじゃないか。で？あの2人は何を隠してるんだ？」

「うー 他のみんなには言わないでよ？」

「それは約束するよ」

アタシは昨日あった決闘の内容を大体話した。けど、全部は話さなかった。

流石にバカなアタシでもあの2人の過去を話すなんてことはしない。

「まだ隠してることがあるみたいだけど それは気楽に話せる内容じゃないんだろ？」

それでも大和にはあんまり意味がなかったみたい。

でもそれ以上の追求は「本人に聞く」と言っしてしないでくれた。やっぱり大和は優しい。

「それにしてもあの2人が転入か しかも晴蘭は3年生だったのか。てつきり同級かと」

「それはアタシも驚いたわ。アタシでも知ってることを知らなかつ

「ただだから」

「じゃあなんで4月1日は1つ年上か説明できるか？」

「それはアレよ！閏年で、誕生日がない人が出来ちゃうからで」

「なんだ、珍しく知ってるじゃないか」

アタシはせーちゃんと一緒に麗の“なぜ4月1日は学年が1つ違うのか”、って言う講義を受けたからね。これで覚えてないと麗に申し訳ないわ。4回も説明してもらっちゃったからね。

「まあ解ったが　あの晴蘭があんなに強くなってるとはな」

「昔のせーちゃんはただ見てるだけだったのが多かったからね、あの頃から強かったのかな？」

「それだったら姉さんが黙ってなかったと思うけどね」

「確かにね。そういえば大和、麗って大和のお姉さん代わりだったのよね？お姉様の舎弟に入る前の話しだけど」

「まあな。俺だけじゃなくてキャップもだぞ？俺は麗に逆らえないくらい圧倒的に決定権に差があったからな」

「へえ！それはいいこと聞いたわ！また麗に聞いてみよ！」

「あ、こら！それは止める！！」

Side Out

Side 大和

「まあその内2人とも学園に来るって」

この話は区切りにして再び歩き出す俺たち6人。一子も俺たちに合
わせてゆっくりと歩く。

タイヤを引きずりながら。

「よお、仲良しグループ。今日も元気そうだな」

「オス（キャップがバイトしてる本屋の店長か）」

「はは、お前ら昔からずっと一緒だなバツキャロー。いったいいつ
まで一緒でいるつもりだバツキャロー」

「決まってるわよ、ずっとずっと一緒」

ワン子が天真爛漫に返事をしていた。

「晴蘭も忘れんなよ？一子」

「麗お姉さんもね」

「あれ？京？お姉さんは私じゃないのか？」

「あの2人も一緒に登校できるといいね。峰槻さ 麗にはまだ慣れないけど」

「モロは奥手だな、麗なら俺がいくらでも取り合ってるから。正直その必要ないだろうけど」

「なんで？」

モロが純粹に質問をしてそれに答えようとしたところで、麗にマナーを叩き込まれた1週間が脳内にフラッシュバックする。

「アイツ、だれそれ構わず巻き込む習性があるから」

「大和？顔色悪いよ？」

京が顔を覗き込んでくる。

そのまま京の顔がどんどん近づいてきて

「あつぶね!!どさくさにまぎれてキスしようとするな!!」

「おいしい」

「既成事実で固めようとするなよ?」

Side Out

Side 麗

「しつねーしまーす!!」

2回軽く扉をノックをして学長室に2人揃って入室する。

「おお、待っておったぞ」

学長が部屋のソファに腰掛けて煎茶をすすっていた。

学長室にいるのはアタシたち以外に3人、学長の川神鉄心と見たことのない2人。

「あの、こちらの御二方はどちら様でしょうか?」

晴蘭が懇切丁寧に質問する。学生の癖に生意気な発言だ。

「うむ、このいいスタイルの小島先生が麗君のクラスの2-F担任で、こっちの眼鏡で髪を尻尾みたいに結んでおるのが晴蘭君のクラスの3-F担任の御手洗先生じゃ」

「小島梅子だ、歴史を教えている。よろしくな」

小島先生とアタシは握手を交わす。

そこで気付いたけど、小島先生の腰に鞭が装備されていた。

なるほど鞭使いか。しかもパツと見で解るこの鞭から感じる気。

手から離れてる武器から気を感じるってことは相当な手足れ、小島先生はかなりの上位の鞭の使い手ね。覚えておこう。

「御手洗音澄みたらいなりきよって言います。専攻は化学、俺のことは“ライオン先生”って呼んでね」

晴蘭は御手洗と名乗った白衣を着た眼鏡の教師と握手を交わしていた。

「ライオン先生」？」

「御手洗の“らい”と音澄の“音”^{おん}で“ライオン先生”。これ考えた奴いいセンスしてると思わない？まあ俺の嫁さんなんだけど」

なんだ、惚気か。

「ちよつと峰槻さん！そんな冷ややかな目で見ないでよ！」

「御手洗先生、とりあえずそれくらいで」

「ま、仕方ありませんね。それじゃ今から君らのクラスに案内するよ」

「それにしても学長、最近転入が多いですな。私どものクラスは初めてですが」

転入生が頻繁に？この時期だからそこまで不自然じゃないけど

「まあ退学ではなく転入じゃし、気にするほどの事でもないじゃろ。ああそれと晴蘭君。気になっていそうじゃから先に伝えておくぞい。転入生の中には“あれ”はおらんかった。」

晴蘭は一瞬何を言っているのか理解していなさそうだったが、直ぐに顔を真剣なものに切り替えた。

「ありがとう、おじいちゃん」

「かわいい孫の頼みは聞くもんじゃからの、ホッホッホ」

「学長、一体なんですか？」

「いやなに、彼の知り合いがいるかどうか確かめただけじゃ」

「そうですか」

小島先生は納得して引き下がったが、アタシには解る。多分“アレ”ってというのは恐らく、アタシたちの因縁の相手。

復讐の対象者。

アタシの兄貴を殺し、晴蘭の家を壊滅させた外道。

あの悪魔の事に決まっている。

「それじゃ、案内するよ」

アタシたちはそれぞれの担任に従って互いの教室を目指した。

行ったようじゃの。

少し気が抜けたわい。あやつ、一瞬だけわしに殺気を放ちおった。

正確にはわしではなく、晴蘭君が考えている例の元凶、七天流を悪用しようとしている輩に対してじゃろうが。

わしもそれなりに調べてみたが、これは思ったよりも深いところ話のようじゃな。

七天流、なんて名前を出しても食いつくものは一つもなく、秋星と言う家柄は書道の名門としか解らなかつたのう。

なにか別のキーワードを、そう思って戦国時代、ようは16世紀頃の文献をしらみつぶしに読んでおいたら気になるものをみつけてしまった。

“三代目総代、咲昏碎聖”

確か、七天流を受け継ぐには咲昏という名を襲名する必要があったはずじゃ。先日の決闘のあとで晴蘭君が言っておったな。

さて、もう少しだけ調べてみるかの。

おじいちゃん面をした上、百代のことも任せてしまつたからの。ちよっとは孫のために頑張つてやらぬとな。

Side Out

Side 大和

「おはよー」

俺たちは5人一緒に2・Fに入った。姉さんとは昇降口で別れたからここにはいない。

2・Fは問題児を集めたとされるが実際はそうでもない。いい奴ばかりだ。

「」

隣の席の京は席に着くと読書モードに入ってしまう。いつものことではあるが、京は昇降口に入った辺りから完全に無口な状態になつてしまった。

「ていつてい」

前の席のワン子は鞆から取り出したハンドグリップでトレーニング開始。

「ゲンさんもたまには一緒に学校行こうぜー」

後ろの席のゲンさんにも声をかける。

「コミュニケーションに俺をいれる必要はねえ」

キーンコーン

チャイムが鳴り出すとみんな雑談を止めて自分の席へと戻っていく。

「みなさーん。小島先生が来ますよー」

廊下からカツカツカツと厳めしい音が聞こえてくる。

「あれ？足音が1つ多いような」

「ホントだ、確かに多いわね」

京とワン子が聞きなれない足音に反応した。ワン子は誰のか解っているはずだが　アイツまさか忘れてるのか？

「！みなさん！先生が！」

委員長の合図と同時にみんなが姿勢をピシッと正した。

その直後、ガラッ！と勢いよく扉が開かれた。

「朝のHRを始める」

みんなが朝の挨拶を終えて小島先生は出欠席の確認を取っていった。

「急だが、皆に知らせがある。今日から新しくこのクラスに仲間が増える」

小島先生の一言にクラス全体がどよめく。

「実はもうそこにいる。入ってきてくれ」

ガラッ！と扉が開けられ、そこから入ってきたのは

「はっ はあっ 福本育郎います!」

瞬間、クラスが凍りついた。

「こ、小島先生、ひよっとしてギャグかなんかですか?」

恐る恐る小笠原さんが先生に尋ねた。

「いや、これは私も予想外だ。で?福本。何故今頃来たのだ?」

「あ、朝起きたらすごい時間で」

「私に恥をかかせたことと寝坊による遅刻、情状酌量の余地は欠片もない!」

小島先生が鞭を握り締めてヨンパチこと福本育郎をビシバシはたいていく。いつもより回数も多いし音も大きい。

「う　ぐぐ　」

ヨンパチは床に突っ伏して動かなくなってしまった。

「それでは気を取り直して　入ってきてくれ」

「この後非常に入りづらいわね　」

そう言って開けっ放しだった扉から桃色の髪をなびかせてアイツが入ってきた。

「峰規麗です。これからよろしくね！」

「「「「え？」「」「」

俺以外のファミリーは驚いていた。

ちょっと待ってワン子、お前本当に忘れてたのかよ

第二話 4月20日・・・サプライズ（後書き）

「麗と」「京の」「人情紙風船ビューテホーピーポアのコーナー」

「はい、そういうわけで京ちゃん！今回から始まりました“真剣でボクとアタシと恋しよう！”の元ネタ解説のコーナー！」

「ねえ麗、このコーナーの題名自体パクリじゃない？HELLSI NG2巻の後書き漫画から拝借してるよね？」

「まあいいじゃない！それじゃ早速やっていきましょう！」

・ららんるー・・・“マクドナルド”

「つついちゃっちゃんよね、ドナルドお兄さんと」

「最近このCM見ないね」

・そーなのかー・・・“東方紅魔郷”

「ルーミアって子の口癖みたいね」

「本編だと結構しゃべってるのに二次創作だとコレばかりしか言っていないのもあるよね、可哀想」

・お持ち帰りー・・・“ひぐらしのなく頃に”

「なんか同族の香りがする」

「ちよ、京ちゃん怖い！」

・てもてー、貧乳はステータry・・・“らきすた”

「あれって井上的にはロリなのかな？」

「しょーもない」

・ゴメンコームル・・・“エアギア”

「この時のイツキ君スーパーダツセエ」

「京ちゃんそれもネタなんだけど」

「京ちゃん、どうやら次回は人が変わるらしいわよ」

「私は大和を所望」

「それじゃまたねー」

第三話 4月20日・・・Fクラス、容赦なし(前書き)

更新遅れてしまいました、しかもちよつと雑かも

第三話 4月20日・・・Fクラス、容赦なし

Side 百代

「はい、みんな席着いてー」

チャイムが鳴り終わって数分後、担任のライオンが教室に入ってきた。

「それじゃ、出欠席の確認するからね」

ライオンは生徒の名前が五十音順に並べられたあの黒い冊子を開いて順に名前を読み上げていく。

「おっし、欠席なしだね。いいことだね！」

ライオンはニカッと笑って冊子を閉じた。

しかし、大して髪の毛が逆立っているわけでもなく覇気も感じられないこの教師のあだ名が“ライオン”なのか。

確か昔結婚する前に奥さんにつけてもらったとか聞いたが、それが

本当なら大した相思相愛だ。

「じゃ、ちょっとばっかし急だけど　今から転入生を紹介するよ」

突然の報告にざわざわとクラスの連中が騒ぎ始める。

転入生、か。麗も晴蘭も下の奴等と同じ年だから^こーFに転入することはない。

じゃあ誰なんだろうな、強いやつならいいんだが。

「それじゃ入って」

ライオンの声に応じて扉がゆっくりと開かれる。さて、いったいどんな奴が

「どつも」

「ぶっ」

私は予想外の人物の登場に盛大に噴き出し、その音はクラスの注目を集めてしまった。

「ど、どうかしたの川神さん」

「い、いや、大したことじゃ」

「そ、そう？じゃあ自己紹介お願い」

「えー、この度川神に戻ってきた秋星晴蘭って言います！しばらく海外を転々としていたもので学校生活なんて初めてで解らないことが多いと思うので色々教えていただけると助かります。1年間ほどよろしくお願いしまーす！」

女子からは「キャー！！イケメン！！」なんて黄色い声が上がっているが、男子どもからは「ケツ、なんだ野郎か」と悔しさと残念さが籠った汚い声が漏れている。

ってそれどころじゃない！

「じゃあ連絡事項は後ろのホワイトボードに書いておくからしっかり読んでおくように」

そう言い残してライオンはそそくさと教室から退散した。

「えっと、ボクの席はどこが空いていますか？」

「百代の隣が空いているで候」

「あ、ありがとうございます。えっと」

「矢場弓子で候」

「ありがとうございます」

その屈託のない爽やかな笑顔と甘い声を聞いた弓子は顔が爆発したように真っ赤になった。

「お、おい！あの愛想のない矢場が墜ちたぞ！」

「なんてこった！あの鉄面皮と名高い矢場が！」

「矢場さんそんなに鉄面皮とかじゃないのに酷い扱いね」

「でもあれだったら私もKOされそう」

三者三様言いたい事ばかり言っている。

「お隣失礼しますね」

「どの口がそんなこと言うんだ」

「流石に入ったばかりのクラスでお隣に挨拶しないのはマナー違反でしょうし、丁度隣は百代さんだけでしたしね。ボクはそうやって生きてきたんですよ。まずは手堅くいい印象を擦り込むのが鉄則で

す

コイツ、見ないうちに大分ふてぶてしくなったな。いや、世渡り上手になったのか。

「まあそれも無駄だろう」

「え？」

「伊達にFクラスは問題児揃いじゃないってことさ」

何を言って、と聞き返したかったんだろう。口がそう動きかけていた晴蘭だったが

一瞬にしてクラスの奴らに取り囲まれていた。

「な、何ですか!？」

「ねえねえ!海外ってどこいったの!？」

「戻ってきたってどういうこと?昔は川神にいたの?」

「おい、さっきから川神さんと親しげだがどういう関係だお前!！」

「ねえ、あたし報道部なんだけどちょっとインタビューを!！」

「ちょ！百代さん助けて！！」

「いい機会だ、お前も学校と言うものも知っておいて損はないだろう？」

晴蘭はそのままクラスメイトたちに飲み込まれていった。

私が質問するのはその後でいいだろう。

Side Out

Side 大和

「なめてたわ、まさかこんな質問攻めに会うわ写真を撮られるわ、1日の始めにこんなに疲れるなんて」

ボクの隣の席で麗はプシュー と頭から煙をあげてショートしていた。

小島先生が連絡を終えた直後、麗は男女問わずの質問攻めに会っていた。

流石Fクラス、質問だけでこんな威力を發揮するとは

「で？このクラスはどう？」

「そうね、アタシは好きよ。みんなが言いたいこと言い合っ
てもし喧嘩してもどうせ仲直りするの早い奴らの集まり。まさしく
アタシが求めていたものね」

「麗お姉さん、大丈夫？」

そこへ、京が心配そうに顔を出してきた。

「だから京ちゃん、麗お姉さんは止めてよ。お姉さんって自分では
言うけど他人から言われるのはどうもね」

「じゃあ、私の事も呼び捨てにしてよ。そうすれば対等」

「解ったわ、京」

京が一番麗と慣れないかと思っていたけど、それは杞憂に終わった
みたいだ。

「珍しいな、椎名があんまり知らない奴と話すなんて」

と、後ろの席のゲンさんから声をかけられた。

「そつ?」

「そうだろ、現にクラスの奴らとまともに会話してるのなんか見たことねえ」

「そつなの?京」

「私はファミリーのみんながいればそれでいい」

「うーん」

1回だけ麗はうなると、俺を手招きして耳を貸すように言ってきた。

(何さ?)

(ひょっとしなくてもさ、京がこうなってるのってあのイジメが原因なの?)

(ご推察、何とかしてみんなと普通に接することが出来るように俺もファミリーのみんなも結構苦労してんだけどさ)

(何年もかけてそれじゃいきなりポツとでのアタシじゃ直ぐに解決は難しそうね　あのイジメさえなきゃね)

(麗には苦労かけるけどさ、このこと頭に入れておいてもらっていいか?)

(当たり前前、アタシは元川神のお姉さんよ?)

(助かる)

「ちよつと、2人だけで話なんてずるい」

俺と麗の間に京が入ってくる。

そのまま京はこっちへ顔を寄せて

「さつきと似たようなことすんな!」

「惜しい」

「だから!既成事実で固めようとすんな!」

俺と京がいつものようなやりとりを交わしていると、麗の視線はいつの間にかゲンさんに向けられていた。

「アンタ、確か一昨日島津寮にいたわね。アタシが京と大和とじゃれついているのを確認したら戻って行ったわよね?」

「ああ」

「名前、聞いてもいいかしら?」

「源忠勝だ」

「ああ、アンタがああ、のゲンさんね」

「どづいうことだ、俺のこと知ってんのか」

「まあね、大和のメールにツンデレな不良って書いてあったから」

「直江、ちよつと面かせ」

「ちよ！誤解だゲンさん！」

しまった！麗にそれを言うなって口止め忘れてた！

怖くてゲンさんの顔もまともに見れぬまま俺は廊下へと連行されていった。

Side Out

Side 晴蘭

「死ぬかと思った」

「しっ、愁傷様だな」

質問攻めから開放されたボクは百代さんの隣でダウンしていた。

「これでお前の第一印象はどうなったかな？」

「最低限、いい奴ってことにはなったんじゃないでしょうか？」

「まあそれはどうでもいいんだが　どうして敬語なんだ？」

「まあ、慣れちゃったので。タメ口の方がいいですか？」

「クラスメイト以前にお前はファミリーだからな。同い年の仲間に敬語を使う理由は特にないだろ？ファミリーのみんなだってもっとくだけているぞ？」

「　ん。わかったよ、百代」

百代、って呼び捨てにしてみたのはいいものの、これ結構歯がゆいもんだね。

「で？お前は知っているのか？この学園のルールを」

「ひよっとしなくても決闘だよな？それならお断りだよ。約束したじゃん、ボクから勝負を申し付けるって」

「チッ」

「それに、この学園に着いてからずっと気になってたんだけど強いのが結構いるね。百代さんくらい強いって訳じゃないだろうけど、明らかに隠してる奴はいるね」

「ああ、多分転校して来た奴の中にもいくらかいるようだ」

そう言えば、確かに最近転校や転入やらが多かったって小島って先生が言ってたような。

「どれくらい来たの？」

「2桁は流石にいないが お前と麗を含めれば7人くらいいてもおかしくはない」

「そりや多いもんだね」

気になるな、いくら七天流の気が感じられないからといっても、明らかにこの数は異様だ。それくらい学校生活を送らなかつたボクにだって解る。伊達に執事が出てくるお嬢様漫画とか読んでるわけじゃない。

まああの生徒会長がぶっ飛んだ異常性極まりない漫画は置いておいて。

「また確認しておこうかな、暇つぶしに」

「暇つぶしに私の相手をしてもらいたいだろうか？」

「その話は無し。それに今は闘えるような体じゃないからさ」

「どづいっことだ？」

ボクは制服の袖をまくって自分の右腕を百代に向けて見せる。

ボクの腕はところどころ切り傷だらけで、肘には包帯を巻いているが血がにじんでしまっている。

「ちょっと昨日劉土が張り切り過ぎちゃったからね。右腕がなかなか思ったように動かなくてさ。どうもアイツの技はボクに合わないらしい。土気がピッタリ合う人間はボクは今のところ、2人しか知らない」

「その2人は強いのか？」

「2人とも百代が知ってる人だよ、1人だけ教えてあげるよ。年上と年下、どっちが知りたい？」

「年下、なんとなくだが」

「島津岳人」

「は？」

百代さんは予想外すぎる人物に驚きを通り越して呆然としているみたい。

「まあだからと言って劉土リュウツを読ませる気はさらさらないよ。極力フアミリーのみんなには七天流なんて物に関わってほしくはないからね」

「じゃあ、アイツ、素質はあるっていうのか？」

「アイツが戦国時代に生まれて、七天流の門下生だったらいい線行つてたんじゃないかな。それに、この話は素質云々の問題じゃあないからね」

「そうなのか？」

「それはまた川神院で話すよ、今は初めての学生生活にちょっとウキウキしてるからさ、七天流からは離れたいんだ」

「そ、そうか」

ボクの表情が図らずもちょっと暗くなってしまったのかな？百代がバツの悪そうな顔をしている。うん、ちょっといじめたくなるけど我慢しよ。ガタが外れるとボクって制御が効かないから。

「後で大和たちに挨拶に行ってくるよ」

「私も行こう、麗の顔を見ておきたい」

「了解」

Side Out

Side 大和

時は移り昼休みになった。

「おべんと、おべんと」

「真っ赤なお弁当」

「み、京のお弁当、なんでそんな地獄みたいな色をしているの？」

「あー、麗。京は辛党だから」

「へー、そつかー って納得できるか！食べられるの？あれ食べられるの！？ねえー！」

麗は京カスタムされたお弁当を目の当たりにして驚愕していた。無理もない。こんな韓国人でさえ食べられるか解らないくらい七味唐辛子ぶっ掛けてあったらそう思う。

「食べる？」

「遠慮しとくわ 食べたら意識がどこかへ吹っ飛びそうな気がする」

『それでは、次のニュースです』

なんて会話を楽しんでいると、テレビから気になるニュースが流れてくる。

『昨日の午後7時頃、埼玉県深谷市の飲食店で無銭飲食をした男が居合わせた男子学生に取り押さえられました』

「取り押さえたの男子学生だって！イケメンかな？」

女子たちはそんな他愛も無い話をしている。

『取り押さえたお手柄の男子学生は、神奈川県川崎市在住の風間翔一さんで、限定メニューを先に注文されて腹が立っていたので本気で追いかけたと』

「ぶはっ！！」

「妙技ムーンウォーク」

ワン子が盛大に嘔き出した牛乳を京は華麗にかわす。

「ゴメン。ふいちゃったわ」

「被害軽微、それより」

「翔一 昨日いないと思ってたら何やってんのよ」

テレビにクラスメイトが出たとあって、クラス中（主に女子）が騒ぎ始めた。

「だから何だつてんだ。いちいち騒ぎやがって。どっちかつつと痛い部類じゃねーかよ」

「 今、聞き捨てならないことが聞こえたわね」

後ろのほうで呟いていたスグルを睨みつける麗。まずい、これは説教タイムに突入する流れ！

「ちょっと、アンタよ大串君」

「あ？何だよ？」

「確かに翔一はあの歳にもなって子供相手に本気で勝負したりガン

ブラで賞を取ったりしてるとね、それでもいい奴だしクラスメイ
トなの！あんまりそう仲間をけなす言葉を使っちゃダメ。思っても
口に出すと取り返しがつかなくなるの、いい？」

「 ああ、悪い。少しひがみが入っただけだ」

「 ならよし。ところでアンタ、その机に広がってるのってなに？」

麗の説教が予想より早く終わったが、麗の興味はスグルの机に広げ
られた雑誌を指差していた。

「 これか？これは女じゃあんまり興味の無いものだろうよ」

「 ひょっとしなくても米軍の冷戦時に隠し持ってた偵察機の特集記
事？」

「 ほう、これが解るとは さては軍オタだな？」

「 駆け出しだけどね、銃器に関してはそれなりに詳しいつもりよ」

「 女の中にも解る奴がいるものだな 」

「 それでさ、ものは相談なんだけど 」

「 ふむ なるほど、それなら任せろ、俺にはそこいら
の軍オタでは話にならんほどの知識がある」

「 助かるわ！ヨロシク！」

「「!？」」

いつの間にか麗とスグルが握手を交わしていた。それを見たクラス
の何人かが驚愕していたのは言うまでも無い。特にガクトやヨンパ
チはシヨックで固まっていた。

「よし」

そこへ、姉さんが晴蘭を連れて2-Fにやってきた。

「晴蘭じゃねえか！ホントに転入してきやがったな！」

「1つ年上だったのは驚きだけだね」

硬直から解放されたガクトとモロが晴蘭に近寄って色々と話しかけ
ている。

「いやさ、1番驚きだったのはボクの方で あれ？テレビに翔一
が映ってる」

「キャップの奴、また何かしでかしたか で？麗は何処に行った
？」

「麗は あっち」

ワン子が指差した方を見ると、クラスの10人以上が麗を取り囲んでおり、何やら盛り上がりつつ楽しそうな雰囲気だった。

「お姉さんパワー全開、流石は麗」

「お姉さんキャラが取られた気がするのです」

そんな委員長の悲しい言葉が聞こえてきたが、この数分後、委員長も麗のお姉さんパワーに当てられていつの間にか仲良くなっていた。

「賑やかになりそうだね」

「心労が増えるけどな」

「大和も苦労人だね」

俺とモロは顔を見合わせて苦笑した。

実はこの時モロがスグルに嫉妬していて、俺たちがそれに気づくのはまた後の話である。

第三話 4月20日・・・Fクラス、容赦なし（後書き）

「ガクトと」「晴蘭の」「あとがき（仮）のコーナー！」

「あとがき（仮）って、なんかなかったのガクト」

「次回までには考えて ってなんで俺様が怒られる!？」

・執事が出てくるお嬢様漫画・・・ハヤテのごとく

「俺様は雪路先生がタイプだ」

「ボクは 綾崎ハーマイオニー」

「おい、それ男」

・生徒会長がぶっ飛んだ異常性極まりない漫画・・・めだかボックス

「俺様あそこに行ったら何クラスだ？」

「1組だよ、たぶん」

「容赦ねえな」

・真っ赤なお弁当・・・武装錬金

「戦部とは同族のにおいがするぜ」

「脱いで体を見せびらかすところ？」

「お前 俺様に何の恨みが」

感想意見ドシドシお願いします！

Extra・・・晴蘭、麗の設定画、ペン入れ前（前書き）

素人ですが 見てやってください！

Extra・・・晴蘭、麗の設定画、ペン入れ前

> i25183 — 3286 <

晴蘭くんの下書きです！急ピッチで仕上げたのでペン入れしてる暇
ななかなかったぜ！

自分の画作は完全に捨ててできるだけ本家に近づけました！

あー、男の子を書くのは専門外なのに

目の書き方分からず公式サイトの石田三郎と大和を参考に必死に勉強した結果がこれだよ！

> i25184 — 3286 <

麗の下書き、デッサンのなものです！

ツインテールが　　も少しペン入れの時は修正しよう

晴蘭と同じく急ピッチな一品、時間がなかった

やありこちらまでできるだけ原作チック、目とか公式サイトの松永先輩と京みて必死に勉強したww

キャラが出るたび更新したいのですが、こっちはできる範囲でW W

デジタルなんて ペンタブなんて持ってないのでアナログですW W

色つけるのは僕は色鉛筆（90色）を使いますが、多分そこまで手が回りませんので、お願いします

へたくそです、美術とかがんばっても3しか取ったことないですW W
しかし書くのは嫌いじゃないのであげちゃいました。少しでも2人のイメージを明確にしてもらいたかったので

残念な力量ですが、ペン入れ前にアドバイスがほしいです。意見も
ください。お願いします！

Extra・・・晴蘭、麗の設定画、ペン入れ前（後書き）

ご覧いただき、ありがとうございました

意見お待ちしております!!

第四話 4月21日・・・穿火、謝罪、そして、決闘(前書き)

自分の話でイチヤイチャするのが出るのは箱根辺りですかね

遅れてしまってスイマセンでした!!

第四話 4月21日・・・穿火、謝罪、そして、決闘

Side 晴蘭

「
川神院に居候して3回目の朝、何故かは解らないが朝っぱらから叩き起こされていた。しかも日の出前の午前4時、お日様だってこの時期だと5時起床なんだぞ？」

「朝っぱらから何なんのさ百代」

「七天流について詳しく教えると言っていたくせに昨日帰りにいなかったじゃないか。だから罰として眠りを妨げてみた」

「理不尽な 昨日はおじいちゃんと一緒に手続きに行ってたの。住所とか戸籍とかいろいろ面倒なこと多くてさ」

昨日は学校が終わった後、おじいちゃんに呼び出されて一緒に市役所やら回って正式に川神院在住になった。流石に身寄りの無い学生を放つてはおけなかったらしい。

「早く、説明！」

「解った解った！えーと？どこから話せばいいんだろうか」

「確か劉土とか言う奴は7つの気について少しだけ話していたぞ？」

「よし、じゃあその辺りから話そうか」

ボクは念のため巻物を鞆から取り出しておいて話を始めた。

「七天流つてのは気つてものを1つのものとして見るのではなくて、気自体にも種類があるとしてるんだ」

「それなら私ら一般の武道家でもあるぞ？」

「あくまでそれは内外の区別だけでしょ？七天流はそれ以上に分割してる。内気とされるのは火気、土気、風気、水気、木気の5種類。外気とされるのは闇気、雷気の2種類。これらにはちゃんと役割があるんだ。火気は“再生・浄化”、土気は“共鳴・掌握”、風気は“自由・破壊”、水気は“流動・変化”、木気は“成長・荘厳”、闇気は“虚無・永遠”、雷気は“須臾・天罰”、一体これが何を意味してるかは正直ボクにも詳しくは解らない。けど、これらが意味しているものの中に多分技の特徴が入ってるんだと思う」

「技の？」

「うん。穿火にしか自己再生能力は存在しないし、土気くらいしか自然と完全にリンクできるものはない。それに、これは文献を読ん

ただけだけど、木気が使えれば他人の細胞を成長させて回復させることも出来るし、雷気が使えれば攻撃や移動の速度が光速と同じレベルになる」

「ふむ、それで？なんでそんなことが出来る？巻物を読んだだけなの？」

「巻物にはさ、魂が封じ込めてあるのは知ってるよね？そいつらの影響もあるし、七天流の開祖は代々自分の力を無くさないように後継者の五感に訴えかけて自分の技を継承させていったみたい。それが巻物にも使われてるんだと思う。けど、巻物だと視覚と触覚からしか訴えかけれないから多少なりにも修行が必要なんだよね、この中に封印されてる魂のご教授を承ってさ」

「なるほどな、ちなみにそれは私が読んでも効果はあるのか？」

「もっともな質問だけど、残念ながらそれは出来ないんだ。ボクが“主”である限り、コイツらは他人に技を教えられないし、巻物自体に宿っていた力も“主”にしか使えない。けど、ボクが無理矢理読ませれば話は別になる。これを七天流では“御霊宿”みたまやどりって言うって、無理矢理読ませた相手に七天流の気を少しだけ分け与えることが出来る。その時のリスクは半端なく大きいけどね」

「リスク？」

「まず、ある気の適正率が30%を切っている相手にその気を与えたら相手も自分も後遺症が残る。読ませた者は五感のどれかに支障が現れ、読まされた相手は発狂して自我が保てなくなるらしい。逆に適正が良過ぎた場合、適正率が80〜90%の間の場合、読ませた者は自分の力が少し削られる。これはそんなに辛くは無いんだけど」

ど、読ませられた被害者は七天流の気に当てられて暴走して燃え尽きるまで暴れまわる。その後は廃人直行」

「じゃあ あくまで、あくまで例え話だが、もしガクトにお前が無理矢理劉土の巻物を読ませたら」

「ガクトは手当たりしだいに地震を引き起こして川神は崩壊、ってシナリオが濃厚だね。だから言ってるじゃんか、“ファミリーのみんなには七天流に関わってほしくない”ってさ」

「」

百代は押し黙ってしまった。最悪な想定を頭の中で再現しているのだろうか、顔に翳りが見えてくる。

「どっ？他に何かある？」

「ファミリーに他に適性がある奴はいないのか？」

と、予想外な質問が飛んできたな。てつきり他の巻物はどんな技が使えるのかとか戦闘狂の質問かと思ってたのに。

「ボクはまだ火気と土気と闇気の適正しか解らないけどさ、土気はガクトがピッタリ。あとは一般人と変わらない適性、適正率が50〜60%、もし読まされても暴走もしないし後遺症も残らないよ」

「そうか」

「心配？」

「ああ、流石にな」

「今のところは安心しても大丈夫だよ。無理矢理読ませたりするほどボクは落ちぢゃいない」

「解った。よし、それじゃあ続きをやるう、決闘の続きを」

「こんな朝っぱらからやってられないよ！！ていうか！！今の話からどうしてそう繋がるのさ！！」

やっぱりこの人 生粋の戦闘狂だ。さっきの質問一つで戦闘狂じゃないなんて決めつけるのは早計だったか

(主、代わってくれ)

「え？」

突然頭の中から百代と同族の奴の声が響いてきた。

「どっししてっ？」

(ちょっとコイツと話がしたい、頼む)

頭の中でのことだが、コイツがいきなりボクに頭を下げて頼みごとをしてきた。

「頭下げるなんて珍しいことするね、解ったよ」

「ど、どうした？1人でぶつぶつと？」

「ちょっと百代と話したい奴がいるから代わるね、七天流奥伝、穿火」

Side Out

Side 百代

「ふう、待たせたな」

晴蘭がぶつぶつと独り言を言い出したかと思ったら、いきなり人格を変えて話を再開した。

「今は穿火だ」

「あ、ああ。それで、話したいことって何だ？」

「謝罪だ、侘びを入れに来た」

そう言っつて穿火はいきなり頭を下げてきた。

「お、おい、どうした？」

「お前のことを誤解していた。戦闘狂の中でも仲間を気につけないようなオレの嫌いな部類だとばかり思っていた」

「ストレートだな」

「だが違った。今の質問は明らかに仲間みんなを気につけるもの、仲間を大事にしてなきゃ出ない言葉だ。すまなかった」

再び私に向けて頭を下げる。

「ならおあいこだ。私も謝罪する」

「なに？」

「私はお前のことを完全な戦闘狂だと思っていたが、今の発言を聞く限り、お前も仲間を大切にしているんだろう？初めはそうは見えなかったからな」

そう言っつて私も頭を下げる。

「ぶっ！」

「ははっ！」

数秒ほどたつて2人で顔を見合わせ同時に笑いだした。

「ははは！川神百代、気に入ったぜ！お前はあんまり興味がないだろうが折角だ。本名を名乗ってなきゃ失礼つてもんだよな？」

「本名？」

「おう、オレが生きていた時の名前、咲昏穿火の名前を賜る前のオレの名だ」

そう言っつて穿火は3つの巻物の内の1つを取り出し広げる。

「オレは甲斐の虎、武田信玄だ」

「 武田信玄? 」

「 おう、一応今の時代だと有名だと自負してるぜ? 」

「 武田ってゲームにも出てくるぞ!? 知らないわけがない!! 」

「 そこまで力説してくれると嬉しいもんだな、じゃあその礼だ。今日オレが闘ってやるよ 」

Side Out

Side 大和

「 おー、みんな揃ってるな 」

「 さっき笛の音が聞こえたもんだから焦ったわ 」

「 まあお陰でどこにいるか探す手間が省けたね 」

ワソ子をキャラメルで餌付けしていると姉さんと麗と晴蘭が揃ってやって来た。

「 みんな揃ったみたいだし登校するか 」

「ちょっと待ちなさい翔一、アンタ昨日学校サボったわね？」

キャップは背後から聞こえた鬼の声に体を硬直させた。

「いや、待て麗！これには事情が！」

「言い訳無用！」

「かくなる上は、脱兎！！！」

「逃がさん！纏元流、蛇交鞭！」

麗の鉄槌が下される前にキャップは変態の橋目掛けて走っていくが、麗が鎖を使ってキャップの足を縛って転倒させた。そのまま鎖を引っ張ってキャップを引き上げる。

「さてと」

「待って！警察に事情聴取されてたの！！だから帰れなかっただけ！！他意はないから！！！」

「言ったわね？信じるわよ？」

「信じてください！！！」

「仕方ない、今日は勘弁してあげるわ、頭突き1発で」

ガツン！！

「はがつー！！」

麗の額がキャップの頭頂部にめり込んだ。

「さて、行きましようか」

「キ、キャップ気を失ってるけど？」

麗に背負われているキャップは明らかに意識が途絶えていた。どんな威力の頭突きなのか

「ほら起きなさい」

ガツン！！

「ぐはっ！あれ？俺何してたんだっけ？」

「目覚ましヘッドバンド」

「恐ろしいね」

麗の攻撃に戦慄を覚えずにはいられなかった俺たち男子だった。

「ん？橋のところに誰がいるよ？こっち見てる」

そこで、京が橋の人影に気付いた。

「またお姉様目当てかしら？」

「なに？百代ってそんなに挑戦者来てるの？」

「学長に勝負を挑むにはまずモモ先輩を倒さなきゃいけないルールなんだってさ」

「だったらボクが相手しなくてもいいような」

「そういうわけじゃないんだよ」

「ん？大和、それどういう意味？」

「強者つてのは強者との闘いに飢えるんだよ」

Side Out

S i d e 晴蘭

橋の上から場所を移って河原で決闘をすることになった。確かに橋の上で暴れられちゃ通行人にも迷惑かかるし当たり前前的事か。

それにあの人、並みの武人よりは強そう。これじゃ瞬殺なんて失礼な真似は

「せいっ！」

「ばぎゅらー！」

前言撤回、ちよつとはいい勝負になると思ったボクが馬鹿だった。男は容赦なく10メートルほど吹っ飛ばされていた。そして相手に向かって百代は一礼をする。

「何と言つか、何が起きたか解らなかつたというか、ちよつと相手が可哀想だったというか」

モロ、それは正しいよ。ボクもすっごい哀れに思えるもん。

「ウォーミングアップには、なつたかな」

「ウォーミングアップ？何のだ？」

「今日は川神院で試合をするんだよ、晴蘭とな」

「また！？もう2人ともダウンなんて止めてよね！」

モロが本気で心配してくれている、それはすごく嬉しい。けど

「これがボクの“お仕事”だからさ。それに、今日は1人だけしか闘わないよ。“オレ”と百代だけのサシだ」

「“オレ”って、さりげに人格入れ替えるなよ」

「え？人格？なんでみんな不思議に思わないの？俺意味解んないんだけど？」

「安心しなさい、アンタには説教含めてアタシが直々に教えてあげるから」

麗の一声で翔一の顔が真っ青になるのが解った。南無阿弥陀仏。

「さて、登校するか」

ボクたちは揃って学園に向かった。

Side Out

Side 由紀江

橋に差し掛かる頃にはいつも揃っている7人組、楽しそうに話したりじゃれあいながら登校している仲良しグループ、いつもその背中を遠目で追って私は登校します。

いいなあ、仲が良くて 私も早く友達が欲しいです

松風も頑張れと応援してくれてるから答えてあげない！

そんなある日、いつもとは違う光景が私の目の前にはありました。

いつもの7人組にお仲間が増えていました、それも2人。男の人と女の人が1人ずつ、この辺りでは見たことのない人でした。

男の人は眠そうにしていますが明らかに強そうな気配がします。しかも、どこかで似たような気を感じたことがあるような

女の人は優しそうな雰囲気の中にしっかりとした強い何かを感じら

れました。それと、僅かに感じられる武器使いの洗練された気。

私は目を疑いました。

女の人が偶然にも横顔を見せてくれました。

その横顔は、私の記憶にある優しかったあの人の顔。

麗さん。

どうしてそこにいるんですか？

第四話 4月21日・・・穿火、謝罪、そして、決闘（後書き）

ネタが特に無かったので解説コーナーは本日休業日です

そろそろテストが始まるのでまた更新が遅れるかもしれません

感想、意見お待ちしています！ジャンジャンお願いします！！

第五話 4月21日・・・悲劇？喜劇？（前書き）

胃腸風邪かかりました

1カ月で2回かかるとかどうよ

第五話 4月21日・・・悲劇？喜劇？

S i d e
麗

21Fの教室の朝のHRで、翔一が小島先生にバンダナについて指導されていた。しかし、翔一は外すつもりはないと内申を捨ててまで抵抗していた。それに納得した小島先生はあっさりと引き下がった。私がそれを見ていると、隣から大和が話しかけてきた。

「なあ麗、キャップのバンダナには何も言わないのか？」

「ええ、あそこまで芯の通ったことを否定するほどアタシは外道じゃないわよ。内申が要らないのも将来が固まってるからでしょ？だったらむしろアタシは応援するわ」

「流石」

「元川神のお姉さんを甘くみないでね」

「さて。次に面白いニュースを諸君に伝えよう。今週の金曜日、川神の姉妹都市であるドイツのリューベックから転校生がやってくる。質問は拳手をしてからだ」

ざわっ　！とクラスがどよめいた。アタシの時は急だったけど予告

があるところなもんなのかな？

「女子ですか？美人ですか？胸とかありますか？」

「男子ですか？イケメンとか、お金持ちですか？」

「先生、どちらなのでしょう？」

「ヒ・ミ・シ」

ざわっ　！！とクラスが一層どよめく。小島先生、貴女そんなキヤラじゃない気がするんですけど

なんて思っていたHRは終わってしまった。

そして休み時間。

「まったく、あの先生は時々謎の冗談言うから怖いぜ」

「表情変わらないから余計にねー」

やっぱりあの先生無茶してるんじゃないかしら

「そんなことより時代は転校生の話題だろ！ボインの姉ちゃんだったら女にして揉みしだくぜ！..」

「何あのチビ、マジキモ」

ヨンパチ君が妄想にふけつてよだれを垂らしている。それに女子たちは冷ややかな目を向けていた。

確かに、今の発言はいただけないわね

「まかせて千花ちゃん」

「え？」

私は千花ちゃんの肩を軽く叩いてからヨンパチ君の耳元で囁く。

「あら、ヨンパチ君　じゃあアタシの時も妄想してたのかしら？」

「え？」

「アタシ、87あるの」

「ちょっとトイレ行ってくる！..」

そう言い残して彼は男子トイレへと突っ走って行った。それをみた千花ちゃんが耳打ちしてくる。

「ねえ、いきなりどうしたの？わざわざ発情させて」

「ふふふ、今に解るわよ」

千花ちゃんが首をかしげていると、モロ君の携帯に着信が入った。

「はい、もしも」

『た！！助け』

ブツツ！！と勢いよく通話は遮断された。

「え！？ヨンパチ！？どうしたのさ！！ヨンパチ！？」

「大丈夫よ、ちょっとお仕置きしただけだから」

「何したのさ！？ヨンパチ生きてるの！？」

モロ君が焦って尋ねてくるけど、アタシは出来る限り爽やかな顔で答える。

「トイレの中にちょっと2人くらい男好きの柔道部員を仕込んでおいたのよ。これで少しは懲りるでしょう?」

「ヨンパチ お前、もう俺様が知ってるヨンパチじゃなくなってしまうんだな AMEN」

「ヨンパチ 君の事は忘れないよ」

「三次元に手を出すからそうなるんだ」

ガクト君とモロ君はヨンパチ君の弔いを始めていて、スグル君は呆れた顔をしながら漫画を読んでいた。

「まあ引ん剥かせる程度で止めるように言っておいたから、学校のトイレに対するトラウマで済むんじゃない?」

「麗!!アンタ最ツ高!!」

「アタシはね、露骨なのはいいけど女が下に見られるの嫌いなものよ」

アタシはいつの間にか千花ちゃんを筆頭とした女子に囲まれてキャ

「キヤー騒がれていた。うん、悪い気はしないわね。」

Side Out

Side 大和

「麗ちゃん人気者です」

小笠原さんたちがはしゃぎあったりガクトたちが祈りを捧げたりしているのから少し離れたところで委員長は見守っていた。

「委員長は行かないの？」

「行ってしまったらお姉さんとしての威厳が」

「真与ちゃん！こっちにおいでよ！」

「あ、はい！」

麗に呼ばれてあっさりと大衆に混じってしまった委員長。

「委員長まで麗に飲み込まれたか どう思うゲンさん」

「うるせえ、話しかけるな。俺は寝る」

「やっぱり姉御肌なのかな？」

「てめえ　まあ確かに抱擁力はあるなアイツ　恐ろしい能力だ」

ゲンさんまでもが麗を評価していた。やっぱり麗、アンタ恐ろしい人だよ。

「性別不明の転入生か、面白くなりそうだな　　お！！いいこと
思いついた！！」

キャップがまた何か重いついたらしい。今度は何なのか

Side Out

Side 晴蘭

「　　お、始まったね」

『ハアイエブリバデイ、春といえば恋だよな？でも浮かれて変な病
気にかかるのだけは、勘弁な。今週も校内放送LOVEかわかみが
始まるよー！パーソナリティーは俺、ハゲこと2年の井上準と』

『人生、喧嘩上等諸行無常。3年の川神百代だ』

昼休みに流れ出した校内放送“LOVEかわかみ”、百代が出るから聞いてくれって言ってたから昼食を取りながらラジオに耳を傾ける。

『はい、今日も沢山百代さん宛てにメールが来てますよー』

『よし、とつとと読めハゲ』

このラジオ、なんか井上君が不憫に思えるのは気のせいだろうか。

『好きな子ができました。どうしたらいいでしょうか？』

『私が直々に味見をしてやろう、紹介しなさい』

『ちなみにこれ本気だから気をつけてね』

なんだろう、このラジオすっごい不穏な空気がする。

『じゃあ、次。もし政界に文句を言うならどこに？』

『そうだな、財源の見直しだな。あとは無駄遣いカット』

『次、乗馬は得意ですか？』

『私は意外と乗馬は上手いぞ？色々、な？』

『大和君とよく一緒にいるのを見かけますが付き合ってるんですか？』

『違う、アイツはアタシの舎弟だからな。だから女の子たち！遠慮せずもつとおいで！』

『ちょっとブラコン（ドスツ！）げふツ！スイマセンでした！！お願いだから鳩尾につま先入れないで！！』

『ブラコンじゃないから気をつける』

『えーゴホン！次、百代さんは何かになってみたいなんてものはありますか？川神院の師範代抜きで』

『ふーむ、私猫好きだから獣医とか一回あこがれたな』

『じゃあラスト！どんな映画が好きですか？』

『アクション映画だな』

『今日は珍しくそれなりにラジオとして成り立ったな、俺の鳩尾被害を除いて』

『ちなみに、お前はどんな映画が好きなんだ？』

『可愛い児童たち活躍する映画、かな』

『ちよつと危ない意見だな』

『危なくない！そもそも可愛いものを見守ると言つそれは父性のそれと同等であり決してやましいものなぞ1ミクロンもないと命を賭けて言い切れる。大体なあ、ロリコンなんて言葉が流行したからいけないんだ。俺はただ、小さな女の子とお風呂に入りただけだ、それだけの純粋な粉雪の心なんだ！』

『暴走すんなハゲ！（バキツ！！） あ、イカン気絶させてしまった ま、いいか。曲流すぞ』

「 ねえ矢場さん」

「 何用得候」

「このラジオっていつもこんなん？」

「いかにも」

この学園、思ったよりもカオスな雰囲気にもまれてるんだな

（いいじゃん、楽しそうで）

（退屈しねえだろ？）

（めんどくさい）

頭の中のコイツらも充分カオスの要因だが。

Side Out

Side 大和

いろいろあって放課後。結局ヨンパチは帰ってはきたが、麗に忠誠を尽くすようになっていた。一体トイレで何があったのだろうか。まあ知りたくはない。

「僕はスグルとかとゲーセン寄ってくるよ」

「スト？稼働中だ。ザンギユラ使いとして行かねば」

「あースグル君！例の件もヨロシクね！」

「ああ、それについては順調だ。まあ任せておけ」

麗とスグルがよく解らない会話をしていたが、俺はスルーすることにした。

隣のモロは少々不機嫌だったが。

「あれ？キャップいないぞ？」

「あー、翔一なら千花ちゃんとスイーツ食べに行くとか何とか」

「ふーん、まあ小笠原さんも可哀想に」

「？どっぴいっこと？」

「キャップにはその気は一切ないってことさ」

「まあアンタのメールで大体は知ってるけど、アイツそんなに異性に興味ないの？」

「もうほとんどないね」

はあ　と麗が深く大きく溜め息をついた。キャップや俺の元姉貴分としてはそこんところも多少は気にかかっていたのだろう。

「まあしょうがない、これも追々考えていくことにしましょうか」

やっぱりいつまでたっても麗は翔一のお姉さんだった。

「じゃあアタシちょっと買い物あるからまたね」

「待つて、ちょっと前から聞きたかったんだけどさ。麗ってなんかスグルと仲良くない？」

「ん？ああ、スグル君とはビジネス仲間よ。互いの利害が一致してね。何々？気になるの？」

「珍しいなと思ったただだよ」

ちょっと、モヤツとはしたけどそんなに大したもんじゃない。

「じゃあお先！」

そう言って麗は立ち去っていった。

「じゃあ大和、私たちも行こう」

「ああ」

「逢引に」

「秘密基地に！！」

S i d e O u t

「さて、本当にいいのか？」

「約束は破らない主義でしてね。例えそれが自分の中の別人格の約束でもね」

放課後、私は晴蘭を連れて川神院に急いで戻って決闘の準備をした。じじいに聞いたら「むしろやりなさい」とまで言われてちよつと不気味だったけど都合だ。

「では、七天流奥伝、穿火」

目を閉じた晴蘭の気配がガラリと変わる。口の端を吊り上げて笑っているその姿はさながら獲物を見つけた獣、私と同類だ。

「武田信玄か」

「あー、その名前やめてくれや。オレは今頃咲昏穿火として生きてんだ。そいつはとうの昔に死んだ名前だ」

「解った、穿火、腕は大丈夫か？」

「へっ、オレくらいの使い手になりゃこんなん30秒もかからん」

穿火の右腕がシュウウウ　と、音をたてて煙を上げていた。これで治るんだから不思議なものだ。

「うし、そんなじゃあやるか。今日は前とは違うところを見せてやらあ」

そう言つて穿火は布で包まれた長い棒状のようなものを手に取り構えた。

「武器か、面白い」

「昔は素手なんてやってられなかったからよ、コレの扱いは自慢があるぜ？」

「2人とも、準備はいいな？」

今日の審判はじじい、なんでも「暇じゃからワシも見たい」とか。学園運営はいいのかじじい。

「問題なし」

「いつでもいいぞ」

「それでは時間無制限1本勝負

始めえ!!」

まずは出方を伺う。アレが何なのか解らないと対処の仕様がな

「七天流奥義、星火燎巖！」

轟ッ!!と大気がゆがみ発生した炎が穿火の体に纏わり着いていく。

「前より火力が強いじゃないか」

「まあな、きょうは結構マジだ。主は適正率そこまで高くないから全力は出せんが」

「またか」

「まあそれはあくまでオレが主導権を持つてる時の話だ。アイツは自分でもっと使いこなせるようになるさ。適正率ってのはあくまでオレたちとの適正率だからな。まあ今はまだオレの方が強いが、主が本気で火気を極めようと思ったら今のオレより扱えるようになるだろうぜ？オレたちが指導してやるんだからそうなってもらわなきゃ困るがな」

そして穿火はハッハッハと笑いながら棒を包んである布に手を書け一気に引っぺがした。

そこから出てきたのは

「棒？」

何の変哲もないただの真っ白な棒、刃も石突きも装飾も何もない。強いて言えば、長さが5メートルほどあるだけだろうか。

「何だそれは」

「オレの武器の元だ、安心しな、このままじゃ闘えないからよ」

穿火は両手で棒を掴み先端を私に向けてきた。

「七天流闘王武装、焰断戟」
ほむらのだんげき

突然、何の変哲もなかった棒が炎を纏い出した。その炎は段々と形をしっかりと現していく。私に向けられた棒の先は大きな斧のような刃が1枚、その反対には槍のような細い鋭利な突起物が炎によって形成された。先ほどまで真っ白だった柄もいつの間にか真紅に染まっていた。

「やて、これでどうだ？」

「つくづく驚かされる　ただの棒が巨大な槍になるとはな。お前から本当は魔法使いとか陰陽師とかじゃないのか？」

「槍って言うか、こいつは戟、まあ斧みてえなもんだ。そこんとこ勘違いすんなよ？陰陽師とかつて説は有ったな。七天流開祖、初代総代、初代咲昏碎聖は“森羅万象の顕現”とまで詠われたらしいぜ？ま、正直なところ、一番恐ろしかったのは3代目だな」

「3代目？初代じゃないのか」

「おう、3代目は指先1つで人を殺してしかも生き返らせれたからな。ありゃ恐ろしかった」

「なんだ、会ったことがあるのか？」

「まあな、オレはソイツに殺されたんだよ。指先1つでな」

ゾクリ、と背筋が凍った。対峙していた穿火から一瞬だけ放たれた憎悪、憤怒、殺気。

「アイツは次々と戦国の武将を襲っていった。オレは中でも始めに殺された部類だ。病気で弱ってたつてのもあったが、屈辱的な殺され方だったぜ。もしアイツにあつたら 殺す、必ず殺す」

穿火は意識していないのだろうが、炎の勢いが遥かに増していた。感情の昂りに炎が呼応しているのだろう。

「おっと、つまらん話なんかしてないでやるうぜ？」

「ああ、そうだな」

今の話、一応舎弟にも教えておいてやるか。

「七天流槍術、鬼灯ほおすきの型、棕呂扇しゅろせん！！」

「うおっ！？」

考え事をしている隙に穿火が斧を振り回し接近していた。前回同様、足の炎が速度を上げているのは解ったが、やはり火力は異常に上がっていた。

なんて状況を把握していると、斧がおもいつきり横に振られる。しかも斧の刃の付いていない部分には炎がまるでブースターのように

吹き出し速度を上げていた。

「チイツー!!」

私はそれを後ろへ思いっきり飛んで辛うじて回避した。

「獅子魁!!」

穿火は1回転させた斧の石突きを地面にぶつけると、そこから噴き出した炎が突進力を上げて襲い掛かってくる。

「くっ!!」

咄嗟に斧を掴んでしまつ、かなり熱かったが意外と掴めてしまった。

「断葵!!」

ぐん!と体が引き寄せられる。どうやら斧が下に降ろされ引っ張られたらしい。

私はいい加減に熱いのもあり手を離す、が、真上から殺気を感じて思わず両手で何かを掴んだ。

「白刃取りとはやるじゃねえか」

掴んだものを見ると、それはついさっきまで私が掴んでいた斧の石突きだった。

「熱いぞ」

「あのな？これ雑誌の束くらいなら触れたら一瞬で燃え尽きる火力なんだが」

「まあちよつとした気の応用だ」

「無茶苦茶だな　つと？」

突然、斧の炎が消えたかと思うと、穿火の体がバランスを崩して倒れこんできた。私はそれを受け止める。

「お、おい！どうした！」

抱えた穿火の体に違和感を感じた。

明らかに体温が低い。平熱もないんじゃないか？

「 ヤベエ 」

「 どうした？ 」

「 すまん もっと、闘ってやりたかったが、ちょっと無理そうだ 」

「 何があった？ 」

「 エネルギー、切れ 」

「 は？ 」

それっきり、穿火は動かなくなった。

「 あの馬鹿が、ごめん 」

その代わりに、晴蘭が謝罪してきた。

向こうから吹っかけてきた決闘は拍子抜けな結果で終わってしまった。

それなりに楽しかったが。

第五話 4月21日・・・悲劇？喜劇？（後書き）

「大和と」「麗の」「作者の自己満、あとがきコーナー!!」「」

「おい、タイトルがこんなんで大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

「麗も結構ネットやるもんね この受け答えはさすがと言っべきか」

・AMEN・・・HELLSING

「最後に神父様は何を見ていたのかしら？」

「様って あこがれてるの？」

「あの銃剣、どうやって隠してるのかしら」

「そこかよ!!」

・無駄遣いカット・・・恋と選挙とチョコレート
・乗馬が得意・・・Fate/stay night
・ブラコンぎみ・・・君が主で執事が俺で
・獣医に憧れ・・・あずまんが大王

「作者暴走したわね」

「ああ　いくら声優好きだからってこれは」

「みんな同じ声優だもんねー、流石に引くわー」

・ザンギユラ・・・ゲームスト

「いい加減許してやれよ!!」

「ねえ、ゲームストに誤植が多たって本当？」

「確かめてみる!」

「アンタもノリノリじゃない」

「感想、意見、お待ちしてまーす!!」

裏戦国軍記・第一節 虎、散る（前書き）

今回はまじこいキャラの登場はなく、オリジナルのお話。

時代は遡り戦国へ

裏戦国軍記・第一節 虎、散る

1573年、長篠城

天守閣にある1室、そこに3つの人影があつた。胡座をかいている男に対して2人の男が敬意を表すように膝を付いていたが、その胡座をかいている男の様子がどうもおかしかった。

「くつ　　ガハツ!!」

「お、お屋形様!!」

2人の男がお屋形様と呼ばれた男、武田信玄へと近寄る。

「ゲホツ! あーしんどい、もう少し楽にならんもんか?」

「もう無理です、撤退を!!」

「黙ってる幸隆、虎綱。持病が悪化した程度だ」

「嗜血しているくせに何をおっしゃっているんですか!?!」

「たかが嗜血だろ? こんな持病を理由に戦から引いてたらアイツに

顔向けできねえ。アイツとはいずれきつちりケリつけなきゃならねえ」

「ケリ、ですか　いい加減気持ち伝えてしまえばいいではないですか」

額に大きな太刀傷のある男、さなだゆきたか真田幸隆は呆れたように信玄に伝えるが、信玄はさらに呆れ顔で返答した。

「バーカ、そんなんじゃねえよ。アイツとは殺し合い、殺され合う。そついう仲なんだよ」

「相手方はお屋形様の状況をまるで知らないのでしょうか？」

「当たたり前だ。死んでもアイツに助けなんか要請しねえ」

「物資は送ってもらったくせに今更何を」

右目に真っ黒な眼帯をした男、かすがとらつな春日虎綱も呆れたようにため息をついた。

「オイ虎綱、なんか文句あんのかよ」

「早く甲斐へ戻っていただきたいことぐらいですよ、我が願いは」

チツ、と信玄はわざと聞こえやすく舌打ちをしたが、2人とも慣れっこなのか大して気にしている様子はない。信玄はそれを見て1回大きく深呼吸をして天井を見上げる。

「畜生。こんな時に限って“浄火”じょうかが使えねえとはな。お師匠ももう少しこういう時の対処法を教えてくださいやいいのに」

「七天流、ななのみちりゅう“七纏”ななまじわじですか」

ああ、と信玄はおざなりに返事をするが、その顔色は血の気が引いており、明らかに優れていなかった。

「負の要素を浄化する火炎、“浄火”、なぜ今になって使用不可に？」

「恐らく、オレの気力不足だろうな。再生の“聖火”せい火も“甦火”そ火も使えん。こりゃ死に際が近寄ってんだらうな」

「「な!?!」」

幸隆、虎綱の両名は信玄の衝撃の告白に驚愕の声を上げた。

「安心しろよ、野垂れ死になんてしねえ。討ち死にもしねえ。あのクソ豚と似非魔王を討ち取ってから」

「なりません!!」

「尚更、甲斐に戻ってください!!」

2人とも先程の驚愕していた表情から一変してより必死の形相になっていた。2人のいきなりの大声に流石の信玄もたじろいだ。

「お、おお?どうしたいきなり?」

「まだ我ら二十四将に四名臣も、全員ではありませんが　しかと生きております!!我らを駒のように使ってお逃げください!!」

「あの方に会って下さい!!そして、そこで満足してから命を絶ってください!!」

2人の説得は次第にボルテージが上がりエスカレートしていき、それにつれて信玄は眉間にシワをよせ、段々と苛立ちを露にしてい

「　　テメエら　オレに死ねって言ってやがんのか?死に掛けるオレでもテメエらを消し炭にするのに2秒もかからんぞ?」

「承知の上で申しております、自身で死期を感じ取っておられるのであれば、あのお方の胸で安らかに眠ってください!」

「お屋形様に勘助と同じ道は歩ませません!!」

勘助、と言う名前前に顔をしかめる信玄。ようは、戦場で信玄を殺させないと誠心誠意、全力全霊を持って止めようとしている。

「どうしても俺に逆らうつてのか？」

信玄はゆっくりと立ち上がり壁に立て掛けてあった刀を手に取り、わざと刀と鞘を擦り合わせて音を大きく立てて刀を引き抜く。

「悔いはありません、この身でお屋形様の無謀な出兵を止められるのなら！」

「例えこの身が燃え尽きようと本望です!!!」

幸隆は手を広げて体で止めようと、虎綱は襖の前でここを通すまいと立ちはだかっていた。2人の顔は既に覚悟を決めており、目にはしっかりとした意思が宿っているように見えた。

「後悔すんなよ？」

「「ッ!!!」」

信玄が刀を思いっきり振りかぶりこれでもかと鋭い殺気をぶつける。それに怯んで2人は思わず目を瞑ってしまう。

ゴツン！ーゴツン！ー！

「あた！！」

「いた！！」

しかし、2人に降り下ろされたのは刀の刃があるものではなく、鋭利なものの一切付いていないただの鞘だった。信玄は1回鞘の口を布でぬぐったあと、出しっぱなしで活躍の場がなかった刀を鞘にしまう。

「オレが甲斐に引いても後悔すんなよ？」

「お、お屋形様？」

「まったく、オレが仲間を殺せないのを知っておきながらよくやるぜ」

信玄は刀を腰に差し込んで鎧を外し、真っ白な直垂ひたたれの様な綺麗な服装、俗に言う死装束へと素早く着替える。

「申し訳ありません!!」

「無礼を詫びます!!」

2人は躊躇うことなく座して畳に頭を勢いよく叩きつけた。この2人の信玄への忠誠が現れた行動だった。

「頭上げるテメエら、さつさと戦場に戻れ。オレは1人で行く」

「え?」

「テメエらいなきやここは落ちる。クソ息子もいる。あとはテメエらで何とかしやがれ」

「し、しかし!!せめて私だけでも!!」

虎綱が頭を上げて信玄に詰め寄ってきたが、信玄は右の掌でそれを制したが、目の前に火の玉を出現させた。それを見た虎綱の視界がぐるぐると歪み出した。

「“惑火”」

「あ?」

「お屋形、様!」

ドサツ！ドサツ！と2人は意識を失い畳に体を沈めた。どうやらただ眠ってしまっただけのようだ。それを見て信玄は2人に、いや、戦場で戦っている家臣に向けて一言残した。

「あばよ戦友、地獄で会おうぜ」

信濃国、駒場

信玄は山道を駆け抜けていた。それも馬とひけを取らないような速度、足の裏から弱々しいが火を出して加速していた。馬で脱出すると徳川軍にバレる恐れがあり自らの足で脱出した。

「チツ、加速してるとはいえ、やっぱり遠いな　迂回してるのが
仇になっ　　グフツ！！」

信玄は急に立ち止まり咳き込んでビシャツ！！と地面に血を吐き出した。それも量は尋常ではない。

「ゲホツ、ウエツ！！ハアツ、ハツ　クソツ！もう少し持ち耐えてくれ、オレの体　！あと、少し　！！」

信玄は木に背中を預けてその場に座り込む。その口と鎧を脱いだ死装束姿は血塗れで今にも死んでもおかしくないような状態だった。

「おやおや？そこにおわすのは」

「!!!？」

そこに、山奥から1つの人影が気配を感じさせず近寄ってきていた。信玄にこれほどまでに接近しておいて気配を悟らせない、つまりこの人物は相当な手練だと信玄は直感で判断した。

「甲斐の晴信君じゃないか！」

一瞬で辺りは暗闇で包まれて姿はハッキリと視認することができなくなってしまうが、信玄はその手際のよさと声で誰かを把握した。その男は、かつて自分が師と呼んだ者の師。

「て、テメツ　　3代目!？」

顔は見えないが、明らかに笑っている雰囲気。3代目と呼ばれた男は首から下の狩衣姿だけを見えるようにしていた。その狩衣姿から感じる危険な気は信玄の胸の鼓動を加速させた。

「その呼ばれ方も久し振りだ。なんせここ最近はみんなしゃべる前に死んでるからな」

「破門されてからも人殺しか？」

「他にすることも思い当たらないからな」

「相変わらずの人でなしだなテメエ　！！」

信玄は刀を支えにして、木に背中を押し付けながらゆっくりと立ち上がって3代目を睨み付ける。その睨みは3代目を怯ませることなく、むしろ歡喜に浸らせてしまう。

「ん？ひよつとしてまだ根に持つてる？お前のお師匠さん、4代目咲昏碎聖を殺したこと」

「今更だ、そんな話出されても怒りやしねえ。5代目も決まっていたしな」

「おろろ、そつか。やっぱりこの話は古かったか。じゃあ、コイツならどうしよう」

そう言つて男は袖から布に包まれた兜ほどの大きさの物を取り出した。それを見た瞬間、信玄の背筋が凍つた。

「 オイ、まさか」

信玄の想像してしまつた最悪のシナリオ、信玄が仲間の後押しを受けて会いに行こうとしていた人の首がそこに、そう思つた瞬間、3代目はクククと笑いだした。

「安心しろよ、あの軍神じゃねえから。とは言つても？怒らないでいられるか？」

布をほどいたその何かを信玄の足下へと3代目は放り投げる。それは信玄の思つていた首ではないものの、さらに予想外な物が顔を見せていた。

「 勘、助？」

先の戦いで、確かに首を取られた武将、山本勘助の首がそこにはあった。しかし、勘助は武田軍がしかと葬ったはずだった。

「いやあ、上杉の軍にまぎれてコイツの首取るのには苦労したぜ？コイツなかなか強くて困ったもんだ。まあちよつと力を込めた蹴り1発あつけなく倒れちゃったからよ？俺がこう、クイツ！と回してねじ切ったんだけどそんな時のコイツの顔っていったら！！」

武士が討ち死にすることは珍しいことではない。むしろ敵の攻撃を防ぎ、尚且つ敵方の首を取ったのならそれは称賛に当たるべきことだ。

しかし、信玄はそれらとは全く関係なしに、ただ純粹に怒っていた。自分の家臣を、大切な仲間を、共に幾多の戦場を駆け抜けてきた戦友を。

むごい殺し方をして、あるつことかそれを嘲笑った。

「ぶつ殺す！！！！」

ドオン！！と辺りの木々が一瞬にして灰塵と姿を変えた。激昂する信玄から放出された火炎が断つ巻いている、その中で3代目は炎をもものともせず平然と佇んでいた。

「搾りかすの炎にしてはそれなりに威力が強いもんだ。まあ、水気が使える俺には大した威力にははらんな」

ほら、俺って天才だし？などとおちゃらけている3代目に、信玄の怒りは治まることを知らなかった。信玄は3代目に向けて右腕を突きだし集約させた炎を射出した。

「滅火^{めっか}”！！！！”

信玄から放たれた真つ黒な炎、燃えた後の炭や灰や残りカスまでもが消し去っていく。まるで奈落の底の暗闇の色をした地獄の業火。しかし、それを3代目は右腕1つでいとも簡単に真上に弾き飛ばした。3代目はその炎を弾いた右腕を見て、失望したようにため息をついた。

「期待はずれだ、もういいよお前、死ねよ」

3代目は信玄に人差し指を突きつけた。その顔は見えないが、笑っているのは明確だった。その笑いが歓喜や落胆、どの感情から来ているかは解らなかったが。

「たまぐらい
魄喰雷」

ドクン！！！と信玄の心臓が爆発したように膨れ上がった。

「カ、ツハ
」

まるで水風船が破裂したかのように、信玄の体中の穴という穴から血が激しい勢いで噴出し、辺りに底のないような血の池が作られ、信玄はそこに倒れ込んだ。

「よかったな、アイツに会う前に死ねて。ケハハハ！！」

3代目は薄気味悪い笑い声を残し、そのまま闇の中へと消え去っていった。

しかし、信玄は体の中の血液の大半を失っていながらも、まだ生き絶えていなかった。信玄は血溜まりから這いつくばって脱出し、刀を支えにして立ち上がる。

「ちよ」

最後に、会いたかった。

唇がそう動いて、声は一切でないまま、信玄は立ったまま命を落とした。

（へッ。嫌な夢だ）

穿火の目がゆっくりと開いた。どうやらいつの間にか寝ていたようで、穿火の寝覚めはそこまで悪くはなかった。

（何が？）

（うおっ！？）

にゅつと顔を除き込んできた劉土に驚き思わず飛び退くが、穿火は1度咳払いをすると直ぐに落ち着き喧嘩腰になる。

（けっ、テメエには関係ねえ話だ劉土）

（人の心配を無碍にするとは、1回死ね）

劉土がまるで野球の投手のようなフォームをして何か小石のようなものを投げてきたが、それが突然膨れ上がり巨大な石の柱となり穿火の頭の右スレスレを通過していった。

（あつぶねえ！！いきなり石柱飛ばしてくるんじゃねえ！！）

（頭、潰せば少しはいい子になるかと）

（喧嘩売ってるようだなテメエ）

(穿火の態度、1回本気で改める)

(おもしれえ、やれるもんならやってみろや!!!七天流、緋連雀!
!)

(受けてたつ。七天流、雲母)

晴蘭の頭の中で軽い紛争が始まる。つまりそれは、主である晴蘭には頭痛と大差ないわけで。

「うるっさい!!!黙っててくれ!!!」

ガタン!!!と椅子から立ち上がり晴蘭は大声で叫んだ。

「どうした秋星、私の授業がそんなにうるさかったか?睡眠の妨害になるほど　うるさかったか?」

教師の指摘を受けてようやく自分が何をしてしまったのか気づいた晴蘭の顔が真っ赤に染まっていく。

「え！？いや、その、スイマセン！！」

それを見ていた楼閣はやれやれとため息をついてから2人を止めに行く。

（不憫な主、ほら2人とも止めて！）

今日も晴蘭の中は賑やかである。

裏戦国軍記・第一節 虎、散る（後書き）

はい、この裏戦国軍記はいろんな仮説、史実を織り交せて創作した
ものとなります。

虎綱ってこのころにはもう戦場にいたんじゃないかと思われる方も
いるかと思いますが、あくまで創作物ですのでご容赦を。

話し方とか戦国っぽさゼロですしねww

あと、お屋形様ですが、別にお館様でも間違いないそうです。
もともと屋形からきた呼称らしいので。

ほんとにいろんな仮説が組み合わさっているので カオスなこと
になっております。

感想、意見ドシドシください！気楽に書きちゃってください！

第六話 4月22日・・・ハゲ、昇天す（前書き）

あの花最終回、涙腺崩壊しました

第六話 4月22日・・・ハゲ、昇天す

Side 大和

朝、いつもの7人+2人、意外と違和感を感じないのは昔っからの付き合いだからだろう。麗も京になつかれてるし、晴蘭にいたって一切問題はない。

「あり、今日はお姉様への挑戦者いないわねえ」

「昨日の件があつたから今日は憂さ晴らししたかつたんだが」

「ホントに昨日はあの単細胞が失礼をしました！」

晴蘭が勢いよく姉さんに頭を下げていた。朝っぱら姉さんを敵に回さないのは殊勝な考えだ。1日が厳しくなるから、体力的に。

「どうもアイツ、腹が減るとどうにもならないくらい弱っちゃうみたいで 申し訳ない」

「全く、昨日じじいに中断されなきゃ穿火じゃなく、お前と決闘の続きをしたっていうのに」

「じじいがどうかしたかの？」

一瞬突風が吹いたかと思うと、そこには川神学園の学長、川神鉄心が姿を現していた。

「うわ、じーちゃんいつの間に」

「学長、おはようございます」

「うむ、おはよう。孫たちが世話になつとるの。それとモモ、晴蘭君のあの時の体温は32 を切っておったのだぞ？無茶させて晴蘭君の体を壊させてしもうたら、それこそ川神院の名折れじゃい」

「まあ確かにあれは仕方が無かったか　まあその分、次回はもつとやらせてもらうがな」

「おじいちゃん、ボクこの“お仕事”で死んじゃうかも知れないんだけど」

晴蘭が心底疲れ果てた様子で学長に訴えかけている。やっぱり姉さんの相手って相当疲れるんだろっな。

「安心せい、お主と百代の闘いには必ずワシかルーがついておる」

「絶対ですよ？正直、一子のトレーニングの相手が疎かになりそう
で」

「それについては安心なさい。昨日アタシが一子ちゃんと薙刀の特訓をしたから」

「ええ！楽しかったわ！」

「「ねー！」」

いつの間にか麗とワン子が意気投合している。たった2日足らずで京のみならず、ワン子までも手玉にするとは　クラスの女子も麗に飲み込まれている気がするし

麗、やっぱり侮れないな。俺も気をつけよう、いろんな意味で。

「うー、私の妹だぞ！」

「安心なさいな、私はみんなの姉貴分だから。もちろん百代も、アタシにとっちゃまだまだ若いわよ」

「言ったな？よーし、今度勝負しようじゃないか。姉貴度バトル」

「いいわね、ベテランお姉さんの力を見せてあげるわ」

姉貴度とかベテランお姉さんとかはよく解らないが、麗と姉さんの仲もそれなりに良好のようで一安心。

「それじゃあワシ、朝礼の準備をしてくるからの。遅刻をするでないぞ?」

学長は来た時同様、軽やかな身のこなしで風のように去っていった。

そして何事も無かったかのように俺たちは会話を再開し歩み出す。怪異な老人もこの変態の橋ではよくあることだ。

「大和、その本何?」

晴蘭が俺の持っている本を指差して尋ねてきたので、堂々と本を突きつけて表紙を見せる。

「政治家でも出来る愛犬のしつけ方”。ワン子のしつけに最適」

「それで、こうなったのか?笛を吹くと駆けつけたり」

「まあ、そこは俺たちの血と汗の結晶だよ」

「不憫な」

晴蘭が溜め息をつくとき、背後から嫌な気配を感じた。

「うー、消化不足、大和でもいじめて退屈しのぎするか」

「ちらばー！」

後ろを見ずに走って逃げ出した瞬間、欲求不満な獣に背中から抱きつかれて持ち上げられてしまった。

「ほーら、お姫様抱っこだぞー」

「止めてくれ姉さん！恥ずかしすぎる！」

「ふふふ。舎弟と姉貴分のコミュニケーションだ」

「こら百代！」

そこに麗が割り込んできた。救いがきたか？

「ズルい！アタシにもいじらせなさい！」

姉さんから助け出してもらえる、そんな都合のいいことが起りうるはずも無かった。

「イヤだね、妹をたぶらかした罰だ」

「チエツ　おっと、それより翔一、昨日千花ちゃんとはどうしたのよ?」

つまらなそうにしていた麗の矛先が翔一へと向けられる。

「ひたすらにケーキを食ってた!なんかしゃべってたけど俺食うのに必死だったし」

それを聞いた姉さんと麗が翔一の前に立ちはだかる。

「乙女を代表しておしおきだな」

「元お姉さんとして更正してあげよう」

「げえ!?モモ先輩に麗が同時に!?冗談じゃねえや!」

キャップはすぐさまその場から撤退した。しかし、相手が悪すぎる。

「ははー、待てーこいつう」

「スタンガン装備かんりよー」

2人はいとも簡単にキャップを捕らえ、そしてお仕置きが開始され

た。

キャップの断末魔が河原から橋へ響き渡る。

「ほほえましいわねー」

「キャップが必死かつ全力で逃げてるけどねー」

ワン子とモロが言うように、よくあるのどかな登校風景だった。

Side Out

Side 麗

朝から朝礼、かぁ。朝礼つてのもなんか久し振りねえ

前の学校は勉強ばつかの専門学校みたいなところで、朝礼どころか集会も滅多に無かったから新鮮な気分。

「みなさーん！朝礼ですよー！グラウンドに向かってくださいーい！」

真与ちゃんがクラスの連中に呼びかけているが、どうも反応がよろしくない。みんな好き勝手騒いで話を聞いちゃいないわね。

「むー」

真与ちゃんがむくれっ面になってきた。仕方無い、助け舟を出しましょうか。

「ほらみんな！朝礼よー！遅れると後々面倒！ここの担任の小島先生、怖いんでしょ？」

担任の名前を出した途端、みんなも朝礼に遅れるとまずいと自覚したようで、みんな自然と教室から出てグラウンドへ向かっていた。

「麗ちゃん助かりましたー！ありがとうございます！」

「これぐらい問題無いわよ、それより真与ちゃん？アタシの事はお姉ちゃんと呼ぶように言ったじゃない」

「あう、しかしそれでは委員長としての威厳が」

「そんなもん気にしないの！家じゃ一番お姉さんかもしれないけどね、今はアタシがお姉さんよ！」

「うー、いいのでしょうか」

「ほら、一緒に行こう？」

キュツ、と真与ちゃんの手を握って軽く微笑んでみる。

「あ　はい！お姉ちゃん！」

うーん。いいわねー、この笑顔　はあ、可愛い　こんな妹欲しかったのよ　髪の毛の色も一緒だからもうバツチリね！

「よし！じゃあ行くわよ！千花ちゃんも行く？」

「ええ、行きましょ」

千花ちゃんを連れて3人で教室を出ようとする、後ろからヨンパチ君が話しかけてくる。

「おいスイーツ、グラウンドになんだって？」

「グラウンドに行くのよ」

「うひょー！！グラウンドにイ　ハッ！！いい、イカン！！俺はもう学園のトイレでこんなことはしないと誓ったじゃないか！！」

学習したわね、ヨンパチ君。

「踏みとどまって正解よヨンパチ君。今日は5人仕込んであったか
ら」

「ヒイ！！？」

「発散するなら家でね？それならアタシは一切止めないから」

「解りました姉御！」

いつの間にか姉御って言われるようになった。うん。悪い気はしないわね。

さてと。朝礼に遅れないようにしなきゃ。

S i d e O u t

S i d e 準

今日は朝の朝礼だ。

つまり、朝から合法的に2・F委員長と接触することが出来る。

昇降口で待ち伏せる それとなく登場 委員長と衝突 委員長が尻餅をつく それを優しく持ち上げる 惚れられる。

完璧だ　いつもはユキに邪魔されてきたが、今日は若と一足先にグラウンドに行ってもらった。これで邪魔をするものはもう何もない。

そして、刻一刻と迫る運命の時。

「　　」
「　　」

微かだが、俺の耳が2・F委員長の声を捕らえた。周りに数人邪魔者がいるが、これは想定内だ。

そして、足音が近づいてくる。

今だッ！！

「あー、朝礼が始まるなー（棒読み）」

さりげなく飛び出しそして横目で2・F委員長を目視

そこには、いつもの2・F委員長ではなく、お姉さんのような人に

手をつながれた天使がいた。

いつもより幼く見える、まぶしすぎる屈託のない笑顔。

「我が生涯に一片の悔いなしッッッ！！！！！！」

俺の意識はそこで途絶えた。

Side Out

Side 麗

「なにこの坊主、変人？」

いきなり鼻血を噴き出して倒れた男がアタシの足下にいる。

「あー、ハゲには刺激強かったみたいね。今の真与、子供っぽくていつもより可愛いし」

「井上君、どうでしょう」

「放っておいて大丈夫よ。Sクラスだし、なんとかなるわよ」

「そ、そうなんだ」

気絶してる坊主頭の変人の顔が、何故か満足そうだったのもあり、私たちはあえて関わらずにおいた。

Side Out

Side 大和

毎週水曜日はこの学園恒例の朝礼があり、学長のありがたいお言葉が頂ける。

みんなが並んで待機していると、変人の橋を風のように通過していった怪異な学長がヒョコヒョコと出てきた。

「ネムそうな顔してる奴が多いの。特に1年。まあ朝だろうしの。こんな年寄りの言葉を聞くためにわざわざ校庭まで出てきてご苦労じゃった
などと許すと思っていたか愚か者めらが」

一瞬にして辺りの空気が一変し、緊迫した張りつめたものになる。

「たるんどる！喝つつつ！！！」

ドオン！！と爆発したかのような轟音が周囲の空気がビリビリと振動させた。体にまで響き渡るもんだから心臓に悪い。

だらしなかつた者が慌てて態度を直すか、2、3年はもう慣れたものだった。流石に入学したての初々しい1年は、突然の大音量に驚きを隠せていなかったが。

「ふむ、聞ける態度にはなつたの。1度しかない学校生活。節度を保って好きに過ごせや。人生は楽しんだもん勝ちじゃからのー」

やる気のないように聞こえないこともないが、頷いている生徒もちらほら見られる。

「ただ、お前たち、腹は減っておるかの？名誉や金、力には飢えておらんか？男や女はどうだ？飢えておらんか？飢えているならそれはいい。とても正しい。どんどんハングリーになりなさい。奪い取り、つかみ取るために努力しなさい競い合い切磋琢磨していきなさい。そのために“決闘”というシステムも用意しとる。白黒つけたければ活用しなさい。そして“何か”をつかみ取ってみなさい」

きつと、この話の間にも晴蘭は姉さんに闘えって詰め寄られてるんだろうな。南無三。

「勝つという快感はやめられんよ。人生はより楽しくなる。ワシからのオススメじゃ」

これに共感している生徒は少ないだろう。俺も勝ちにはこだわらぬ。頭脳戦が主ではあるが。

「成功する秘訣は夢ではなく野心ということよ。といつても、ただ飢えるだけでは獣と変わらん。理性と本能を両立させて楽しい人生を送ってくれることを願うぞい」

それと、と学長は声質を変えて話を続ける。

「なーんにも飢えとらん、平凡で普通の人生を送るのが一番だと思う奴、それはそれで構わん。精神は腐敗していきそうじゃが、それも1つの生き方よ。ただ、その生活をするのにも、ある程度の学力と健康的な体が必要不可欠じゃ。今のうちに鍛えておきなさい。願わくは、皆が何かしらの野心を抱いた飢えた若者たちであることを願うぞい。以上じゃ。ファンレターは目安箱に入れてくれ」

この最後の台詞がなけりゃ、最高の演説だって評価されてたんだろ

うな。

Side Out

Side ????

朝礼で大気を揺らすって、相も変わらず化け物だなこのじーさん。

アメリカとか各国の大統領が恐れるのも頷けるもんだ。

それにしても　いまの声を直に浴びても尚、平然としている奴が
やっぱ数人いるな。いくら2、3年がこれに慣れてるからっていつ
ても、微動だにしないってのはおかしな話だ。

川神百代、は規格外だから例外として外す。

1年にも怯えてはいるが、そんなに苦でもなさそうな奴もちらほら。

さて　いつ頃決行しようか

決闘で俺の強さを見せつけるなら　盛り上がりのある日がいいな。

例えば、他人が決闘をする日とか。

Side Out

Side 麗

「みんな！転入生の性別がどっちか賭けないか？」

昼休み、翔一がみんなに賭けの話を持ちかけていた。さつきから大和とこそこそやってると思ったら、そんなことたくらんでいたのね

「くらくらー！賭け事はいけませーん！」

そこへ真与ちゃん乱入。しかし直ぐにガクト君にどかされてしまった。うーん、微笑ましいわねー。

「札は1枚1,000円、配当はどっちも2倍、公平だろ？上限は10枚1万円までなー！」

みんな各々金額を翔一に渡して掛札と交換している。

そこでスグル君が予想をしようとしていたのを発見する。

「スグル君、あんまり無理な予想はしない方がいいわ」

「ん？なんでだ？」

「流れてる噂が男、このクラスは私が入ったから女が多い。確かに男の確率が高いわ。でも、私がここに入ったのと転入生がここに来るのが決まったのはほぼ同じだから、男女がどっちかって解らないでしょ？」

「ふむ」

「それに、胴元が翔一で噂が流れ始めたのは恐らく今さっき。タイミングが良すぎると思わない？それに大和が買ってない　ね？」

「なるほど、直江の情報操作か。だが、何でそれを俺に教えたんだ？」

「一子ちゃんと違って話が通じやすく助かるわ。」

「アタシはビジネス仲間にはちゃんと気を使うのよ。あと、これは誰にも言わないように」

「了解した。じゃあ女に5枚ほど買っておくか」

「失敗したら責任とってあげるわ」

「悪いな」

さて、後で大和と翔一に詰め寄ってみるか。

Side Out

Side 大和

「やっぱり男に賭けた奴が多かったな。作戦通り」

帰り道、俺はキャップと京と3人で家路に着いていた。

「大和の流言作戦が見事にはまったなー！転入生が女だったのは確定してっからな」

「何したの？」

あやしがつて賭けに参加しなかった京が不思議そうに尋ねてきた。
まあ説明してやるう。

「それは」

「自分のクラスじゃなくて、別のクラスにまばらに情報を蒔いたのよ。“転入生の性別は男”って真っ赤な嘘をね。そうすれば当然の

ごとく胴元は儲かる。そのために女と解っているアンタは極力目立たないように何も買わなかった」

「そうそう」

「え？」

おかしい。俺が京に説明しようと思っていたことが全部背後から聞こえてくる。

「つまりは、高確率で胴元が儲かるテキレーズに近いもの、でしょう？愛しい可愛い弟共」

「「麗！！？」」「

振り返ってみると、賭け札をピラピラとさせている麗が仁王立ちしていた。

「アンタらも悪知恵が働くわねえ」

「あ、いや、麗。これはその」

「ん？怒ると思ってる？特に怒りゃしないわよ」

「え？」

ケロッとしていて一切怒る気配を見せない麗が正直拍子抜けだった。

「賭け事は賭けた奴の自己責任。得しようが損しようがそれは自業自得、因果応報。ちよっと考えれば、アンタが買ってない時点で怪しいと思うでしょ？」

「そうなの？」

「もし京ちゃんが大和だったらさ、この賭け事の胴元側に一切関与していない立場だったら、どうする？」

「確実な情報を手に入れて確実に儲ける」

京に躊躇うことなく断言されたが、まあ確かに俺ならそうする。

「でしょ？何にもしないなんて怪しいと思わない？」

「でも、もしかしたら、確実な情報が掴めなかったのかも」

「噂が流れてたのよ？だったらなんとしてもそれを追求するに決まってるじゃない？でも大和はそんなそぶり一切見せなかったからね。まあ一番の決め手は、その2人が朝礼に行くまでの間、ずっと2人きりだったことかな。どうせ打ち合わせでもしてたんでしょ？」

なんだこの無駄な洞察力

「まあキツチリ稼がせてもらったからお咎め無しよ」

「敵わんな　なあキャップ」

「全くだぜ」

「川神の元お姉さんをあまく見ないことね」

やっぱり麗には敵わないな。まいったまいった。

「それを秘密にするための口止め料、って訳じゃないけどさ。今から仲見世通りで何か食べない？」

と、俺たちが麗の恐ろしさを痛感しているところで麗が提案をした。

「そんなにぼったくりやしないわよ。一品くらい、ね？京ちゃん？」

「ゴチになります」

「ま、しゃーないな」

「オツケー、じゃあ行こうぜ」

財布の中身の心配をしつつ、俺たちは仲見世通りへ向かうことにした。

第六話 4月22日・・・ハゲ、昇天す（後書き）

「ワン子と」「モロの」「作者の自己満、あとがきの「コーナー」「

「今日はアタシたちなの？アタシよく解らないんだけど」「

「まあ僕が頑張ってみるよ」

「おおっ、流石オタクね」

「なんか釈然としないね」

・我が生涯に一片の悔いなし・・・北斗の拳

「今回はこれだけね」

「このセリフだけ知ってる人もいるんじゃないかな？MUGENとかやってるならなおさらだよね」

「この人の名前聞いたとき初めカップラーメンかと」

「それダメ！！そのラーメン好きだけどダメ！！」

「感想、意見、お待ちしておりますー！！」「

ホントに、もっと感想ほしいです

気軽に書いてください

第七話 4月22日・・・見た目はお姉さん、知識は子供（前書き）

忙しいから合間合間で書いてたんですが

いつもより4000字も多くなるってどういづことなの？

第七話 4月22日・・・見た目はお姉さん、知識は子供

Side 大和

そんなこんなで仲見世通り。

「そついや麗、委員長には“お姉ちゃん”って呼ばれてるけどいいの？」

「あー、それはね。京とか大和とかは同等の立場で話したいのよ。昔からの癖でみんなを弟分とか妹分と思ってお姉さんぶることはあるけど、やっぱり同い年は友達同士の方がしっくりくるからね。でも、真与ちゃんは別よ。あれは私の“姉性本能”を揺さぶるわ。同い年として見ることなんて出来ない！もう妹でいいわ！」

麗が何かを熱弁している。委員長の身が案じられるな

「あ！おいおいあれ見てみるよ！」

何かを見つけたキャップが指差した方向に俺たちは一斉に視線を向ける。するとそこには

「はい、あーん」

「あーん、もぐもぐ、んー。お前に食べさせてもらうとより美味しいな」

後輩の女の子に葛餅を食べさせてもらっている姉さんがいた。また可愛い子見つけてイチヤイチヤしてるのか

俺たちが呆れていると姉さんがこっちに気付いた。姉さんが女の子にお礼を言つと、その女の子が別れを惜しんでいるみたいだ。しかし、姉さんは巧みに女の子を優しく振りほどいて耳元で甘い言葉を囁いてからこっちに寄ってきた。

「何て言ったのさ？」

「また一緒に食べような？その時は、お前も一緒に、食べてやろう」って。急に顔を真っ赤にして可愛かったなあ」

ガクトがいたら、「俺様にも食べさせてくれよ！！」とか言って姉さんに訴えかけそうなのが想像出来てしまう自分がいやだった。

「またおごってもらったの？」

「モモ先輩俺の事言える立場じゃないじゃんか！タダ飯おごってもらってるくせに！」

「このバカ！バンダナ！（バキッ！）殴るぞ！」

「ぐはっ！す、既に殴られ」

「ついげきのグラウンドヴァイパ！！（ゴスッ！）」

「げふっ！それただの木槌！」

キャップに対して姉さんの拳と麗の日曜大工とかで使われそうな木槌が襲い掛かった。麗はどこから木槌を出したのか、いやそれ以前に、何で麗は木槌を常備しているんだらうか。

しかし、突進からの打ち上げでつなげる2段攻撃を木槌でやるとは

「お前はタダ飯を食わせてもらっておきながら相手を楽しませなかった！」

「ちゃんと相手をしてあげなきゃダメに決まってるでしょうが！」

そして2人から同時に説教を食らうキャップ、実にシユールな絵だ
が決して侮れない。俺もこうならないように気をつけよう。

「だったら俺は大和とかと飯食ってた方がいいや」

「そうかい」

「 やっぱ あの2人 出来てる (ヒソヒソ) 」

「 私の告白 断ってた理由 (ヒソヒソ) 」

「 そこ！妙な会話をするな！！ 」

「 何々？何の話？ 」

姉さんと京が（主に俺の世間体に対して）好ましくない話をしているところに麗が突撃して行った。

「 ええ、！！？ 」

と、麗から聞いたこともないようなすごい声が聞こえた。麗の顔を見ると、あまりの驚きに顔が真っ青になっていた。暫くすると顔が段々と紅潮してきて爆発したように真っ赤になった。

「な、なななな何よそれ！！お、おおお、おおおお尻！！！！
？お尻に挿すの！！？何をお尻に挿すのよ！！！！？」

「あれ？麗つてB.Lの耐性ないの？ヨンパチにホモを差し向けたよ
ね？」

「び、B.Lが何なのか解んないけど、ホモってアレでしょ？男同士
でお尻を叩きあうアレでしょ？けど何よ！！お尻に挿すつて！！！」

麗、さつきからお尻お尻うるさい。

「麗、ひよっとして、知識少ない？」

「な、何が？」

「おい麗、お前赤ちゃんがどうやって出来るか知ってるのか？」

「馬鹿にしないで！それくらい知ってるわよ！！！」

まあ、流石にこの一般常識くらいは知っているよな。知っている、
よな？

「どつやってだ？」

そこへ姉さんがさらに問い掛ける。知っている　よ、な？頼む、知っていてくれ。

「そ、それは　き、キス、とか、胸を、じかに揉まれたりすると、って何恥ずかしいこと言わせんのよ!!」

周囲に冷たい風が吹き荒れた。

「う、麗？それ、本気？」

いつもクールな京にも焦りが見える。

「え？何がよ？」

「おい舎弟、麗って性の知識全く無いんじゃないか？」

「ゴメン、俺もこれには予想外」

「ひよっとすると、キャップくらい知識がないのかも」

俺と姉さんと京で麗の性知識に関する緊急会議を開催する。そこで、姉さんが麗に簡単な質問を1つしてみることにした。

「おい麗、お前男の股間に何がついてるか知ってるか？」

「排泄器官でしょ？他に何かあるって言うの？」

「「「重症だ！」「」」

俺と姉さんと京の判決、“麗の性知識は小学生以下”。

「京、麗にちよっとずつ性の授業をしてあげなさい」

「ラジャー！」

「何よ！？ちゃんと赤ちゃんの作り方知ってたでしょ！？」

「公園でカップルとかがキスしてるの見たこと無いのか？」

「それはあれでしょ？薬飲んでるから大丈夫って奴でしょ？」

「キスの度にピル飲んでたら死んでしまうわ！！」

重症も重症、早めに気付いておいて良かった。社会に出るまでに一般人程度の性知識がないと大変なことになりかねん。まさか普段お姉さんぶってる麗にこんな1面があったとは

「キスキスって、よくそんな恥ずかしい言葉が連呼出来るわね」

「お前のお尻連呼よりマシだ！！」

今日もドタドタ騒がしかった。ちなみに、これから麗が京に性の手ほどきを受けて逆に常人より性に詳しくなっていくのは言ってもない。

Side Out

Side 晴蘭

「よし、そんじゃ今日は1つ面白い技教えるね」

「ホント!？」

今日は百代がいないし、ここ最近は一子の相手も疎かだったのもあって、一子の特訓を手伝うことになった。

場所は川神院から離れて多馬川の河原で行うことにした。ここなら結構のびのびとやれるからね。

「じゃあ薙刀貸して」

ボクは一子から薙刀を受け取る、っと。結構重いもんだな。それに持ち手が一子の手の形に磨り減ってる。

一体どれだけこれで素振りをしたんだろうか。一体どれだけ努力を積み重ねてきたんだろうか。毎日やっていないとこんなことにはならない。

「よし、じゃあいくね」

一子の努力に感心するのを中断して薙刀に意識を集中する。薙刀を、体の一部とイメージする。

「あれ？刃先がぶれて？」

流石、目がいいな一子。

「七天流剣術、土塊つちくれの型、睚鳩みぎこ！」

ボクは薙刀を横に勢いよく振るう。けど、一子は首を傾げるだけだった。

それもそうだ。振るったところには何もなくなただ空を切っただけなんだし。

「？終わり？」

「うん、終わりだよ？」

「何もなっていないわよ！？ただの横薙ぎじゃない！！」

一子がウガーツ！と詰め寄ってきたのを胸で抱きとめる。相変わらず犬みたいだな、これはいい。

「よく見ててよ、ほら」

「がっ?」

ボクが指差した方を一子はじっと見つめる。そこはさっきボクが薙刀を振るった空間。そこにボクは1本の木の枝を拾って投げる。

バキン!!

すると、何も無い空中で木の枝が弾けとんだ。

「え!?!」

「1回しか切れないけど、斬撃の振動を刃から切り離して攻撃する。“波動の剣撃”って称されたこともある技みたい。慣れない薙刀でやったもんだから上手く飛ばなかったけど 本当はそこら辺に生い茂ってる雑草をズバッ!といくつもりだったんだけどな」

「す、すごいわ でも、こんな技アタシには」

「いや、川神流が使えるなら多分これも練習しだいで出来るようになるよ」

「それホント!?!」

ボクの言葉に一子は目を輝かせていた。うん、こつこつ目をしてくれどと教える側としてもやりがいがあるね。

「この技の特徴はね、相手に振動を伝える土気っていう気を使わなきゃいけないんだけど　偶然なのか、川神流の“蠍撃ち”、あれと土気の振動を利用する技は酷似してる。これは百代が身をもって証明してくれた。それと、これはもともと刀でやる技で薙刀でやったの初めてだから、まだ名前のない新技として扱ってもいいかもね。それに薙刀の技は七天流には存在しないからね。まあ七天流は無駄に重い槌とか、異様に長い槍とか刀を使う技もあるから、無理矢理薙刀で出来ないこともないんだけどさ」

ペラペラとしゃべり続けている途中で、一子の頭から段々と煙が上がってきていた。ショートしかけてるねこれは　早いところ話を切り上げよう。

「とにかく！一子は薙刀に関してはボクより扱い上手いし、それに蠍撃ちは出来るでしょ？やってみる価値はあると思うな、どう？」

「やるわ！」

さっきまで脳の容量キャパが超えかけていたのに、一子はもう復活していた。立ち直りの早さは長所と言うか、単純と言うか。

「じゃあまずは気のコントロールから　とは言っても、一子は蠍撃ちが使えるみたいだから下準備はバッチリなんだけどね」

「じゃあ何をすればいいの？」

「薙刀を両手で掴んでドツシリ構えて、薙刀と感覚を共有させるように意識を集中させて、それを自分の体の一部だと認識を改めるんだ。原理はまあ何と云うか、その元となった物質に宿っていた生命力に再び命を吹き込むとか、この世の万物に共通する脈に自分の気を流し込むとか、色々言いようはあるんだけど　気を再び送り込むことでその物質はまるで自分と同化した様な感覚になってだね」

「えっと　うーん　？」

イカン、遠回しに言い過ぎたか。また脳容量オーバーでショートしかけてる。

「ようするに！薙刀が自分の腕みたいに思えればよし！それで蠍撃ちが出来れば完璧！！」

「解ったわ！！」

勢いよく返事をする一子を見て解ったこと、一子に指導する時は理屈的な原理より、感覚的な方法を教えたほうが手っ取り早いみたい。

それと、どうやら一子は武としてのセンスよりかは、“こちら側の

気”に関してのセンスの方が有りそうだ。

「むむむ」

一子は薙刀を両手でしっかりと持って腰を落として構えたままうなっていた。両目を閉じているところを見ると、相当集中しているね。さて、1回目どころまでいけるか。

「ぐぬぬぬ」

10分経過。

「ん、くう」

正直、驚いた。

確かに七天流は感覚がものを言う場合がある。火気に関して原理を上手く言え、なんて小難しいことは、分家の当主でも相当文献を読

んでないと答えられないことだし、恐らく、現代で七天流を使える者の9割強の人口は、原理のこれっぽっちも理解していないんだろう。

それにしても、一子の感覚、センスには驚かされた。

ただ武器に気を纏わせるくらいだったらそれなりに闘える武人にももっと言えば腕のいい職人なんかでも、自分の道具や作品に気を込めることは無意識に出来てもおかしくはない。

ただ一子はその1段階、いや、3段階は上のテクニクをやっただけで一子はその1段階、いや、3段階は上のテクニクをやっただけでいる。

時間はかかったとはいえ、初めてでほぼ完全に薙刀に気を纏わせている。それとても自然で淀みのない気、普段自分が無意識に纏っている気と何ら変わりのないような気だ。

恐らく、このまま維持できることが出来れば　　かなりいい線いけるはずだ。

思ったよりも数倍の早さでこのステップが終わった、これは期待できるね。

「　　ぜ、ぜえええええええええい！！！！」

と、一子が目を見開いて薙刀を上から勢いよく振り下ろした。

すると、約20メートルほど先の川がいきなりドッパン！！と爆

ぜた。

一子と爆発地点を結ぶ直線上に生えていた雑草も、見事に刈り取られていて地面がむき出しになっていた。

「うおおおー!?!」

「は、はあ　ふ、へへ　どーだ、せーちゃん　でき、た、

よ　「

「おっとー!」

一子がまるで糸の切れた人形のように倒れそうになったので慌ててそれを支える。思ったよりも一子の体は軽かった。

「なるほど、全力でやったんだね？武器に気を意識して宿してそれを飛ばす、なんてのは気が一気に消費されるからね。でも、初めてでここまで出来るってのはホントにセンスがいいんだよ？これなら明日にはもっとレベルを上げても　ん？あれ？一子？」

一子からの返事がない。これでは一人でブツブツエア友達に語りかけているみたいで危ない。

「　　zzz　　うー　　カルビ　　ハラミ　　17人前

「

ボクの耳に可愛い寝息と、聞いただけで胸焼けしそうな単語が飛び込んできた。夢の中とはいえ、まさか一人で食べるつもり？太っちやうぞー？

「寝ちゃったか。まああれだけ一気に気を消費すれば当然の結果かな？じゃあ今日はここまでにしますかね。よいしょっ！」

寝ている一子を背中に乗せボクは河原を後にした。

今日は一子の修行がかなり早く終わっちゃったけど、一子はそれなりに楽しんでたように思える。意外と可愛い寝顔だし、満足そうに微笑んでいるから大丈夫そうだね。

それに、一子は七天流の使い手としてはかなりいい素質を持っている。一子の“劉土”の適性率は76%、か　ボクより高いとは恐れ入ったよ。

けど、これは一子には言わないでおこう。一生懸命努力をしている人に、七天流のような邪道な方法で強くなってほしくない。御霊宿を使ったら確実に一子は強くなる、今の修行量なんか要らなくなるほどに、今までの修行時間が全て水泡に帰すほどに。

だから、ちよつとずつでいいから、ボクが修行を見てあげよう。

ボクが逃げ出した、“努力”と言う道を歩き続ける一子には、絶望なんてしてほしくないから。

「 むにゃむにゃ 石焼きビビンバー テールクツパ
ZZZ
」

夢の中でどれだけ食べるのだろうか。

そう言えば川神の名物に焼き肉があったな。ボクもお腹減ってきた
今週末にでも焼肉食べに行こうかな。一子と行ったら財布が
悲しくなりそうだから 誰と行こうか？

Side Out

Side 大和

麗の所持している性知識が皆無だったという衝撃的な事実が発覚して数時間後、俺たちは島津寮へと戻って自室で各々やることをやっていた。俺は日課のトランプいじり、最近シャッフルがさらに滑らかなになってきていい傾向にある。

なんて、自分の腕のよさに浸っていると、コンコン！とノックの音が響いた。

「どつぞー、開いてるから」

「あ、あのっ！！！失礼します！！！」

ものすごく勢いよく扉が開けられたかと思うと、刀を持った1年生がズイツ！と詰め寄ってきた。正直、顔もなんかすごい形相だし刀が威圧感バリバリである。なんか後ろからオーラが出て見えて怖い。

「こ、これ、つまらないんですけど　実家から送られてきたもので」

そう言っって1年が差し出してきたのは、お弁当サイズの風呂敷だった。

「あっ！違う！！その、つまらないものって言ったら失礼ですよね！えーと、いやそうではなく！えーとえーとえーと！！！」

「落ち着けまゆっち！まゆっちならいける！クマだって倒せる！物理的に1000匹イケる！！！」

なんか、1年が1人でブツブツと声色を変えて呟いている。こう、なんて言うか、スツゲエ痛い。

「で、でも直江さんポカーンとしちゃってます！ここは戦術的撤退を！！！」

「何言つてんだよまゆっち！ここで1歩を踏み出さなくていつ踏み出すって言うんだYO！！！」

「ふっ、踏み出す　！！1歩を！！！」

「そつだ　今こそ勇気を振り絞って踏み出すんだぜ　友をツ！
！明日をツ！！切り開くんだアツ！！！！！」

「クツ！出来ない　　後1歩ガツ！！！」

「動け、動いてくれよまゆっちい！！今動かなきゃ、今やらなきゃダメなんだよ！！アクセル全開で全てを振り切るんだあつ！！！！！」

そろそろ、止めたほうがいいかな。というか、俺の部屋なのに俺が隅に追いやられるってどうということなの？

「大丈夫ですかね？さつきからお1人で（何故か敬語）」

なんてツツコンでみると、1年は顔を真っ赤にして息を止めてしまった。

「しっ、しししし失礼しますう！！！！！」

頭を膝に打ち付けん勢いで2、3度深くお辞儀をした後、だだだだ

っ！！と廊下を全力疾走して1年は2階へと消えていった。

その後、ゲンさんが俺の部屋にやってきた。どうやらゲンさんのところにもあの1年は出没したらしい。2人で話し合ったが結局何が目的だったのかは解らずじまいだった。

その話し合いが終わったらゲンさんがケーキがあるといって分けてくれたうえに紅茶まで入れてくれた。けど全部“勘違いするな”だなんて、ホントにツンデレなんだから。

Side Out

Side 由紀江

はうづ、またやってしまいました

あんなに人形相手に物を渡す練習をしたというのに
不甲斐無いです
これでは父上に顔向けできません

しかも、肝心の目的を果たせず終わってしまいました。

麗さんについて、少しでも聞きたかったのに。

どうやらこの寮の先輩は皆さん麗さんと同じクラスのようすしいいなあ

うう　麗さあん、助けてくださあい　麗さんは私の事忘れちゃったんでしょうか　早く昔みたいにおしゃべりたくさんしたいですよお

あの時、麗さんが話しかけてくれたときは天にも昇るような気持ちでした。

きっかけはかなり意外なところからでしたけど　ああ、あの頃が懐かしいです

麗さんもここに住んでくれれば話は早かったのに、せつかく部屋が1つ開いてるんですから。

はあ、早く友達がほしいです

S i d e O u t

S i d e 晴蘭

みんなが寝静まった深夜2時、やはり目が覚めてしまった。

最近、気を使いすぎちゃったかな　感情のコントロールが難しい。
感情が昂りすぎて抑えるのが困難だ。

「　七天流、畔柳」

自分の気を、気配を完全に遮断する。自動防衛オートガードさえ使わなければ、
自分を外界から隔離するのは造作もない。

おじいちゃんや百代に悟られないように川神院から抜け出す。

ちょっと、風に当たろう。そろそろ疲れてきた。

ゆったりと漂うように覚束無い足取りで歩いて、多馬側川の河原までやってきて土手に大の字で倒れこむ。

下を見ると、一子が削り取った地面が見えた。一子の寝顔を思い出してちょっと癒された。

「ふう　」

(主、大丈夫そう?)

頭の中から、楼閣の心配そうな声が控え目に聞こえてくる。

「なんとかね。一子に教えてるうちは大丈夫だったんだけど、まあ今はお前の気に触れてるから幾分楽だよ」

（僕と主、本当に相性良すぎだよ。適正率尋常じゃないもん）

「100%超え、恐れ入った？」

（穿火と劉土に関しては50%台のくせに、典型的な“伝承者”だね）

“伝承者”、七天流の巻物との適性率が100%を超えている特異な人物のことで、その力は巻物に封印された七大闘王と比肩出来るほどらしい。ボクは“楼閣”の“伝承者”らしく、“楼閣”が主導権を握っていれば全盛期の楼閣の力が使えるだろうが、他の穿火や劉土が主導権を握っている場合は、火気も土気も上手く扱いきれない。

もともと、自分で火気と土気のコントロールに修行を費やせば、それなりに強い力が使えることには使えるのだが、適性率が100%を超えてしまっているのは、適性率が一般の者と同じ量の修行の必要がなくなる。多少は修行をしないと鈍ったり扱いづらくなる点は変わらないが。

初代咲昏碎聖や3代目咲昏碎聖は複数の気を完全に使いこなせたらしいがそれは例外だ。昔は巻物を使わずより密度の高い修行が出来たみたいだし、現代では同時に2つの巻物をマスター出来るのも至難の技だ。読む分には問題はないみたいだけど、全てを極めるには相当な修行がいるらしい。

(闇に浸かり過ぎると、後々怖いことになるよ?)

「今更だよ。何年来の付き合いだと思ってるのさ」

(そんなの忘れちゃったよ。結構長い付き合いだからね。20代目、主のお父さんが亡くなってからだもんね)

前の楼閣の主は、七天流前総代、20代目咲昏碎聖、ボクの父さんだった。

秋星家が1人の悪魔によって襲撃されたあの日、父さんは楼閣を使ってボクに御霊宿をした。

その後直ぐに父さんは死んじゃったから、そのままボクが主になったわけだけど、ひよっとしたら父さんは自分の命と引き換えにボクに楼閣を渡したんじゃないかと思う。

けど、何度聞いても楼閣は御霊宿の最後の条件、“適性率が100%を超えた“伝承者”に御霊宿をしたらどうなるのか”を教えてくださいなかつた。それが楼閣と父さんとの約束らしい。

“時期が来たら、教えてあげる”といつもはぐらかされてしまう。

「もう後戻りは出来ないくらい闇に飲まれてるよ、ボクは。みんなに見せたくないくらい」

(ボクを使わない理由って、それ?)

少し楼闇が不機嫌になりそうだったから直ぐに訂正する。

「違っつて、前に言ったでしょ? お前は切り札だもん。そんなやたらめったら使ってたら意味ないよ」

(だからって、こんな深夜に僕と修行しなくても)

「闇を使うなら夜がいいでしょ?」

(本当に、無茶だけはしないでよ)

「魔王様も心配性だ」

(怒るよ?)

「ごめんごめん、それじゃ やろつ。七天流奥義」

今日も静かに、ひっそりと。誰にも気付かれず、悟られずに修行をする。

真っ暗な夜の闇、照らすのは星と月の光のみ、この辺りまで来ると街灯もなくていい。ひんやりとした深夜の空気が体に染み渡る。

自分の体が闇を求めているのがよく解る。闇もまたボクを求めているのが解る。このままいけば、ボクの体にもいずれ異状が出始めることは明確だった。

でも、そんなの構うもんか。

復讐を成し遂げるためなら、この身がどうなるうと、構うもんか。

S i d e O u t

S i d e ? ? ?

おかしい。

確かこの家に保管されてたはずなんだがな

「おい女」

「ヒッ!?!」

足下で転がってる着物姿の侍女らしき女を足蹴にして軽い質問をする。

「翠風すいふうの巻はどこだ」

「そのような、ものは 知りませ

」

ドスッ！

「がはっ！？」

「鳩尾に蹴り1発、痛いか？やめてほしかったら、吐け。吐かないんだったら、50回でやめて諦めてやるよ」

ドスッ！

女は腹を押さえてのた打ち回る。

「ぎゃっー！」

「2発」

ドスッ！

「えーと、何回目だったっけ？まあいいや、数え直し！1発！」

ドスッ！

「あ、へあ おじ」

「ん？あっちゃ、壊れちまったか。まあいいか。そこで隠れてるちよっと強そうな奴に話を聞いてみるか」

白目をむいて泡と一緒に血を吐き出してる女を適当に蹴り飛ばして俺の近くから退場させる。

「そのこの柱の後ろにいるジジイと若造、出てきやがれ」

「貴様、ここが麻陰流あさかげの本家と知っての狼藉かあ！！！！」

柱の裏からそれなりに鍛え上げた体をした30代ぐらいの男と、長い髭が1番初めに目に入る小さなジジイが出てきた。なるほど。感じたとおり、確かに強そうだな。

「知らねえよそんなこと。俺は他流派の武術にや興味がないんでね」

「ふざけるな!!」

「んー？今、テメエは何に対して怒ってやがんだ？俺がここの道場の看板を叩き割ったことか？そこらへんにいた女を片っ端に蹂躪したことか？それとも、この女のどれかがテメエの伴侶だったか？」

「き、つさま!!!!」

お、案の定挑発に乗ってきやがった。いいねえ。こついう力量も解らず無鉄砲に飛び出してくる馬鹿、嫌いじゃない。

「麻陰流奥義!!頭碎烈火!!」とうさいれつか

男は縮地のような技で一瞬で俺に詰め寄り俺の腕を掴んだ。どうやら投げ技らしいが。

「ガッ

」

「俺に触った事がテメエの“死因”だ」

一瞬、男の体から光が放たれたように見え、男は俺の腕を掴んだまま硬直して動かなくなってしまった。まあ、コイツは死のうが生きようが、本命じゃないからどうでもいい。

「そのジジイ、ちょっと聞きたいことがあんだよ」

「翠風の巻か？ならば残念じゃったな。ここにはそんなものはありませんわい」

「じゃあ、どこにあんのかな、それ。教えてくれたら命だけは助けてやるぜ？」

そう言っつて譲歩の案を提示してやる。

「たわけ、腐れ外道めが。貴様にくれてやる情報なぞ欠片もありやせんわ」

譲歩案があっさりと弾かれてしまった。

「命を無駄にしたな老体」

「ワシと若頭がない間に孫娘が、そして今日の前で若頭も殺された。この様子じゃ奥のワシの可愛い子供たちも家族も死んでおるじやろつて。ワシだけ生きても何にもならん」

「うーん、死んだつて言うか、半殺し？適当に内臓を破裂させただけだから生きてるかもよ？」

「嘘は無駄じゃぞ小童。ワシには解る、奥から、“死”の匂いがする。もう誰一人、生きておらんじやろつ。」

チツ、ばれたか。

「スマンが、殺すなら1度経を読んでからではいかんかのう?」

経、と言う言葉に反応してしまうのは最早癖だ。

「むしろ、読んでくれや。手間が省ける」

「手間、じゃと?」

「ああ、これでも俺は元は僧でな。生きてる奴は心底どうでもいいが、殺した相手にはちゃんと経を読むのが俺の主義だ。おかげで頭の中には殆どの宗派の経が入ってる。」

「不気味な奴じゃ」

「よく言われる」

その言葉を最後に、ジジイは経を唱えだした。涙を流しながらも決して経は途切れさせることなく、しっかりと読み終わったジジイには敬意を評そう。

「じゃあな、ジジイの分も読んでやるから安心しな」

「余計な世話じゃ」

そう言ったジジイの泣き腫れた顔はそのままに、頭と体を手刀で斬り離す。

ゴトリ、と落ちたジジイの首を取って道場の神前に置いてやる。

「確か、さっきの経は」

ジジイが読んでいた経を思い出す。確か浄土真宗の“白骨ノ御文章”はっこくごぶんしやうだな。これを読むのも久し振りだ。還骨の時の経だったがまあ問題ないな。

「夫人間ノ浮生ナル相ヲツラツラ觀スルニオホヨソハカナキモノハ
コノ世ノ」

それにしても、無駄足か。

翠風の巻は加賀にあるって聞いたんだがな

仕方無い、気を探って地道に探索していこう。あんまり沢山経を読むと疲れて仕方がない。

「さて、久々に一家皆殺しだ　またでかいニュースになっちゃうな。しょうがないから、“自然災害”ってことにしておこう」

その日、加賀のとある武道の道場に巨大な雷が落ちた。

第七話 4月22日・・・見た目はお姉さん、知識は子供（後書き）

「晴蘭と」「百代の」「作者の自己満、あとがきのコーナー!!」

「いつも隣にいるパーソナリティーはハゲだったからなんか新鮮だな」

「あのラジオ、井上君雑な扱いじゃない?」

「そうか?結構いい待遇だと私は思っているが」

「え?そうなの?」

「そうだろ」

・ついできのグラウンドヴァイパ・・・フロントさん（FF11）

「ダメージはさらに加速した」

「にしても、このフロントって強いのか?だったら1回私と戦ってほしい」

「さんをつけるよデコ助野郎」

「ちよ、それAKIRA!」

・男同士でお尻を叩きあうアレ・・・ガチムチパンツレスリング（GPW）

「歪みないな」

「歪みないわね」

「こつちの世界は 無理して知る必要は無いんじゃないか？」

「釣られたことがある奴は頑張れ、気をしっかり持つんだ」

・今動かなきゃ、今やらなきゃ・・・新世紀エヴァンゲリオン

「あのシーンは胸が震えたよ」

「どこのシーンだ？」

「式号機が量産機に咀嚼されていくとこ」

「お前、何でそんな小学生がトラウマになるようなシーンを持つてくるんだ」

・アクセル全開で全てを振り切る・・・仮面ライダーW

「コイツのトライアルフォームと闘ってみたいな」

「百代、コイツ100mを最速で0.27秒だって（マシンガンスパイク発動時データ）」

「たしかコイツ雷避けてたな　ウズウズ　」

「期待しないで！どうせ出てこないから！」

「感想、意見、お待ちしてまーす！！」

感想、切望しております。じょんぺいです。

ちよつと時間が無いから今回は内容が全然ないだろうと執筆していたら、

10000字を超えたww

いつもは6000字、どんだけインフレーw

追伸、8月までに第一章を台本形式から変更したいと思っておりますのでご了承ください。

第八話 4月23日・・・麗の性能、晴蘭の苦勞（前書き）

遅くなりましたー

台本形式修正につき更新遅れ気味で申し訳ないですー

第八話 4月23日・・・麗の性能、晴蘭の苦勞

S i d e 大和

今日は人間力測定だ。現在は男子はみんな体育館で身長や体重、握力や胸囲を測っている。

数値が成長した者もいれば停滞している者もいて、満足している者もいれば不満を抱える者もいる。

「測り終えた者からグラウンドへ移動するように。女子がスポーツ測定をしている、それが終わったら女子と交代だ。」

「女子が 計測中だとお!？」

小島先生の一言をきっかけにガクト、ヨンパチを筆頭とした男子たちがすさまじい勢いでグラウンドへ向かっていった。やはり、思春期の男子はがめつくものなのだろうか。

そんなことを考えながらグラウンドへ向かう俺もまだまだ若い。

俺がグラウンドに着いた時には、既にヨンパチが女子をただひたすらに激写していた。なんと欲求に忠実な学生だろう。麗に畏にかけられたくせによく懲りない。

「いやー、それにしてもうちの女子はレベルが高いなー！」

確かにそれには同意する。クラスの何人かの男子も俺同様に頷いている。

「恐怖の武神の妹であるスポーティー娘の川神一子、我がクラスの頑張りや委員長こと甘粕真与、クラス最高級の美人で大和の女の名京、付き合いたい&やりたい女No.1の小笠原千花。これだけ揃っていた上に、さらに恐ろしい人材がやってきた。」

「京が俺の女じゃないことは後で議論することにして、それはやっぱり」

「自称、元川神のお姉さんの峰槻麗だ」

みんなの視線が一斉に麗に集中する。

そのスタイルに男子どもの飢えた心は釘付けにされてしまう。なんと言っても胸がでかい。これを視界に入れない男子はまずいないだろう。ひよっとしたら姉さんと張り合えるスリーサイズなのかもしれない。

体操服を突き出さんとしている豊富な双丘と、むちむちになってヒップを強調しているブルマがなんと　　って、なんで俺は評価をしているんだ？

「おーい、次は麗だよー」

「りょーかい京！直ぐ行くわ！」

なんてことを思考していると、麗が100mを走るようだ。そして鳴り響くスタートの合図と鼻を突き抜ける火薬の匂いが立ち込める。あれ？意外と麗遅い　まあそれでも一般の女子学生としてはかなり早い部類なんだが、ワン子と比べると遅く感じてしまう。

「タイム、12秒01」

「うーん、やっぱり伸びないわね」

「でも、麗って確か　かなり早く動けた気がするんだけど」

「そつえば、モモ先輩と決闘した時、異様に早かったよね」

「だってあの時は重りを付けてなかったからね。今は日常生活分の重りつけてるから仕方ないのよ」

話に耳を傾けてみると重りやら何やら聞こえてくる。

「纏元流当主ともなるとね、決闘とか以外はそれなりに重りを付けるのが義務付けられてるのよ。もう肩が凝って仕方ないわ　もっ

と気楽にやらせてくれればいいのにな」

「じゃあ、重りを外したらどれだけ早いのか？アタシよりは早いよね？」

「そうね 全部外したことは無いから解んないけど 百代と闘った時の重りなら100m1秒かからないんじゃないかしら？」

「モモ先輩並だね 恐ろしい」

不吉な会話が聞こえてきた ことから辺で退散しよう。

その後、キャップが陸上部と勝負をして圧倒的に勝利したりと俺たちのリーダーぶりを見せ付けてくれた。

S i d e O u t

S i d e 麗

「ふむ、いいスタイルだな。そのスタイルの維持の秘訣を習いたいものだ」

「そんな先生やめてください！腰回りは先生の方が細いんですから自信持つてくださいよ！」

「はっはっは！なあに、ちょっとしたひがみと言っ奴だ。気にするな。」

スリーサイズを先生に測ってもらったけど　なんか胸とお尻を重点的に見られて困った。胸が大きいと肩が凝ったりと結構疲れるんだけどねー　まあその分武器を隠せる場所が増えるからいいかな。

「お姉ちゃん！握力を測りましょー！」

と、自分の胸を触って確かめっていると、真与ちゃんが握力計を持ってきてくれた。それは非常に微笑ましいしありがたいんだけど

「ゴメンね真与ちゃん。アタシ、それじゃ測れないの」

「え？」

「小島先生ー！学長から預かり物ありませんかー？」

「む？おお、預かっているぞ」

そう言っつて小島先生は赤い風呂敷で包まれた何かを手渡してくれた。それを不思議なものを見るような顔で真与ちゃんが覗き込んできた。

「それは何ですか？」

「これ？握力計よ、特注のね」

アタシが布を取り払うと、真っ黒な敵つい形をした握力計が出てきた。真っ黒なだけで何も変わってないように見えるけど、メーターの最大数値が奇妙なことになっている。

「 300まであるんですけど、これ」

「これくらいがいいのよ」

真与ちゃんがこの握力計に驚愕しているのを横目に握力計を右手に持つ。

「 スウー ふっ！！」

右手に思いっきり力を込めると、メーターの針がゆっくりと動き始める。アタシは限界まで力を入れて一切力を抜かない。

「ひ、100を越えましたよ!？」

まだまだ、アタシはこれじゃ満足しない。

「150、170　バカな、まだ上昇するの？」

「え、なにこのメーター!？」

そこに京と一子ちゃんもやってきた。

「　　んう　　はあっ!どづよ!?!」

メーターが指し示した数値は“283”、よし、前測った時より5も上がってる。

「　　私、ひよつとして麗が1番危険なんじゃないかって思った」

「　　奇遇ね京。アタシもそう思ったわ」

Side Out

Side　晴蘭

「　　で?何なの?」

授業が全て終わり、今日はちょっとゆっくりして帰ろうと思ってい
たら、百代に呼び止められて川神院に拉致られた。まあ、要するに
一緒に帰ったってことと同義、だと思う。

「何って、見れば解るだろ？」

「いや、今百代が持っているのは確かに見覚えあるよ？だってそれ
ボクの武器だもん。そうじゃなくてさ、なんでそれを百代が持っ
ていて胴着を着てるのさ？」

「そんなの決まっている、前回の未消化分を完全に無くすためだ」

その話を聞いてようやく納得した。前回の穿火との闘いが不満だっ
たんだろう。まあ確かに、期待させておいてそのまま放置した感じ
に近かったし

「断れそうにないね」

「話が解るじゃないか」

「断れないよ、身内の問題だからね」

かと言って、ボクもまだ全快じゃない。穿火がエネルギーが尽きる
まで闘ったもんだから、火気がうまくコントロール出来なくなっ
て、せっかく試したかった“アレ”も試せない。だったらここはアイツ

に任せよう。

「七天流奥伝、劉土」

それじゃ、後は任せたよ。

Side Out

Side 百代

「お待たせ」

晴蘭の気配が変わった。この気配は以前にも感じたことがある、私を楽しませてくれたアイツだ。

「まず、先に謝っておく。あの単細胞が迷惑をかけた、ゴメン」

「いや、それなりに楽しかったから問題はない　　が、やっぱり不完全燃烧だな」

「ゴメン、ぼくら、魂になって封印された時、かけられた制約があるから、一定以上の力を使うと、“禍罪”^{まがつみ}っていう負荷がかかって、

うまく動けなくなつて、意識が保てなくなる」

なるほど、あの時の穿火の体温が下がつたのはその禍罪とやらが原因か。

「力の配分を間違えなければ、そうそう禍罪は発生しない。あの馬鹿、体力があんまりない状態でエネルギー使い果たしたから、完全にダウンした」

「あー、やつちやつたつて奴か」

「じゃあ、お詫びの決闘、やろうか」

劉土が手に持っているのは、昨日穿火が使用していた真っ白な棒だった。

「なあ、それ何なんだ？」

「これ？これは、“雛”^{ひな}。七天流開祖、初代咲昏碎聖が樹齡2000年以上の桜の木から作った武具、7つの武器に変化する特殊な術が施されてるらしい」

「七大闘王に7つの武器、それに気概念が7種類あるとなれば、お前ら1人1人に得意な得物があるようだな？」

「そういうこと。七天流闘王武装、砂斬刀」^{いさしのせんとう}

劉土は棒を降り下ろすと同時に、その持ち手を棒の末端に動かし両手でしっかりと握るっている。

すると、地面から浮いた岩が持ち手の近くに引っ付いてまるで日本刀の鐔のように形作り、鐔から棒先に向けた残りの部分に舞い上がった砂が纏っていき、1本の長刀へと形を変えた。

「お前の武器は刀か。確か穿火は戟、いや、斧だったな」

斧のくせに、何故か槍術を使っていたのが気になったが

「土気は何故か土ってイメージが強いみたい、だけど、それは西洋のドワーフとか、ぼくはあくまでも刀、長刀、シンプルに、スマー
トに」

「準備はいいかな？」

今日の審判はルー師範代だ。ジジイの方は何か調べごとがあるとかで県外に行っているらしい。

「それでは、始め！！」

「せいー！」

劉土は両手で持っていた長刀を左手だけで持ち、右肩に担ぎ上げる。かつぎ面の構えで素早く迫ってくる。

だが、あの構えは確か威力が高い分初速が遅い構えのはずだ。となると

「力勝負か！面白い！」

私は腰を落とし脇を締め、これでもかと力を加える。これなら刃先に負けることなく対抗できる。

しかし、不意に襲ってきた感覚。

本能が告げていた。あれに触るのはマズイと。

私は本能に従いすぐさま構えを解いて刀を避けることだけに神経を集中させた。

「やっ！」

劉土は右手で刀の柄尻を掴み、長刀は予想以上の速度で勢いよく振り下ろされた。

その振り下ろされた刃が地面に刺さる。

いや、刺さったんじゃない　これは　！

「たたつ切られている　それも触れただけで　！」

「ご明察。この砂斬刀の特性は、言うなれば、チェンソーとか言う伐採道具に酷似している。刃を形成している非常に細かい砂が、常に絶え間なく、素早く、振動している。触れただけでスッパリいける」

「でたらめだな」

「貴方こそ」

「じゃあこちらも行かせてもらおう！川神流、蛇屠り！！」

まずは縮地で劉土の背後に回りこみ、その勢いを保つたまま足下を狩りとるように蹴りを低く繰り返す。

「奥義、土崩瓦塊」

が、足が地に着いたまま動かなくなってしまった。この感覚は覚え

がある

「後ろ」

劉土は長刀を振り向きざまに右手で横へ振り払おうとしている。イカン、食らったらずい！

「川神流、蠅撃ち！！」

私はあえて、自分の太ももに自分の拳を叩き込む。以前のコイツとの闘いでコレの対処法は把握済みだ！

「足に自ら攻撃を、でも、瞬間回復があるなら、悪くない方法」

振るわれた長刀をギリギリで回避する。

「じゃあ、次は砂斬刀コイツを攻略してみてよ」

劉土は地面を救い上げるように長刀を下から上へと斬り上げ、おまけとばかりに横にも長刀を振るって地面をえぐり取る。

すると、刃の振動で砂や石が飛礫ついでとなって私に襲い掛かってくる。

しかも、その飛礫全てに振動した砂が付着している。これはあたら意外とやばそうだ。

「クツ！」

こんな弾幕じゃ避けたりかわしたりすることはおろか、全部受け流すのもまず不可能。

だったら、打ち落とすしかないな。

「川神流、致死蚩！！」

私も負けじと気弾を飛ばして飛来してくる石の弾丸を打ち落としていく。

ある程度弾き落としたところで少しの被弾は覚悟で劉土に突っ込む。

「おっと、七天流、土塊の型、睚鳩！」

目に捕えられる限界の速度で長刀が横に振るわれた。何かを斬ったようには見えなかったが、劉土の気が飛んできたのは肌で理解できた。しかもコレはさっきの砂と同系統、斬られる確率が高い。

だが密度が薄い。これならば拳でもいける！

「川神流、蠍撃ち！」

空中でドパン！と弾けた音がした。恐らく私の蠍撃ちと劉土の気が相殺しあったのだろう。

これで、劉土まであと1手だ！

「シメだ！無双正拳突き！！！」

「いかるが斑鳩！」

突然、劉土は私の目の前で地面に長刀を突き立てる。すると、その長刀を中心に半径1メートルほどの地面が爆発した。

その爆風で弾けとんだ砂や石が私に向けて飛来してくる。それも先程同様、振動した砂がそれらに纏っている。

「うざい！川神流、大爆発！！！」

いちいちこんなちまちました攻撃を受けてはたまったもんじゃない。私は体を爆発させて襲い掛かる弾幕を吹き飛ばした。

「小細工は効かんぞ!！」

「うん、じゃあ、もうやめにする」

そこで、その声が聞こえた方向がおかしいことに気付く。先程は私の前方にいたはずの劉土の声が、どうして私の後ろから聞こえてくる？

「はっ!！」

ズバツ!と何かが斬れる音が背中から聞こえて、生暖かい何かが下半身に付着する。数秒してから、自身の背中が刀に斬られたと気付いた。

しかしおかしい、普段なら私の背中は何に修復されるはずなのに

傷口がなかなか塞がらない、ズキズキと背中に痛みが残っている。こんなのは久し振りだ。

「土気の特徴、忘れたわけじゃないよね?」

先ほどまで前方にいた劉土は、いつの間にか私の背後に回りこんで

いた。さっきの爆発はこのための布石か

「 気の、無効化 ！」

「 正確には、気の貫通。今は、瞬間回復のために使う気を一切削らずに斬った。だから本人の意思と関係なしに発動する瞬間回復は、発動しない。“瞬間”で“精密”ってことは、当然、自分の意志でやってるわけじゃないよね？」

確かに、体を爆発させた瞬間に回復をするなんてのは意識してやっていない。意識する前に、脳へ命令が行く前に脊髄反射で回復してしまう。

「 瞬間回復の弱点は、自分でコントロールが上手くいかないこと、まだ改良の余地有と見た」

「 私の瞬間回復にそこまでケチつけたのはお前が初めてだよけどな、1つ勘違いしてるぞ？」

「？」

「 何も、回復が意識して出来ないわけじゃない！...！」

私の叫びと同時に、背中の傷が瞬時に塞がる。

「なるほど、瞬間回復の穴を見つけたと思ったけど、意識してそこまでやれるなら、また作戦の考え直し」

「なかなかいい線いっていたぞ？次はもつと頑張れ！」

「そうしたいけど、流石に今日はもう疲れた。最後の1撃が当たったから、よしとする」

劉土が肩の力を抜いた。その瞬間の事だった。

突然、私の背中が再び斬り裂かれた。

「ガハッ！！」

「昨日、出来た技、名前は未決定。空間に斬撃を設置する技」

「クッ」

だが、これはさっきと違って貫通された感じはない。私の背中も瞬間的に治っていた。

「まだ改良の余地有みたい、今日は楽しかった、ぼくの負け」

「何？」

「ごめん、ぼくもそろそろやばい。慣れない技使ったから、疲れた。あとは主に任せる、またね、百代さん」

その言葉で私たちの決闘は幕を閉じた。

S i d e O u t

S i d e 晴蘭

「いやあ、参った参った」

「私はまだ闘いたかったんだが？」

「コラ百代、そう無理は言わない。晴蘭君だって限界があるヨ」

劉土のリタイアで今日の決闘は幕を閉じたんだけど、どうも百代がまだ闘いたがってるみたいだ。ホントに闘いに飢えてるんだと痛感させられる。

「大丈夫ですよルー師範代。“お仕事”はキッチリやらないとです

から。まあ連続は厳しいですけどね」

「すまないネ。そういえば、晴蘭君の使っている武器を使った技は面白いネー！」

なんか、ルー師範代の目がキラキラ輝いている。

「えっと、七天流はさつきも劉土が言いましたけど、7つの武器を使うんですよ。ボクも全部は把握してないんですけど、使う武器は刀、斧、槍、鎌があつて、それぞれに3つの技がセットになった型が1つだけあります。刀には土塊の型つて言う、雉鳩、斑鳩、鳩槃くぼんと繋がる型、要はコンボみたいなものです」

「じゃあ、さつき私の後ろに回りこんだのは　その鳩槃とやらか？」

「そう、雉鳩で斬つて、斑鳩で地面を爆発させて姿をくらませ、鳩槃で後ろに回りこみ斬る3連コンボ」

ほー！と、ルー師範代と百代は2人揃つて感心していた。

「そういえば、楼閣は闘わないのか？」

急に百代さんが話を変えてきたが、あまりいい話題ではないな。

「ちょっと調子悪いからね。しばらくはお休み。」

「そっかー、と言って百代はあっさり引き下がってくれたので助かった。」

「あまり楼閣について言及はされたくない。」

「出来るだけコイツの奥義は隠しておきたい。」

「みんなに軽蔑視されたくないからね。」

「よし、じゃあ次はお前だ晴蘭！」

「え？」

「まだ本気のお前とやってないからね！約束だぞ？」

「断れそうにないね」

「解ってるじゃないか」

「穿火も劉土も途中でギブアップだったからね。だったら次はちゃんと決着がつくまでやってあげなきゃね」

「ふふふ、楽しみだー！」

そのときの百代の顔が猛獣のようで、脳裏に焼きついて離れなかつた。

次の決闘、心してかからないと、やられるな

第八話 4月23日・・・麗の性能、晴蘭の苦勞（後書き）

「晴蘭と」「翔一の」「作者の自己満、あとがきのコーナー!!」

「苦勞人、秋星晴蘭です」

「自由人、風間翔一です」

「2人あわせて、戦争の犬です」

「ねえ翔一、このネタ解らないでしょ」

「こまけーこたあいいんだよ!」

・バカな、まだ上昇するの?・・・ドラゴンボール

「ラディッツつてさ、なんであんなに弱いのか?」

「そりゃーあれだ。ギャグ要因だったからな」

「そのあと悟空は金髪になるしフリーザは53万とか言い出すし」

「ラディッツの陰もないな」

「感想、意見、お待ちしております!」

ラディッツは慢心キャラ、そう思っじょんぺいです。

台本形式の撤廃に着手しました。これで少しでも読んでくれる人が増えれば

と思っっていたら早速お気に入り登録が増えました！！ありがとうございます！！
ざいます！！

活力が湧いてきました！よっし！あと6話ほど頑張ろう！！

感想をいただけるとホントに嬉しいです！

お待ちしておりますーす！

第九話 4月24日・・・暴走デー（前書き）

今回の話に出てくる警官はドラマCCROの“多馬川マンダーグラウン
ド”に出てくる暑苦しいお方です。

第九話 4月24日・・・暴走デー

Side 晴蘭

「 つ ！」

現在、朝の5時。お日様が起床する時間に、ボクは多馬川の河原で早朝修行をしていた。もう百代さんのことを気にする必要がなくなつたので存分にやれる。

(いい感じ)

(もう少しそのまま耐えろ！)

頭の中で穿火と劉土が応援してくれている、と言うか、実際は結構手助けしてもらっている。

右手と左手だけに全神経を集中させ、右手のコントロールは穿火が、左手のコントロールは劉土がサポートしてくれている。

今ボクがやっている修行は、かつて初代咲昏碎聖が封印したと言われている気の応用。何でも、相当な集中力と忍耐がいるらしく、これを完全に扱えたのは初代と3代目を含めて5人しかいなかったら

しい。

「で、これからどうするんだっけ？」

(イメージ)

(頭の中で絵の具が混ざり合うのをイメージしてみな。上手くいくから)

(本当なら、昨日の時点で実践に入れる予定だったのに、単細胞の虎)

(しかたねえだろうが！腹が空いちまったんだから！腹減ってると闘えねえんだよ！)

「もうそのことについてはいいからさ、感情を露骨にしてボクの修行を邪魔するのだけは勘弁してよ」

折角コントロール出来てた両手がまた乱れ始めた。

(腹が減ってるのに気づかないとか、どれだけ脳筋)

(喧嘩だな？喧嘩売ってんだな？いいぜ、今なら高価買い取り中だ)

(昔はもっと考えて動いていたのに)

(今は昔と違って遊び感覚だからな。仲間の命が懸かってるなら話

は別だが、自分のことだけだしな)

(ふーん、相変わらず仲間は大切にするんだ。そこは昔から貫き通してるのか)

(へっ、ちよっとは見直しな!)

(わー、すごい、すごい)

(やっぱり喧嘩売ってんだろ劉土お!)

「うるっさい!?!修行の邪魔するなって言ってるだろ!?!?」

(あ!主まで興奮しちゃったら気が暴走して)

楼閣がボクを止めようとしたのも虚しく終わり、右腕と左腕から莫大な量の気が漏れてしまい、その2つの気、土気と火気が合わさり膨張していつて

「あ

ドッカン!?!?!

「げっ!?!?!」

爆発した。

(ツ！?危ない！！七天流奥義 ！！)

Side Out

Side Others

ドッカン！！

「ぬおー！？な、なんだー！？このー！爆音はー！！」

早朝、多馬川の近くを自転車で警邏をしていた警官が凄まじい爆発音を耳にした。警官はその発信源を確かめるべく、全力で自転車を漕いで音のした方へ向かった。

「こ、これはー！！何なんだー！？」

警官が目にしたものは、半径5mほどのクレーターだった。そこに生い茂っているはずの雑草が完全に焼失していて、地面すら真っ黒に染め上げられていた。

「む!？」

そのクレーターの中心、警官はそこに1つの人影を見つけた。その人影は、陰になっている場所でもないのに、体の色が飲み込まれそうな黒い色をしていた。そしてその右肩には見たことも無いような巨大な刃物を担ぎ上げていた。

「あ」

「ぬ!？」

その人物と警官の目があつた、ような気がした。気がした、と言うのは、ハッキリとその人物の目が確認できなかったからだ。そして、その人物は慌てて頭をブンブンと横に振ると、真っ黒だった体が元に戻っていった。

「お、おはようございます」

その人物の顔を警官は完全に捕らえた。こんな朝早くから、汗まみれの顔、所々に滲んだ血と泥の付着した服、そして何より、手にしている巨大な刃物。警官はこれらの要素から、1つの結論へと辿り着く。

「いらー!! 貴様の仕業かー!!」

「うえっ!?!」

「本官がー!! お縄を頂戴するー!! 観念しろー!!」

警官は男の腕を素早く手錠で繋いだ。

「え? え!?! ちょっと!?!」

「爆発が何かは解らんがー!! 銃刀法違反で逮捕するー!!」

男、秋星晴蘭の訴えが届くことは無く、晴蘭はそのまま警官に連れていかれてしまった。

Side Out

今日もいつものメンバーで登校、と行きたかったが、何故か晴蘭がいなかった。

「なあワンス、晴蘭はどうした？」

「んー、なんでも警察に間違っつて逮捕されちゃったみたいで」

「間違っつて？」

「うん、間違っつて爆発を起こしちゃったんだって」

「それ間違っつてレベルじゃないでしょ!？」

間違っつて爆発っつて 晴蘭も姉さんみたいになっつてきたな

えっつと？姉さんに麗に晴蘭 ファミリーの中に最強クラスが3人もいるとかどんだけインフレだよ

「それで、じーちゃんが警察に頼み込んでるらしいわ。実際に爆発した瞬間は誰にも見られてないし、そっちは問題は問題ないみたいんだけど」

「アイツ、無意識に武器を作ったらしくてな。銃刀法違反だそうだが、これは目撃されたようだからちよっと時間がかかるらしい」

「無意識に武器作るって危なすぎるでしょー!!」

「まあ武器は見つからなかったみたいだし、学校には直ぐ来れるだろう。ジジイも手を回しているだろうしな」

なんつーでたらめな 無意識に武器作るってなんだよ

晴蘭の遅刻理由をダラダラしゃべりながら橋までやってくると、その中腹に胴着を着た若い男がいた。

「モモ先輩の挑戦者がいるよ?」

「私は昨日楽しんだからな、コイツじゃ退屈かもしれん」

「じゃあ、アタシにやらせてよ」

姉さんがあまり面白くなさそうな顔をしているのを見た麗が、この挑戦者の相手をするとな乗りに出た。

「そこアンタ、百代に挑戦だろっけどさ、アタシを倒さなきゃ挑戦権はないわよ?」

「こ、コラ！勝手に話を進めるな！！」

「アンタは晴蘭に無茶させてるんだからちょっとは我慢しなさい！」

「う
」

スゲエ 姉さんが説き伏せられてる姿を久々に見た 麗、使えるものは何でも使うな それが晴蘭の話題でも

「俺は構わねえっスよ？この殺人空手のウォームアップには丁度いいっス！」

挑戦者の方もノリノリだった。

「ねえ百代、手当ては川神院がしてくれるのよね？一応正式に挑んできたわけだし」

「ん？ああ」

「じゃあ、ちょっと新商品、試させてね。スグル君の腕前を確かめなきゃね」

そう言って麗は両腕を広げる。

その両腕や体には、この日本では一般人が持ってちゃいけないよう

なものが沢山装備されていた。

両手に拳銃を、右肩にライフル3丁を、腰にマシンガン2丁を、左肩にショットガンを1丁を、手榴弾を首からぶら下げて、背中には馬鹿でかい大砲をかつぎe t c . . .

「な、何だそれ？」

流石の姉さんも驚きを隠せなかったらしい。

「殺人能力0のゴム弾よ。爆弾も大砲も火薬の量が格段に減らされた特注品」

「お、おい！そんなん使うつスか！？」

挑戦者の顔にも焦りが見られた。軽く引き受けた勝負にいきなり銃火器が使われたらそりゃ驚くよな。

「心配しなくていいわよ。コイツらはそのまま扱えるほど調整が出来てないの。違う方法でアンタをダウンさせてあげる。あと、先手はあげるわ」

「なめてるっスね？それじゃ行かせてもらっス！ほあっちゃー！
ー！！！」

挑戦者は麗に拳を振りかざし突撃してきた。それに対し、麗は避けるそぶりを一切見せない。

「麗！危ない！！」

ワン子が叫んだと同時に、挑戦者の拳が麗の右頬に突き刺さる。が。

「ぐ、あ？」

「まだまだ拳が出来上がってないわね。もっと拳を痛めつけて、鉄を殴っても平気になるまで特訓しなさい」

苦しんでいたのは、右拳を押さえている挑戦者の方だった。拳が当たった麗の左頬を見ると、傷跡は一切残っていない。

「あ！あれ！ナイフでも傷つけられなかった麗の技だ！」

「なに！？麗ってそんなことが出来るのかよ！？」

ワンスの解説にガクトが興奮する。それにしても、刃物で傷がつかないって　ホントに麗も化物じみてきたな

「先手、確かに譲ったわ。それじゃ、病院にでも行ってなさい！！」

麗の拳が挑戦者の腹に打ち込まれる。

その瞬間のことだった。

ドゴオン！！

「ゲッフ！？」

急に挑戦者の腹で小さな爆発が起こった。

その爆発の衝撃で挑戦者は気絶してしまった。

「え？今、爆発した？」

「ぼ、ボクにもそう見えただけ」

「ああ、爆発したみたいだな　　原理は解らんが」

ワン子とモロの疑問に姉さんが答えた。

そこにピースをしながら麗が帰還してきた。

「余裕で勝利！じゃあ川神院に連絡お願いね？」

「あれ生きてんのかよ　　」

「ガクト君、失礼な。大きな傷は無いわよ。爆発の衝撃で気絶してるだけ」

「その爆発、どうやってやったか気になるな」

姉さんの顔がニヤけている　　晴蘭と決闘することが決まった時の顔にそっくりだ

「スグル君と合同作業して作った兵器みたいなもんよ。頑張ってたかいがあったってものね！」

「スグルと、ね　　ねえ、う、麗？最近さ、スグルと何してるの？」

と、モロの雰囲気が悪くなったと思ったなら予想外な質問を麗にぶつけた。最近モロが不機嫌になっている時と雰囲気が似ている。

「お？気になる？」

「まあ、ね。あの魂を二次元に売ったスグルが現実の女の人に興味を持つなんてさ、ほんの少しだけ裏切られた気分です」

「ふーむ、最近モロ君から感じる暗い視線はそれが原因か」

「え？気づいてたの？」

「予めスグル君から話を聞いてたからね。最近、モロが俺を見る目が変わった”ってね。安心しなさい、アイツは本当に二次元に魂を売ってるわ　それが解ったからスグル君と一緒に作業してるのよ」

「　　なーんだ」

肩の荷が下りたのか、モロは息を大きく吐いて安堵の表情を浮かべていた。

「よかつたら今度一緒に仕事場に来る？」

「いいの？」

「アタシたちは友達でしょ？何を遠慮してるの？」

「それじゃ、行かせてもらおうね」

モロと麗との間にあった微妙な空気も完全になくなり、普通に喋りあえる仲になっていた。これで1つ心配事が減ったな。

「一安心、か」

「麗に彼氏がないの？」

「何をおっしゃる京さん、これでファミリー内のわだかまりは無くなったと安心しただけですよ」

「そつだよね、もう妻がいるのに他人の事を気にするなんてしないもんね」

「勝手に夫婦関係にしないでいただきたい！」

そう、本当にそれだけだ。麗がみんなと仲良くなれた。それに安心してるだけだ。

他意なんて、ない　　きつと。

ドン！

「つと、すいませんでした」

考え事をしていたら誰かとぶつかってしまったので、直ぐに頭を下げて謝った。

「いや、こちらこそスマナイ。私の方こそ余所見をしていた。」

ぶつかった人の顔を見ると、ビシツ！と決まった軍服姿に突き刺さるような鋭い眼光、まるで本物の軍人みたいだ。

「先ほどの果し合いという奴だな。面白かった。それにしてもこの匂い、火薬だね。中国の拳法で似たような技があるが、まさかここでお目にかかれるとは　　若者の謝り方もしっかりしている。この国に来て正解だったな。フッフ　　」

外国人のおじさんは不敵な笑みを浮かべて去っていった。

なんだろう、嫌な予感しかしないのは何故だろう。

Side Out

Side 晴蘭

「や、やっと解放された」

ようやく事情聴取と身体検査が終わった。おじいちゃんがちょっと警察に話を通してくれたらしく、普通より早く解放してもらえたらしい。

（ご、ごめん主！つい離で武器作っちゃって！）

「いいよ、ボクも無傷だったし。問題は 解ってるよね？」

（わ、悪かったよ）

（ 面目、無い）

頭の中で楼閣はバツの悪い顔をしていて、残りの2人は喧嘩のあとなのでボロボロになりながらも謝っていた。

「これ以上やるようだったら、巻物を威力最大の加湿器の上に放置するからね！」

(ちょっと待てー!!それじゃ巻物が湿気で腐るー!!)

(時々、主の顔が本気だから困る)

(僕に関してはとぼっちりだよ)

頭の中のコイツらに釘を指したところで学園に向かう。

と、その道すがらに妙な物が視界に入る。この日本の公道ではまず見られないもの。

馬、だよなあ

あれ。

しかも、人が乗ってるし

乗っているのはどうやら女の人みたいだ。長い金髪の髪が風で揺れ

てキラキラと輝いて綺麗だ。

（ あの女、ここをどっかの牧場と勘違いしてんじゃねえのか？ ）

（ 牧場より、どこかのテーマパークと勘違いしてそう。馬の毛の色が白いから、外国って感じがする ）

（ 国道とか通ってたら危ないよね あれ飼ってるのかな？ ）

頭の中でその光景に対しての様々な感想が飛び交う。

「 話しかけたりしたら、面倒ごとになりそうだね。見なかったことにしようか 」

（ ン、異議なし ）

（ 同意 ）

（ さんせい ）

3人の同意を得たところで、視界から馬を外して学園に足を運ぶ。

穿火が少し言い淀んだのが気になったが

（ 主、地面から足音が伝わってくる、しかもこれ、馬の足音 ）

「んな？」

劉土の声につい足を止めてしまつ。

「失礼する。川神学園の生徒とお見受けするが？」

例の馬に乗った女の人に話しかけられてしまった

足を止めずに走り出すのが正解だったか 一生の不覚 !

「あ、そうだけど」

「よろしければ案内していただけないか？人に尋ねようにも逃げられてしまい」

一般人にその馬で近寄られて逃げない強者は滅多にいないと思うんだけど

(馬)

と、頭の中で穿火が呟いた。

(いかん、うずうずしてきた 触りてえ)

(この騎馬マニア、自重しろ)

そついやコイツ生きてたときは騎馬隊組んでたっけ

(馬、触りてえなあ うう、うお !!)

ん！？せ、穿火の意識が強く !!

コイツ、勝手に人の体を !!

「ん？どうしたんだ？」

「あ、いや、何でも 触りてえ!!」

「なに？」

「なあ！馬に触ってもいいか!？」

Side Out

Side ????

み、道に迷ってしまったので学園の生徒に声をかけて行って、ようやく1人の男子生徒が話を聞いてくれたのだが
なにやらいきなり馬を見て興奮し出した。

「ちょっと！ちょっとだけでいいからさ！」

そんなに浜千鳥（馬の名前）に触りたいのか　ここまで食いついてきた日本人は初めてだな。

ひょっとして、この男はあまり馬に触れられない貧乏な身分なのだろうか？

日本の侍はみんな馬に乗っているものと思っていたが、確かに時代劇で出てくる庶民たちが馬に乗っているシーンはほとんど見ない。

ここで断ったら可哀想だな

「ああ、構わない」

「ホントか!？」

キラキラさせた目がまるで玩具を見つけた子供のようだった。

意外と慣れた手つきで浜千鳥を撫でている。

馬に慣れていない人間は、いきなり頭を撫でようとして逆に警戒されて失敗するのが落ちだ。乗馬を始めたばかりの人もそうしてしまうことがあるらしい。

だが、この男はちゃんと馬との接し方をちゃんと心得ている。

顔には極力触れないように、肩や足をゆっくりと撫でている。馬の警戒心を解く簡単で効率的なやり方だ。

「あー、いい毛並みだあ　昔はこんなにゆっくりと触れる機会がなかったからなあ　恩にきるぜ!触らせてくれてありがとうな!　浜千鳥!」

「ん?何故浜千鳥の名前を知っているんだ?」

私は口に出していないはずなのに。

「コイツが自分で教えてくれた。俺は馬とは仲がいいからな」

いま一つ信じがたい。が、浜千鳥の名前を答えられたのならあなたが嘘とも言えないし

「おっと、もうこんな時間が、そろそろ行かないとマズいな」

男は携帯を取り出して時間を確認する。どうやら遅刻しそうな時間らしい。

「浜千鳥、大事にしてるみたいだな！いい飼い主だなお前！」

「ああ、もちろんだとも」

褒められた。悪い気はしないな。この男も相当な馬好きなんだろう。

「はっ！とと、ゴメン！ちょっとスイッチ入っちゃって
！！」

と、そこで男の雰囲気ガラッと変わった。先のグイグイ押ししてくる積極的な態度から、1歩下がって見守るようなポジションになっていた。

「気にしなくていい。浜千鳥も嬉しそうだったからな」

「あはは おい、穿火、後で 」

何やら1人でぶつぶつ言い出したが大丈夫だろうか？

「行かなくていいのか？」

「っと！そうだった！じゃあ行こうか折角だし案内するよ」

「本当か？では是非 」

パンン！！

「「！？」」

突然、どこからか破裂音がした。音の発信源を見ると、どうやら車のタイヤがパンクしたようだ。少し驚いた。

が、私たちよりも驚いていたのは

「ッ！？浜千鳥！？」

急に浜千鳥が暴れだした。さっきの破裂音で相当驚いたのか、収ま
りが見つからない。

「クッ！」

バランスが取れなくなって私は浜千鳥から飛び降りる。

急に体が軽くなったので浜千鳥はさらに暴走して走り出した。

その先に、さっきの男子生徒が。

「あ、危ない！！」

しかし、男は避けるそぶりも見せず、そこで両腕を広げていた。

「おいで」

ドズッ！と鈍い音を出して、浜千鳥が男に激突した。

「!」

しかし、男は吹き飛ばされずに踏みとどまり、浜千鳥の首に腕を回していた。

「落ち着けー、俺だぞー、さっき話しただろー？」

男は浜千鳥の耳元で何かを小さく話しかけていた。

首に回した手でゆっくりと長い首のうなじを撫でている。警戒心を解く撫で方だ。

「大丈夫だぞー、ちょっとびっくりしちゃったなー、どつどつ」

すると、さっきまで暴れ馬の状態だった浜千鳥が一瞬にして大人しくなった。

「おし、おし。おーいお前」

「な、何だろつか」

「何だろつか、じゃねえよ。飼い主なら引き取りに来いよ。いつまでもオレが抱きとめておくわけにもいかないだろ？」

「あ、ああ、すまない　お、おい！その首！」

急いで浜千鳥の元へと急ぐ。

すると、男の首から血が出ているのが解った。

「ん？ああ、気にしないでいいよ。ボクは傷が直ぐ治るから」

「す、すまない　飼い主なのに　」

「キミのせいじゃないよ。安心して」

ニツコリと笑う男の笑顔は、さっきの馬を見ていたときとは全く違う優しいものだった。

そういえば、1人称がさっきと違うような

「ありがとう。あと、私は“キミ”じゃない。クリステイアーネ・フリードリヒだ」

「クリステイアーネさん、かあ　　ちょっと待って、今フリードリヒって言わなかった？」

私が名乗った途端、男の顔が段々と青くなっていった。

「あ、ああ」

「まずい、君があの人のお嬢さんか」

「ん？お様を知っているのか？」

お様の知人だとしたら、この男 相当強いんじゃないか？さつき浜千鳥をなんなく止めたし

「あの人には色々お世話になったからね ヤバい、一緒に登校してるところなんか見られたら、完膚なきまでに殺されてしまう ゴメン！先に行かせてもらっつね！！この道をまっすぐ行けば川神学園だから！！それじゃ、また会えたらいいね！！」

「あ！ちよつと待て！！」

男はそそくさとその場から逃げ出した。私はそれを追いかける。

「行くぞ浜千鳥！！」

第九話 4月24日・・・暴走デー（後書き）

ようやく第一章の台本形式を完全に撤廃しました！（改）が沢山付きましたw

じょんぺいです、評価がここ数日で上がりました！ありがとうございます！

今回はネタを盛り込んでないのであとがきコーナーはお休みですw

一応報告と言っが、この4月24日の話はかなり長くなりますので悪しからずw

感想、ご意見、お待ちしております！

第十話 4月24日・・・歓迎と決闘と（前書き）

久々の10000字越え、目が疲れましたw

第十話 4月24日・・・歓迎と決闘と

Side 大和

朝のHRはいつもより早く始まった。

理由は単純明快、転入生のために時間を割いたからだ。

「それでは、転入生を紹介する。入りたまえ」

ガラッ！と扉を開けて転入生が入ってきた。

「グーテン・モルゲン」

転入生をじっくりと見ると、ビシッ！と決まった軍服姿に突き刺さるような鋭い眼光、まるで本物の軍人みたいだ。

ん？どっかで見たとような

って、さっき橋の上でぶつかって怪しい外国人じゃねーか！！

「さっきの！」

「おお、君か！また会ったね」

な、なんだと？まさかこの人が転入生！？

俺が情報を間違えるなんて 転入生は女のはずなのに ！！

「こら大和、どう考えても保護者が誰かに決まってるでしょうが。何をシヨック受けてるのよ」

「いやな？ちよつとこうというのがやってみただけなんだよ」

「何やってんだか」

「あー、お前たち。今峰槻が言ったとおり、この方は転入生の保護者、父君だ」

小島先生の一言にみんな納得して大人しくなる。

「あの、ご息女は」

「ご心配なく、時間には正確な娘です。間も無く駆けて参りま」

「勘弁してくれ————!!!!」

その時、グラウンドから声が響き渡った。

この声、どこかで聞いたことがあるような

ちょっとグラウンドを見てみる。

「ん？ ゲツ!？」

「どうした大和？何か見えたか？」

正直、よく解らない光景がグラウンドにはあった。

「見たことのある緑髪の男がものすごい形相で馬から逃げ去ってその馬の上に金髪の女の子が乗っている」

「なんだそりゃー!」

俺の言っていることが不可解なのか、クラスメイトのほとんどが窓側によっていつてグラウンドに目をやっていた。

「ホントだ、馬に追っかけられてるね」

「と言うか、あれ、晴蘭だよな?」

京が冷静にその場を分析してるけど、やっぱりアレは晴蘭か

「あんのバカ 警察沙汰の次は珍事件?」

「クリス!? 誰だあの男は!!! クリスに追い掛け回されると? 許せん!!!」

「理不尽な怒りにもほどがあるでしょ!!!?」

軍人さんが激怒しているが、どうもその理由がおかしく、モロがツッコまずにはいられなかった。

「今行くぞクリス！！」

軍人さんは一瞬にして教室から飛び出して行ってしまった。

何という行動力、流石は軍人

「おい大和、よりにもよって“アイツ”も今登校してきたらしいぞ？」

ガクトが指差した方向を見ると、物凄い勢いで砂埃を上げている何かが校門をくぐった。

今、グラウンドはカオスな状態になっている。

S i d e O u t

S i d e 晴蘭

「待つてくれ！！何故ボクは追われなきゃいけないんだ！！」

「案内をしてくれると言ったではないか！男なら言ったことを貫き通せ！！」

どうしてこうなったんだ　！！なんでこんな朝早くから馬に乗ったちよつと可愛い外国人の女の子に追っかけまわされなきゃいけないんだ！！

（主が逃げ出したから）

「そんなことは解ってるよ！！」

「ならば案内をしろ！！」

「違う！！キミに言ったわけじゃない！！」

今のはボクの中の魂に言ったんだ、なんて言ったら一瞬にして変人扱いを食らうから何も言えない。エア友達と話してる痛い子と勘違いされる。

何でこんな時に限って警察に捕まるかなあ　　捕まらなかつたらこの子と会うこともなかったのに！

「待てえ！！！」

何でそんなに必死なんだよお！！道なら教えてあげたじゃんか！！

と、わき目も振らず全力で走っていると、目的地である川神学園が見えてきた。

「ゴールが見えた！！ほらフリードリヒさん！！川神学園！！案内終わりだよ！？」

「それはよかった、が、女を置いて先に走って逃げるのは感心しない！！その性根を叩きなおしてやる！！」

「勘弁してくれーーーー！！！！」

速度を落とすことなく川神学園の校門をくぐる。馬の速度から逃げ切ったボクはある意味爽快な達成感に浸っていた。

けどその達成感も、まだ後ろから追ってくる馬によって踏み潰された。

「もう着いたでしょ！？遅刻しちゃうよ！？」

「全力で走ってきたからまだ余裕はある！！！」

「ああもう！！いい加減に」

いい加減にしてくれ、と叫ぼうと思った瞬間、背後の学園から強烈な殺意を感じた。

しかも、どこかで感じたことのある殺気。

「クリスに追い掛け回されていた羨ましい奴は、どこのどいつだああああああああ！！！」

少なくとも、後ろにいる人物はまともじゃないことが解った。しかも興奮してボルテージがおかしいのか、この和が溢れる学園でドイツ語バリバリである。

「貴様か」

ゆっくりと振り返ると、そこには見慣れた服装を着た、相変わらず鋭い眼光の持ち主。

何か右手に拳銃持つてるし。おい、ここ日本。

しかもあれH&K製のP7か、結構メジャーなもの持つてるんだなあ、じゃなくて!!

『成敗してくれる!!』

『待つてフランク・フリードリヒさん!!ボクです!!秋星晃刹こうせつの息子の晴蘭です!!』

ボクのドイツ語がなんとか通じたのか、フランクさんは未だに発砲してこない。

『コーセツ?あのコーセツの息子か?あの小さくて活発だった少年の』

『はい 晴蘭です。その節はお世話になりました』

「おお、キミだったか!いやいや見違えたよ!」

ボクのことを思い出して頭に昇っていた血が元に戻ったのか、丁寧な日本語でボクに話しかけてくれた。

「はは、もうあの時から大分経ちましたからね。身長もグンと伸びちゃったもので」

「そつだ、キミのお母さんは元気かね？」

「いえ、母さんは数年前に過労で死んじゃいました。ロシアで何とかして生計を立ててくれてはいたんですが、父さんもいなかったし、精神的に無理だったみたいで」

「そつだったか、残念だ。キミのお父さん、コーセツが亡くなったと聞いたときは驚いたが、あの優しかったユーミまで逝ってしまったか」

フランクさんは空を見上げて寂しそうな顔をしていた。この人は本当にボクの両親と仲が良かったんだと痛感させられた。

父さんはよくフランクさんと酒を交わしたと言っていたし、母さんもフランクさんは気さくな人だと語っていたのを覚えている。

「連絡をくれれば支援が出来たのだが」

「残念ながら、2人分の交通費もない上に切羽詰まっていたもので連絡できる余裕がなかったんです」

「ふむ、では困った時は連絡を入れるといい。コーセツとユーミの息子の頼みと言ったらみんな聞いてくれるだろう」

「いざと言つ時はお願いします」

フランクさんとボクはガツチリと握手をする。昔はボクの立ち位置に父さんがいたんだと思うと結構感慨深い。

「と、父様？この男と知り合いなのですか？」

と、そこに娘さんが話に入ってきた。

「ああ、彼は」

と、フランクさんが話を切り出そうとした時、校門の方から何かが聞こえてくる。

「　　ッハッハッハッハ！！九鬼英雄である！！」

「おはよびございませうっ！！」

金で彩られた燕尾服を来た男がメイドが動力の人力車に乗って登校してきた。

その勢いは車に負けないほど速かった。

「おお、人力車！」

「人力車通学の生徒もいるのか」

フリードリヒ親子は何故かこの光景に感心していた。

ボクには感心する要素が見当たらないんだけど

しいて言うなら、メイドの馬力？

「フハハハハ！！馬で登校とは、やるな転入生！！」

しかもこっちも感心してるし！！この人たちの感覚は一般大衆よりずれてるんじゃないの！？

「む、貴様どこかで」

あ、目をつけられた。

「おお！思い出したぞ！書道の名門の秋星家の長男、晴蘭ではないか！！」

「や、やあ、久しぶり。会ったの10年近く前なのによく覚えてるね」

「そのボサボサの緑髪は簡単には忘れられんわ!」

英雄とは何かのパーティーで一緒になった。父さんが書いた掛け軸が気に入られたらしく招待された、ような気がする。昔のことだから記憶が曖昧だ。

ただ、この英雄はそんなこと関係なしに遊んでくれたのを覚えてる。

「おっと、そろそろ教室に戻らねばならないな。行こうかクリス、晴蘭君」

「はい、解りました父様」

「じゃあね英雄、またゆっくり話そうよ」

「うむ!待っているぞ!」

この学園、ボクが思ったよりも遥かにカオスなんだと痛感させられた。

それにしても、英雄ってボクより年下だったんだな

Side Out

クリスに対してみんなが質問をしていた。やっぱり転入生に質問攻めは醍醐味だろう。

その際、フランクさんがクラスの男子に対して“クリスに何かあれば軍で殲滅する。”と、国家間戦争になりそうな脅し文句をかけたきたのは正直度肝を抜かれた。

軍の恐怖を男子に擦り付けてフランクさんは馬を回収してその場を後にした。

「はい質問！何か武道はやってるのかしら？」

大体質問が済んだ所で、ワン子が目をギラギラと光らせて質問した。

「フェンシングを小さい頃よりずっと」

「YES！梅先生提案！転入生を“歓迎”してあげたいと思いまーす！！」

クラス全員が“歓迎”の意味を悟る。それは入ってきたばかりの麗

も例外ではない。

「血気盛んだな川神、だが面白い。クリス、そのポニーテールがお前の実力を見たいそうだ」

「！！ なるほど、新入りの歓迎か」

どうやらクリスも意味を理解したらしい。

それを見たワン子が勢いよく机の上にワッペンを叩きつける。

「決闘よ！クリス、戦闘で勝負よ！！」

この川神学園には決闘と呼ばれる、生徒の自主性や競争意識を尊重するためのユニークなシステムが存在する。決闘とは必ずしも肉體同士の闘いのみならず、知略戦やスポーツや討論でも問題は無い。

ルールは主に立会人や肉體戦闘時の学園の許可が必要なことや、出来レースの禁止、遺恨を残すことを禁じるというものぐらいで、ケガを負ってもそれは合法とされるらしい。

つまり、これから行われる決闘には職員会の了承が必要なのだが。

「話は聞かせてもらったぞい。いいよ、ワシの特権で許可する。今すぐやんなさい」

急に現れた学長がそれをすぐに許可してしまった。
相変わらず神出鬼没なじいさんだ。

「うーん、強いわねあの子」

「そうだね、多分私よりも」

麗と京は冷静にクリスの強さを見定めていた。京が自分よりも強い
といったレベルか　こりゃ相当白熱しそうだな。

「決闘トトカルチョ開催だ！」

キャップはキャップで稼ぎに走っていた。

「おいお前ら手伝えYO！人手が足りないぞう！」

「1割だぞ」

「1割ダゾ」

「アタシ仲見世通りの葛餅食べたいな？」

「お前ら、あれほどキャップの命令には無条件に従えと　ええい
！それどころじゃねえ！！」

結局、俺と京と麗の条件を飲んでキャップはグラウンドに駆け出していった。

さてと、手伝って給料もらいますかね。

S i d e O u t

S i d e ????

『ただ今より、第1グラウンドで決闘が行われます。内容は武器有の戦闘。見学希望者は　』

校内アナウンスがスピーカーから響き渡る。

「ついにきたか！！この日を待ってたぜ！！」

「おやおや、どうしました麻陰君。そんなに興奮して」

俺がガッツポーズを取って歓喜に打ち震えていると、肩に手を置か

れて後ろから話しかけられた。

話しかけてきたのは葵冬馬、クラスの頭脳でイケメン四天王とやらの筆頭らしい。

「フッフッフ、葵よ。俺は誰かが決闘をする日を心待ちにしてたんだ！この日に俺が活躍するためにな！！」

「おいおい、なんだか目立ちたがり屋の発言が聞こえるぞ」

葵の隣にはいつものようにハゲの井上準がいた。どうにもロリコンらしいが特に悪いことではないと思う。

井上は基本的に話しやすくいい奴だ。意外と気があう、ロリコン以外で。

「まあ聞けよ井上。初めは川神百代に勝負を挑んで一躍有名になるうと考えていたのよ」

「モモ先輩をターゲットにしてる時点でお前の計画は破綻していると思うんだが」

「ハタンー、ハタンー！」

葵と井上の2人あるところにこの不可思議少女、榊原小雪がいるのはいつも通りだ。

この女は本当に何を考えてるのか解らん。實力も未知数だ。

「おう、俺もこないだの“人間テトリス肉塊タワー事件”を目の当たりにした時に流石に無謀だと気付いた。不良にまぎれて観察していたもんだから逃げ出すのに苦労したぜ。だからよ？誰かが決闘やつて観客のボルテージが上がってるところで俺が決闘をする。すると俺の知名度は急上昇するって寸法よ」

「お前一応転入生だったんだからよ、転入してきたその日に決闘すればよかつたんじゃないの？2週間前ならまだF組にも転入生はいなかつたろ？」

「川神百代の實力を調べているうちにタイミングを失った」

「お前やつぱりバカだろ」

「黙れハゲ、俺はこう見えても物理は満点しか取ったことないんだぜ？」

「でもー、こないだの英語の小テスト悲惨だったよなー？」

流石天然少女、痛いところを突いてくるものだ。

「理系科目しか出来ねえんだよ。悪かつたな」

「よくS組に入れたもんだ」

「感心しますね」

「葵、井上。テメエらとはキツチリとケリつけなきゃならんらしいな」

コイツらは人を見下しやすいS組の中ではまともな方で、井上はそこまで嫌な奴じゃないが、葵はどうにもいけ好かない。イケメンだからだろうか？

まあ、嫌いじゃないけど。転入した初日に声をかけてくれたのはコイツらが初めてだしな。

「それで？麻陰君は誰と決闘する予定なんですか？」

葵が話を戻してくれた。こういうところは手際がいい奴だ。

「候補は2人、うち1人は川神百代の妹の川神一子だったんだがどうやらたつた今入った決闘が川神妹らしい。だから自動的に残りの1人にする」

「で、誰なのそれー？」

「おう、どうやらコイツは川神院にお世話になったことがあるらしい。学長に気に入られているなら条件としてはバツチリだろ？」

俺は自慢げにその人物の名前を口にする。

「F組の転入生、峰槻麗だ」

S i d e O u t

S i d e 晴蘭

「決闘とは、気の早いことで」

「転入生か 可愛い奴だといいな」

百代とボクはグラウンドに足を運んでいた。一子が出るとなれば行かなきゃいけないだろう。

少し、気についてまだ言いたいことはあったから、先生としてはちよっとアドバイスをしなきゃね。

「そういえばお前、転入生の親と知り合いらしいじゃないか？今朝グラウンドで一騒動あったそうだな」

「あの人は手が付けられないよ、娘の事となるとね。普段は完璧主義者の軍人と言っても過言じゃないのに」

昔、父さんがフランクさんと酒を交わして帰ってきた後、父さんは必ず“また娘について語られた”と言っていた。よっぽどの親バカであることは確からしい。

「それにしても、爆発かあ。どうやってやったんだお前？」

ついに来たこの質問、絶対聞かれると思ってたからそこまで驚かなかったけど。

「劉土の砂塵と穿火の火力が粉塵爆発を起こすくらい威力高くてね。困ったよ」

「ふーん、で？何で無傷なんだ？あの畔柳とやらは他の七天流を使っている間は使えないんだろ？それに、その時劉土と穿火は全力に近かったんだろ？じゃあ、お前はどうやって爆発を防いだのか気になってなあ」

戦闘技法に関することになる、本当にこの人は急に鋭くなる。

踏み込んでほしくないところまで踏み込んでくるのは恐らく、わざとだろう。

あれ以来、あまり楼閣の話題を出さなかったのは逆に失敗だったかな。

「いずれ機会が来たら教えてあげるよ。それまでは我慢してね」

そんな機会は多分来ないだろうけどね。

「それじゃあゆっくり待たせてもらおうかな　それよりお前、最近目をつけられてるの知ってるか？」

すんなりとこの話題から手を引いてくれたのは助かったが、なにやら不穏な話があるらしい。

「何のこと？ボクが目をつけられてるって？」

「ああ、S組の中に私のファンがいるらしくてな。“F組”ときがなんで百代さんのそばにずっといるんだ。数日前に転入してきたばかりのくせに生意気な”、だと」

「そんなことになってたのか　まあ適当にあしらっておくよ」

正直、そういうのは口だけだと思う。相手にしなければどうってこととは無い。

基本、面倒ごとは嫌いな性分だしね。

「おっと、急がないとまずいかな。そろそろ始まるかもな」

「じゃあ行くっか」

ボクと百代は足を速める。

後ろからの視線を振り払うように。

百代め、解っててさっきの話題出したな　このいやーな視線はほぼ100%S組の百代ファンだろう。

よし、無視しよう。面倒ことは苦手なんだ。

最近、自分で面倒ごとに首を突っ込んでる気がするけどね。

Side Out

Side 大和

「2人とも、前に出て名乗りをあげるがいい!」

「2年F組、川神一子!」

「今日より2年F組、クリステイアーネ・フリードリヒ!」

グラウンドの中央、審判兼立会人を務める学長とワン子とクリスの3人を囲むように野次馬が円を作っていた。

ドイツからの転入生と姉さんの妹の決闘ってことで野次馬はかなりいる。

「ワシの立会いのもと、決闘を許可する。勝負がつくまでは何があっても止めませんが、勝負がついたにも関わらず決闘を続行しようと言っならワシが介入する。よいな?」

「承知したわ！」

「承った」

2人が武器を構えて臨戦態勢に入る。

「シャッターチャンスはのがさねえ！！」

ヨンパチはクリスのパンチラを狙ってカメラを構えていた。この熱意を他に活かせないものか

「ふむ、気に関してはとりあえずはいいかな。“あの技”をやるんならもう少し落ち着いてくれると、教えた先生としても安心できるんだけどな」

「アンタが何を教えたのか知らないけどさ。アタシの指導も生きてるんだからね？薙刀の応用術の中で一子が使えそうなを選別するのに時間がかかったんだから」

「おい晴蘭、それに麗、妹に何を教えたんだ？いつもより気配が違っぞぞ？」

姉さんが不思議に思っているが、素人の俺からしたらいつもと変わらないように見える。

「大したことじゃないよ。ただ、1発決め手を教えてあげただけ。昨日ちよっと寝る前にコントロールの仕方を教えておいたから、2回“あの技”を使ってもギリギリ体力はなんとかなる」

「アタシのはテクニクだからそこまで気にするほどのことじゃないわ」

どうやらワン子は強力な師匠を2人も見つけたらしい。

川神院の修行に自主トレ、それにこの2人の修行、体が壊れないか心配になる修行量だな

「安心してよ大和、ちゃんと制限はさせてるよ。むしろ自主トレの時間を時間を削ってるから量は減ってるしね。質の方は解んないけど」

考えていたことが顔に出ていたのか、晴蘭に気を使わせてしまった。

「いざ尋常に、はじめいっ！……！！……！！」

そんなことを話していると、一子とクリスの決闘が始まった。

「はあああああっ！……！！」

一子が薙刀を振り回す。その太刀筋は鋭く速い。

「間合いには入れさせないっ!!」

「ッ
」!

一子の斬撃が一方的にクリスを攻めていく。クリスはそれをかわしていなしていただけだった。

「あの薙刀であの速さは合格点、まだあの修行は3日目なのにすこいもんだよ」

晴蘭が一子の攻撃に感心しているが、何がいつもと違うのかよく解らなかった。

「姉さん、どういこと？解説お願い」

「んーとだな、一子は薙刀を気で強化してるんだよ。ほんの少しだけだな。あれぐらいの気の量ならそこまで威力は上がらないだろうが、あの気の使い方は利点がある」

「利点？」

「第1に、薙刀の重さがあまり感じなくなることだな。その分スピードが増すからワン子にピッタリだ。第2に、相手が気を使えるならそれを打ち破れるだろう。まあこの利点に関しては、気が薄いからまだ意味をなさないな。」

つまりは、ワン子はそれなりに力を上げてるってことなのか？

ワン子も成長してるんだな

「さて、ここからよ」

麗の言葉につられて意識を決闘に戻す。

「確かに一子がおして見える。けど、クリスちゃんもそろそろ動くわよ。恐らくカウンター気味の1発」

「じゃあやばいのか？」

「そこで、アタシのテクニクの出番よ。カウンターのカウンター、見せてあげなさい」

麗の指導が何なのかはまだ解らないが、麗の言ったとおり、クリスは襲ってくるワン子に踏み込んでカウンター張りの攻撃を繰り返す。

「やあーっ!!」

「っ!!」

クリスの付きがワン子に襲い掛かる、が、ワン子の対処は極めて冷静だった。

待っていたと言わんばかりの反応だった。

Side Out

Side 一子

来た!!と、心の中で叫んでしまった。

麗に修行をつけてもらったあの日、教えてもらったのは薙刀の技じやなくて、戦闘中のテクニクだった。

思い出すのは麗の言葉、今もしっかりと思い出せる。何回も説明してもらったし実践練習もしてもらったからね。

（頭のいい人間ほど、1度“してやった”と気が抜けた瞬間が1番隙が生まれるわ。油断、慢心なんて言い方をするけどね。戦略で例えるなら罠にはめたと喜んでいる時、戦闘で言えばカウンターを仕

掛けてきた時よ。カウンターで“してやった”と思っている人間ほど叩きやすい相手はいないわ。裏の裏をかくの。）

アタシはそんなことを考えながら戦闘は出来ないって言ったっけ。

（ 何？頭を使って闘うのが苦手？うーん、そうね、それじゃあ 自分が踏み込んだ瞬間に相手も踏み込んでいたら、相手の攻撃を回避するか受け流すかしなさい。回避は最低目標、受け流してカウンターにカウンターをいれるのが最終目標よ。）

でも、受け流すって言ったってどうすればいいか解らなかった。基本的に避けることが多かったからね。

（どんなに鋭い直線の攻撃で威力が高くても、切っ先をずらせば恐れるに足りない。どんなに鋭い切れ味を誇った切っ先でも、刃筋を立てなければ何も斬り裂けない。もし相手が突きを使ってくるのであれば、薙刀の柄を回転させて横に払う。相手が斬撃を使ってくるのであれば、薙刀の刃を寝かせて刃筋を立たせないようにするのがベスト）

始めは何て無茶をいつてるのかと思ったけど、その後の実践形式の特訓で身についた自信はある。それを本当の実践で使える自信もついた。

だから、受け流すことに恐怖は無いわ！！

予想通りのコースの突き、速度がかなり速いけど、練習でもこの速度は体感した！

薙刀を右斜めに立てて丸くなってる柄を思いっきり下に回してレイピアの突きを斜めに受け流し、腕を押し出してレイピアを下に払う。

「何ッ!？」

クリスの体が前のめりになってバランスを崩した。

麗の言ったとおりね。カウンターが失敗した後はがら空きよ！

少し余裕が出来た。だったら、リスクを負えた攻撃が出来る!!

「必殺」

せーちゃんに言われたとおりの気の量なら2回までは使えるみたいだけど、またダウンしたら怖いからこれ1発だけにしておくわ。ちよっと気の量を多めで。

「燕刈り!!」
しやぎめり

Side Out

Side 大和

「燕刈り!!」

ワン子がクリスの突きを見事に受け流して、地面に水平になっている薙刀を真横へ振るう。

クリスはバランスを崩しながらもワン子の攻撃を防ごうと残った左手でガードを固めた。

「やあああああああ!!」

しかし、ワン子の薙刀の切っ先はクリスには届かなかった。ギリギリのところまでクリスが1歩下がったのが原因だった。

(危なかった　だがもう2度と　)

「もう2度と食らわないってのは無理よ!もう食らってるんだもの!!」

ズバッ!!と、クリスの腹部から攻撃されたような音が聞こえた。

「ぐっ!？」

刃先は一切当たっていないのに衝撃が襲い掛かってきた、不思議な攻撃にクリスは驚愕していた。

「どーよ?」

「くっ やるな。だが、まだまだ終わらんぞ!！」

クリスは腹部を一切気にすることなく再びワン子に詰め寄る。

「あっちゃあ、仕留められなかったか」

と、後ろから晴蘭が溜め息をついた。

「どづいづことだよ?」

「あの技な、滅茶苦茶疲れるんだよ。一子はまだあれを完全にものにしてないから相当ばてるはずだよ。気の量も無駄に濃かったし。レプリカ使ってるから斬れやしないだろうけど」

「それに、アタシが教えたあの突きの回避方法ね。あれも相当集中

力使うし精神的にキツイのよ」

2人の話を総括する。

「要はワン子が不利なの？」

「一概には言えないけどね」

「ちょっと苦しいのは事実よ」

ワン子とクリスの激しい攻防が繰り広げられているが、明らかに先程のような勢いはワン子にはない。

そこで、ワン子は勝負を決めにかかる。薙刀を振り回して速度を上げていく。

クリスもそれが必勝の構えだと判断して間合いを詰めれずにいた。

「違う、そうじゃないだろワン子」

と、後ろで姉さんが呟いた。

「川神流、山崩し!!」

ワンスの薙刀が降り下ろされる。しかも、その軌道はクリスの頭部を狙っているものではなく、脚を目掛けて斜めに振り下ろされていた。

「げっ、こりやマズイね」

晴蘭もボソツと呟いた理由が俺にはよく解らなかったが、数秒後、それを理解することになる。

「ふっ！」

クリスはその薙刀をかわした。ワンスは避けられるはずがないと思っていたのか、度肝を抜かれたように驚いていた。

「！？避けっ

」

「ハアアアアアアア！」

クリスの突きがワンスの肩にクリーンヒットする。これは勝負有りだ。

フェンシングの有効部位は胸のみ、ワンスはその弱点を突きすねを狙ったのだが、フェンシングにも全身有効な種目があって、クリス

がそのの専門であったのだ。

ワンス子の誤算がこの結果を招いたらしい。

「勝者、クリステイアーネ・フリードリヒー！」

野次馬から盛大な拍手と奇声上がる。

「さて、見るものはちゃんと見たし。そろそろいいよね？」

「そうね、ジロジロ見られるのは嫌いなよ」

と、晴蘭と麗は何か違う話をしていた。ジロジロ見られる？ なんの
ことだ？

「さっきから後ろにいる奴」

「最近アタシをつけ回ってる奴」

「出ていけ」

晴蘭と麗が同時に振り返った。すると、野次馬を掻き分けて2人の男が出てきた。

「バレてたか、F組にしてはなかなか鋭いらしいな」

身長がかなり高い男が晴蘭に睨みを効かせている。

「ま、1週間近くテメエを調べてた訳だしよ。逆に気付いてなかったら拍子抜けになるところだったぜ」

明るい茶髪の男が麗の目の前でケタケタと笑っていた。

「秋星晴蘭」

「峰規麗」

2人は自分のワッペンを地面に叩きつけた。

「決闘を申し込む」

「ふーん、S組がF組に決闘を申し込むんだ」

「なあに、俺が有名人になるための踏み台にさせてもらうぜ？峰槻麗！」

「その意気込みはいいけど、アンタいい加減に名乗りなさいよ」

「ん？俺か？俺は麻陰あまかげこうじ鴻士、2・Sだ。記憶したか？なんつって」

鴻士と名乗った男は何故か上機嫌だった。

「ポツと出の若造に百代さんはやらん！！」

「そんな力説されてもなあ　まあ何時かは衝突すると思ってたか

らそこまで驚かないけどさ。で？キミは誰なの？」

「俺はU・Sの下山紀嗣したやまつぐのじ、みんなからはエロマエストロと親しみと敬意をこめて呼ばれている」

「それ自慢すること！？」

自信満々で自分の異名を名乗ったが、正直人として残念そうな気配がする。

「それで？」

「どーすんだお2人さん？」

未だにこの2人のワッペンが地面に置かれたままだ。

「面倒だけどね」

「売られた喧嘩は買うわよ？」

晴蘭と麗が自分のワッペンをその上に重ねた。

本日の決闘は、まだまだ終わらない。

第十話 4月24日・・・歓迎と決闘と（後書き）

「京と」「大和の」「作者の自己満、あとがきのコーナー!!」「」

「ついに大和と密室で2人つきりつつ!!」「」

「早く終わらせよう、俺の貞操が危ない」

「ねえ大和、こんなに狭い後書き枠で2人つきりだよ?」

「2回言わなくていい!!」「」

・エア友達・・・僕は友達が少ない

「なんか前にこれ使った気が」

「多分その時書き忘れたか、作者が忘れてるかだな」

「私も星奈みたいにハプニングを起こせば」

「待つて京さん、どうして服を脱ぎだすの?」

・記憶したか?・・・キングダムハーツ

「私の好きなBL臭が」

「ストップ京さん!あれは友情だよ戦友だよ!!」「」

「むー」

「BLにも耐性があるこの子、恐ろしい」

・下山紀嗣、エロマエストロ・・・W・L・O・世界恋愛機構

「名前がちよつと変えただけってことは」

「雑魚っぽいね、この人。そして大和、この人に“アリサの服で迫れ”とご指導してもらったんだけど」

「待て京、落ち着け。声優ネタはいいから！」

「あつちの私も一途なんだ！！ベクトルは違っても絶対値は同じ！！」

ダツ！ 大和逃げる

ガシツ！ 大和捕まる

「感想、意見お待ちしております！さて、カメラを切つてと」

「た、たすけ」

大和はフラグ王、ねたましい、じょんぺいです。

勢いって怖いですね、10000字がその内基本になりそうで怖い
ですw

この日の話が異様に長いので仕方ないといえは仕方ないのかもしれない
ませんが

最近お気に入りも増えてポイントも入れてくれたお方がいます！感
謝感激です！！

感想、ご意見、気軽にお願いします！

第十一話 4月24日・・・秘密兵器(前書き)

書き方をちょっと変えてみました、主に行間ですが……

読みにくかったら言ってください、すぐ直します。

第十一話 4月24日・・・秘密兵器

Side クリス

渾身の一撃を一子殿にヒットさせると、一子殿は肩を押さえて倒れ込んだ。

危なかったが、自分の勝利だ。学長の鉄心殿が一子殿のケガを見てくれたが、どうやら骨に異状は無いようだ。よかった。

「くー、負けちゃったかあ……悔しいなあ……ふふ、ふふふふふふ！」

肩を押さえていた一子殿が急に立ち上がる。それに何故かずっと笑っているのが気になった。

「アタシも本気を出すわ!!！」

そう言っで一子殿はリストバンドを外して地面に放り投げた。

ズシン!!

明らかにリストバンドが落ちたとは思えないような音が聞こえた。一体どれほどの重りをつけて闘っていたのか、それでいてあの薙刀の速さ、素晴らしい。

「2回戦よ!! 勝負はここから……」

「あほっ！ もう終わりじゃ！」

ペシン！ と一子殿が鉄心殿に勢いよく叩かれた。

「あ痛っ！ じーちゃん！ 何すんだよお……」

「もう勝負はついたわい。初めから全力で行かんお前が悪い」

「うつつ……大怪我は流石に可哀想だと思ったのよ……情けなんて必要なかったのね……」

結構悔しいらしいな。まあ自分も手加減をかけられていたかと思うと、どうにも胸の奥がモヤモヤするな。甘く見られていたのがちよっと悔しい。

「クリ！ これで終わったと思わないことね！」

「く、クリ？」

何故か妙な名前と呼ばれた。

「あだ名よ！ ダチには必要でしょ？」

「……ダチ？」

「決闘して笑い合えたらもう友達よ？ ね、クリ！」

歓迎してもらえた上に友達として見てもらえたのは大変喜ばしいことなんだが……どうにもこのあだ名に納得がいかない。何故に自分のあだ名が日本の秋の味覚なのだろうか……

「よし、ならば自分もお前をあだ名で呼ぼう。確かワン子と呼ばれていたな……よし、今日からお前の事を犬と呼ぼう」

「む！ アタシをイヌ科の哺乳類にしたわね！」

「お前は自分を植物にしただろう？」

「ぬぬぬ……!!」

「むむむ……!!」

「ほれ一子にクリス。ちょっと下がっていなさい」

犬と睨みあっていると、そこに学長が入り込んできて自分たちを戦場から遠ざけようとした。

それに、ギャラリーの様子がおかしい。決闘が終わったのに、まだ帰ろうとしない。

「学長？ 何が始まるんです？」

「決闘じゃよ。本日2回目の決闘じゃ」

Side Out

Side 晴蘭

「最初はグー!!」

「じゃんけん……」

「「ポン!!」」

「いよっしゃあ！ 俺の勝ちい！！ 先ずは俺からだ、悪いねセンパイ？」

「チッ、どうにもこの手の対決は弱い……」

「最初はグーが味噌なんだぜ？ 漁師のおっちゃん教えてくれた」

下山君と麻陰君の壮大なじゃんけんの結果、次の決闘は麗と麻陰君。最後の試合がボクと下山君になった。

「それじゃやろうぜ？ 峰槻麗！」

なんでも、この2人は既に学長に話を通してあるらしい。それに対して学長は“血気盛んなことじゃ。その心意気やよし”とあっさり認可したとかなんとか。

「一応調べてみたんだけどよ、テメエのこと」

「へえ、それで？ どうだったの？」

「お前、一時期北陸にいたらしいじゃねえか。黛大成に世話になってよ？」

黛大成だつて？ まさか、初めて会った時に話してくれた黛さんって…… 黛十一段！？ おいおい、なんて人と知り合いなんだ……

「てことは、由紀江とも親しかったんじゃないの？」

「由紀江ちゃん？ 妹のように可愛がつてたわよ？」

「アイツがこの学園にいることは知ってるのか？」

「知ってるわよ？」

「何で助けてやらねえ。アイツ、友達が出来ないって苦しんでんだぞ？ 姉みたいな存在なら助けてやるのが当たり前だろうが！」

「当たり前？ 何を言ってるの。過保護と言う鳥籠は、時として中も外も傷付ける茨の檻になるのよ」

段々と話がエスカレートしてきた。おいおい、決闘の前に口論勃発？

「じゃあ条件つける。俺が勝ったらテメエは由紀江の友達作りに協力しやがれ」

「だったら、アタシが勝ったらアンタと話す時間を頂戴。今日の昼休みでもいいわ」

「交渉成立だな。じゃあやろうか？ 暗器専門の纏元流」

「そうね、麻陰流を見せてもらわなきゃ」

「なんだ？ 俺のところの流派知ってんのか？」

「名前と、柔道技を使っただけね」

「麻陰流はただの柔道じゃねえぜ？そこんところ勘違いするなよ？」

2人は火花を散らしながらグラウンドの中央へと進んでいった。

「それじゃあ下山君、見学にでも行くこうか」

「貴様と一緒に行動する理由はない」

そう言って先に行ってしまった。つれないなあ。

Side Out

Side 麗

「2 F、峰槻麗」

「2 S、麻陰鴻士」

アタシたちは名乗りをあげる。今からアタシの川神学園で初の決

闘が始まるうとしていいる。一子たちの決闘の後だからギャラリーは異様な人数だった。

「がっかりさせないでくれよ？」

「こっちの台詞よ」

「それでは……………始めえ!!」

まずは相手の出方を窺う、さてどうくる？

「それじゃあ行こうか、見せてみるよ纏元流!!」

鴻士は距離を詰めてきた。コイツは京みたいな遠距離タイプじゃなくて、接近戦を好むタイプか。まあ柔道を使うなら当たり前のことだけだ。

なかなか速い動きをするわね　捕まると厄介だわ。まずは距離を置く!

「おっと、逃げんのかい？」

「安い挑発ありがとう。アンタの力量を確かめたいからね、ちょっとまだ観察させてもらおうわよ」

「生憎と、俺はせっかちな性分だね!!」

鴻士はアタシが下がった距離を一瞬にして詰めてきた。コイツ、アタシが距離を置くのを見越していたのか？

「くっ!!」

アタシは胸ぐらを鴻士にガッチリと捕らえられてしまう。柔道で言うところの、相手の組み手にされてしまった。

「おらあー!!」

グイツ！と体が前に引き寄せられる。すごい引きつけ、腕力が相当あるわね。マズイ、離れないと

「せつー!!」

その時、アタシの体が左前方に飛ばされていた。アタシが投げられまいと体を後ろに下げていた時、無防備になった左足が払われたようだ。そのままバランスを崩して前のめりになったアタシの体は力一杯投げられてしまった。

しかし、ただの柔道技と違って襟は持たれたままじゃない。だから着地は容易だった。

「まともな柔道をするかと思っただらそうでもないわね。乱暴さ溢れる技ありがとう」

「まずは小手調べだ。ただの支え釣り込み足なんて面白味がねえから投げただけだぜ？」

「じゃあ見せてくれるのかしら、面白味のある柔道技を」

「言われんでもやったるぜー!!」

再び男はアタシの襟を掴む。警戒していたのにあっさりと襟を持つていかれた。コイツ、相当うまいわね……無駄な組み方を殆どしない。

「ぜいー!!」

鴻士が掴んだのはアタシの右襟と右袖、そして背中を見せるこの構え、左に背負い投げー!!

「残念！」

グイッ！と体が真逆の方向へ引っ張られる。左に体が引かれるはずなのに、何でアタシの体は右へ引っ張られてるの？左に引かなきゃ背負いはできな

まさか

「袖釣り!？」

「正解、だ!!！」

気付いた時には手遅れだった。もう袖釣り込み腰はほどけない程に決まっている。まるで宙に浮いたような感覚が私を襲う。しかし、袖釣りなら衝撃は背中と胸部に集中する。ならそこに気を集中すれば

「言ったよな、ただの柔道技と違っつて」

私はそこで疑問に思う。

なぜ前方に観客が見えるのだろうか。本来の袖釣りなら体は上を向いているから空が見えるはずなのに

これは、頭から落下している？

「麻陰流、流星」

ゴツ！！ と、頭から突き抜けるような衝撃が襲いかかった。頭を支える首に1番負荷がかかり軋んだようにギシギシと骨が鳴っていた。

「ぐ、あつ！？」

「おらおらドンドンいくぜえ！！」

鴻士は自分だけ瞬時に立ち上がって、アタシの胸ぐらを掴んで持ち上げた。抵抗しようとするが、頭に衝撃が走ったせいかわ、どうにもうまく力が入らない。

「だあつ！！」

柔道の背中中の帯を捕まれるように、スカートのベルトを捕まれて持ち上げられる。そのまま背中が地面に叩きつけられる

そう思ったが、またも予想を裏切られる。

「麻陰流、落雷！！」

バキッ！と、背中から嫌音が聞こえて、腰の辺りに激痛が走る。アタシの腰の部分に鴻士が右膝を叩き込んでいたが、折れてはいないだろう。

「ぐっ！！」

「追撃!!」

腰の痛みを気にしている暇もなく、間髪入れずに腹部にエルボーが落とされる。形だけ見れば、まるでワンハンドバックブリーガーだ。本当に腰が折れかねない。

「ぐっ　あ　くそっ!!」

鴻土の手を振りほどいて再び距離をとって体勢を立て直す。アイツが使うのは変則的な攻撃ばかりで翻弄されている。

少し落ち着こう。

顔を伏せて深く深呼吸、ゆっくりと息を整える。腰の痛みもそれほど残っていない、腹部も問題無さそう。気を溜めておいて正解だったわ。そんなに長い時間は高密度の甲冑鎧を使えないから、これは正直ラッキーだった。今朝の空手野郎みたいな単純で見え見えな攻撃だったら苦労しないけど……

柔道なら柔道一本で攻めてくれればまだやりやすいつてのに……普通の柔道とはタイミングが違う。受け身が取れない投げ方をするし、まるでプロレスみたいな技まで使ってくる。厄介極まりない。

「おらおら、休んでるなんかないぜえ!!」

鴻土の声にバツと顔を上げる。

何故か鴻士はドロップキックを仕掛けていた。

「もう何でもありなの!!!?」

アタシは鴻士のキックを避けて再び距離を取って、体の中から武器を取り出す。

「おいおい、近代兵器なんか使っちゃうのかよ?」

「手の内隠しておけるような相手じゃないみたいだしね!フル活用させてもらっわ!」

手に取ったのはデザートイーグル、要は拳銃だ。ゴム弾だから当たっても穴が開くことはないし火傷もしない。

「取り敢えず、食らったときなさい!」

照準を鴻士に合わせて引き金を3回引いた。薬莢やくきょうが拳銃から飛び出て火薬の匂いが充満する。

「食らっつかよ!」

鴻士は弾丸を横にかわして詰め寄ってくる。いい目してる。弾

丸の速度は大体音速ぐらい、弾丸をかわすにはアタシの手の動きと銃声を聞いて避けるしかない。いい反射神経も持つてる。流石はS組と言った所か。

「ほっ！ギャラリィもう少し離れてるー、ゴム弾と言っても痛いぞー！」

流れ弾は百代が処理してくれているので気兼ねなくやれる。予め頼んでおいてよかったわ。

「生意気ー！」

デザートイーグルを全弾一気に撃ちきる。

「あつぶねえー！」

これも全弾かわされる、厄介な速度だ。

「おら！撃ち止めか！？」

「まさか」

デザートイーグルを地面に捨てて別の銃器を手にする。今度は回ル転式拳銃、コルトSAA。
ホルバ

「おいふざけんな！なんでそんなマニアックなもん取り出すんだ！？今はコルト・ガバメントだろ？」

「至ってマジメよ？」

トリガーを引いてゴム弾を一気に射出する。最大装弾数6発、全てを避けられる？

「麻陰流、火花!!」

アタシは目を疑った。鴻士はまるで銃弾を掻い潜るようにアタシ目掛けて突っ込んでくる。その動きは1歩1歩が弾けるような高速移動だった。

「うっぜい!」

ゴドツ!!と何か重いものが地面にあたった音がした。

「……………!!!?!」

鴻士は脚を止めた。アタシの取り出した異物に驚愕したのだろう。アタシもこれを使えるなんて夢にも思ってたけど。

Side Out

Side Others

「ねえスグル君、この弾頭みたいな何?なんかファンがついてるし、穴が所々空いてるし……………」

麗の家の倉庫の地下室、その1角の工房で、麗はスグルが持ってきた何かを手を取った。大きさは普通の弾頭とあまり代わりはない。

「それか？それは対戦車砲などの弾頭代わりだ」
「弾頭代わり？これが？かなり軽いけど……火薬詰まってる？」

麗は掴んだ弾頭を軽々と振るが、どうやら相当軽いらしい。

「それは爆発に火薬を使わず圧力を使う。発射には火薬を使うがな」
「圧力？」

「発射により生じる空気抵抗を蓄え、弾頭が目標物に当たると蓄えた空気が破裂する仕組みだ。詳しくは流体力学やら空圧について物理の先生に聞くがいい。1950年代にヘリの動力としての実験があったらしいから案外簡単に調べられるぞ」

「どこ向いて誰に説明してんのよ」
「画面の向こうの我が同士だ」
「あっそ」

Side Out

Side 麗

「テメエ……」
「安心しなさい、風圧の攻撃よ。弾頭が当たっても衝撃しかないから。安心して消し飛ばせ！」

アタシは本来戦車を駆逐するために使う殲滅武器、RPG 7を構えた。弾頭はスグル君製。原理は完璧には解ってないけど、高密

度の風圧兵器だってことは解った。

「消し飛べって言ってんじゃねえか!!」

「ノリよ、ノリ」

アタシは躊躇いなく引き金を引いた。その筒から発射された弾丸は軽く、さらに空気抵抗をほぼ無視できるので速度はかなり速い。

ドン!!と何かがはぜる音が鴻士の腹部にある弾頭から聞こえた。

「ぐっつ!!」

「ね?心配するような威力じゃないでしょ?」

「自転車が突っ込んできたかと思っただわ!!」

「死にやしないでしょ」

使い終わったRPG 7を捨てて別の銃器を2丁構える。

ヘッケラーアンドコックホ

「H&K製MP5Kと、ワルサー製MPL!!」

「サブマシンガンなんかこしらえてんじゃねえ!!」

鴻士の喚きに構わず撃つ。ガガガガガガ!!と鳴り響く機関銃特有の連射音が堪らない。

「ぐっつ!!」

鴻士は回避に専念するが、さっきの腹部への衝撃でまともに動けないのは明白。

「ぐあっ!!」

当然、足に当たってもおかしくはない。

「くっ、もつと真面目にやれ!!」

「至って真剣よ?まあ肩を楽にしなさい」

脚を押さえてその場にうずくまった鴻士にアタシは新たな武器を向ける。

「パンツァーシューレックでケリをつけてあげるから」

「対戦車砲とは……恐れ入るぜ……」

それにしても、コイツ結構軍事兵器詳しいわね。後でちょっと話してみるか。

「じゃあね」

アタシの担いだ太い筒から最後の1発が発射された。

「けどな」

そこで、鴻士は右手をアタシへと向けた。

「切り札持つてんのは、テメエだけじゃねえんだよ!!」

弾頭を鴻士が右手で挿んだ瞬間、ドオン!!と激しい衝撃が鴻士を襲った。流石にちよつと空気を多目にしたからこれで立ち上がれないだろう。

しかし、この予想も目の前の光景で水泡に帰した。

あの衝撃をまともに受けた鴻士が無傷でたたずんでいた。

「な!？」

「威力の主力が風圧なら恐れるには足らねえんだよ。俺にはな」

鴻士の姿をはっきりと視認した瞬間、ピリピリと、アタシの中の何かざわつく。アタシの中の何か警告している。

コイツの気配が変わった。まるで、そう、初めてアイツと戦った時に感じたのと同じ……

「七、天流……?」

ボソツと呟いた。確信など一切なく。

「ああ、七天流だ」

アタシの疑問はあっさりと肯定された。

「なんで、アンタがそれを!!」

「勝ったら教えてやるよ!!」

鴻士の両腕が風で覆われる。目で解るほどの密度だ。

「だらあ!!」

さっきのコイツの台詞から察するに、恐らく空気を力とするあの弾丸はもう使えない、だったらさっきと同様に拳銃よ!!

「ワルサーP88か、いい趣味してるぜホントに。わざわざそんなマニアックな銃を使うなんてよ」

鴻士は笑いながら突っ込んでくる。アタシは照準を定めて引き金を一気に引いて弾丸を6発射出した。

「七天流、鼓翼!!」

それに対して、鴻士は両腕を下に振り下ろした。すると、まるでそこに壁が出来たんじゃないかとおもукраいの高密度の風が発生して、アタシの弾丸を空中で止めた。

「なっ」

「おらっ!!」

踏み込んできた鴻士の掌底がアタシの鳩尾にクリーンヒットする。しかもその掌底はただの掌底ではなく、先ほどのような高密度の風を纏っていた。

その風に押されアタシは吹き飛ばされた。

幸いにも、アタシの銃におびえた観客がアタシたちの決闘から離れていてくれたので、アタシがギャラリーに突っ込むことは無かった。

「くっ!!」

2回ほどバウンドしたところで立ち上がって体勢を立て直す。鉄心さんからの終了の合図がかからないってことは、まだまだアタシはやれるって見なされてるのね。嬉しいけど、そこまで期待値上げてもらっても困るわね……

それにしても、七天流か……まさかこの学園にあのバカ以外に七天流が使える奴がいたとはね……

体が反応してる、心が震える。

憎き七天流の使い手が目の前にいる。あの悪魔と同じ……これは、前哨戦には丁度いいかもね。

「ふふ、ふふふふ……あはは！」

「どうした？痛みで頭がどうにかなっちまったのか？」

「いやね？楽しくなってきちゃって」

アタシは両腕を広げる。その腕や服の袖、スカートの中から大量の武器が現れて地面に堆積されていく。

残ったのはアタシの両手に小太刀が1本ずつ、しかも45センチと短め、脇差しのようなものだ。

「ん？何やってんだお前？武器捨ててどうすんだよ？降参か？」

「降参？そんな気さらさらないわ。今アタシの中にあるのは、勝利への渴望でかき立てられた闘争本能だけよ」

今まで1度も勝ったことの無い七天流に勝利せんがために、あの悪魔を殺す自信を付けんがために、アタシはコイツを完膚なきまでに倒す。

アタシは刀を地面に突き刺して、それに体重をかけるように体の前に沈めさせる。まるで獣のような4つん這い状態だ。

「纏元流奥義！艶舞・胡狼ウルク！！」

踏み台になってもらおうよ、麻陰鴻士！！

「神速の獣、篤と御覧あれ」

S i d e O u t

「神速の獣、篤と御覧あれ」

その言葉を呟いた瞬間、麗の姿が消えた。

「!?!、どこいった!?!」

どうやら麻陰も姿を追えなかったらしい。姉さんにも見切れなかった速度だ、無理もないだろう。

「姉さん、見える?」

「前回よりスピードが落ちてる分見やすいぞ。きっと装備してる武器や重りが今日は多いんだろう」

「見やすいって……速度の違いが解るの?」

「前は残像やら何やらでぶれていたからなかなか実体を掴めなかったが、今回はちゃんと体が見える。それにしても、奇妙な走り方をしてるな」

「奇妙な?」

「さつき4つん這いの体勢だったろ?あの体勢のまま2足2刀、合計4足歩行で走っている」

4足歩行って……

「それにしても、晴蘭以外にも七天流を使える奴がいるなんてな。知り合いか?」

隣にいる晴蘭に姉さんが話しかけた。しかし、晴蘭の反応がない。

も飲み込まれそうな勢いだっただのに……

Side Out

Side 麗

翻弄する、それがこの技の特性だと兄貴は言っていた。目に見えない速度で相手の周りを駆け巡り、持つている脇差しで“周囲の物体”に斬り傷をつける。いきなり聞こえる斬撃音と、突如現れる2本の脇差しによる爪痕。相手はそれだけで動揺し、辺りを見回し、自分が追い込まれていくことに気づかない。相手を中心とした円を描くように移動して追い詰めていく。それだけで相手の動きは制限されていく。

「うっぜえ!!」

そして痺れを切らした相手が大振りに攻撃を仕掛けてきたその時
!!

「絶好のチャンス!!」

「ッ!? (風の壁ッ……ダメだ!!間に合わな (」

鴻士がこつちに気付いたがもう遅い。刀を十字に振って背中を斬り裂いた。

「ぐあっ!?!」

けど、これだけじゃまだ弱い、追撃を仕掛ける。刀を両方とも振り上げてクロスさせるように振り下ろして首を狙った。
ドスツ！と鎖骨と肩を狙った攻撃がクリーンヒットした。

「ぐ、クソツ……！！」

鴻士は肩をかばうようにして仰向けに倒れこんだ。

「そこまで！！勝者、麗！！」

観客がドツ！！と湧いた。銃を使ってやったのは恐らくアタシが初めてなんだろう、感心している連中が多いように見受けられた。

「ほら、立てる？」

アタシは鴻士に手を差し出した。鴻士はしばし躊躇ったが案外あっさりアタシの手を取った。

「ケツ、付け焼刃の風気じゃどうにも出来なかったぜ」

「そう、それよ！何でアタシが七天流を使えるのよ？」

「あー、それは昼に話す。今は休みたいんでな」

「あらそう、解ったわ」

そう言って鴻士は目を閉じた。ちょっと強くやり過ぎちゃったのかしらね、気絶しちゃったわ。

「ふむ、直ぐに保健室に運ぼうかの。幸い、ヒビは入っておらんよ
うじゃが」

そこに鉄心のおじいさんが鴻士の体をチェックしてくれていた。そっか、骨には問題ないか。

「それにしても……七天流とは………ワシは解らんかったのう………全校生徒を見て回ったはずなんじゃが………」

「無理もないですよ。アタシの七天流に反応する力でも反応しなかったのです。どうやら、七天流の力に何らかの施しがされているのかと………現に、アタシが今コイツに触っても体は一切反応しませんし」「ふむ、ワシが衰えた訳ではなかった訳じゃな。ほっほっほ」

もうアンタ充分歳だよ、そう心の中で呟いておく。今更衰えなんか気にしなくてもいい気がする。百代と張り合えるんだからさ。

しかし、風の力が……

あのバカが持つてるのは穿火と劉土と楼閣、あの悪魔が持つてるのは皇樹と崩雷、コイツが持つてたのが翠風の力………あと1つ、水の力、幻水げんすいだけが行方不明………

昼休みの鴻士との会談、あのバカも交えて話をした方がいいのかもしれないわね。もし大和がいてくれたら、話も多少はスムーズに進むかもしれないけど………アイツには話したくないな、アタシの醜い目的なんか。

「ほれ麗、そろそろ晴蘭の決闘が始まるぞい」

と、学長が再びフィールドを作ろうとしている。そっか、今日はもう1回決闘があったんだっけ。あのバカ、準備出来てるのか………

「……………え？」

つい口に出してしまった。それほど予想外な光景が目の前にあった。

グラウンドの中央へと歩んでくる晴蘭の右腕が、見たこともないくらい真っ黒に染まっていた。

その右腕の輪郭ははっきりとせず、まるで陽炎のようにゆらゆらと揺れていた。

「ち、ちよつとアンター！」

晴蘭に呼び掛けるが、向こうは一切の反応なし。そこでもう一つの違和感に気づく。

何でギャラリーは何も言わない。こんな異質な右腕を見て。何故恐れおののかない、この恐怖の塊を。

S i d e O u t

Side 紀嗣

「おい、何とか言えよ」

「……………」

この男、さつきまでへらへらと笑っていた筈だが、どうにも様子がおかしい。俯いたまま何も喋らなくなってしまった。今更になつて怖じ気づいたか？

「名乗りを上げよ！ワシ、今日だけでこの台詞3回目、生徒がやる気に満ち溢れとって嬉しいわい」

実にどうでもいいことをじいさんが口走っているが、まあ名乗らないことには始まらないしな。

「3 S、下山紀嗣！」

「……………3 F、秋星晴蘭」

やっと口を開いて名を名乗った。そこでこの男はゆっくりと顔を上げた。

「悪いけど、こんな茶番に付き合ってる暇は、ない」

「茶番、だと？」

「僕は忙しいんだ……………ようやく、見つけたんだ……………」

何を言っているかは解らんが、バカにされているのは確かなようだな……………！

「言ってるF組が、完膚なきまでに叩きのめしてやる」

俺は拳を構える。これでも俺は空手を通信教育でマスターしていで、暴れん坊將軍と呼ばれている。悪いがこの勝負もらった。

「それでは、始めい！！！！！」

学長の掛け声がかかった瞬間、俺の目の前が真っ黒になった。意識はあったのに、何も出来なかった。

数瞬して、顔を掴まれていることに気付いた。

そのまま体が宙に浮いて、俺の意識は遠のいた。

第十一話 4月24日・・・秘密兵器（後書き）

「た、忠勝と……」「翔一のお！作者の自己満、あとがきの「コーナ
ー……」」

「つてこらあ！！ ゲンさんまじめにやってよ……！」

「出来るかこんなこと！！なんで俺が……代行するのはこんなこと
もしなくちゃならんのか……！」

「ゲンさんやってくれないのか……！」

「……………チツ、おら台本貸せ！勘違いすんなよ？あくまでも
仕事だからな」

「解ってるぜ！！ 流石ゲンさん……！」

・何が始まるんです？・・・「マンドー

「シユワちゃんいい肉体だよな……！」

「鍛えすぎな気がしないでもないがな」

「この映画初めて見たとき、腹にパイプが突き刺さってて怖かった
よゲンさん……！」

「確かに、小学生とかにはトラウマになるかもな」

・最初はグーが味噌・・・HUNTER×HUNTER

「仕事しろ!!」

「おお、ゲンさんが怒ってる……」

「まあ、再開するってんなら……応援してやらんことも無い。勘違いすんなよ？ 読者のためだ!!」

「おおう、まさかの愛情の裏返しだった」

・空手を通信教育で・・・吉本新喜劇

「これ結構有名なギャグだよな！ “通信教育やけどな”」

「これ2000年代にも普通にやってたみたいだから、下手すりゃ小学生でも知ってる奴がいそうだ」

「伝統つてすごいんだねゲンさん、そのツンデレとか」

「誰がツンデレだ誰が!!」

「感想、意見お待ちしてまーす!! 撤退!!」

「風間!! 待ちやがれ!!」

富樫さん頑張って、マジ頑張って、じょんぺいです。

文字数多くてスイマセン……

さらっと、ようやく全部の巻物の名前出しちゃいましたw

それに、鴻士君の初期設定はただのまじめな柔道家だったのに……
どうしてこうなった？

感想、意見、お待ちしてまーす！！

第十二話 4月24日・・・和解(前書き)

遅くなりました…

途中でデータが消えて……

うわあああああああ！！

第十二話 4月24日・・・和解

Side 音澄

「勝者！！ 秋星晴蘭！！」

わずか数秒の出来事に、観客は何も言えずにただ呆然としていたが、状況が理解できて再び盛り上がりを見せた。その盛り上がりは屋上の貯水タンクで見物している俺まで届いた。

ギャラリーからは“何て速さだ！！ 追いきれなかったぜ！！”とか“1撃で決めるなんてスマート！！”とか“Sクラスの相手が何も出来なかったわ！！”とか、見切れてもいなくせに感想を述べている。今の秋星君の動きを完全に見切れたのは極僅かだろうね。

「蕾、見えたかい？」

「……………何とか」

「何が起きたでしょうか？」

「……………右手で相手の頭部を掴んで、体ごと持ち上げ地面にたたきつけた」

「正解、流石俺の妹だね」

俺の後ろに立っている蕾の頭を撫でてあげる。無口な妹だけど、その小さくて翡翠色の頭を撫でると、ちよつと顔が赤くなるのがこれまた可愛い。

「じゃあ蕾、秋星君の右腕のアレは見えたかな？」

「……………（ふるふる）」

蕾は何も言わないで首を横に振った。まあ、見えない方が俺としては嬉しいから良かったんだけどね。秋星君も、あんなドス黒い気配をよく隠せていたものだよ。

「……………アイツの妹もここに転入してきたし、この学園で1波乱あるのは確定かな」

「……………アイツ？」

「うん？ ああ、俺の親友だよ。もうソイツは死んじゃったみたいだけど」

「……………みたい？」

「葬式に参加できなかったからね。死体を確認してないから“死んだ”って断言したくないだけだよ。気持ちの問題だから気にしないで」

俺の言葉に蕾は1回だけ頷いて、それ以上は追求してこなかった。顔に出ちゃったのかな？相変わらず俺の事となると鋭い、本当によく出来た妹だよ。

「……………秋星君に聞けばちょっとは謎が解けそうだ。七天流について」

Side Out

Side 麗

時は流れて昼休み。アタシたちは屋上にいた。

「えっと……あの、その……」

「緊張しなくていいぜ由紀江、知り合いの方が多いんだからよ」

「は、はい！」

そこにいる面子はアタシ、晴蘭、鴻士、そして、由紀江ちゃんの4人だ。アタシと鴻士は打ち合わせしてあったから普段通りだったが、由紀江ちゃんは何で呼ばれたか解らず緊張していて、晴蘭に關して言えば完全にポカンとしていた。まあアタシが首根っこ掴んで引きずってきたからそうなるもおかしくはないけど。

「何でボクは呼ばれたのかな？ 決闘前（きつせん）の口論を聞く限り、ボクは話に關係ない気がするんだけど？」

「わ、私、何か粗相を致したでしょうか？」

「晴蘭は別件だからまだ黙っててもいいわ。由紀江ちゃんはいいい子だから安心しなさい」

「おう、まず目的は正直達成されてんだがよ。この女と由紀江の再会ってのが第1目標だったからな」

この男にあの女呼ばわりされると妙にムカつくけど、とりあえず我慢我慢……

「久しぶりね由紀江ちゃん、何年振りかしら？」

「は、はい！お久しぶりです！ 大体4、5年振りくらいかと……」

「そうね、兄貴が死んでからサツパリ会わなくなっちゃったもんね」
「あう、その……」

由紀江ちゃんが申し訳無さそうに顔を伏せてしまったが、それは

やめてほしかった。兄貴の話を持ち出されたぐらいでアタシは暗くならない。ただ、怒りが募って復讐心を高められるだけだ。

「ああ、気にしないでよ。それより、友達出来た？」

「あうー、それが全然……」

「だから言っただろうが。結構苦労してるって」

鴻士も話に混じってきた。

「こんな時こそ助けてやらなきゃいかんだろ？ 俺は兄貴分、お前は姉貴分として」

「悪いけど、アンタ何か盛大な勘違いしてるわね。友達作りつてのは手伝いすぎちゃいけないのよ。アタシは大々的に手伝う気は更々ないわよ」

「何だと？」

アタシの発言を聞いた鴻士は怒りを表情に出して、由紀江ちゃんの顔を見て解るくらい青くなっていた。本当にこの2人は解ってないわね……

「いい？ 例えば鴻士さ、“強引に握らされたもの”と“自分で掴み取ったもの”だったら、アンタはどっちを選ぶ？」

「後者に決まってるんだろ」

「アタシが言いたいのはそういうことよ。アタシらが無理矢理作った友達と自分で勇気を振り絞って作った友達だったら、言うまでも無く後者の方が由紀江ちゃんの将来のためになるって言うてるの」

「そりゃ解ってる。けどな、きっかけを作ってやらにやどうにもならんだろう」

「そのきっかけ作りをアタシたちがやっちゃダメなのよ。それこそアタシたちに依存する火種になる」

アタシの言いたいことが解ってきたようで、鴻士からの反論が少なくなる。

「解った？ アンタがしようとしてるのは“まず1人目を手伝って上げれば後はどうにかなる”って考えが根本でしょ？ アタシたちがするべきなのは、“友達になりそうな人を本人が見つけたら、それが成功するのを見守って励ますこと”よ。始めから付き添ってちゃダメなの。むしろより友達が出来なくなる。確かに友達を作ることを手伝うってのはいいことよ？でもね、アタシらが構い過ぎちゃったら、逆に人は寄り付かなくなる。コレがさっき言ってた例えよ。“過保護と言う鳥籠は、時として中も外も傷付ける茨の檻になるのよ”」

アタシの話聞いていた鴻士が合点がいったと言う顔をしている。それに、ちよっとコイツの顔が赤くなっている気が……

「だからアタシは見守ってきたわよ。大和に連絡を取ってね」
「大和……直江先輩？」

聞き覚えのある名前が出たからか、由紀江ちゃんが顔を上げて反応した。

「そうそう。聞いたわよ？ この間寮のみんなに大福配ったんだって？ 頑張ったじゃない」

「あ
「後はもつと笑顔の練習しなきゃね。あれじゃみんな怖がって逃げちゃうわよ」

「はう！ 優しい言葉の直後に厳しいご指摘がッ！！」

「いや、これは褒められたと思うべきだぜまゆっち！！」

そこで、由紀江ちゃんの近くから誰かの声が聞こえた。これはもしゃ……

「え？ 誰？ 今の声誰？」

状況が一切解っていない晴蘭は慌てていた。まあ、知らない人は何なのか解らないだろう。

「松風はまだいるのね……相変わらずテンション高いわねー」

「だ、だろ？ クオリティー上がってきてんだぜ？ 完全に別人格になりそうだ」

「松風？」

「秋星先輩にはまだ紹介していませんでしたね。松風、御挨拶を」

「オッス、オラ松風。まゆっちの友達ダゾ」

由紀江ちゃんの近くから声の主が現れた。

馬の携帯ストラップだけだ。

「へえー、馬かぁー」

そこで、晴蘭が意外な反応を見せた。

「松風って言うの？ よろしくね」

「ま、松風が認められました！！ やりましたね松風！！」

「オラ嬉しすぎて天にも昇る気持ちだぜー！！」

「松風は何で喋れるの？」

「オラ九十九神だからな！ それぐらいお茶のこさいさいだぜ！」

「九十九神かー。原理的には穿火たちみたいなものかな？」

このバカの周りには魂の宿った巻物が3つもあるから、確かに松風の話可信理由にはなるけど……コイツの事だ。面白がっている可能性も否めないわね……

「はいはい、松風の話はまた今度、こっからはアンタの話よ」

「お、遂にボクが関係ある話が始まるのか」

「七天流についてよ。鴻士とアタシの決闘、見てたでしょ？」

「……ん？ 俺も関係あるのか？」

「七天流を使える奴が関係ないわけないでしょ！ コイツは七天流の現総代なのよ？」

「……………んな！？ コイツが！？」

鴻士が面白いくらいに驚愕している理由は解らなくもない。アタシも総代ってのはもっと若いもんだと思ってたし。

「……………そうだ、君が……………」

「「「ツ！！？」「」」

一瞬にして晴蘭の気の質が変わった。それ「に即座に反応したアタシと鴻士と由紀江ちゃんは咄嗟に身構える。

晴蘭の気から感じるの、明らかな敵意。

「……………その君、翠風の巻は、どこにあるんだ？」

「し、知らん」

「……………いいかい？ これはね、知らぬ存ぜぬじゃあ済まない話なんだ。悪いけど、吐かないなら……………力付くで吐かせてもらうよ」

次の瞬間、晴蘭の右半身が真っ黒な何かに覆われた。それは先程の決闘で見たものと同じ、恐怖の塊だった。

「ま、待て！ 今どこにあるかを知らなくて、その存在はちゃんと知ってる！！」

それに怖じ気づいたか鴻士は弁明を始めた。あの質の気を見たあとじゃ妥当な判断だ。それを聞いた晴蘭の動きも止まった。

「元の所持者は俺のひいじいさんだ！ 俺はひいじいさんが読んだときに偶然目を通しちまってよ！ そしたら“みたまなんちゃら”とかにかかったらしく、数年前から風の力が使えるようになったらよかったんだ！」

「……………なるほど、それで？ なんで所在不明なの？」

「……………つい先日の事だ……………俺の実家、麻陰流の本家なんだけどよ、そこが雷で完全になくなっちゃってさ。その時に巻物も一緒に燃えちまったのかと思ったんだが、どうにもずいぶん前から倉庫から出てたみたいでな？ ひいじいさんに聞いたらよかったんだが……………雷に巻き込まれて死んじゃった、家族もろとも」

「……ちょっと辛い話をさせたみたいだね。ゴメン、僕も熱くなりすぎた」

鴻土の話が終わると、晴蘭の右半身の黒い何かは剥がれていつて、その体には何も無かったかのように元に戻った。

「うーん、僕もまだまだだね。翠風のこととなるとどうも後先考えなくなっちゃうよ」

「ちよつとアンタ！！ 見境なしにその黒いの出すのやめなさいよ！！」

アタシが晴蘭の右腕を指差して注意したその時、晴蘭の顔色がまた変わった。

「……………今のが、見えたの？」

驚きを隠せないまま晴蘭は私たちに尋ねてきた。アタシたちは三人ともゆっくりと頷いた。

「……峰槻麗はその男に能力を与えられていて、麻陰鴻土は七天流を使えるからまだ解る。けど、何で黛由紀江はこれが見えたんだ？」
「どういうことですか？」

「今の技は完全に開放してない状態だと、一般人には見えない仕様になってる。見える条件として、七天流を使えるか、若しくは七天流の巻物の適性率が異様に高いか……」

「じゃあ……由紀江ちゃんは七天流の素質があるの？」

「どうだろうね。少なくとも、僕や穿火や劉土の適性率は一般人くらの40、50%くらいだけど……」

「ふーん、それじゃあ残りの4つの巻物のどれかが

「

ふと、そこである疑問がアタシの頭を過^よった。

「……………アンタ、今なんて言った？」

「ん？ 一般人くらいの40、50%？」

「違う！そのもう少し前！」

「僕や穿火や劉土の適性率？」

「それよー！！」

さつきから感じてた妙な違和感はこれか！！コイツ、今“僕”と穿火と劉土つて言ったわね！？

「アンター！！ 晴蘭じゃないでしょー！！」

「え？ そうだけど？」

「あっさり肯定したわね……………いつの間に入れ替わったのよ、楼閣」

「「ローアン？」」

約2名、アタシとコイツの会話についていけてなかった。まあ無理もないと思う。

「改めまして。僕は咲昏楼閣、七天流の7つの巻物に封印された魂の1つだよ」

「……………魂？」

「うーん……………話すとな長くなっちゃうからさ、まあ深く考えないでいいよ。とりあえずは別人格ってことで」

ついこの間、別人格扱いを受けて残念そうな顔をしていたのはどのどいつだ。

「それで、いつ入れ替わったか……………だったよね？ 答えは、たった今」

「え？ でもアンタ、七天流奥伝とやらを使っていないじゃない」

晴蘭と魂たちが肉体の支配権を入れ替えるには、七天流奥伝とやらを使う必要があったはずだ。そうやって言っただのはこの本体自身だし。

「うん、僕と主は深い繋がりだからね。その技を使わなくても入れ変わりにくらは造作もないよ。それより、僕が表に出てきたのはいいものの……目的のアイツには会えなかった」

楼閣は笑ってはいるが、その笑顔に翳りが見える。

「アイツって……翠風の巻に封じられている魂のこと？」

「うん、アイツとはちよつと面識があつてさ……ちよつと色々と言いたいこともあつたからね……麻陰君、君はアイツと……翠風の奴と喋ったことはない？」

「残念ながらそれはない。たった今始めて巻物に魂が封印されていると知つたしな」

「そつか……ゴメンね。さつきは辛い話させちゃつたし、ちよつと殺気ぶつけちゃつたし」

「正直、喉が張り付く感覚で生きた心地がしなかつたぜ」

よつやく張り詰めた空気が軽くなった。と言つところで時間がないうとに気づく。

「あつちやー、もう時間切れか……それじゃあ由紀江ちゃん、また島津寮に遊びに行くからさ。その時は沢山お話しでしょ？」

「あ はい!!」

由紀江ちゃんは笑顔ではっきりと頷いた。この笑顔がアタシたち

以外に出来ればいいんだけどね……

「鴻士も迷惑かけたわね」

「い、いや。気にすんな……」

なんだろう、さっきの由紀江ちゃんの話が終わった辺りから鴻士の様子がどうもおかしい。

「それと、由紀江ちゃんを見守っててくれてありがとう。アンタは立派な男よ、見直したわ」

「お、おおおお、おおおおおおおっ！！！！」

恐らくは“おう”と答えたかったのだろうが、何やらどもったせいで雄叫びみたいになってる。

「さて……あ、そうだ。翔一からの言伝を忘れてたわ。晴蘭、アンタ今日の放課後は空けとけだって。なにやら面白いことがあるみたいよ？」

「ん？解ったよ」

Side Out

Side 晴蘭

「で？ 何処に向かっているの？」

放課後、特にこれと言った用事も無かったから言われたとおりに予定を空けておいたんだけど、何があるか告げられぬまま一子に案内してもらっている。

「とりあえずは買い出し！ 食べるものはいいから飲み物ね！」

買い出し行く分には問題ないんだけど……せめてこの飲み物たちが何に使われるのかは教えてほしかった。そしてそんなこんなでスーパーへ。

「うわ、しそ味だって……なんだよしそ味って、ドレッシングの類でしょ……」

「せーちゃんそんなの飲むの？」

「ネタの炭酸飲料は1通りチャレンジしたくて……これはボクの個人的な買い物で」

「アイスキューカンバー味だけ飲んだことがあるけど……なかなかの劇薬だったわよ？アタシたちの分は普通のジュースや炭酸にするわ」

そう言って一子がカゴにどんどん1Lのペットボトルを投下していく。

「持つよ」

「気にしないで！ せーちゃん今日は主役なんだから！」

「主役？」

「そうよ？ 金曜集会兼、歓迎会兼、お帰りのね！」

金曜集会？

「さー、食いねえ食いねえ寿司食いねえ！！ 今日大量だぜ！！」
キャップがバイト先で余った大量の寿司とざるパック（下が蕎麦
上が寿司）をテーブルに並べた。

「そのの姉妹、今日くらいは遠慮をして」

「まぐまぐまぐまぐ」

「ネギトロうまいな」

「ちつとは今日の集まりの主旨考えろや！！」

いつも通り容赦の無いワン子と姉さんの暴食、今日の主役は晴蘭
と麗だつて言うのに……ちよつとは気を使ってやるうよ……

「て言うか、麗ジベタリアン？」

「いやあ、アットホームな空間だとしても胡坐がかきたくて」

麗は照れくさそうに笑いながら俺の対面に座っていた。折角ソフ
アーが2人分空いてるんだから、そこに座ればいいのに
ん？2人分？

「せーちゃんも座らないの？」

「ここで立つてるよ。みんなの顔が見渡せた方がいいからね」

晴蘭は晴蘭で入り口付近に立っていた。ちゃっかり片手に寿司が
乗った皿と近くにいたクツキーに飲み物を持ってもらっていた。も
うクツキーと仲良くなったのか、流石晴蘭。

「ほら大和、早くしないとアンタの分無くなるよ？」

俺が2人に気を回しているうちに、さっきまで大量にあった寿司

のほとんどがどこかへと消えていた。

「ああ！？ 俺の寿司が！！」

「じゃあ私の分をあげるのさ。高感度アップ？ むふふ……」

「そんな真っ赤に染まった玉子いりません」

なんで巻いてある海苔の部分まで真っ赤になるのか聞いてみたいな。

「そっか、これがアンタのメールにあった金曜集会なのね。」

麗がみんなと秘密基地を見渡してニツコリと笑った。

「事情は一子に聞いたよ。京が静岡に引越したのがきつかけなんだって？」

「うん。みんなと週末に遊ぶためにこっちに帰ってきた。今はもう寮生だけど、やめる理由にならないもんね」

「うーん、涙ぐましい話ね。アタシも始めから参加したかったなあ

……」

「ボクも、こんないいところがあるなら飽きるわけないし、みんなと一緒に尚更だよな」

晴蘭も麗も気に入ってくれたみたいだ。もうこの空間に馴染んでいる、と言っか、始めからそこにいたような感じだった。

「それで、歓迎会とお帰り会はこれにて1段落！ 今から金曜集会の議題について話すぜ！」

しばらくみんなで食って飲んで騒いで落ち着いた後、キャップが話を切り出してきた。

「クリスを仲間に入れようと思う！！ クリスは逸材だ！！ 俺が言うんだから間違いないえ！！ どう思うよみんな！？」

突然の話にみんな戸惑っていたが、麗が真つ先に声を上げる。

「アタシはアンタに従うわ。メンバーに入れてもらったし、アンタの統率力を見たいからね」

「理由がちよっとプレッシャーになるが……モモ先輩は？」
「賛成だ、色んな意味でクリは欲しい」

姉さんの口から唾液が見えたのは気のせいだと信じたい。

「俺様大賛成。いつかこの鋼の肉体で落としてみせる！」

ガクトが自分の胸をドン！と叩くが、正直脈は無いと思う。

「うーん……あんまり乗り気じゃないけど……勝負できる子は欲しいのよねー……まあ様子見！」

ワン子にしては即断じゃなかった。それだけ慎重な問題だとワン子も解っているんだろう。

「私は反対」

「やっぱりですか」

京は当然のごとく拒否モード。それを見ていた麗の顔もかなり不安そうだ。そろそろ他の連中にも目を向けてくれるといいんだが……

「僕も反対かな、新しいメンバーとか気を使っちゃう」

モロの意見には結構根拠がある。麗が加入したばかりの時を思い出せば、モロがいかにも人見知りか激しく女に弱いか解る。

「大和は？」

「俺か………とりあえず様子見かな。いろいろ腹の立つことがあったが、異国で寂しいのは事実だろうし」

「腹の立つこと？」

麗が興味深々に尋ねてきた。そこまで面白い話じゃないんだが……一応、今日クリスと口論したことを伝えた。頭を使ってきた俺を悪だの卑怯だの罵ってきたクリスが発端だという、今日のクリスの案内の時に起きた諍いさかいだ。

「ふーん……まあ初めての日本だし、色々だまされてた子だし、思い込みが強いから仕方ないって割り切る……のは無理そうね」

「許せないよね、案内した大和をそんなふうに侮辱するなんて……」

大和には侮辱されたいと、椎名はMもいけることをアピールします

「京ちゃん、健気ね……お姉さん泣けちゃうわ……」

「お姉様!!」

「京!!」

京と麗がヒシッ!と抱きしめあっている。なんでだ?いきなり寸劇が始まったぞ?

「で?晴蘭はどうなのよ?」

「ん?ボク?」

キャップが最後の1人、晴蘭に質問をした。まあお人よしのコイツのことだ。どうせ

「反対」

そうそう、反対って言うに決まって

「ええ！？ 反対！？」

「な、なんだよガクト。そんなに意外？」

「当たり前だろ！？」

「ボクね、面倒ごと嫌いなんだ。あの人のお父さん相当めんどくさくてね。どうせファミリーの誰かに、悪い虫がつかないように見張ってってくれと監視役を頼んできたり、ちよくちよくクリスの様子を見に厄介ごとを持ってきたりするよ……」

晴蘭が遠い目をしている。一体晴蘭はあの軍人の何を知っているのか……

「そんな訳で、決定しちゃったらしようがないけど、極力あの人に関わってきそうなことは避けたいって事で」

「ふーむ、賛成が4、反対が3、様子見が2か……総括すると、とりあえずお試し加入！ あわなければ切り捨てる！ それでいいな、京？」

キャップが切り捨てるなんて厳しい言葉を使っているのは京のためなんだろう。麗もそれが解っているのだろう、何も言わずに見守ってくれている。

「大丈夫だ。絶対上手くいく。俺を信じる！」

とりあえず、これでこの話題は終わった。それを見たクッキーがみんなに飲み物を出していく。

「そうだ！ 麗と晴蘭の好きな飲み物も教えてよ！」

クッキーが2人にアンケートを取っていた。クッキーはみんなの好きな飲み物を準備してくれるのだ。例えばそれがピーチジュースだろうと、肉汁だろうと、天帝八バネロカイザードリンクだろうと。

「じゃあボク、タピオカ入りココナッツミルクにガムシロップ12個」

「川神水、若しくは極力発泡酒に近い炭酸飲料」

「……2人とも、このメンバーに負けず劣らず個性的だね」

クッキーが珍しく言葉に詰まった。やはりこの2人、只者じゃないらしい。

こうして夜は更けていった。

Side Out

Side 由紀江

「あの、これは一体……？」

「オイオイ麗姉さん！ そりゃやりすぎだぜ！ そんないきなり“変態だー！！！”なんて、相手がかわいそうだぜー！！！」

30分後……

「ちょっと松風！？ アンタはペガサスじゃないから！！ 小宇宙とか言わないでよ！！！」

1時間後……

「麗さん、本当にここに来る途中であの將軍にあつたんですか！？」
「そうなのよ！！ 相変わらずのヒゲに盾と槍だったわ！！！」

2時間後……

「はー、笑った笑った！」
「もう深夜ですけどね。大声出しちゃいましたね……」
「大丈夫よ、これくらいでみんな怒りやしないうって」

麗さんと私の目じりには涙がたまっていた。こんなに笑ったのは久しぶりです……いつもは悲しくて、寂しくて、虚しくて泣いてるだけでしたから……

「あ、そうだ。母が送ってくれた大福がまだあるんですけど、食べ

ますか？」

「お、それじゃあ頂こうかな？」

私は鞆の中を探って大福を探す。

ゴトッ。

おっと、鞆から父からの預かり物が出ちゃいました。しまわないと……

「……………待って由紀江ちゃん」

「はい？」

預かり物を手にとって振り返ると、麗さんの顔がさっきとは豹変して険しいものになっていました。

「それ、何？」

「これですか？これは父から預かった物で……晃刹と言う方に渡せと」

その瞬間、麗さんの顔がさらに変わった。さっきまでの楽しそうに笑っていた顔も、険しくこれを見詰めていた顔も無くなって、怒気を孕んだ形相に変わっていました。

「貸して」

「え、あの……」

「早く」

麗さんの気迫に押されてしまい、預かった大事なものを手渡してしまっただ。

「……………間違いない」

そう呟いた麗さんはすぐに携帯電話を取り出して誰かに連絡を取りました。もう日付が変わっているというのに。

「もしもし？アタシ。見つけたわよ」

麗さんの目は瞳孔が完全に開ききっていました。それは、人間の怒りが最大限に達した時の症状とそっくりでした。

「ええ、そう。ここに、七天流の巻物が」

第十二話 4月24日・・・和解（後書き）

「モロと」「ガクトの」「作者の自己満、あとがきのコーナー！
！」

「さて、ガクトって説明できるの？」

「なめてるな？ なめてるだろ？」

「だって説明力なさそうだし……原作でもちよつと残念な……」

「それ以上言うなモロー！！」

・しそ味、アイスキューカンバー味・・・ペプシ

「あずきにバオバブ……」

「そしてモンブラン……」

「ペプシマン辺りではまだ間違ってたと思っただけどね……」

「そっぴや俺様ペプシマンのゲーム持つてるぜ」

・変態だー！！！！・・・うえきの法則

「前も使った気が……」

「言つなモロ……記憶力の乏しい作者なんだ……」

「ガクトにバカにされる作者って……」

「はあ、みんなあれで中学生かよ……マリリンちゃん可愛いのに、年下とは……」

・小宇宙……聖闘士星矢

「1980年代の漫画だねこれ」

「うおっ!?!? Wikipediaの項目が異様に多い!!」

「それだけ愛されてるんだよ」

「もう一回読み直すか……」

・あの將軍……サンレッド

「このネタいい加減にしなよ!!」

「あんまり受けよくないんじゃない……」

「確かにいい人だけどさ……」

「この人のレシピ役立つって母ちゃんが言った」

「感想、意見、お待ちしてまーす!」「」

サンレッド大好き、じょんぺいです。

執筆中にパソコンフリーズ、死にたくなりましたw

あと、また体調崩してしまい……

誰か看病してくれー!!

感想と意見を心待ちにしております。

第十三話 4月24日・・・翠風(前書き)

遅れました!! 申し訳ないです!!

第十三話 4月24日・・・翠風

Side 由紀江

「お邪魔するよ黛さん」

「あ、はい！」

つい先程、麗さんが電話をしていた相手、秋星先輩が私の部屋までやってきました。その表情は非常に真剣なものでした。

「これよ」

麗さんが例の物を秋星先輩に手渡しました。秋星先輩がそれを手にとってじっくりと観察しています。

「……………確かに、七天流の気配がするね。触らないと解んなかったけど」

「相当嚴重な封がされてるわね。七天流の氣にに敏感なアタシでさえも、視認するまでこれの正体に気づかなかったわ」

秋星先輩は麗さんの話を聞いて暫く考え込んだ後、それを畳の上にゆっくりと置きました。それは直方体の木箱に沢山の札で封がしてあって、正直かなり怪しいもの。

「…………これを、晃剎に渡せって言われたんだよね？」

秋星先輩の顔が昨日のお昼に会った時とはまるで別人、その顔が怒気を孕んでいたのは一目瞭然でした。

「は、はい……」

「お父さん、黛十一段に？」

「はい……」

「黛は分家じゃない……かと言っても、麻陰も分家じゃなかったはずだし……」

「確か巻物は分家に渡されたのよね？」

「うん。その分家は全部把握しきれてないのが現状だけどね……」

…それより、これを開けてもいいかな？」

そう言っつて、秋星先輩が木箱のお札に手をかけ………っつて！

「あ、あの！ 一応それは預り物でしょ！」

「晃剎に渡せつて言われたんでしょ？ だったら問題ないよ。ボクは晃剎の息子だから」

「え……？」

「それに、もう父さんは死んじゃってるし。だから、いいよね？」

秋星先輩の有無を言わせない気迫に、私は頷くしかありませんでした。

「それじゃあ……」

秋星先輩は丁寧に一枚ずつお札を剥がしていきました。

「これ、どつちだと思っつ？」

そこで、麗さんが秋星先輩に尋ねかけました。

「幻水か、翠風か……ってこと？」

「こないだのトランプ大会の後に聞いた話じゃ、加賀と陸奥の分家だけ所在が解らなかつたんでしょ？じゃあこれはそのどっちかの分家の巻物ってことよね？」

「恐らく、幻水の確率はないよ」

「由紀江ちゃんは加賀の出身だから？」

「確かにそれも結構有力な理由だけどね。これはボクの推測だけど

……幻水は既にあの悪魔が所持してる可能性が高い。そうじゃなきゃ簡単には分家は潰せないはず」

「もしそうだとすると、これで巻物は全部出揃ったことになるんじゃないの？」

「……この中の巻物が翠風ならね」

そうやって話しているうちに、秋星先輩は木箱の封をしていたお札を全て剥がし終えていました。そして、その木箱の蓋に手をかけました。

「開けるね」

ゆっくりと木箱の蓋が開けられて、そこには1本の巻物がありました。

「話を聞く限り、これに今主はいないよね。だったら、読んじやうね」

「ッ！？ 馬鹿！！」

麗さんが咄嗟に叫びましたが、秋星先輩は既に巻物を開いて目を通してしまっていました。

「……………ぐっ……………ヤバッ……………」

巻物から目を離れた秋星先輩が、頭を押さえて急に苦しみだしました。

「この大馬鹿ー!!」

「……………ゴメ、ン……………ちょっと、離脱するね……………」

秋星先輩は駆け寄ってきた麗さんを手で制して、部屋の窓を開けて外へ飛び出してしまいました。

って!! ……ここ2階なんですけど!?

「クソッ!! ……生き急ぎすぎよアイツ!! ……追うわよ由紀江ちゃん

!!」

「えっ!? ……あ、はい!!」

何故巻物を読んだだけで秋星先輩が苦しんだのか、何故それだけで麗さんが激怒したのか、何もかも解らないまま私は麗さんに続いて島津寮を飛び出しました。

Side Out

Side 晴蘭

「……………くっ、があっ!!」

なんとか辿り着いた多馬川の河川敷、そこでボクは盛大に転倒した。

「…………ちつ、流石に容量キャパを越えちゃったか？」

頭を鷲掴みにされてしこたま振り回された気分だ。流石にボクのちつばけな脳みそに5人分の意識を制御できる能力は無かったか…
…しかも、そのうちの1人はまだ暴れ馬状態もいいところ……

「流石に死ぬなあ…………」

ちよつと諦めが入ってきた……

(主！ しつかり！)

(おいおいしつかりしやがれ！)

(主、頑張れ)

「ちよつとは、手伝ってくれよ…………!!」

励ましだけじゃ気休めにもならないって…………!!

「…………ぐあっ!?!」

第2波が襲ってきた。全身に翠風の魂が抱えていた風気が流れ込んでくる。

「…………名を、名乗れ!!」

必死に自分の体の中にいるであろう、翠風の魂に呼び掛ける。

「応えろ!! 僕は21代目、咲昏碎聖だぞ!! 応えろ!!」

空に向かって怒号を放つ。

(あんたが新しい主かい?)

「よつやく応えたね……」

頭の中に聞きなれない声が響き渡った。こいつが七大闘王の4人目……!!

(悪いけど、おいらはそう簡単にや従わないぜ?)

「だろうと思ったよ……楼閣こそ譲ってもらったが、劉土と穿火は死に物狂いで支配したんだ……!! 今さら何も怖くはない!!」

(ときめくね、その強さに。じゃあ始めようか……おいらを従えてみるや!!)

視界が反転する。ああ、“また”この展開か。あの2人同様、闘いの試練が始まる。せめての願いとしては、誰も試練の間にボクに近づくんじゃないぞ……！！

Side Out

Side 麗

晴蘭を追いかけてひたすら夜の町を奔走していると、突然発生した莫大な気の量を察知した。これはかなりでかい……しかも、鴻士の気に近い。これは晴蘭か？

「由紀江ちゃん！ 感じた？」

「はい！ とてつもない気配が……！！」

これを察知できたか。やっぱり由紀江ちゃんは晴蘭の言った通り、七天流の才能があるのかもしれないわね。アタシが感じるのは七天流独特の気だけ、他の気は一切感じなかったからね。

「麗さん！ あれを！」

由紀江ちゃんの指差す先を見ると、そこにはうつ伏せに倒れている晴蘭がいた。

「晴蘭……！！」

直ぐ様駆け寄ったアタシと由紀江ちゃんで晴蘭を持ち上げて座らせた。晴蘭の意識は無いらしく、呼び掛けたり揺すっても反応が何もない。

「大丈夫でしょうか？」

由紀江ちゃんが心配そうに尋ねてくる。この子はいいい子だね。知り合ったばかりのコイツに対しても気が使えるなんてね。

「気が乱れてるわ。それもコイツから感じたことのない新しい気。恐らくこれが翠風の魂が持っていた気ね。」

コイツから感じたことのある気は全部で4つ、コイツ自身の気、穿火の辺りを燃やしそうなほど熱い気、劉土の静かなながらも大きい威圧を感じる気、楼閣の暗く静かではつきり認識できない気の4種類。

その4種類の気と全く違う、鴻土が使っていた気に近いもの、透き通った荒れ狂う気。これが翠風の力が……………

「……………げ……………る……………」

突然、わずかながらも晴蘭の口から声が聞こえた。

「何？ 苦しいの？」

「秋星先輩……………？」

更に近寄ったアタシたちを、晴蘭は虚ろな目で見たあと、ゆっくりと口を開いてこう告げた。

「に、げろ……………逃げろお……………！！！！」

その瞬間、晴蘭を中心とした竜巻が凄まじい爆音と共に発生した。

「わぶっ!?!」

「と、突風!?!」

あまりの風圧に耐えきれず、アタシと由紀江ちゃんは10メートルほど吹き飛ばされた。

「……………くくっ……………!」

体勢を立て直したアタシと由紀江ちゃんが見たのは、先程の竜巻を体に纏って直立した晴蘭の後ろ姿だった。

「……………晴蘭?」

アタシがボソツと呟くと、晴蘭は首だけをぐりつと回してこちらを睨み付けてきた。

「……………あー、くくっ……………ケヒツ……………ケケケ……………!!」

首だけこちらを向いていた晴蘭が、不気味な笑いを伴って体ごとこちらに向けてきた。

その行動と気配で解った。

これは危険だ、イカれている。

晴蘭を見て危険だと思ったのはこれで2度目だ。今日の屋上での楼閣の右腕の力を見せつけられた時が1度目、そして今が2度目……でも、さっきまで晴蘭の意識は確かにあった。まだアイツが頑張れば挽回は出来るはず……！

「応戦するわよ由紀江ちゃん。コイツを抑え込む。アイツが戻ってくるのを信じて!!」

「……………はい!!」

アタシは両手に籠手を装備して、由紀江ちゃんは刀を抜刀する。アタシは寝る前だったから余計な装備はなし、何時でも奥義を発動できる体勢だ。由紀江ちゃんの気も鋭くなっていく。臨戦態勢に入したアタシたちは晴蘭を見据えた。

「……………んー……………ひひっ!!」

晴蘭がこちらの気確かめたからか、晴蘭自身の気の質が変わった。コイツもやる気は満々みたいね。

「纏元流奥義! 艶舞・狸々シキウシキ!!」

先手は取る!! 一気に間合いを詰めて、晴蘭のから空きの腹部に気の籠った拳を叩き込んだ。

「けひっ!!」

「っ!!」

拳が腹部まで届いていない!?

「やあっ!?!」

アタシに気をとられていた晴蘭の背後に回り込んだ由紀江ちゃんは、その背中を斜めに切り裂いた。

「っ!?!? これは!?!?」

しかし、由紀江ちゃんの剣撃は晴蘭の背中まで届いていなかった。さっきのアタシの拳を防いだ時といい、今回といい、コイツの周りは風の盾があると判断した方がよさそうね。

「一旦離れて!?!」

「は、はい!?!」

アタシと由紀江ちゃんは互いに3歩ほど後退した。

「どう? 斬れそう?」

「気を斬るつもりでやればなんとかかなりそうです!」

何度か刀を上下に振って感覚を確かめる由紀江ちゃん。

「頼もしいわね。アタシも気に対する対策ならある。問題はコイツの風圧の障壁……」

「私が斬り開きます! そこに1撃をお願いします!」

「オーライ!?!」

ざっくりと作戦を立てたところで再び構えを取る。由紀江ちゃんは晴蘭を中心とした円を通るようにアタシの近くに寄ってきた。

「1、2の3で突っ込むよ!」

「了解です!!」

晴蘭の動きがまだ鈍い、これがアイツの言ってた七天流の暴走状態なのか？話を聞いた限りじゃ、もっと獰猛な感じがしたけど……

……

いや、余計なことは考えないでおこう。今はコイツを戦闘不能にする、怪我は治せた筈だしちょっとくらいは怪我しても文句は言わないでよね？

「1、2の……3!!」

アタシと由紀江ちゃんは出来る限りの最大の速度で踏み込んだ。重りを付けてるアタシより由紀江ちゃんの方が若干早い。

「せいっ!!」

由紀江ちゃんの鋭く速い太刀筋が4閃同時に走った。十字に晴蘭を斬り裂いたと思ったら、さらに今度はクロスするように斬り裂いた。素晴らしい速度だね……昔言ってたわね、黨の剣技の真髄は神速の斬撃だって。この太刀筋を見る限り、かなりレベルが上がってるみたいね……この子なら、涅槃寂靜を極められるかもしれない。

つと、感心してる場合じゃないわね。折角斬り開いてもらった障壁が塞がる前に、クジを引く箱に手を突っ込むように、1発ぶちかましますか!!

Side Out

「……………くっ、やっぱり闘王ともなると……………生半可の武将じゃないわけだ……………」

暗く、しかし時折輝く星のような光で照らされる宇宙のような神秘的な空間。そこでボクと対峙しているのは、この空間での闘王たちの統一された翡翠色の短髪の140センチの少女。

この空間の中では、どんな闘王も140センチの少女で顔は全て一緒、1人称は必ず僕か私になるらしい。違いは性格と髪の毛の色と、その戦闘能力。

そして、目の前にいるこの少女は紛れもなく闘王の実力を持っている。肩に担いだ槍がその証拠だ。闘王武装の槍、槍の中腹に4つの竜巻を伴っていた。

「僕に勝とうなんてのはそう簡単じゃねえさな」

「初めから楽勝なんて思ってない。ただ、従える気は満々だよ」

ボクは体に黒い闇を纏わせる。この空間で使えるのは、適性率が100%を越えた楼閣だけ。穿火と劉土はここにはいない、今はどこかで見物しているんだろう。

「お前さんが伝承者、ねえ……………楼閣の力をどこまで使えるのやら」

明らかにボクを嘲笑っている。どうもこいつは敵対心剥き出しで嫌だね。慣れなきゃいけないんだろうけどさ。

「それじゃあ……………見せてあげようか？伝承者にだけ使える“あの技

”……どう？”

「それを使ったら僕が“なくなる”ことぐらい解ってんだろ？それとも、はったりかい？」

少し驚かしてやろうという悪戯心と、ちょっとばかり見返してやろうという意地が合間って、ボクは右手を翠風の右足に向ける。

「試してみてよ」

ボクの右手から黒い波動が翠風の右足をかすめた。それだけ、たった触れたそれだけで、その触れた部分は何もなかったように“空いた”。

「つ、なるほどねえ。甘く見てちゃダメってことかい」

先程のボクを嘲笑していた顔とは一変、焦りが見られる顔になっていた。ボクのことを少しは認めてくれたのかな？

そんな風に安堵した瞬間、翠風の気配が豹変した。

「じゃあ、本気でいこうかい」

「なら、こっちも奥義を使わせてもらおうね！」

S i d e O u t

S i d e 麗

食らえや、アタシの拳！！

「……………はひっ？」

最大に威力あげた拳を晴蘭の腹部に打ち込んだ。その貫通した衝撃で晴蘭の背後の雑草が根こそぎ剥がされていった。

「やった!？」

「いえ、まだです!!！」

右腕を打ち込んだ瞬間、手応えが違うと感じた。それは端から見ていた由紀江ちゃんにも解ったことだろう。

「げっ！ 届いてないじゃん！」

「障壁が一瞬で再生……………いや、別の障壁が発生しました!!！」

「おっそろしいもんやってくれるわね!!！」

アタシと由紀江ちゃんはまた距離をとる。さっき全力で拳を打ち込んだもんだから結構体力を持っていかれた。

由紀江ちゃんの方はまだ問題ないだろう。顔色を見る限り、まだ何回かは障壁を斬ってくれるだろう。ちょっと頼りっぱなしになるのはお姉さんとしては情けないから……………ここは踏ん張りどころってわけよね。

「……………お前さんら、こいつのお仲間さんかい？」

アタシは耳を疑った。さっきまで言葉をまともに発することなどできなかった晴蘭が、聞いたことのない口調でアタシたちに問いかけてきた。

「訳あって、ちよいと体を拝借しているよ。こいつの実力を今測っているところなんぞな」

「実力……？」

「そう、おいらをまともに扱えるかどうかの試練っちゅう奴だな」

飄々としているこの気配、ここに来る時に感じた気の気配にそっくりのものをまとっている。となると、コイツが翠風の巻の中に封印されていた魂か？

「おいらは咲昏翠風、はつきり言えばおいらは楼閣や穿火に比べれば弱い方だな」

意外とすんなりと話せるあたり、こいつは気さくな奴なんだろう。ひよっとしたら一番話しやすい奴なんじゃないだろうか。

「ちよいと確認させてくれよ。お前さんらはこいつの仲間ってことでいいのかい？」

「あ、ああ、一応そうなるわね」

「知り合っただけですけど……アタシは仲良くなりたいです！」

由紀江ちゃんが声を張り上げた。アイツ、由紀江ちゃんにちょっとかいたしたりしないでしょうね……

「ふむ、話に聞いてた通りってことか」

「何を勝手に納得してるのよ」

「いやなに。こいつが暴れてる状態で必死に抑え込むところを見ると、相当信頼関係が強いんだと感心していたもんでな」

妙に納得した顔がちよっとムカつくわね……こいつが今度同じ顔をしたらぶん殴ってやる。

「そろそろこいつの試練も終わる頃なんぞな。だからおいらが出てこれたって寸法さ」

「試練が終わる？」

「おうよ、こいつが正式においらの主になるってことだ」

……つまり、アイツは1人で抱え込むわけか。復讐を誓いあった同士だっていうのに……多少はアタシにも相談しろ、あの馬鹿

「まさかな、この男があれほどまでに闇を扱えるとは思ってなかったさ。ありゃもう戻れないんじゃないかねえかな」

軽く翠風が呟いたが、アタシと由紀江ちゃんはその言葉の意味がよく解らなかった。もう戻れない？

「もう戻れないって、どういうことよ？」

アタシは反射的に尋ね返してしまった。これが聞いていい話なのかいけない話なのかはこの際関係ない。いい加減、あのはぐらかしたようなアイツの態度からは解らないことを知るいい機会だ。

「この男はさ、楼閣の伝承者なわけですよ？要は1番使ってるのが闇

「ってことなんだよ」
「そうなるわね」

「その影響でな、闇の力が体に巣食っちゃまって。正直に言えば…
…あと何年何カ月としないうちに、人を殺したがる化物に成り下がるかもな」

「「えっ!?!」」

アタシと由紀江ちゃんは同時に声をあげてしまったが、そんな重要な話を聞いたことがないもんだから仕方無いだろう。

あの大馬鹿、何でそんな大事なことを今まで隠してきたんだ!!
復讐を果たした時にアンタが化物になってちゃ意味がないでしょうが!!

「さて、そろそろこの男…主の意識が戻りそうだな。それじゃあなお仲間さんたち。またお話ししような!」

軽く手を振った翠風の意識が途絶えていき、晴蘭の肉体は糸が切れた傀儡人形のように前に倒れ込んだ。それをアタシと由紀江ちゃんが見逃し、気がつかない。気がつかない。

数秒は何の反応も見られなかったが、1分もしないうちに晴蘭の

意識が戻った。

「……………ゴメン、迷惑かけた」

晴蘭が目覚めてからの第1声がそれだった。

「……………アンタ、化物になるってどういうことよ……………」

「……………やっぱ、聞いちゃったみたいだね……………仕方無いか、忠告できない翠風の奴が話したんだろ？ボクの今の症状を見てね」

晴蘭の顔からは少しだけ寂しさが窺えた。コイツはコイツなりに隠したかった秘密なんだろう。でも、アタシはどうにも納得がいかない。

「アタシくらいには話してもよかったんじゃないの？」

敢えて語気を強めて言い放った。それには晴蘭も流石に申し訳なさそうな顔をしていた。

「ゴメンね……………でも、化物にはならないよ。絶対にね」

アタシの目をジッと見つめるその瞳には、確固たる決意があるのが解った。この馬鹿、そうならそうと初めから話をしてくれればいいってのに。

「さて、そろそろ帰ろうか。もう深夜にもほどがあるしね」

第十三話 4月24日・・・翠風（後書き）

朝起きたら鼻血でベッドがうわー！！ じょんぺいです。

コレで一応二章が終わり、ということになります。

このあとに人物紹介、技紹介と続きますが……

そのうちパソコンが諸事情により使用不可になりますので、まじこいの執筆が出来なくなってしまうです。

携帯で出来ないことはないのですが、何分原作を見てないと不安なもの……

なので、ここらでお休みを頂きます。

読んでくださってる方、大変申し訳ありません。

それでは、感想、意見お待ちしております！！

閑話 麻陰鴻士の悩み（前書き）

少し時間が取れたので執筆短期再開……！

閑話 麻陰鴻士の悩み

S i d e 鴻士

『神速の獣、篤と御覧あれ』

一瞬の決着だった。俺の背中と肩に走った鈍痛が未だに残っている。これほどまでに強いとは思ってもみなかった。完全に俺の目測ミスだ。もつと観察力も必要だな。

それにしても、女に敗北したのはいつぶりか。少なくともここ数年では一回もなかったな。それに、女に負けたのは今回で2人目、母以来ということになる。

母も相当強かったがあいつの強さも規格外だった。川神院に世話になったことがあるというのも頷けるほどの強さだったな。

『ほら、立てる？』

倒れていた俺に差し出した手は思ったよりも小さく、俺にこれ程まで強烈なダメージを与えた手とは思えなかった。そんな小さく綺麗な手を握ってもいいのかと逡巡したが、俺はその手を取ることを決意した。

握ってみるとその手の小ささをより実感したが、それよりもその手のひらの硬さに驚愕した。一体何を何千何万と振るえばあんなに

強固な手のひらになるといふのか。少しだけあいつの過去に興味が出てきた。

『過保護という鳥籠は、時として中も外も傷付ける茨の檻になるのよ』

他人の言葉にこれ程の感銘を受けたのも久方ぶりだった。ひいじいさんが色々と俺に教えてくれてからは、世の中のことにあまり疑問を抱かなくなっていたが、どうやらひいじいさんの教えだけで全てをこなせるようにはこの世は出来ていないらしい。

それにしても、俺と同じ年でありながらこんな言葉がスラスラと出てくるなんて、一体こいつはどんな人生を歩んできたというのだ。

『アンタは立派な男よ、見直したわ』

そんなことを言われたのは初めてだった。男として認められたことを言葉にして聞いたのが初めてなものだから、心の動揺が隠しきれずにまともに返答することが叶わなかった。

心臓が早鐘を打ち静まることを知らなかった。手の汗が尋常でないほどにじんんでいた。顔が熱くなっていくのが自分でも解ってしまっ

「……………」

布団の上に大の字になって目を瞑る。
目蓋の裏側に現れたのは、俺より身長の高い女、桃色の髪の毛を携えている同級生。

俺を負かした女子、峰槻麗の姿だった。

決闘の最中の真剣な眼差しと凜とした顔付き、鮮やかな武器の扱いや高速の攻撃、屋上で話している時の様々な表情、由紀江に向けた輝く笑顔、俺に向けた美しい瞳

「……………はっ！！ お、俺は一体何を考えている！！？」

待て待て待て待て、落ち着け落ち着け、クールダウンクールダウン、深呼吸深呼吸、瞑想瞑想、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏、素数を数えて落ち着け俺、2、3、5、7、11、13……………

な、何故こんなにもあの麗のことを考えているんだ？ 妙に頭の中から離れないし脳裏から剥がれやしない。目を閉じたら麗の画像が鮮明に表れてくるし……………

それに耳の奥では麗の声が何度も何度もリピートしてるし、手には麗の手の感覚がまだ残っているし……………

「こ、これじゃアイドルの握手会に行った重度なファンと何ら変わりねえじゃねえか！！」

やばいな……………俺はこんなキャラじゃないはずなのに……………！！
俺はもつところ、孤高な狼タイプでやっていきたかつたんだ！！
転向初日に葵と榊原と井上にその夢はうち壊されたが……………それで
も！！こんな女々しいことをしていい訳じゃねえ！！こんなま
るで少女漫画に出てくる恋心を抱いた主人公のような

恋？

いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや
いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや！！！！

「有り得ねえから！！ 起こり得ねえから！！」

俺が恋？ 俺が、峰槻麗に？

ふざけんな！ 俺はそんな単純な人間じゃねえ！！ たかが見る
のも眩しいほど輝いた笑顔を向けられたり、俺よりも強い実力を奮
つて俺を打ち倒したり、由紀江のことも第1に考えていてくれてい
た優しさに当てられた程度じゃ……………程度じゃ……………程度、じゃ……………

「じゃ、恋？」

いやだからそれは確率的に有り得ねえ！！ 恋心を抱いたら胸が苦しくなったりするらしいが、俺はそんなことはない！！ どちらかというと麗を思うとまるでヒーローを思っているかのような

ヒーロー……

683

「そうか……憧れだな」

この気持ちはどうやら憧れに近いものようだ。よくよく考えれば、ひいじいさんに向ける憧れに近い気もする。自分より高みにいる存在へ向けるこの気持ち、これは間違いないようだ。

「……………」

憧れ、この一言で俺の気持ちは固まった。

これから宜しくお願いしますぜ……………姉御お！！！

「……………？」

何かしら、妙な寒気が背中を走った気がしたのだけれど……………？

「どうしました麗さん？」

「あ、いや、何でもないわよ」

由紀江ちゃんに心配はかけちゃいけないわね。寒気のこととは忘れ
ましようかね。

閑話 麻陰鴻士の悩み（後書き）

右耳が聞こえなくなった原因は肩こり、じょんぺいです

9月、ちよいと時間が取れたので執筆を再開します！

10月以降はどうなるか解りませんが……

もうしばらくお付き合いください！

第二章 登場人物（前書き）

今回は2人です。

第二章 登場人物

あさかけこうじ
麻陰鴻士

身長 182センチ

血液型 B型

誕生日 2月5日 みずがめ座

一人称 俺

あだ名 鴻士、コージ

武器 麻陰流、拳

職業 川神学園2-S

好きな食べ物 フォンダンシヨコラ

好きな飲み物 カフェオレ

趣味 観葉植物の手入れ

特技 逆立ち耐久

大切なもの 家族、努力

苦手なもの 文型科目、主に外国語

尊敬する人 曾祖父

二年前に転校してきた麻陰流当主の曾孫。学生的身で柔道の技なら大体は習得しており、そこいらの道場の師範と張り合える程の力を有している。

とにかく目立ちたがり屋。自分の力を学園中に見せつけようと麗に勝負を挑むも返り討ちにあってしまう。由紀江とは親しく兄貴分のような存在でもあるが故、由紀江といつまでたってもコンタクトを取らない麗に敵対心を抱いていた。由紀江の友人を増やそうと奔走するあたり根はいい奴。

重度なチョコレート好き、バレンタインデーは彼にとって至福の1

曰。顔は悪くなくやはり根はいい奴なので、そこそこ女子の人気が高いのでもらえるチョコレートの数はなかなか多い。家族が本家ごと雷に巻き込まれ全滅。当時はそれが人為的に行われたものだと知らずにいた。

翠風の巻の御霊宿をされており七天流の一端が使える。当時の翠風の巻の主は彼の曾祖父であり、偶然御霊宿をされてしまった被害者である。

麗に負けてから麗に強い憧れを抱くが、恋心ではなくあくまで姉御と考えている。

みたらいなりきよ
御手洗音澄

身長 179センチ

血液型 O型

誕生日 4月24日 おうし座

一人称 僕

あだ名 ライオン先生、ライオン

武器 拳

職業 川神学園3-F担任

好きな食べ物 妻の作ったオムライス

好きな飲み物 芋焼酎

趣味 バイクの手入れ

特技 妻の自慢話

大切なもの 妻、妹、生徒

苦手なもの 海

尊敬する人 宇佐美巨人

川神学園3 - F担任の科学専攻教師。タバコ大好きヘビースモーカーだが学園内では生徒のことを思って自重、家では妻の事を思って禁止、最近是多馬川の土手で携帯灰皿片手に黄昏ながらタバコを吸う姿が目撃されている。

一切武術を習っていないド素人であるが負け知らず。生まれながら勝つために存在し続けているような人間。その強さは鉄心が一目を置くほど。本気の強さは未知数である。しかし気のコントロールなどは複雑で面倒なので諦めているとのこと。あくまでも戦い方に関しては素人である。喧嘩慣れしており、なんとなく思いつきで縮地に近いものが出来る辺り規格外。

奥さんとは川神学園生の頃からの付き合いで純情。バカップル全開で手に負えないようだ。実は奥さんもかなりの強者である。

実家は酒屋、子供の頃から酒の匂いをかいでいたせいも異様に酒に強い。

妹が川神学園の一年生でいるらしい。

第二章 登場人物（後書き）

千本桜、真剣^{マジ}かっけえ、じょんぺいです。

今回は2人だけの人物紹介になります。

ライオン先生の妹さんや晴蘭の両親はまたの機会に。

巻物にいた翠風も、ちゃんと話に加わってから。

妹さんは1年生ですから、いづれきちんと話に加わるので今回は無し
の方向で。

さて、後は技の説明が残っています。

二章もあとわずか、今しばらくお付き合い願います。

第二章 技一覧

使用流派：七天流

・御霊宿
みたまやどし

七天流の巻物に封じられた七大闘王の魂の主となることで使用可能になる術。他人に七天流を強制的に覚えさせる催眠にちかいもの。方法としては、広げた巻物を本人の同意なし（条件として、主が巻物に触れている時に限る。）に読ませることにより発動。効力はその者と巻物の適性率により変わる。

- ・適性率が0%以上30%未満の場合、被害者は発狂し自我を失い、主は五感のどれかを失う。
- ・適性率が30%以上80%未満、または90%台の場合は、一般人の平均的適性率なのでリスクは存在しない。
- ・適性率が80%以上90%未満の場合、被害者は手当たり次第に手に入れた七天流の力を振り回す化け物になり、主は自分の体内に蓄えている気が削られる（寿命が縮む場合もあり）。
- ・適性率が100%を越えた伝承者の場合は未だ不明。

・浄火、じょうか 聖火、せい火 甦火、そか 惑火、ごっか 滅火、めっか

七天流の火気を極めた者が使えた火の名称。使われていたのは戦国時代、巻物を編纂したことにより現在では名が変更されている。七天流が完全に滅んだと思わせる仕掛けだったという説がある。

・魄喰雷
たまぐらい

七天流の雷気を極めた者が使えた雷の名称。使われていたのは戦国時代、巻物を編纂したことにより現在では名が変更されている。全身の穴という穴から血を噴出させる。操るのは体内に存在する電気信号らしい。

使用者：秋星晴蘭（穿火、劉土、楼閣を含む）

・焰断鉞
ほむらのだんげき

七天流の七大闘王の1人、穿火が扱う闘王武装。炎で刃が形成された戟と斧の中間の武器。故に横薙ぎも突きも出来る意外と応用性溢れる武器。特性としては、炎を噴射するブースターによる加速、膨大な熱量による物質の溶解、どちらも相手が百代のためそこまで活躍せず。

・砂斬刀
いかりのせんやう

七天流の七大闘王の1人、劉土が扱う闘王武装。刃が高速振動をすれば高密度の砂によって形成された長刀。長さが異常な上に砂が伸びることもありリーチは異様に長い。特性としては、高速振動による強力な切断、触れたものに振動と気を付加させる。百代の致死量に防がれたが、石の飛礫による攻撃はコンクリートを粉砕できる。

・鬼灯ほおずきの型、棕呂扇しゅろせん、獅子魁ししがしら、断葵たちあおい

七天流に伝わる槍術。槍による三連撃、相手の腰を狙った横薙ぎである棕呂扇、相手の首を狙った突進攻撃である術獅子魁、槍を半回転させて石突きで攻撃する断葵で構成されている。本来なら槍を闘王武装とする翠風の特異技だが、焰断鉾の性質上、この槍術は使いやすいらしい。

・土塊つちくれの型、睥鳩みよこ、斑鳩いかるが、鳩槃くぼん

七天流に伝わる剣術。刀による三連撃、斬撃を飛ばす睥鳩、刀の先端に溜めた気で地面を爆破する斑鳩、舞い上がった砂で姿を隠し後ろへ回り込む鳩槃で構成されている。一子の使う燕刈りは睥鳩の応用技。

使用者：峰槻麗

・艶舞えんぶ・胡狼ころう

纏元流の奥義の1つ。両手に脇差しを持って四つんばいの状態になった構えから始まる。体の中にしまっている武器は最小限にしてあるため速さは奥義の中でもトップクラス。（鴻土との決闘時は重りを沢山つけていたために遅くなっていた。）獣のように4足歩行で走るため、手に持った脇差しが爪が引つ搔いたような跡が辺りに残る。麗の兄曰く、この技の真骨頂は翻弄することにあるため、攻撃力は使用者の腕力によって激変する。

・艶舞・狸々しやうじやう

纏元流の奥義の1つ。両手に籠手を装備して殴るという実にシンプルな技だが、体にしまつてある重りの大半を両腕に集中しているため破壊力は異常。腕力に力を入れすぎているため下半身はほぼ無防備、速度も遅く使い勝手が悪いが、ノロマな相手にはピッタリの技だという。

使用者：川神一子

・燕刈り

晴蘭の修行中に偶然生まれた技。元になつた技は七天流の雉鳩。斬撃を飛ばす技のはずが、薙刀でやってみたところ、斬撃を停滞させるといふ荒技になつた。斬撃の威力はまださほど強くはないが、激しい衝撃波を不意に食らつた相手はショックで気絶しやすくなる。いまだ改良の余地あり。

使用者：麻陰鴻士

・流星

麻陰流の技の1つ。柔道技の袖釣り込み腰に近い。相手の体を右に引つ張り持ち上げ、相手の頭から落下させることが出来る。

・落雷

麻陰流の技の1つ。相手の腰の部分を掴んで持ち上げ、背中を膝に落として背骨に攻撃する。プロレスで言えばワンハンドバックブリ―ガーの形に似ている。

・火花

麻陰流の技の1つ。接近戦が主である麻陰流が、相手の攻撃を掻い潜って接近するために開発した技。まるで地面から火花が散って弾ける様に移動することから名づけられた。

・鼓翼こよく

七天流の奥義書の一つ、翠風の巻を読むことで使えるようになる技。両腕に高密度の風を集める技で、羽ばたきを起こせば風圧で敵を薙ぎ払うことが出来る。鴻土が使った鼓翼はまだ未熟なものだが、本来ならば空を飛ぶことも出来る。

第二章 技一覧（後書き）

コーヒー牛乳が血管を流れると死ぬそうです。じょんぺいです。

これでようやく本当に一区切りです。

大変お待たせしました。

さて三章に入るわけですが……

どこまでやれるのか……

首を長くしてお待ちください。

第一話 4月25日・・・10人目はお嬢様（前書き）

はい、これから更新が月1か2になる予定です。

その分しっかりと頑張らせていただきます！

来年の春になればもっと更新できるようにはなるつもりです！

それでは、第三章（長くなりそう）、幕開けです。

第一話 4月25日・・・10人目はお嬢様

Side 晴蘭

「四番、ファースト、島津ーっ」と

打者のガクトがバットを片手に持って振り回している。プロの野球選手のようにバットを斜め上に向けて、打つ気満々だと守備をしているボクたちに向かって挑発してきているようだ。力任せのガクトなら出来ないこともなさそうだけど。

「ガクトか、三振取りやすい相手かな」

それに対し、ボールを手のひらで転がしてグローブへ叩きつけ、乾いた良い音を鳴らしているのはピッチャー京。その顔は余裕の表情、三振が取りやすいと言ったのはハツタリじゃない様子だ。本当に京は感情豊かになったよ。時間が流れたんだなと実感させられる出来事の1つだね。

「ピョロ球ホームラン！そして俺様の決め場！」

「京は結構いい球を投げるぞ？」

キャッチャー役は百代、まあ妥当といったところだね。百代が野球に本気で参加すれば、例え打者だろうが投手だろうが守備だろうが、まともな試合が成り立たないのが簡単に目に浮かぶ。

まあ、ボクがセンターにいたいこと自体もちよつと間違いな気がするけどね。精々セカンド辺りがいいんじゃないかな。野球未経験のボクじゃ上手く動けないし。外野は来た球を取って投げるだけだから簡単だし、やってもいいなら遠慮なくやらせてもらうけど。

それにしても、百代はグローブをつけるって発想がないのだろうか？ 確かに無くても捕球ぐらいどうってことはないだろうけど……もう少し様式美というか、形式に従うってことが出来ないのだろうか？ 型破りな実力や規格外の能力はこんなところにも現れているのだろうか？

なんてことを考えていると、京がボクたちに手を振って『よろしく』と頼んできた。まあご期待に沿えるように頑張るけども、流石に頑張りすぎちゃ試合が成立しないからね。程よく程よくやろう。

あ、そうだ。折角だからちよつと翠風の力も試してみよう。空を飛ぶことも出来るみたいだし、単に跳躍力を飛躍させるくらい雑作もないだろうし、相手がガクトだしいいよね？

それにしてもさつきから妙な視線を感じるな……土手の方から

おいおい、なんているのかなあのお嬢さんフロイラインは。

「野球か」

「ま、テキトーに投手対打者、って簡単な勝負だけだな」

みんなが河原で野球ごっこに勤しんでいる中、アタシと翔一は見学の相手をしていた。見物人はい先日日本に来たばかりのクリスちゃん、クリスちゃんも島津寮の一員になったみたいだし、アタシとしては早くみんなと仲良くなってもらいたかったから、今回のこれはいい機会だと思う。金曜集会にもクリスちゃんについての話題が出たからね。こういうことは本人の意志を確認しておくのが大事だから。

そうこう考えていると、バットがボールを思いっきり叩きつける音が多馬川に響き渡った。

「お、打ったなガクト」

「センターの晴蘭殿を越え

お、キャッチした」

センターの頭を悠々と越したはずの球を、晴蘭はジャンプして軽々と捕球した。その光景に不条理を禁じえなかったガクト君が頭を抱えて絶叫していた。それにしてもあの馬鹿、加減つてものを知らないのかしらね。まあ遊びだしガクト君だし問題はないけど。

「すごいな！　ほとんど初動無しで飛び跳ねたぞ！」

クリスちゃんが晴蘭の跳躍に感心していたけど、アレは昨日身につけたばかりの翠風の力を使ったんだろう。ならしが必要だとかは特に聞いてなかったけど、恐らく興味本位の試しで使ってみたんでしようね。やっぱり加減は出来てないみたいだけど。それにしても鴻士が纏っていた気によく似ているわね。どちらも七天流ってことね。

「それにしても、楽しそうだ」

クリスちゃんが何気なしに呟いた言葉、ちょっと嬉しい言葉だったわ。自分らの仲間内が周りから見ても仲良く見えるってことは意外と大事だからね。昔アタシが通っていた学校は息苦しかったから、こういう言葉は非常に嬉しい。

「だったらクリスも仲間に入れよ」

ここでキャップである翔一の一言。うん、いいタイミングで切り出せたじゃない。合格点よ。アタシが見ないうちにやっぱり成長しているところは成長してるのね……

おっと、ちょっと虚しくなりかけちゃったわ。今が楽しいんだからそれでいいじゃない。昔のことは思い出さないのアタシ！

「いいのか？」

「みんなと話し合つてOKが出てるんだ。歓迎する」

「ありがとう！ いきなりこんなに友達が増えるのは嬉しいな！」

心底嬉しそうな顔で喜ぶクリスマスちゃん、うーん……抱きしめたいわね。

おっと、また悪いクセが出るところだったわ。我慢我慢、我慢我慢。弁えることを覚えなきゃまるで変質者だからね。

それにしても、これだけまつすぐに思ったことを表面に出せる子つてのは現代じゃすごい珍しいわね。今は自分の意見を押し殺す子も増えてきているから、確かにいいことっちゃいいことなんだろうけど……なんか災いを呼びそうな性格ね。少し気をつけたほうがいいかしら……

いや、あえて放置してみるのも面白そうね。問題が起こつたら大和が軍師として力量を発揮してくれるでしょうし。それはそれで楽しみになってきたわ。

なんか川神に戻ってきてから意地が悪くなっている気がするけど大丈夫かしら……うん、大丈夫、問題ないわ。ごくごく自然なことよ、きつと。

「クリーー！！ アンタは仲間内じゃアタシが先輩だからねー！！」

クリスマスちゃんが加入することがどうやら向こうの野球組にも伝わったようで、一子ちゃんがピョンピョン飛び跳ねてこちらに手を振っていた。うーん……撫で回したい。だから、ちよつとは落ち着けアタシ！

すると、声をかけられていた当人であるクリスマスちゃんはというと、

何かが得心いかないといった様子で眉間にシワを寄せていた。

「やはり犬、少し浮いて見える。百代殿や学長に比べると……同じ一族とは」

「ああ、ワン子は養女だからな」

クリスちゃんの疑問を解消したのは翔一の一言だった。これはアタシも大和のメールで知っている。

一子ちゃんは元々孤児院で育った孤児の一人だったのを、確か…岡本さんというおばあちゃんに引き取ってもらったのだけど、そのおばあちゃんが亡くなってしまっただけで引き取り手がなくなってしまったことがあったそうなの。その時新しく引き取ってくれたのが百代……というか川神院だとか。いい話よね。こんなに仲のいい姉妹をアタシは滅多に見ないから余計にね。

うん、翔一がクリスちゃんに説明をしている内容と間違いがないから問題ないわね。

ただ、それを聞いてしまったクリスちゃんはバツの悪そうな顔をしていた。そりゃ今まで自分が言ってきた事を顧みればそうなるわよね。事情を知らなかったとはいえ、申し訳ない気持ちが出るのは当然の事、こんなに感情豊かな少女なら尚更のことでしょうね。

「謝ってくる!!」

「待ちなさいな」

クリスちゃんが一子ちゃんのところへ駆け寄ろうとしたのを首根っこを捕まえて阻止する。本当になんというか、単純なのかい子

なのか。猪突猛進ね、全くもって。

「地元の人は大抵知ってることだ、もう家族なんだし蒸し返すこともないって」

「そういうことよ。ちよつと落ち着きなさい」

「そういえば、あの時大和が犬の頭を撫でていたな」

あの時、というのは大和がクリスマスちゃんに川神の案内をしていて川神院に寄った時のことだろう。確か大和が一子ちゃんと会ったとか言ってたわね……あんまり気にならないような言い方をしていたけど。

大和も成長しているわね。他人にそこまで気配りできるようになってるなんて。

「流石軍師大和ね」

「よし！ クリスもやろうぜ！」

「……ああ！」

よし、今のところは何の問題も無さそうね。よかったよかった。クリスマスちゃんの方は、ね。

アタシとしての大きな問題は、未だに由紀江ちゃんがここに混じれていないことね。クリスマスちゃんに先を越されちゃったわよー？
そろそろ気合見せてねー？

Side Out

Side 巨人

「全く、好きな女でもいるのかな？」

忠勝に女慣れしておけと忠告をすると、忠勝は聞く耳持たぬといった様子で帰ってしまった。一途ならそれはそれでオジサンはいいとは思うが、未経験ってのもなんだかなあ……顔もいいんだし、女には困らんだろうに……もったいない。

仕事終わりにちょっとレクチャーでもしてやろうとおもっていたがあっさり逃げられてしまったし、オジサン困っちゃうよ。

「おやおや、愛しの忠勝君に逃げられちゃいましたね」

頭を抱えていると、後ろから聞きなれた声が聞こえた。

そつえば、こいつも一途といえは一途だったな。

「なんだあ？ こんな時間から珍しいじゃないの。ライオン先生」
「先生は止よして下さい。今はプライベートですよ」

抱えていた頭を上げて振り返ると、そこには思った通りの人物が

白衣を着てタバコをふかしていた。

御手洗音澄、川神学園3年F組の担任で専門教科は科学、ヘビー
スモーカー。この親不孝通りにやってくるなんて珍しいこともある
もんだ。いつもは表の居酒屋で待ち合わせだつてのに。

「悪い悪い、まさかお前が先生になるとはオジサン思っても見なか
つたから」

「その節は何度お礼を言っても返しきれませんよ」

タバコを携帯灰皿に押しつぶしながら苦笑いをしているライオン
先生、いや、ライオン小僧。こいつが親不孝通りに昼間から顔を出
していると、どうにも昔を思い出していけない。あの頃はオジサ
ンも若かつたな……

「で？　なんでここまで来た？　ライオン小僧の再来とあつちやみ
んな驚くだろうが」

「俺が白衣着て敬語使っていたら俺だと気付きゃしませんよ。相方
もいませんし」

それもそうか。昔はもつと髪も長くてギンギラに染め上げてたか
らなあ……今からじゃ到底想像出来るもんじゃないけどよ。

相方の方は残念だったとしか言いようがないか……あの時の3人
を連れて飲みに行くのが楽しみだったというのに、全く、恩を返す
前に逝っちまいやがって。

「奥さんは、観恵那ちゃんみえなは元気か？」

「大分丸くなりましたけど。今じゃせつせと家事に勤しんでいますよ」

「へえ、その光景を見てみたいもんだ」

「何だったら今から俺の家で飲みますか？」

こんな誘いは学生の頃のこいつじゃ考えられなかっただろうな。

オジサンちよつと涙出てきちゃったよ。よくドラマとかで更生した生徒が恩を返すシーンがあるけど、実際問題これはグツとくるなあ……あの暴れん坊がこうも変わったのか。感慨深いもんだ。

「嬉しい申し出だがなあ……夜は合コンがな？」

「代行業ですか？ 相変わらず幅広いお仕事で、合コンの数合わせ、ストーカー調査……不良潰しもやってのけるんですから」

「合コンで余った女は食えるってんだから、割りに合い過ぎる仕事だぜ」

ははは、と苦笑しているが、実際お前の方が女を食った数が多いことなことをやってた癖しやがって。

「俺は昔から観恵那一筋ですよ？」

「どうも信じらんねえが、お前らのバカカップルぶりは異常だからな。見てて吐き気がする」

「酷っ！ ちよつとはソフトにお願いしますよー！」

Side Out

Side 由紀江

はあう……何やら1階が騒がしいと思って降りてきたら、直江さんと風間さんが腹を抑えて苦しんでいます……もしや何か悪いものでも食べたんでしょうか？

あ、どうやら腹痛ではなく空腹で苦しんでいたようですね。良かった……いや、実際問題全くよくないです！ ああ、お気の毒に……私なんかの料理でよければ作ってあげれるのに……

今、私の頭に友達作りの神が降臨しました！！

そうです！！私がお2人を作ってあげればいいんじゃないですか！！これはいい考えです！！素晴らしい閃きです！！これは友達作りが停滞してしまっている私にとって起死回生の1手になりえるでしょう！！

し、しかし！！もしここで出しゃばったが故に引かれてしまったら……

『頑張ったじゃない』

はっ！　そ、そうです……積極的に行くことは麗さんに褒めてもらったじゃないですか！！　ならばここで引く理由がどこにありますしょうか！？

いざー！！

「おい、ギャーギャーうるせえぞ teme いら」

気合を入れて突撃しようとしたところで新たに源先輩がやってきました……どうやらお2方は源先輩に料理をしてほしくお願いをしているみたいですが………あ、源先輩が自室へ行ってしまいました……

これは、好機！

「あの一……」

「ん？　2階の黛さん？」

「椎名町？（何か用？）」

お2人が私に気付いてくださいました。風間先輩が何故か西部池袋線の駅名で返事をしてくれましたがよく解りませんでした。

それより、今は押せ押せタイムです！

「ええと、私でよければ……その、これから夕食を……」

必死に声を絞り出して言葉を紡いでいきます。

その必死さが裏目に出たのか、直江先輩は1歩身を引いたようでした。しまった、また顔が恐ろしいものになってしまったのでしょうか？

「チツ、メシの話をされたから腹が減ってきやがった。オイそのバカ2人。テメエら分も軽いもん作ってやる」

そこへ何故か源先輩が再登場してきました。それに歓喜する直江先輩と風間先輩。どうやら源先輩が料理を作ってくれることで話は決着が付いたようです。

あれ、私はどうすれば？

その後、何も出来ずに自室へと退却した私は、いつも通り松風と1人反省会を開始しました。嗚呼、もっと頑張らなくては……！

Side Out

Side 音澄

「……………今日は、3人？」

「うん。宇佐美さんは今日は仕事があるって」

「あらら、宇佐美さんが来るって思っていたから、ちよっとお酒を
買はずぎちゃったわね」

「また来てくれた時に一緒に飲もうよ。数日じゃお酒は腐らないし」

家に帰ってくると、蕾が大事そうに日本酒の一生瓶を胸に抱えて
待っていて、我が最愛の妻の観恵那はエプロン姿でおつまみやらの
料理をせつせとこなしていた。少しまみの量が多いのは宇佐美さ
んのことを考えてのことだろう。

「……………じゃあ、ご飯にする？」

「そうね。折角作りたてなんだから早く食べてもらわなきゃね」

そう言って観恵那はテーブルの上におかずを運んできた。それを
見た蕾はご飯をよそいに台所へテクテクと歩いていった。手伝い大
好きの働き者で助かるよ。結婚した当初はどうなるかと思っただけ、
観恵那は蕾を本当の妹のように可愛がってくれるし、蕾は蕾で……
ちよっと時間がかかったけど、大分観恵那にもなついてくれた。

「お、肉じゃがだ」

「自信持って作れるのがこれくらいしかないのよ。宇佐美さんが来
てくれるなら少しでも美味しいものが出したいじゃない」

そこんところの気配りも忘れないとは、流石は観恵那だ。昔の観

恵那を知っている人は今の観恵那が別人に見えるだろうけど、それでも観恵那は観恵那でやっぱり可愛いし愛しい存在だ。昔から可愛いところは変わってないんだけどね。

「俺は観恵那が作ってくれた料理なら何でも美味しいんだけどね」「こーら！ あんまり恥ずかしいこと言わないの！」

観恵那におでこを指先で突かれた。照れ隠しもまたお茶目な。

「いいじゃない、本当のことなんだから」

「も、もう……残したら承知しないんだからね！」

「……………その馬鹿2人、さっさと準備して」

こうして、俺らの毎日は終わっていく。

でも、1人足りないのは変えようもない事実。

なあ、相棒。

第一話 4月25日・・・10人目はお嬢様（後書き）

どうも、自分の母校である中学の教師が2人も捕まって興奮状態、
じょんぺいです。

今回はネタをはさみませんでした、咲とかWORKING、とかF
ateとかの旬？なネタを入れようか迷った挙句、今回は取りやめ
させていただきましたw

それで、第三章からの変更点はまず書き方ですが、段落下げを必要
とするように地の文を増やしました、意識的にですが。

初めのほうと比べると、バリバリに変わってますねwバリバリ最強
No.1って良曲だと思いませんか？ 自分はよく歌ってました。

脱線修復、そういうわけで試行錯誤しながら書いております。お気
づきの点があれば遠慮なく言ってください。

そういえばHELLSING？のトレーラーが出てましたね。アー
カードが譲治なのはいいのですが、まさかロリカードまでもが譲治
とは……

『さあ、おいで糞餓鬼！！（姿は黒髪ロングの幼女、CV：宇佐美
巨人）』

それではまた、二話目でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6693s/>

真剣でボクとアタシと恋しよう！

2011年10月12日16時49分発行